児玉町文化財調査報告書　第17集

# 飯玉東II・高縄田・樋越・梅沢II
# 東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋

県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査
及び児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書　第17集

# 飯玉東II・高縄田・樋越・梅沢II
# 東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋

県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査
及び児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書

1995

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

# 序

昭和60年度から実施されてまいりました児玉町北東部の女堀川右岸の水田地帯を対象とする県営ほ場整備事業児玉南部地区も、いよいよ本年度をもって面工事が終了する運びとなりました。事業の開始からこの10年の間に、児玉町で最大の水田地帯も道路や水路が縦横に整備された新しい近代的な圃場に生まれ変わり、昔の景観も今では大きく変貌したように感じられます。

この地域には、千年以上も前の古代に施行された可能性が考えられる約109m四方の碁盤の目のように区画された条里がほぼ全域に存在していました。そのため町の文化財保護審議委員会でも、事業の性格上条里をそのまま現状保存することは困難であるにしても、何とかその歴史的景観を現代に生かすことができないものか検討されておりました。幸いにも、当地区の土地改良を実施するにあたっては、現状の条里坪の区画をベースとした土地区画が様々な面からみても最も有効であるとのことから、事業者側でもこの条里にほぼ沿った路線計画をとることになり、現在のほ場整備の区画は条里の地割り方向の面影をある程度残したものにすることができました。

今回報告する遺跡は、ほ場整備が児玉町を対象とするようになった昭和62年度工区から平成元年度工区に伴って発掘調査されたものです。現地の発掘調査から本書刊行に至るまで、埼玉県本庄土地改良事務所や地元の児玉南部土地改良区をはじめとする多くの方々や機関より、様々なご協力とご教示をいただいたことに対して、心より感謝申し上げるとともに、本書が学術研究の資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために、広く活用されることを念願する次第であります。

平成７年３月10日

児玉町教育委員会

教育長　冨　丘　文　雄

# 例　　言

1．　本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字下浅見に所在する飯玉東遺跡B地点・東牧西分遺跡、大字高関に所在する梅沢遺跡C地点、大字吉田林に所在する高縄田遺跡・樋越遺跡・鶴蒔遺跡・毛無し屋敷跡・石橋遺跡の発掘調査報告書である。

2．　発掘調査は、県営ほ場整備事業児玉南部地区の工事に伴う事前の記録保存を目的として、昭和62年度～平成元年度に児玉町教育委員会が実施し、その調査担当には恋河内昭彦があたった。

3．　飯玉東遺跡と梅沢遺跡については、すでに第1次調査の報告書(駒宮他1979、富田・赤熊1985)が刊行されているため、今回の報告は同遺跡の2冊目の報告書という意味でそれぞれⅡとし、遺構番号もそれらからの続き番号としている。

4．　児玉条里遺跡については、その性格から非常に広範囲に及ぶ遺跡であり、総合的な検討が必要であるため、今回は報告の対象から除外した。そのため条里に直接関係しない遺構が検出された地点を本書では、その小字名をとって別遺跡として扱っている。

5．　発掘調査及び整理・報告書刊行に要した経費は、国庫補助金・県費補助金・町費と県費委託金である。

6．　本書の執筆及び編集は、恋河内が行った。

7．　本書に使用した写真は、遺構を恋河内が、遺物を小林節子と中里広子が撮影した。

8．　本書中の地図は、第1図～第3図が国土地理院発行の2万5千分の1及び5万分の1、第186図が児玉町役場発行の2千5百分の1、その他は児玉町教育委員会作成の「児玉条里現況測量図」(千分の1)を使用している。

9．　発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関よりご助言・ご協力をいただいた。記して感謝いたします。

赤熊浩一、浅野晴樹、伊丹　徹、市川　修、出縄康行、井上尚明、井上　肇、今井　宏、梅沢太久夫、太田博之、岡本幸男、柿沼幹夫、金子彰男、駒宮史朗、坂本和俊、佐藤好司、篠崎　潔、鈴木敏昭、須田英一、外尾常人、高橋一夫、田村　誠、富田和夫、中島　宏、中村倉司、長瀧歳康、長谷川勇、増田一裕、増田逸朗、丸山　修、丸山陽一、水村孝行、矢内　勲、山川守男、山崎　武、
埼玉県教育局文化財保護課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、
埼玉県本庄土地改良事務所、児玉南部土地改良区

# 目　　次

序

例言

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　飯玉東遺跡Ｂ地点の発掘調査（昭和62年度） …… 7
第１節　遺跡の概要 …… 7
第２節　検出された遺構と遺物 …… 11
１．住居跡 …… 11
２．方形周溝墓 …… 14
３．井戸跡 …… 20
４．土壙 …… 21
５．溝跡 …… 27

第Ⅳ章　高縄田遺跡の発掘調査（昭和63年度） …… 33
第１節　遺跡の概要 …… 33
第２節　検出された遺構と遺物 …… 35
１．住居跡 …… 35
２．溝跡 …… 38

第Ⅴ章　樋越遺跡の発掘調査（昭和63年度） …… 41
第１節　遺跡の概要 …… 41
第２節　検出された遺構と遺物 …… 43
１．溝跡 …… 43
２．土壙 …… 49

第Ⅵ章　梅沢遺跡Ｃ地点の発掘調査（昭和63年度） …… 51
第１節　遺跡の概要 …… 51
第２節　検出された遺構と遺物 …… 53
１．住居跡 …… 53
２．土壙 …… 77
３．溝跡 …… 78

第Ⅶ章　東牧西分遺跡の発掘調査（昭和63年度）……83
第1節　遺跡の概要……83
第2節　検出された遺構と遺物……89
1．住居跡……89
2．掘立柱建物跡……182
3．井戸跡……185
4．土壙……188
5．溝跡……196

第Ⅷ章　鶴蒔遺跡の発掘調査（平成元年度）……203
第1節　遺跡の概要……203
第2節　検出された遺構と遺物……205
1．溝跡……205

第Ⅸ章　毛無し屋敷跡の発掘調査（平成元年度）……211
第1節　毛無し屋敷跡の概要……211
第2節　検出された遺構と遺物……213
1．屋敷堀跡……213

第Ⅹ章　石橋遺跡の発掘調査（平成元年度）……215
第1節　遺跡の概要……215
第2節　検出された遺構と遺物……217
1．井戸跡……217
2．土壙……218

第Ⅺ章　ま と め……221
第1節　和泉式～鬼高Ⅰ式(前半)土器の編年的位置……221
第2節　出現期のカマドについて……225

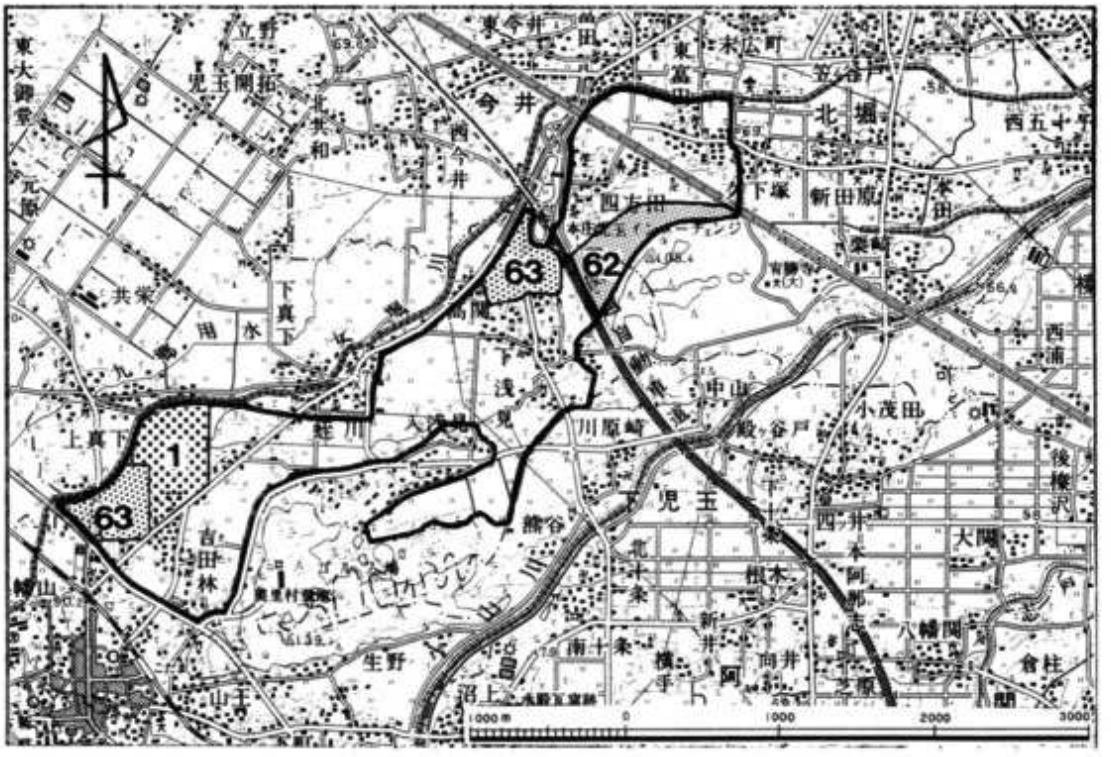
参考文献……227

写真図版

# 第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

県営ほ場整備事業児玉南部地区は、児玉町北部の共和地区から本庄市の一部にかかる女堀川右岸の約360haの耕地のうち、水田を主体とする約315haを対象としている。事業は昭和60年度から平成６年度にかけて面工事が実施され、当初は下流の本庄市側から上流に向かって施工されたが、昭和63年度より上流の児玉町吉田林から下流に向かって施工されるようになった。今回報告するのは、このうちの昭和62年度工区(児玉町分)～平成元年度工区に伴って発掘調査を実施した遺跡である。

昭和62年度工区は、上越新幹線と関越自動車道に挟まれた大久保山西側緩斜面に沿った約19haの細長い工区であり、このうちの南側約６haが児玉町に該当している。昭和61年10月、事業担当の埼玉県本庄土地改良事務所より昭和62年度工区内における埋蔵文化財の所在とその取り扱いについて、児玉町教育委員会に対して事前協議があった。児玉町教育委員会では、工区内の児玉町分には周知の埋蔵文化財包蔵地のNo54-002遺跡に該当する雷電下遺跡と根田遺跡及びNo54-286遺跡に該当する飯玉東遺跡が所在しており、その包蔵地内を土木工事等により現状変更する場合には事前に記録保存のための発掘調査を実施する必要があることを回答した。その後、県文化財保護課、県耕地課、本庄土地改良事務所、児玉町教育委員会による調整会議が行われ、やむを得ず工事により現状変更される4,400㎡については、発掘調査による記録保存の措置をとることになり、その発掘調査は児玉町教育委員会が実施することになった。かくして、本庄土地改良事務所より昭和62年３月20日付け本地第2252号による「埋蔵文化財発掘通知」が、児玉町教育委員会より昭和62年４月１日付け




第１図　児玉南部昭和62年度～平成元年度工区位置図

児教社第１号による「埋蔵文化財発掘調査通知」がそれぞれ埼玉県教育委員会を経て文化庁に提出され、発掘調査に係わる事業は５月28日より実施された。なお、文化庁からは昭和62年７月10日付け委保記第２－2076号による発掘調査通知の受理について児玉町教育委員会に通知があり、埼玉県教育委員会からは昭和62年４月27日付け教文第２-４号による「周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等について」の指示が本庄土地改良事務所に対して通知された。

昭和63年度工区は、事業対象面積が約33haであるが、下流側の第１工区と上流側の第２工区の２箇所に分かれており、第１工区は大字下浅見及び大字高関内の約17haを対象とし、第２工区は大字吉田林内の約16haを対象としている。昭和62年11月19日の本庄土地改良事務所と児玉町教育委員会の間で行われた事前の打ち合わせ会議で、第１工区内には№54-275遺跡に該当する梅沢遺跡と№54-288遺跡に該当する東牧西分遺跡が所在し、第２工区内には№54-121遺跡に該当する樋越遺跡と児玉条里遺跡(高縄田遺跡については条里と直接関係のない集落跡であるため遺跡名を別にした)が所在しているため、これらについてはできるだけ工事による掘削が及ばないように計画を配慮するよう要望した。同年12月に県文化財保護課、県耕地課、本庄土地改良事務所、児玉町教育委員会による工区内に所在する埋蔵文化財の取り扱いに関する調整会議が行われ、やむを得ず工事により現状変更される6,650㎡(第１工区3,640㎡、第２工区3,010㎡)については、発掘調査による記録保存の措置をとることになった。かくして、本庄土地改良事務所より昭和63年４月25日付け本地第175号(第１工区)と第176号(第２工区)による「埋蔵文化財発掘通知」が、児玉町教育委員会より昭和63年４月25日付け児教社第30号(第１工区)と第29号(第２工区)による「埋蔵文化財発掘調査通知」がそれぞれ埼玉県教育委員会を経て文化庁に提出され、発掘調査に係わる事業は６月２日より実施された。なお、文化庁からは平成元年１月18日付け委保記第２-3838号(第２工区)と第２-3839号(第1工区)による発掘調査通知の受理について児玉町教育委員会に通知があり、埼玉県教育委員会からは、昭和63年５月31日付け教文第３－54号(第２工区)と第３－55号(第１工区)による「周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等について」の指示が本庄土地改良事務所に対して通知された。

平成元年度工区は、昭和63年度第２工区の東側に隣接し、北側の女堀川と南側の現国道462号線に挟まれた約24haを対象としている。工区内には№54－121遺跡に該当する児玉条里遺跡(広範囲にわたる遺跡であるため、本書では地点や遺構の性格により毛無し屋敷跡・石橋遺跡とした)とその条里坪内に島畑的景観を呈する鶴蒔遺跡が所在しており、その取り扱いについて昭和63年12月26日に県文化財保護課、県耕地課、本庄土地改良事務所、児玉町教育委員会による調整会議が行われ、やむを得ず工事により現状変更される5,500㎡については、発掘調査による記録保存の措置をとることになった。かくして、本庄土地改良事務所より平成元年５月２日付け本地第163号による「埋蔵文化財発掘通知」が、児玉町教育委員会より平成元年５月２日付け児教社第70号による「埋蔵文化財発掘調査通知」がそれぞれ埼玉県教育委員会を経て文化庁に提出され、発掘調査に係わる事業は６月20日より実施された。なお、文化庁からは平成元年12月19日付け委保記第５－2670号による発掘調査通知の受理について児玉町教育委員会に通知があり、埼玉県教育委員会からは平成元年６月９日付け教文第３－63号による「周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等について」の指示が本庄土地改良事務所に対して通知された。

# 第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

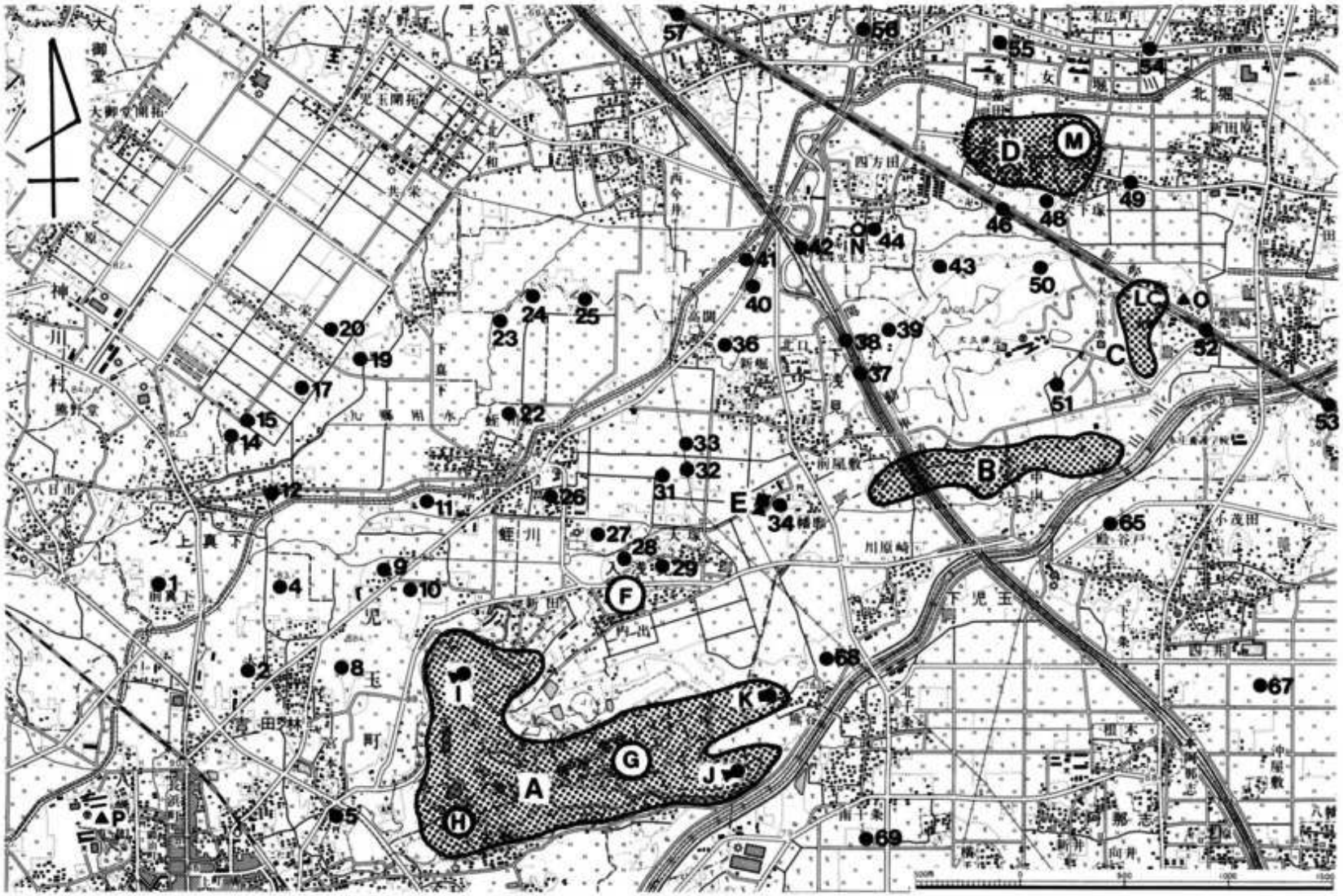
県営ほ場整備事業児玉南部地区の昭和62年度工区～平成元年度工区に伴って発掘調査を実施した本報告の各遺跡は、児玉町北部の大字吉田林・高関・下浅見に位置している。当地域は、群馬県との県境をなす神流川によって形成された神流川扇状地の東端部にあたり、南西側の上武山地と児玉丘陵のほぼ境を走る八王子－高崎構造線の断層崖下付近に源を発する女堀川の開析作用によって、沖積低地が北東方向に向かって帯状に開けている。この沖積低地の北西側には児玉丘陵下から延びる比較的広大な低台地の本庄台地があり、南東側には児玉丘陵から分離された生野山・鷺山・大久保山の残丘が列状に並んでいる。このような地形的環境をもつ女堀川中流域では、各時代にわたる多くの遺跡が存在しているが、特に集落遺跡は沖積低地に面した本庄台地の縁辺部や残丘上及び残丘下に広がる低台地上と沖積低地内の自然堤防や微高地上に主に立地している。本報告の各遺跡は、飯玉東遺跡が大久保山西側斜面下の開析により半島状に突出した低台地上にある他は、この沖積低地内の自然堤防や微高地上に立地している。

本報告の各遺跡が所在する女堀川中流域では、弥生時代後期末には残丘上に生野山遺跡（埼玉県1982）や大久保山遺跡（荒川他1986）、残丘下の低台地上に飯玉東遺跡（駒宮他1979）や山根遺跡（増田1990）などの集落が形成されている。該期の集落は、いずれも単一時期の数軒からなる小規模な集落で、その立地から見ても残丘内の谷や台地上の開析谷を対象とした小規模な谷田経営を生産基盤にしていたと推測され、女堀川の両岸に広がる沖積低地はほとんど開発の対象にされていなかったようである（恋河内1992）。しかし、古墳時代になると急速に遺跡数が増加し、低地内に水路等を掘削して積極的に開発が進められるようになり、当地域の様相は弥生時代の時とはまったく一変する。

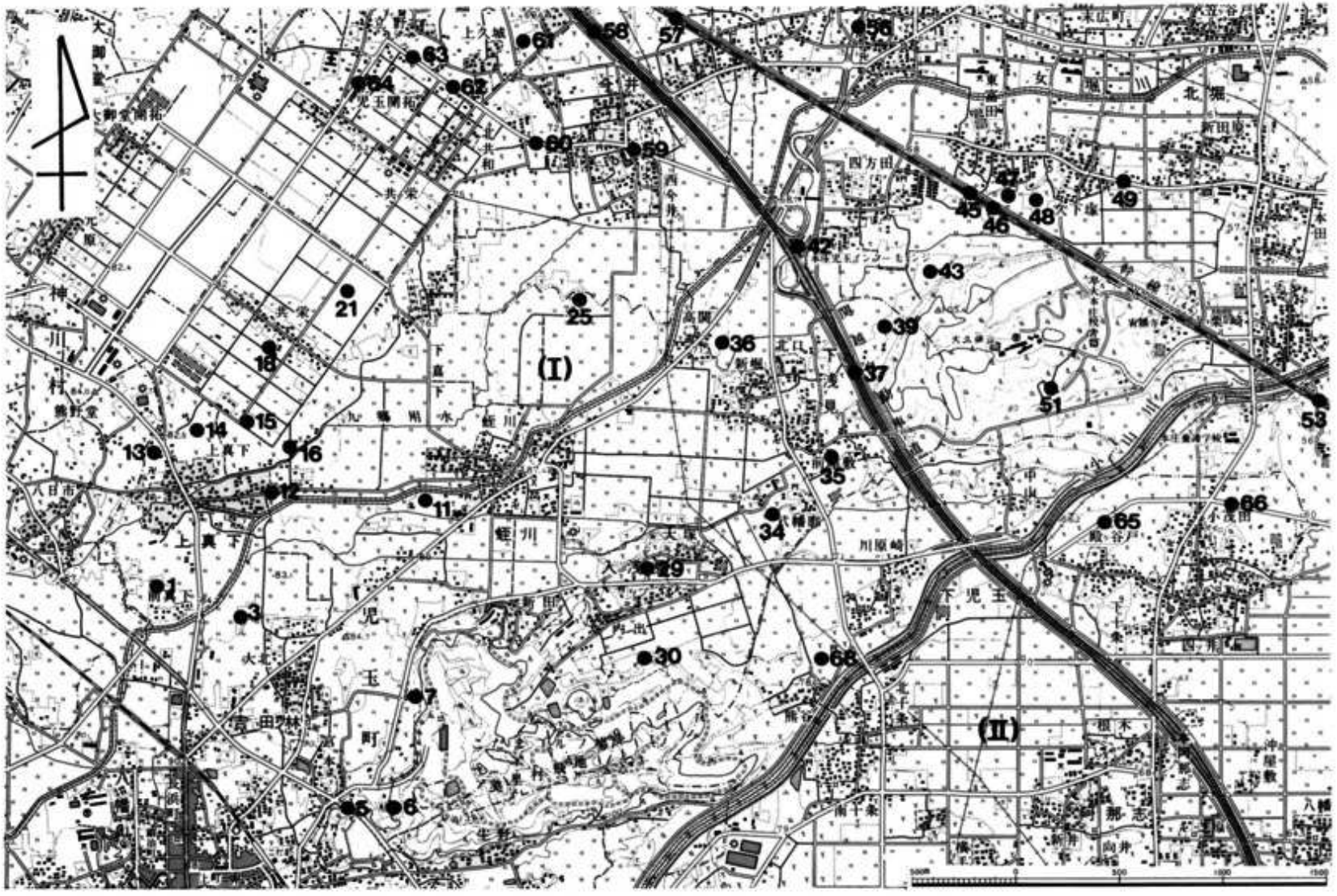
古墳時代前期の遺跡は、弥生時代後期末とした残丘上や低台地上の遺跡の中に、該期初頭に下るかあるいは継続する可能性のあるものもあるが、低地内の自然堤防上に集落が進出するのは現在のところ布留式古段階の叩き甕やＳ字甕Ｃ類を伴う川越田遺跡（恋河内1993）が最初と思われる。この遺跡は、その後集落の主体を北東に移動させて隣接する後張遺跡（立石他1982・83）の大規模集落に展開し、当地域の中心的集落として発展するが、同時に沖積低地内の他の自然堤防上や周辺の低台地及び残丘上にも小規模な集落が多く形成されるようになる。そして該期には、残丘上に県内最古の古墳の一つとして有名な全長60mを測る前方後方墳の鷺山古墳（坂本他1986）が築造されている。

中期は、高縄田遺跡（本報告）や蛭川坊田遺跡など低地内でも水路の掘削が顕著になり、集落の分布も前期よりさらに展開する様相が見られる。しかし、本地域の南東側の残丘上には集落がまったく形成されなくなり、前山２号墳（小久保他1978）・生野山将軍塚古墳（柳田1964）・金鑽神社古墳（坂本他1986）など、円墳を主体とする複数系列の首長層の墓が継続的に作られるようになる（菅谷1984）。また、当地域は中期でも比較的早い段階に住居にカマドが普及することで注目されている（中村1989）が、本報告の東牧西分遺跡第41号住居跡もこの段階のものである。

後期は、生野山の残丘上に全長60m級の前方後円墳の生野山銚子塚古墳（菅谷1984）や生野山16号墳（菅谷1984）が築造され、その後残丘上は生野山古墳群（菅谷他1973）や塚本山古墳群（増田他1977）などの群集墳が形成される。集落は、古墳時代を通じて最もその数が多くなるが、７世紀中葉にな




第２図　女堀川中流域周辺の主要古代遺跡１（古墳時代）




第３図　女堀川中流域周辺の主要古代遺跡２（飛鳥～平安時代）

ると、下田遺跡(柿沼他1979)や本報告の東牧西分遺跡など一部7世紀後半に継続するものもあるが、自然堤防上の集落のほとんどは廃絶され、北西側の本庄台地縁辺部や南東側の残丘下の低台地上に移動する現象が見られる。

奈良時代では、7世紀中葉以降に沖積低地を取り囲むように移動した集落がさらに広範囲に展開するようになる。特に本庄台地縁辺部は、将監塚・古井戸遺跡(井上他1986・赤熊他1989)・南共和遺跡・新宮遺跡・辻ノ内遺跡(鈴木他1991)・真下境東遺跡(鈴木他1989)など、遺構分布の粗密を有しながらも帯状に連続するような広大な居住域として盛行する。この本庄台地縁辺部の集落は、平安時代の9世紀まで断続的に営まれるが、9世紀後半になると衰退し、変わって自然堤防上に小規模な集落が見られるようになる。これに対して南東側の残丘上及び残丘下低台地の集落は、雷電下遺跡(駒宮他1979・恋河内1990)・鷺山南遺跡・新屋敷遺跡・阿知越遺跡(鈴木他1983・84)など、10世紀以降も集落が形成されているものが多く、古代の居住域としては比較的安定した場所であったことが伺えよう。

**主要遺跡一覧表**

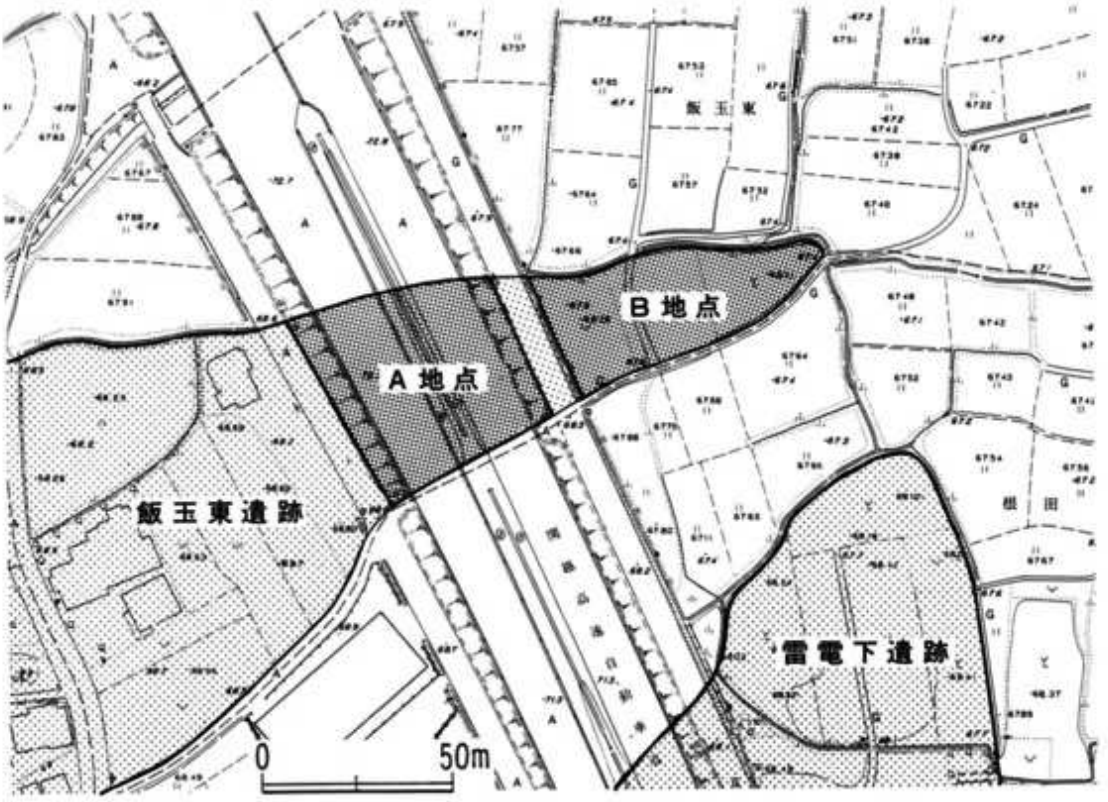
| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 金左奈遺跡(1992年調査) | 30 | 入浅見向田遺跡(1993年調査) | 59 | 北廓遺跡(赤熊他1986) |
| 2 | **高縄田遺跡**(本報告) | 31 | 東田遺跡(1992年調査) | 60 | 今井遺跡群(赤熊他1986) |
| 3 | **樋越遺跡**(本報告) | 32 | 浅見境遺跡(1986年調査) | 61 | 往来北遺跡(増田1990、上里町1992) |
| 4 | **鶴苺遺跡**(本報告) | 33 | 浅見境北遺跡(1992年調査) | 62 | 熊野太神南遺跡(赤熊他1986) |
| 5 | 御林下遺跡(駒宮他1977、1987年調査) | 34 | 鷺山南遺跡(1983年調査) | 63 | 八幡太神南遺跡(赤熊他1986) |
| 6 | 阿知越遺跡(鈴木他1983・84) | 35 | 南ノ前遺跡(1995年調査) | 64 | 立野南遺跡(赤熊他1986) |
| 7 | 割山遺跡(1991年調査) | 36 | **東牧西分遺跡**(本報告) | 65 | 村後遺跡(細田他1984) |
| 8 | 宮田遺跡(1991年調査) | 37 | 雷電下遺跡(駒宮他1979、恋河内1990) | 66 | 向田遺跡(細田他1984) |
| 9 | 辻堂遺跡(1990年調査) | 38 | **飯玉東遺跡**(駒宮他1979、本報告) | 67 | 日の森遺跡(菅谷1978) |
| 10 | 南街道遺跡(1991年調査) | 39 | 根田遺跡(恋河内1990) | 68 | 宮ケ谷戸遺跡(1983年美里町調査) |
| 11 | 蛭川坊田遺跡(1990年調査) | 40 | **梅沢遺跡**(赤熊他1986、本報告) | 69 | 樋之口遺跡(菅谷他1976) |
| 12 | 上真下東遺跡(1986年確認調査) | 41 | 川越田遺跡(赤熊他1986、恋河内1993) | A | 生野山古墳群(菅谷他1973) |
| 13 | 真下境東遺跡(鈴木他1989) | 42 | 後張遺跡(立石他1982・83) | B | 塚本山古墳群(増田他1977) |
| 14 | 辻ノ内遺跡(鈴木他1991) | 43 | 山根遺跡(増田1990) | C | 浅見山古墳群(本庄市1986) |
| 15 | 新宮遺跡(1991年調査) | 44 | 四方田遺跡(増田1989) | D | 東富田古墳群(本庄市1986) |
| 16 | 坊田遺跡(1987年調査) | 45 | 観音塚遺跡(増田1987) | E | 鷺山古墳(坂本他1986) |
| 17 | 塚畠遺跡(鈴木他1991) | 46 | 下田遺跡(柿沼他1979、増田1987) | F | 金鑽神社古墳(坂本他1986) |
| 18 | 南共和遺跡(1990年調査) | 47 | 元富遺跡(増田1987) | G | 生野山将軍塚古墳(梅田1964) |
| 19 | 平塚遺跡(徳山他1994) | 48 | 七色塚遺跡(増田1987) | H | 物見塚古墳(菅谷1984) |
| 20 | 古井戸南遺跡(井上他1986) | 49 | 久下東遺跡(増田1985) | I | 生野山銚子塚古墳(菅谷1984) |
| 21 | 将監塚・古井戸遺跡(井上他1986・赤熊他1989) | 50 | 浅見山Ⅰ遺跡(本庄市1986) | J | 生野山16号墳(菅谷1984) |
| 22 | 左口遺跡(徳山他1994) | 51 | 大久保山遺跡(佐々木他1986・93) | K | 熊谷後1号墳(美里町1986) |
| 23 | 堀向遺跡(1988年調査) | 52 | 東谷遺跡(小久保他1978) | L | 前山2号墳(小久保他1978) |
| 24 | 藤塚遺跡(徳山1992) | 53 | 古川端遺跡(小久保他1978) | M | 公卿塚古墳(坂本他1986、太田他1991) |
| 25 | 柿島遺跡(1989年調査) | 54 | 笠ケ谷戸遺跡(長谷川他1979) | N | 四方田古墳(増田1989) |
| 26 | 共和小学校校庭遺跡(恋河内1989) | 55 | 雌濠遺跡(本庄市1986) | O | 宥勝寺北裏埴輪窯跡(橋本他1980) |
| 27 | 日延遺跡(1991年調査) | 56 | 社具路遺跡(長谷川他1987) | P | 八幡山埴輪窯跡(柳1961) |
| 28 | 城の内遺跡(鈴木他1981、1991年調査) | 57 | 諏訪遺跡(柿沼他1979、増田1990) | Ⅰ | 児玉条里遺跡(鈴木他1991、徳山他1994) |
| 29 | 新屋敷遺跡(1989年調査) | 58 | 久城前遺跡(駒宮他1978、増田1990) | Ⅱ | 十条条里遺跡(美里町1986) |

# 第Ⅲ章　飯玉東遺跡Ｂ地点の発掘調査

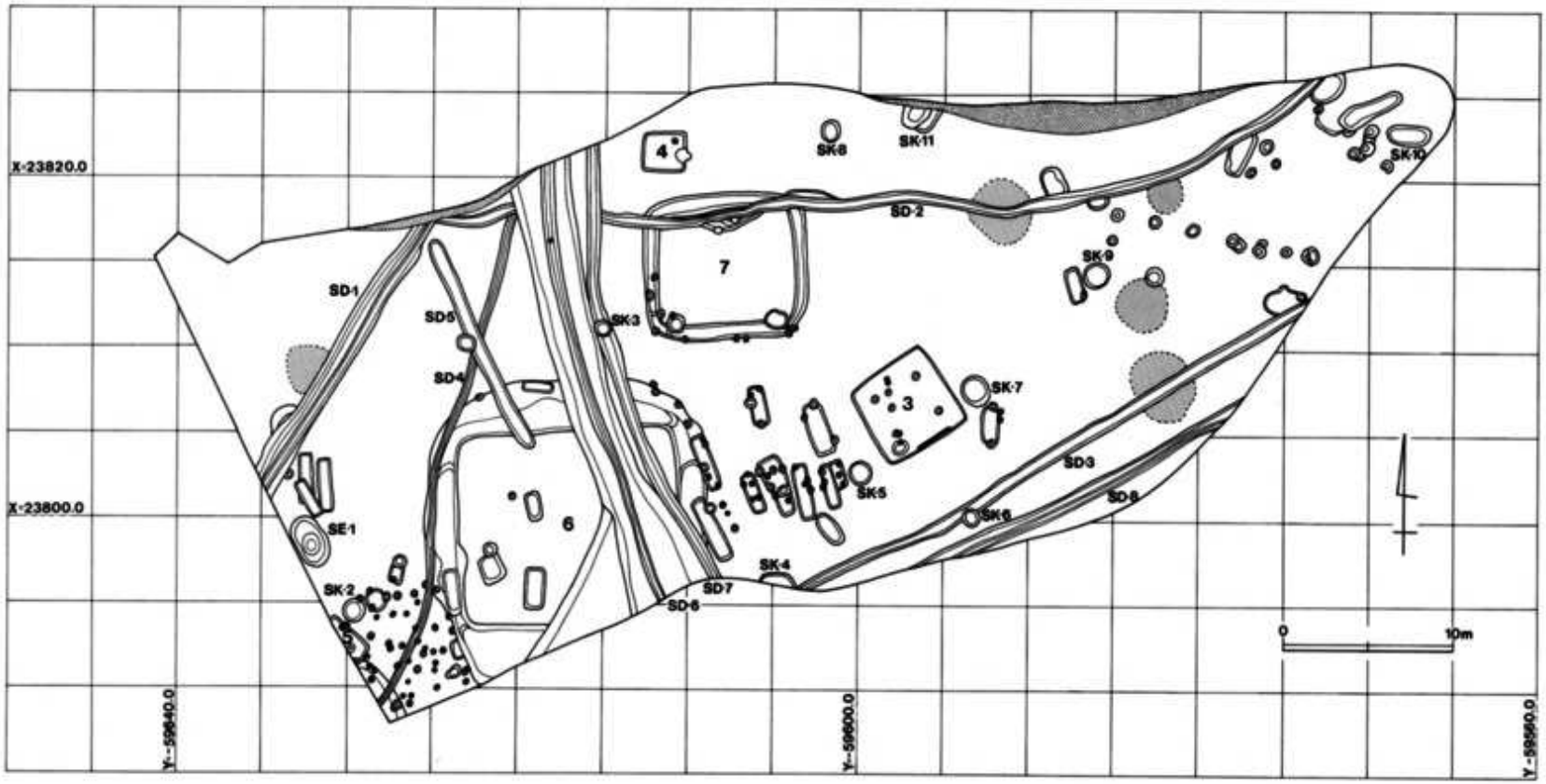
## 第１節　遺跡の概要

本遺跡は、児玉町大字下浅見字飯玉東に所在する、縄文時代から中世にわたる複合遺跡である。遺跡は、大久保山の西側斜面下に広がる低台地から湧水等による開析作用によって分離したと推測される標高68ｍを測る半島状に突き出した細長い微高地上に立地している。本遺跡が立地する微高地は、周囲の水田との比高差が40㎝～50㎝程度で、調査前は主に畑として利用されていたが、その耕作土は10㎝～20㎝とかなり浅く、耕作土下は直接ハードローム層に達している。そのため、現在の微高地は本来の地形よりもかなり強く削平を受けていると考えられ、Ｂ地点の第３号住居跡のように遺構の遺存状態がかなり悪いものも見られることから、中にはすでに削平により消滅した遺構もあることが予想される。

本遺跡は、昭和49年(1974年)に関越自動車道建設に伴って、埼玉県教育委員会により発掘調査が実施されており、住居跡２軒(弥生時代後期１・平安時代？１)、方形周溝墓５基(古墳時代)、土壙１基(縄文時代中期)が検出されている(駒宮他1979)。そのため、この埼玉県教育委員会が調査した地点をＡ地点とし、今回の調査地点をＢ地点と呼称する。また、遺構番号については、Ａ地点で検出された遺構からの続き番号にした。今回調査したＢ地点は、Ａ地点の東側に隣接し、東側に向いて半島状に突出した微高地の東端部にあたる。




第４図　飯玉東遺跡Ｂ地点位置図

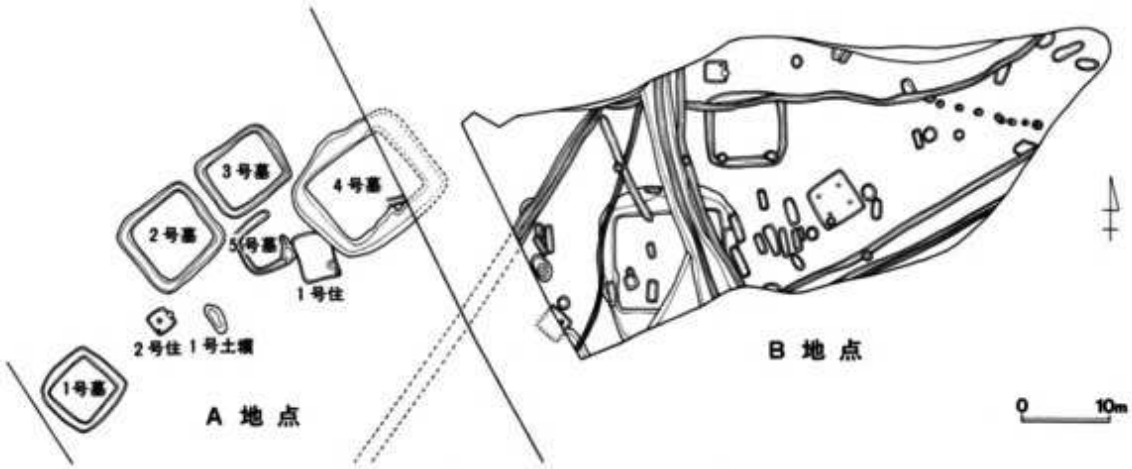



第５図　飯玉東遺跡Ｂ地点全測図

B地点で検出された遺構は、住居跡３軒(古墳時代中期１・時期不明２)、方形周溝墓２基(古墳時代前期)、土壙10基(縄文時代中期１・弥生時代後期４・古墳時代中期?１・古代３・中世１)、井戸跡１基(平安時代)、溝跡８条(古墳時代中期２・後期１・中世３・近世以降２)である。この他では、調査区の東側を主体に倒木痕が複数見られ、調査区の中央部南側から南西側にかけては長方形を呈する最近のイモ穴が多数掘削されている。

縄文時代の遺構は、土壙がA地点(第１号土壙)とB地点(第８号土壙)でそれぞれ１基ずつ検出されただけである。形態はそれぞれ不整楕円形と円形を呈すが、その性格は不明である。時期は、A地点の第１号土壙より中期後半加曽利ＥⅢ式の深鉢(完形)が出土しており、B地点の第８号土壙もおそらくそれに近時した時期のものと思われる。なお、本遺跡や本遺跡の南側に対峙する雷電下遺跡(駒宮他1979・恋河内1990)からは、加曽利ＥⅢ式～ＥⅣ式の破片が多数出土しており、本遺跡の近辺に該期の集落が存在することも予想されよう。

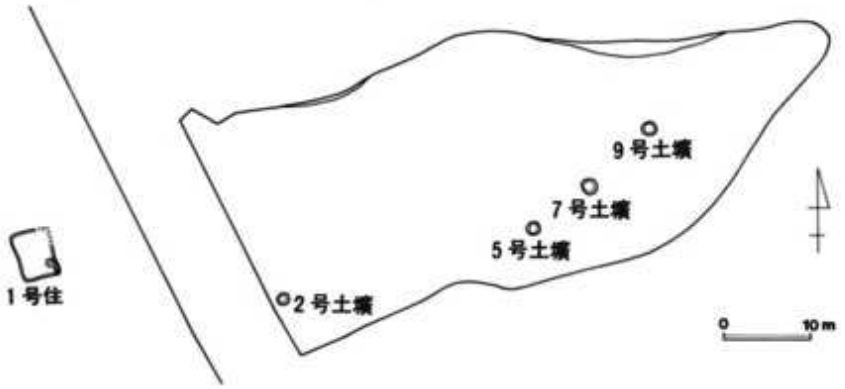
弥生時代の遺構は、A地点で住居跡１軒(第１号住居跡)とB地点で土壙４基(第２・５・７・９号土壙)が検出されている(第７図)。これらは、密集せずに相互にやや距離を置き、比較的散漫とした遺構分布の状況を呈しているが、微高地の中央部に住居跡、東端部に土壙群という意図的な配置が伺える。住居跡は、A地点の西側にもさらに遺跡が広がっているため、そちらに該期の住居跡が存在する可能性もある。この第１号住居跡は、樽式土器を主体的にもつ住居跡に特徴的な長方形を呈しているが、炉や主柱穴などの明確な施設がなく、貯蔵穴も定位置とは異なった場所にあり、一般的な住居跡とは趣を異にしている。土壙は、いずれも直径1.5m前後の円形を呈している。出土遺物が少ないためその性格は不明であるが、覆土が類似していることから同一の性格のものであったことが推測される。これらの遺構の多くは、後期の櫛描文を特徴とする樽式土器を主体とするものであるが、B地点の第５号土壙は系統の異なる縄文を特徴とする吉ケ谷式土器を出土している。本遺跡から出土した樽式土器は、その特徴から後期でも終末段階以降に位置づけられるものであるが、第５号土壙から出土した吉ケ谷式土器は、それに平行する段階のものよりはやや古い特徴も見られ、両者は時間差がある可能性も考えられる。



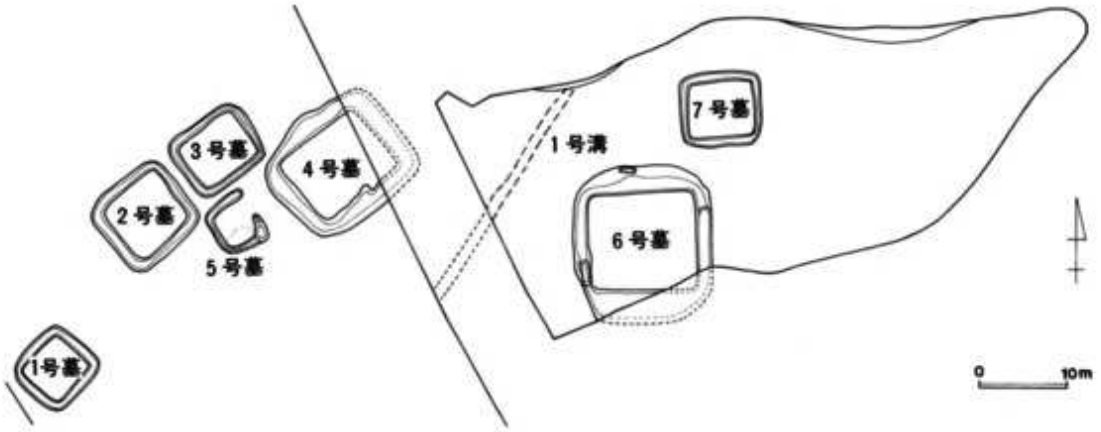

**第６図　A地点・B地点全体図**

古墳時代の遺構は、A地点で前期と推測される方形周溝墓5基(第1～5号周溝墓)、B地点で前期の方形周溝墓2基(第6・7号周溝墓)、中期の住居跡1軒(第3号住居跡)・溝跡2条(第1・2号溝跡)、後期の溝跡1条(第4号溝跡)である。前期は、A・B両地点とも方形周溝墓群が形成され、本遺跡の東側半分は集落の墓域として利用されている(第8図)。いずれも方台部盛土や主体部はすでに削平されており、形態は周溝が全周するものが一般的で、周溝を接しないで群在しているのが特徴的である。これらの方形周溝墓群は、A地点の第1～5号周溝墓とB地点の第6～7号周溝墓では、方台部の向きが異なり距離も離れていることから、墓域を共有する集団の中でも異なるグループによる群として大別できる。A地点の方形周溝墓群では、第1号周溝墓が向きを同じくするもののやや離れて位置していることから、他と分離される可能性があり、さらに第2～5号周溝墓は第2・3号周溝墓と第4・5号周溝墓の小グループに分けることができる。このA地点における周溝墓の配列の原理から見ると、B地点の2基はそれぞれ別の小グループとして捉えることができよう。中期は、B地点で住居跡1軒と溝跡2条が検出されているだけであり、小規模な集落が比較的短期間に営まれていたようである。

この他、本遺跡では古代にも住居跡や井戸跡の存在から小規模な集落が形成されていたことが伺えるが、中世以降は土壙や溝がいくつか掘削されるだけとなる。




**第7図　飯玉東遺跡弥生時代後期遺構分布図**




**第8図　飯玉東遺跡古墳時代前期遺構分布図**

## 第２節　検出された遺構と遺物

### １．住居跡

**第３号住居跡(第９図)**

Ｂ地点調査区中央部のやや南側に位置する。遺構の遺存状態はあまり良好とは言えず、かろうじて住居の形態が分かるが、住居の床面近くまで耕作による強い削平を受けている。

平面形は、南西側壁が若干南に開く方形を呈し、規模は北東～南西方向5.14m、北西～南東方向は5.23mを測る。壁はやや斜めに立ち上がり、北東側壁で最高12cm・南側コーナー部で最低３cm残存している。主軸方位は、Ｎ－56°－Ｅをとる。

床面は、住居の壁際をドーナツ状に掘り窪めた後、ロームブロックを少量含む暗褐色土で埋め戻した貼床式である。全体に凹凸があり、住居中央部に比べて周辺部はかなり軟弱である。カマドや炉については明確な痕跡が認められなかったが、Ｐ１・Ｐ２間の中央の床面付近に焼土粒子や炭化粒の分布が若干認められたことから、その位置にあまり使用頻度の高くないような炉が存在した可能性が考えられる。周溝は、南東壁下の中央部にのみ見られる。

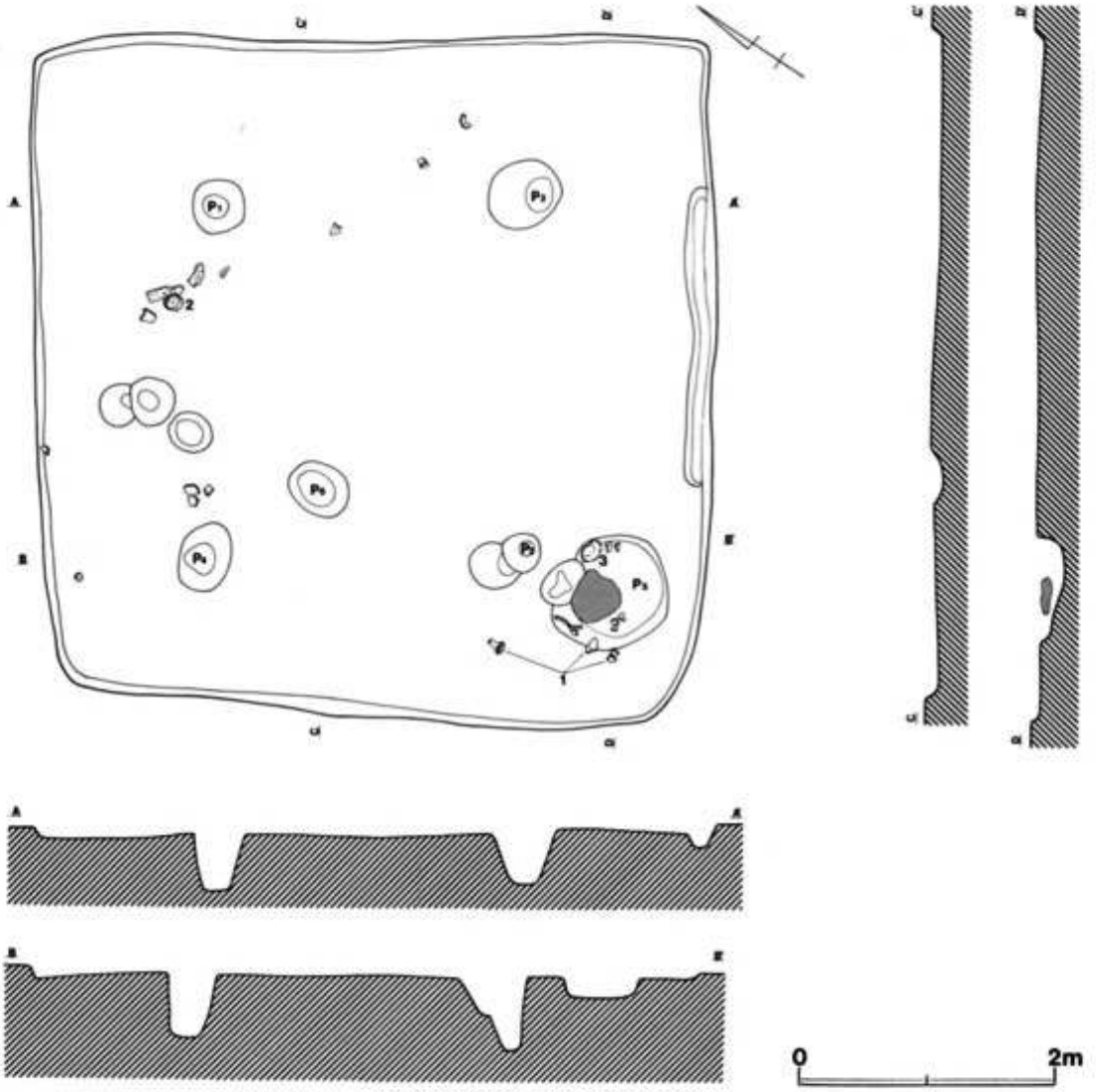
ピットは、住居跡内より10箇所検出されている。ほぼ住居跡の対角線上に位置するＰ１～Ｐ４は、主柱穴と考えられるもので、平面形は円形を呈し、床面からの深さは44cm～57cmと比較的そろっている。Ｐ５は、いわゆる貯蔵穴と考えられるもので、直径42cm・深さ20cmの円形を呈し、中から白色粘土塊とNo３の鉢や土器片が出土している。Ｐ６は、住居中央部の西寄りに位置し、深さ６cmの皿状を呈している。この他のピットは、すべて覆土中にＡ軽石を含む最近のものである。

出土遺物は、住居跡の遺存状態を反映して土器が少量出土しているが、これらはすべて床面直上もしくは貯蔵穴内からの出土である。土器以外では、主柱穴Ｐ１の西側より棒状の片岩が３個出土している。

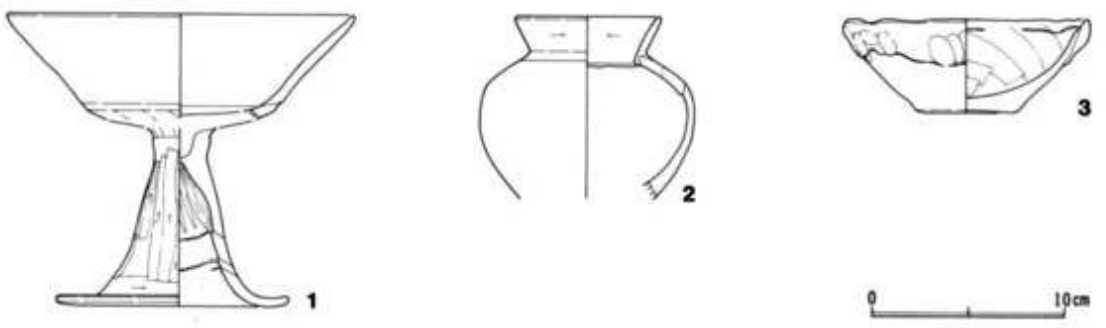
本住居跡の時期は、出土遺物より古墳時代中期の和泉期と考えられる。

**第３号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 高坏 | 口縁部径<br>(18.0cm)<br><br>推定高<br>(15.0cm) | 脚部粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外反ぎみに外傾する。脚柱部はやや膨らみながら開き、脚端部は短めに外反する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚柱部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 白色粒<br><br><br>内外－明茶褐色 | 坏部1/3。<br>脚部2/3。<br>坏部と脚部は接合しない。 |
| 2 | 小形壺 | 口径 7.5cm<br><br>推定高9.4cm | 輪積み成形。口縁部は緩やかに外傾する。胴部は張り、最大径を中位に有する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。頸部内面シボリ。 | 白色粒・赤色粒<br>外－明茶褐色<br>内－橙褐色 | 約1/2。 |
| 3 | 坏 | 口径12.3cm<br>器高 4.8cm<br>底径 5.2cm | 粘土紐積み上げ成形。体部は内湾ぎみに開き、口縁部は複合状を呈す。底部平底。 | 口縁部外面指押さえ。体部外面ナデ、内面篦ナデ。 | 白色粒<br><br>内外－淡褐色 | 約1/2。<br>外面に黒斑あり。 |




第9図　第3号住居跡




第10図　第3号住居跡出土土器

**第４号住居跡(第11図)**

Ｂ地点調査区中央部の北端に位置する。他の住居跡に比べて遺存状態は良い方ではあるが、周辺の状況からみて、耕作による削平を強く受けていると考えられる。

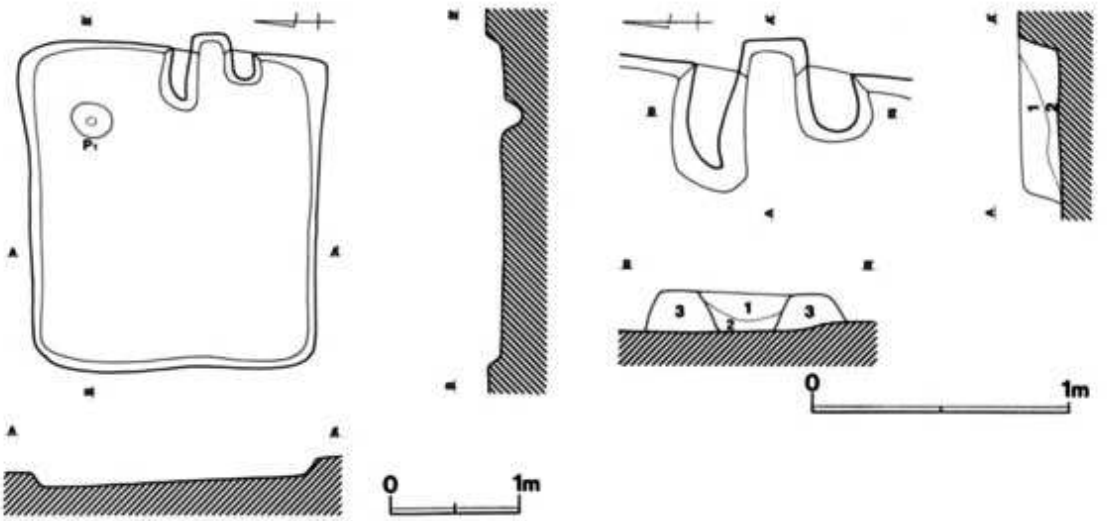
平面形は、長軸を東西方向にもつ比較的整然とした長方形ぎみの形態を呈する。規模は、東西方向2.54m・南北方向2.23mを測り、比較的小形の住居跡である。壁はやや斜めに立ち上がり、各壁とも10cm程度残存している。主軸方位は、ほぼN－90°－Eの真東を向く。

床面は、住居を掘削した部分を整形して直接床面にした直床式で、掘り方はもたない。比較的平坦であるが、やや北に向かって傾斜している。周溝はまったく認められない。

ピットは、住居跡の北東側で１箇所検出されている。Ｐ１は、直径約30cmの円形を呈し、断面は底面の小さい摺鉢状をしている。

カマドは、住居の東側壁の中央からやや南に寄った位置に付設されている。規模は、全長58cm・幅78cmある。袖は、灰白色粘土を住居の壁に直接貼り付けて構築しており、右袖の先端部はすでに崩壊している。燃焼部は、住居の壁をあまり掘り込まず、燃焼面は住居の床面とほぼ同一で、あまり焼けていない。煙道部はすでに削平されており不明である。

出土遺物はまったくなく、一片の土器片すら出土していない。そのため本住居跡の時期は明確にしがたいが、カマドの燃焼部が壁をあまり掘り込まない形態であることから、古墳時代後期～奈良時代前半頃のものと考えられる。




**第11図　第４号住居跡**

**第４号住居跡カマド土層説明**

第１層：暗褐色土層（灰白色粘土粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第３層：灰白色粘土層（灰白色粘土ブロックを多量に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**第５号住居跡(第12図)**

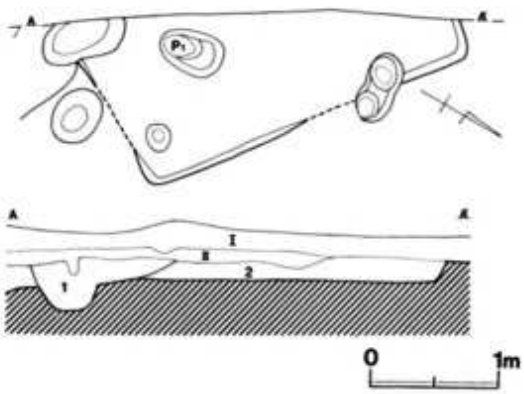
Ｂ地点調査区西端の南側に位置する。住居跡の遺存状態は非常に悪く、住居の床面近くまで耕作による強い削平を受けている。また、本住居跡の大部分は調査区外に位置するため、住居の全容は不明である。

平面形や規模は不明であるが、北西～南東方向は2.72mまで測れる。壁は、やや斜めに立ち上がり、北西側壁で最高18cm確認できる。

床面は住居を掘削した部分を整形して直接床面にした直床式で、掘り方はもたない。比較的平坦に作られており、水平をなす。

本住居跡に伴うと考えられるピットは、Ｐ１の１箇所が検出されており、その位置から主柱穴の一部である可能性も考えられる。平面形は楕円形を呈し、断面は２段に深くなっている。床面からの深さは30cmある。

出土遺物は非常に少なく、古墳時代前期～中期の土器片が数片出土しただけである。本住居跡の時期は、古墳時代前期～中期の可能性が高いと考えられるが、明細は不明である。




**第５号住居跡土層説明**

第Ⅱ層：暗褐色土層（Ｂ軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第１層：黒褐色土層（鉄斑を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

**第12図　第５号住居跡**

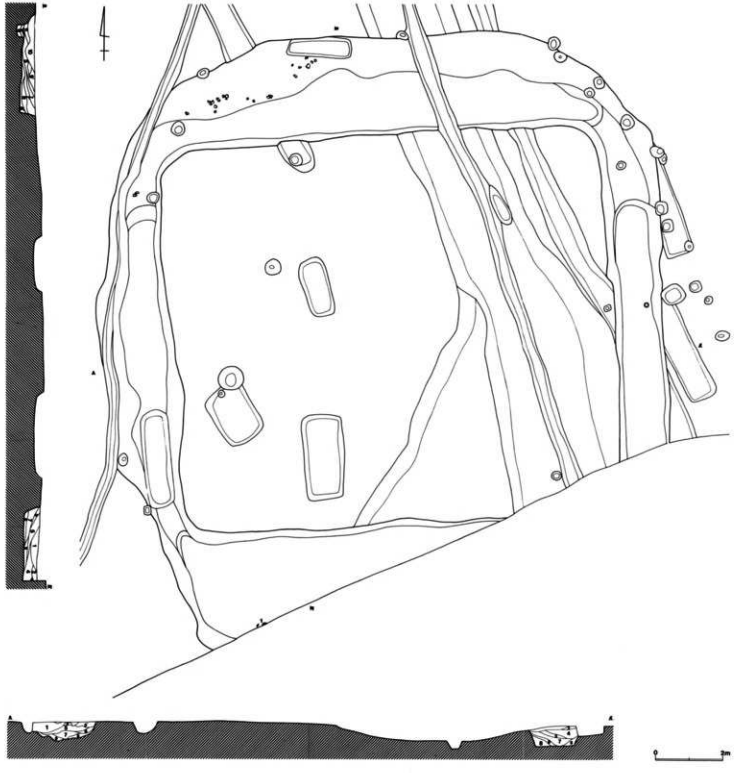
## ２．方形周溝墓

**第６号方形周溝墓(第13図)**

Ｂ地点調査区の南西側に位置する。本周溝墓の北東側約３ｍには、第７号方形周溝墓が近接している。方台部盛土はすでに削平されており、主体部は残存していない。方台部に見られる土壙は、すべてＡ軽石を含む近世後半以降のものである。また、本周溝墓は後世の溝や耕作による攪乱をかなり受けているが、周溝の遺存状態は比較的良好である。

方台部は、コーナー部がやや丸みをもつ比較的整った長方形を呈し、規模は長軸方向12.83m・短軸方向11.28mを測り、これまでに本遺跡で調査されたＡ地点やＢ地点の方形周溝墓の中では、最大の規模を有するものである。主軸方位はＮ－87°－Ｅをとり、ほぼ真東の方向に向いている。

本周溝墓の方台部盛土は、西側に隣接する古墳時代後期の土師器坏を出土した第４号溝跡が、本



**第6号方形周溝墓土層説明**

第1層：黒褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第2層：黒色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第3層：黒色土層（白色粘土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4層：黒褐色土層（白色粒子を均一に、鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第5′層：暗褐色土層（第5層に類似するが、鉄斑を多量に含む。粘性・しまりともない。）

第6層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第7′層：暗褐色土層（第7層を基本とするが、色調がやや暗く、ロームブロックが多い。）

第8層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりともない。）

第8′層：暗黄褐色土層（第8層と類似するが、色調がやや暗く、ロームブロックが小さい。）

第9層：黒色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第10層：黒色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第11層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりともない。）

第12層：黒色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

**第13図　第6号方形周溝墓**

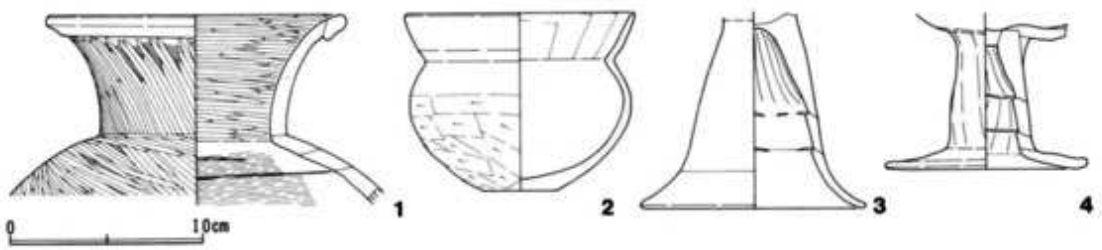
周溝墓の方台部を若干避けるように流路をとっていることから、後期頃までは盛土の痕跡が残存していたようであるが、中世の片口鉢を出土した第６号溝跡が、本周溝墓を破壊して掘削されるころには、完全に削平されていたようである。

周溝は、南東側コーナー部の周溝が調査区外に位置するため、全周するか陸橋部を有するかは判断できない。周溝の形態は、周溝外側はあまり整った形態を呈しておらず、南北両側の周溝幅が南側最大３ｍ以上・北側最大2.85ｍと広いのに対して、東西両側の周溝幅は東側最大1.48ｍ・西側最大1.71ｍとかなり狭い。また、コーナー部は他の部分に比べて狭く浅い形態になっている。周溝断面は、方台部側はかなり急で直線的に立ち上がるが、外側は比較的なだらかで緩やかに立ち上がる。確認面からの深さはいずれも50cm前後あり、周溝底面は凹凸の少ない広い平坦な面になっている。周溝覆土は、基本的に９層に分かれるが、方台部側からの流入が顕著である。

北側と西側の周溝内からは、それぞれ土壙が検出されている。北側周溝内の外側寄りに位置する土壙は、長さ178cm・幅60cmの細長い長方形を呈し、深さは約35cmある。周溝が若干埋没してから掘られたもので、覆土はロームブロックを多量に含む黄褐色土(第11層)と黒色土(第12層)が互層をなし、人為的に埋め戻されたものと考えられる。西側周溝内の南側コーナー部寄りに位置する土壙は、長さ280cm・幅86cmとやや規模の大きい長方形を呈し、周溝底面からの深さは北側で約５cm・南側で約20cmある。これも周溝が若干埋没してから掘られたもので、覆土がロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を主体にしていることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。これらの周溝内土壙の性格は、出土遺物がないため明確ではないが、覆土の観察から本周溝墓の方台部に埋葬された主体者と関係する者が後から追葬された埋葬施設の可能性が高いと考えられる。

出土遺物は、少量の土器片と滑石製の管玉(第14図No５)が周溝内より出土しただけである。No１の複合口縁を呈する壷は、唯一本周溝墓に伴うもので、胴部以下を欠失しているが、南側周溝内の底面に割れ口を接して正位で出土している。No２～４の和泉期の土器は、本周溝墓に直接伴うものではなく、北側周溝のコーナー部寄りの覆土上面に投棄されたものである。No５の管玉は、東側周溝の覆土中より単独で出土している。

**第14図　第６号方形周溝墓出土管玉**




**第15図　第６号方形周溝墓出土土器**

**第６号方形周溝墓出土土器観察表**

| No. | 器　種 | 法　　量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壷 | 口縁部径<br>15.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は幅狭の複合を呈する。頸部は胴部と明確な境をもち、緩やかに外反する。胴部は張る。 | 複合口縁部ヨコナデ。頸部内外面ハケの後ミガキ。胴部外面ハケの後ミガキ、内面ハケの後ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>外－淡褐色<br>内－白褐色 | 口縁部～胴部上半のみ。 |
| 2 | 鉢 | 口径(11.8)<br>器高　9.1<br>底径　3.8 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、底部は平底。 | 口縁部外面ヨコナデ、内面篦ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－暗茶褐色<br>内－黒褐色 | 約1/3。<br>外面に黒斑あり。 |
| 3 | 高　坏 | 残存高<br>10.0cm | 粘土紐巻き上げ成形。脚柱部は膨らみをもって広がり、脚端部は短く外反する。 | 脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 白色粒<br>内外－明茶褐色 | 脚部2/3。 |
| 4 | 高　坏 | 残存高<br>8.0cm | 粘土紐巻き上げ成形。脚柱部はあまり膨らまず、脚端部は低く外反する。 | 脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 白色粒<br>内外－明茶褐色 | 脚部2/3。 |

## 第７号方形周溝墓(第16図)

Ｂ地点調査区中央部に位置する。本周溝墓の南西側約３ｍには、第６号方形周溝墓が近接している。方台部盛土はすでに削平されており、主体部は残存していない。本周溝墓の北側は、東西方向に流路をとる第２号溝跡と重複し、それによって切られている。

方台部は、コーナー部が丸みをもつ比較的整った長方形を呈し、規模は長軸方向8.06ｍ・短軸方向6.51ｍを測る。主軸方位はＮ－87°－Ｅをとり、南西側に近接する第６号方形周溝墓と同一方向である。方台部盛土は、和泉期の第２号溝跡が方台部の一部を切っていることから、その頃にはかなり削平が進んでいたと考えられる。

周溝は、幅約65cm～１ｍの比較的整った溝が全周する形態を呈するが、コーナー部は他に比べて幅がやや狭くなっている。確認面からの深さは、各辺の周溝とも35cm前後あり、コーナー部では北東側と北西側が30cm前後あるのに対して、南東側と南西側は５cm前後とかなり浅くなっている。周溝断面は、両側ともしっかり立ち上がるが、方台部側に比べて外側は傾きが若干緩やかである。覆土は３層に分かれるが、第６号方形周溝墓のような方台部側からの顕著な流入は見られない。

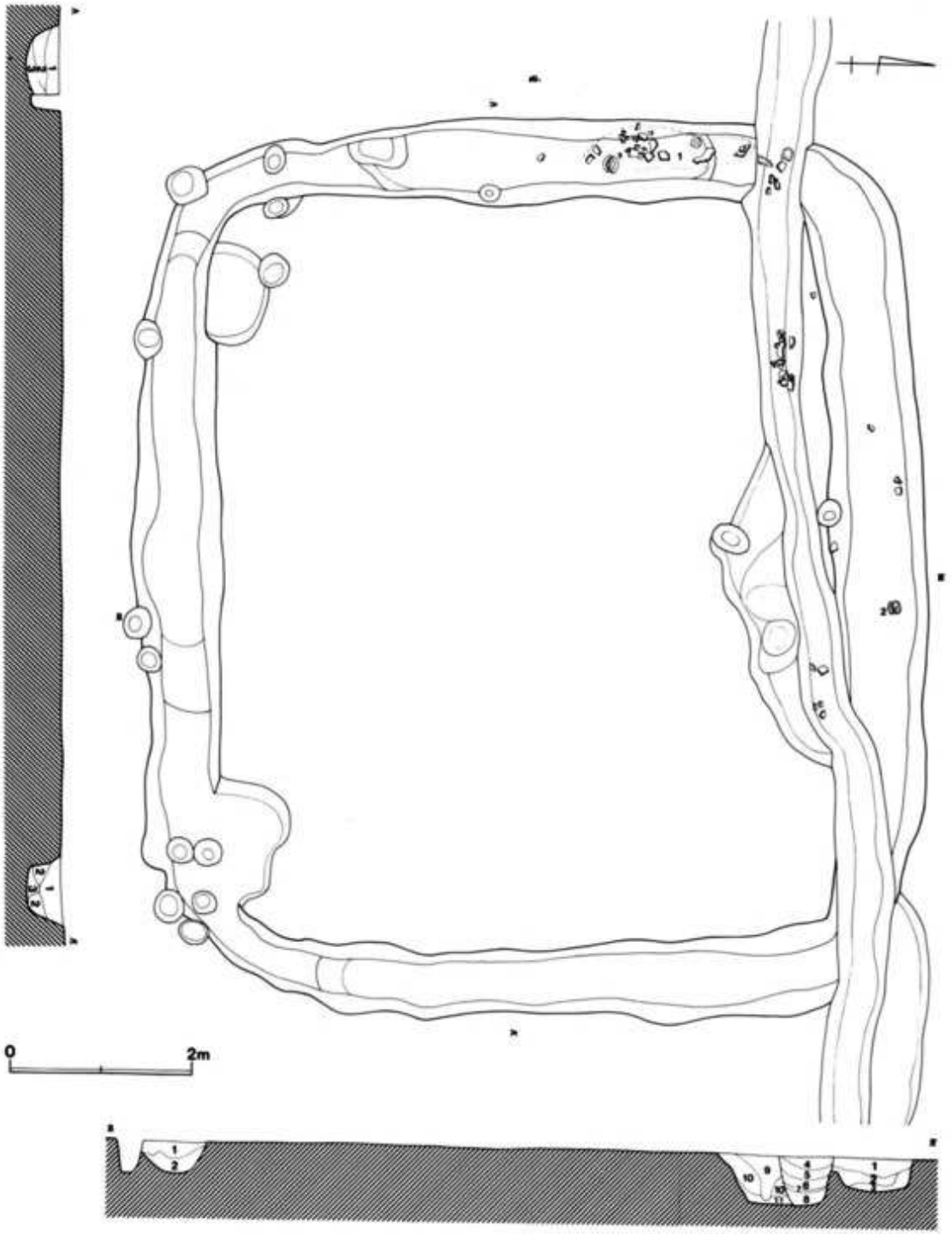
出土遺物は、比較的少量であるが、西側周溝内より壷(No１)が、北側周溝内より器台(No２)が出土している。No１の壷は、周溝底面より10cm浮いて散乱したような状態で出土し、No２の器台は、周溝底面より20cm浮いて倒立した状態で出土している。

**第７号方形周溝墓土層説明**

第１層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第３層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりともない。）

**第２号溝跡**

第４層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第５層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
第６層：黒褐色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第７層：暗灰色土層（灰色粘質土層。）
第８層：暗褐色土層（ロームブロック・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）



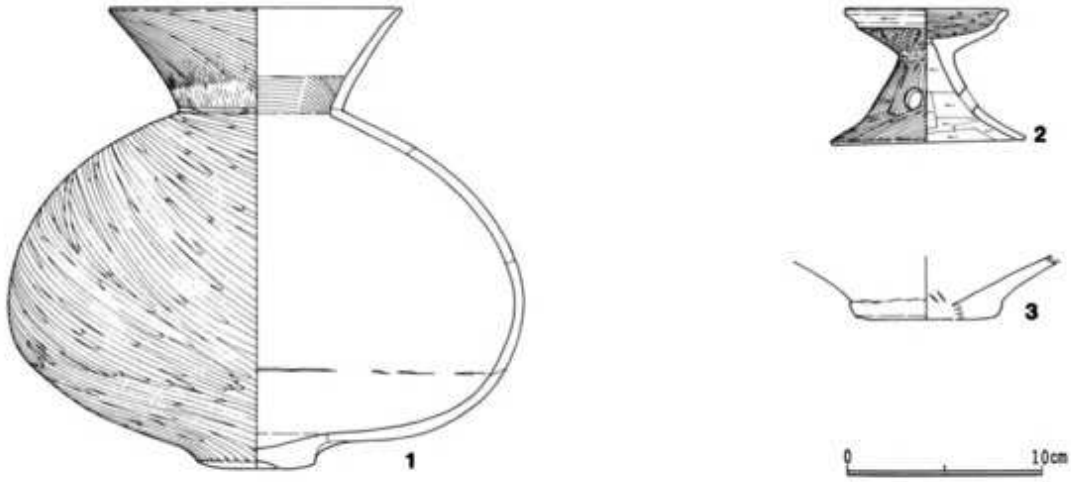

**第16図　第７号方形周溝墓**

**土壙状落ち込み**

第９層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第10層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第11層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりともない。）




**第17図　第７号方形周溝墓出土土器**

**第７号方形周溝墓出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壷 | 口径(15.2)<br>器高 23.6<br>底径 6.0 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はかなり張り、最大径を下位に有する。底部は突出し、中央部は窪む。 | 口縁部内外面ハケの後ナデ。胴部外面上半ミガキ、下半ケズリの後ミガキ。内面ナデ。底部外面ナデ。 | 白色粒･角閃石<br>赤色粒<br>外－淡橙褐色<br>内－淡褐色 | 約3/4。<br>胴部外面に黒斑あり。 |
| 2 | 器台 | 口縁部径 8.4cm<br>器高 7.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は器受部より段をもって上方に外反し、脚部は緩やかに開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ、器受部外面ケズリの後ミガキ、内面ミガキ。脚部外面ハケの後ミガキ、内面ケズリ。 | 白色粒・角閃石<br>内外－明茶褐色 | 完形。<br>脚部穿孔は３箇所。 |
| 3 | 壷 | 底部径 (7.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。底部は突出し、平底を呈する。 | 胴部外面ナデ､内面篦ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－淡茶褐色<br>内－暗茶褐色 | 底部1/3。 |

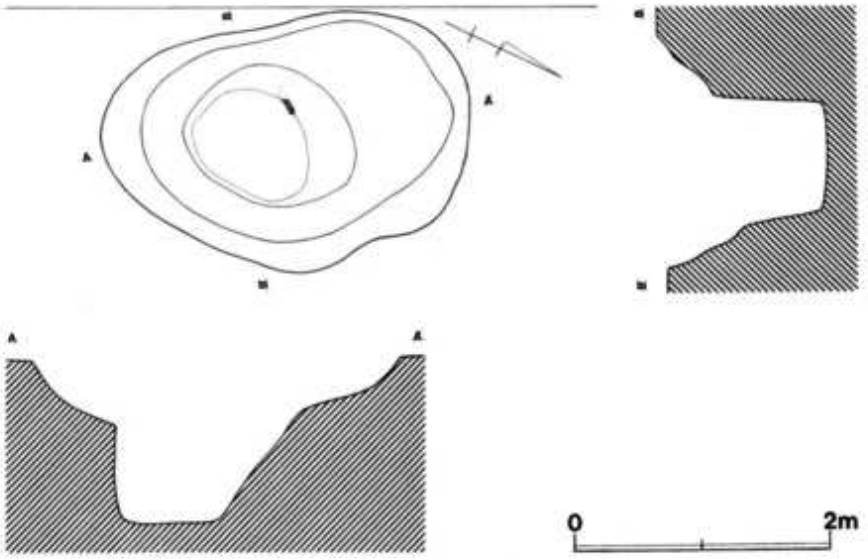
### ３．井戸跡

#### 第１号井戸跡(第18図)

Ｂ地点調査区の西端に位置する。井戸掘り方の遺存状態は比較的良好であるが、井筒は残存していなかった。

掘り方の形態は、平面形は2.84ｍ×1.90ｍの楕円形のような不整形を呈し、中央部が1.28ｍ×1.10ｍの不整円形状に深くなっている。確認面からの深さは1.30ｍあり、比較的浅い。断面は、上半の40cm位までが緩やかに傾斜し、下半は筒状に深くなっている。底面は平坦である。この掘り方中央部の不整円形を呈する筒状の落ち込み内からは、杭の先端部が１箇所壁面に突き刺さった状態で出土しており、簡単な構造の木枠を伴っていたものと考えられる。

出土遺物は、杭の他に数片の国分期の土師器片と羽釜の破片が出土している。本井戸跡の時期は、これらの土器片より、平安時代中頃のものと考えられる。




**第18図　第１号井戸跡**

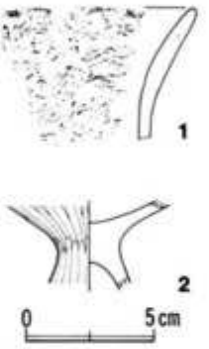
## 4．土　壙

### 第２号土壙(第20図)

B地点調査区西端に位置する。南西側には第５号住居跡、北西側には第１号井戸跡が近接している。土壙の一部を後世のピットによって切られているが、遺存状態は比較的良好である。

平面形は、1.48m×1.33mの円形を呈し、確認面からの深さは53cmを測る。壁は直線的に若干傾斜して立ち上がり、底面は平坦をなしている。出土遺物は、覆土中より弥生時代後期の樽式土器の甕(No１)と高坏(No２)の破片が出土している(第19図)。

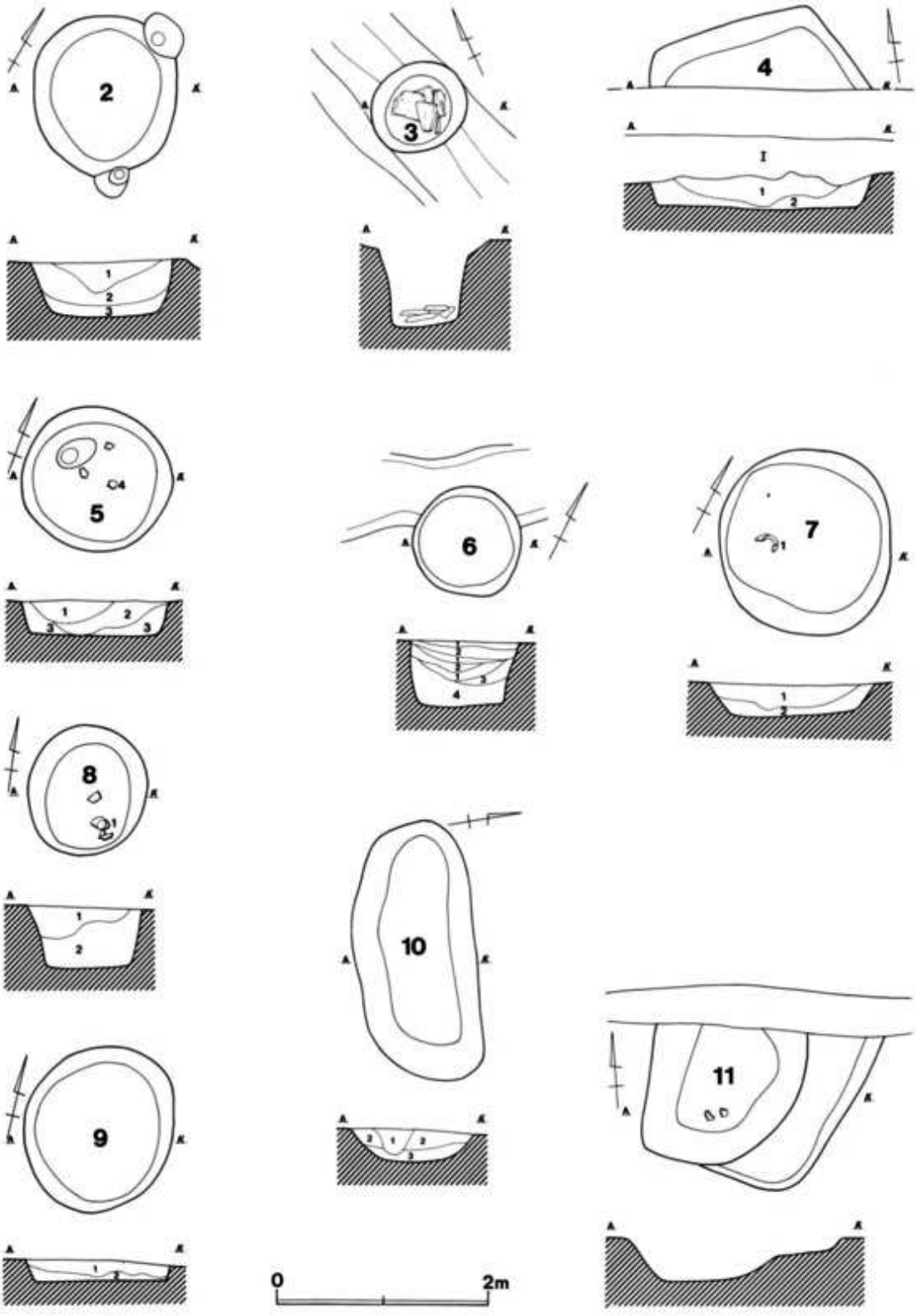
本土壙の時期は、出土遺物や覆土の状態より、弥生時代後期のものと考えられる。




**第19図　第２号土壙出土土器**

**第２号土壙出土土器観察表**

| No. | 器　種 | 法　量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | | 粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや肥厚し、緩やかに外反する。 | 口縁部外面ナデの後櫛描波状文。波状文は右回りで、下段から上段に順次施文。内面ミガキ。 | 白色粒<br>内外－黒褐色 | |
| 2 | 高　坏 | | 粘土紐積み上げ成形。坏部は内湾ぎみに開き、脚部との境はなだらかである。 | 外面ミガキ。坏部・脚部とも内面ナデ。 | 白色粒・角閃石<br>外－暗茶褐色<br>内－淡褐色 | 接合部のみ。外面に煤の付着あり。 |




第20図　土　壙

**土壙土層説明**

**＜第２号土壙＞**

第１層：黒褐色土層（白色粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：黒褐色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

**＜第４号土壙＞**

第１層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

**＜第５号土壙＞**

第１層：黒褐色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性・しまりともない。）

第２層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、ローム ブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に含む。粘性・しまりともない。）

**＜第６号土壙＞**

第１層：暗褐色土層（白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第４層：黒色土層（鉄斑・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

**＜第７号土壙＞**

第１層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ローム ブロック・鉄斑を微量含む。粘性・しまりともない。）

**＜第８号土壙＞**

第１層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：黒褐色土層（鉄斑点を多量に、白色粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

**＜第９号土壙＞**

第１層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりともない。）

第２層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりともない。）

**＜第10号土壙＞**

第１層：黒褐色土層（鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第３層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

### 第３号土壙(第20図)

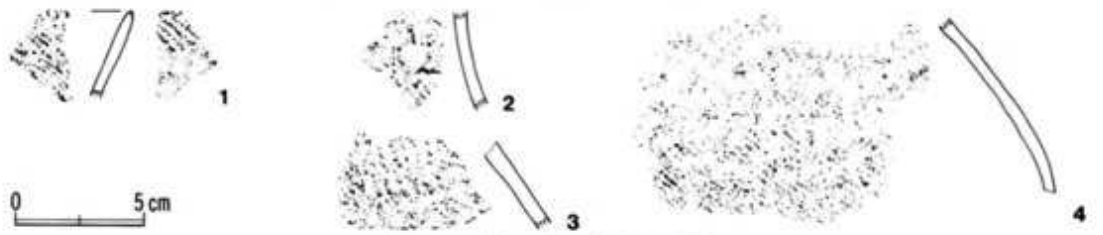
Ｂ地点調査区中央部の西寄りに位置する。土壙上面をＡ軽石を含む近世後半以降の第７号溝跡によって切られているが、遺存状態は比較的良好である。平面形は、92cm×81cmの円形を呈し、確認面からの深さは80cmを測る。断面は筒状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦をなしている。覆土は、Ｂ軽石・ロームブロックを含む黒色土の単一層である。出土遺物は、土壙底面より板状の緑泥片岩が５個重なって出土している。本土壙の時期は、覆土中にＢ軽石を含むことから、中世のものと考えられる。

### 第４号土壙(第20図)

Ｂ地点調査区中央部の南端に位置する。調査区内で検出されたのは土壙の北端部であり、土壙の大部分は調査区外にあるため、本土壙の形態や規模は不明である。検出された部分から推測すると、平面形は方形もしくは長方形に近い形態を呈するようである。壁はやや斜めに立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。底面は広く、平坦をなすようである。出土遺物はなく、時期はＢ軽石降下以前のものである。

### 第５号土壙(第20図)

Ｂ地点調査区中央部のやや南寄りに位置する。本土壙の東側には、第３号住居跡が近接している。耕作によりかなり削平を受けていると考えられるが、遺存状態は比較的良好である。平面形は、1.38m×1.32mの円形を呈し、確認面からの深さは32cmを測る。壁は直線的に若干傾斜して立ち上がる。底面は平坦をなしており、深さ25cmのピットを１箇所有する。出土遺物は、底面近くより弥生時代後期の吉ケ谷式土器と考えられる壺の破片が少量出土している(第21図)。本土壙の時期は、出土遺物や覆土の状態より、弥生時代後期のものと考えられる。




第21図　第５号土壙出土土器

第５号土壙出土土器観察表

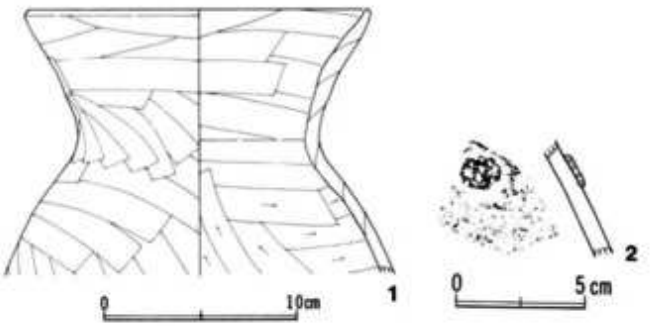
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。 | 口縁部内外面ナデの後、外面及び口唇部内面施文(RL)。 | 白色粒<br>内外－茶褐色 | |
| 2 | 壺 | | 粘土紐積み上げ成形。 | 外面ナデの後施文(RL)。内面ナデ。 | 白色粒<br>内外－暗茶褐色 | |
| 3 | 壺 | | 粘土紐積み上げ成形。 | 外面ナデの後施文(RL)。内面ナデ。 | 白色粒<br>内外－暗茶褐色 | |
| 4 | 壺 | | 粘土紐積み上げ成形。 | 外面ナデの後、無文帯を挟んでＲＬを横位施文。 | 白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 内外面に煤の付着あり。 |

**第６号土壙(第20図)**

Ｂ地点調査区中央部の南東端に位置する。土壙上面の北西側をＢ軽石を含む中世～近世の第３号溝跡によって切られているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。平面形は、１ｍ×１ｍの円形を呈し、確認面からの深さは60cmを測る。断面は筒状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、平坦をなしている。覆土は、上半部に暗褐色土(第１層)とロームブロックを含む暗黄褐色土(第２層)の互層が認められ、人為的に埋め戻された可能性がある。出土遺物は、覆土中よりごく少量の土器片が出土しただけである。本土壙の時期は、覆土の状態よりＢ軽石降下以前の古代ものと考えられる。

**第７号土壙(第20図)**

Ｂ地点調査区中央部の東寄りに位置する。本土壙の西側には第３号住居跡が近接している。耕作によりかなり削平を受けていると考えられるが、遺構の遺存状態は比較的良好である。平面形は、1.70m×1.58mの円形を呈し、確認面からの深さは32cmを測る。断面はかなり緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面は、比較的平坦であるが、細かな凹凸が見られる。出土遺物は、弥生時代後期終末の樽式土器が出土している。No１の甕は、土壙底面に口縁部を密着させて倒立した状態で出土している。No２の壷の胴部破片は覆土中からの出土である。本土壙の時期は、出土遺物より弥生時代後期終末のものと考えられる。



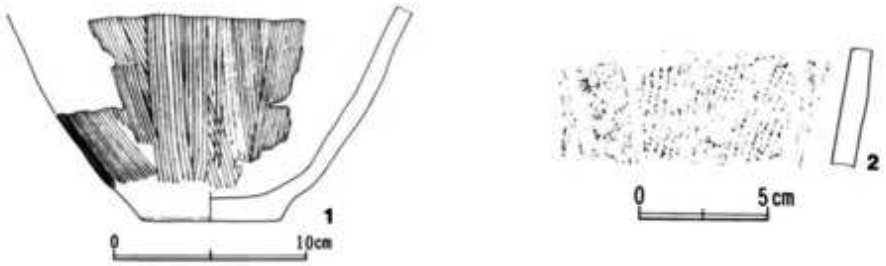

**第22図　第７号土壙出土土器**

**第７号土壙出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径 17.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は内湾し、上方を向く。 | 口縁部内外面篦ナデ。胴部外面篦ナデの後丁寧なナデ、内面ナデの後ケズリ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－黒褐色<br>内－明茶褐色 | 約1/2。<br>外面に煤の付着あり。 |
| 2 | 壷 | | 粘土紐積み上げ成形。文様帯の下端に刺突を有する円形浮文を張り付け。 | 外面櫛描波状文を施文し、施文部外ミガキ及び赤彩。<br>内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－赤褐色<br>内－淡黄褐色 | 外面赤彩。 |

**第８号土壙(第20図)**

Ｂ地点調査区中央部の北端近くに位置する。東側約４ｍには第11号土壙が位置する。遺構の遺存状態は、比較的良好である。平面形は、1.20m×1.12mの円形を呈し、確認面からの深さは60cmを測る。断面は、直線的にやや傾斜して立ち上がっている。底面は平坦をなしている。出土遺物は、覆土中より縄文時代中期後半の土器片が数点出土している(第23図)。本土壙の時期は、出土遺物や覆土の状態より、縄文時代中期後半のものと考えられる。




第23図　第８号土壙出土土器

第８号土壙出土土器観察表

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 深鉢 | 底部径 7.3cm | 粘土紐積み上げ成形。底部は突出する。 | 外面ナデの後、櫛歯状工具による縦方向の条線を施す。内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒 内外－暗茶褐色 | 胴下半1/3。 |
| 2 | 深鉢 | | 粘土紐積み上げ成形。 | 外面ナデの後、太い沈線による縦位分割をし、幅広い区画内に縄文(RL)を施す。 | 片岩粒・白色粒 内外－茶褐色 | |

**第９号土壙(第20図)**

Ｂ地点調査区東側に位置する。耕作による強い削平を受けており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。平面形は、1.75m×1.40mの円形を呈し、確認面からの深さは20cmを測る。断面は、直線的にやや傾斜して立ち上がっている。底面は、比較的平坦であるが、細かな凹凸が見られる。出土遺物はまったくなく、時期は不明であるが、形態や覆土の状態は第７号土壙等に類似しており、弥生時代後期後半の可能性が高いと思われる。

**第10号土壙(第20図)**

Ｂ地点調査区東端に位置する。耕作によりかなり削平を受けていると考えられるが、遺構の遺存状態は比較的良好である。平面形は、1.43m×1.20mの長楕円形のような不整形を呈し、確認面からの深さは24cmを測る。断面はなだらかに傾斜して立ち上がり、底面は船底状にやや丸みをもつ。出土遺物はまったくない。本土壙の時期は不明であるが、覆土の状態よりＢ軽石降下以前のものと考えられる。

**第11号土壙(第20図)**

Ｂ地点調査区中央部の北端に位置する。本土壙の北側は水田によりカットされ、東側上面を土壙状の撹乱によって切られており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。平面形は、不整形を呈するようであり、規模は東西方向が1.44mある。確認面からの深さは、54cmを測る。覆土は、ローム粒子と鉄斑を含む黒褐色土の単一層で、覆土中より古墳時代中期の和泉式土器の破片が少量出土している。本土壙の時期は、出土遺物や覆土の状態より、古墳時代中期の可能性が高いと考えられるが、明細は不明である。

## 5．溝　跡

### 第１号溝跡(第24図)

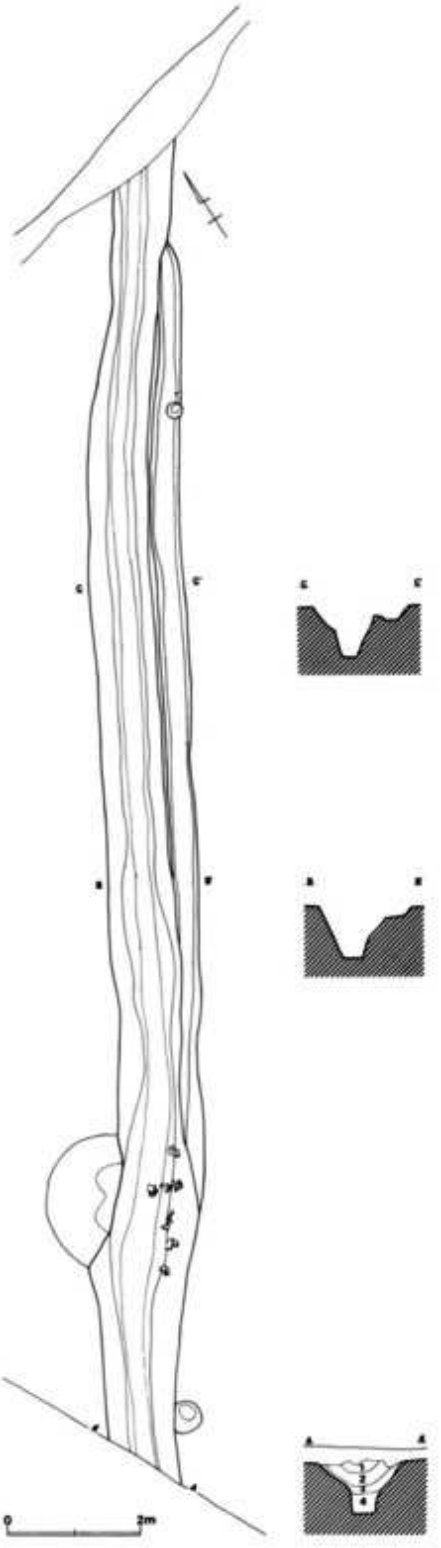
Ｂ地点調査区の西側に位置する。本溝跡の東側約６ｍには第６号方形周溝墓が、西側約８ｍにはＡ地点で調査された第４号方形周溝墓がある。本溝跡周辺は耕作による強い削平を受けているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。

本溝跡は、本遺跡のＡ地点とＢ地点でそれぞれ検出された主軸方向の異なる方形周溝墓群のほぼ中間に位置し、南西～北東方向に向かって直線的に流路をとっている。幅は、遺構上面で84cm～124cm、底面で20cm～30cmを測り、比較的均一で整った形態を呈している。断面の形態は、上半は緩やかに傾斜しているが、下半は中位より角度を変えて深くなっている。底面は平坦をなし、調査区内における溝の北東端と南西端での底面の比高差はほとんどない。覆土は４層に分かれ自然堆積の様相を示すが、第１層の黒色土層は、埋没後に新たに掘り返された幅40cm・深さ15cm前後の小溝の覆土である。この重複する小溝は、本溝跡の中央部で若干ずれるが、ほぼ同じ流路をとっている。

出土遺物は、和泉式の甕・小形丸底壷・高坏等の破片が出土しているが(第25図)、これらはすべて本溝跡に直接伴うものではなく、本溝跡が埋没した後に掘り返された小溝の覆土（第１層）から出土したものである。

**第１号溝跡土層説明**

第１層：黒色土層（鉄斑・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第２層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第３層：黒褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第４層：黒褐色土層（ローム粒子を多量に含む。粘性に富み、しまりはない。）




第24図　第１号溝跡

本溝跡の時期は、重複する小溝が和泉期であることから、和泉期以前のものであることはまちがいないが、その流路がA地点の方形周溝墓群(第1～5号)とB地点で検出された主軸方向の異なる方形周溝墓群(第6～7号)のほぼ中間であることは注目され、これらの方形周溝墓群と近時した時期の可能性が高く、古墳時代前期の五領期に逆上ることも推測されよう。

**第25号　第1号溝跡出土土器**

**第1号溝跡出土土器観察表**

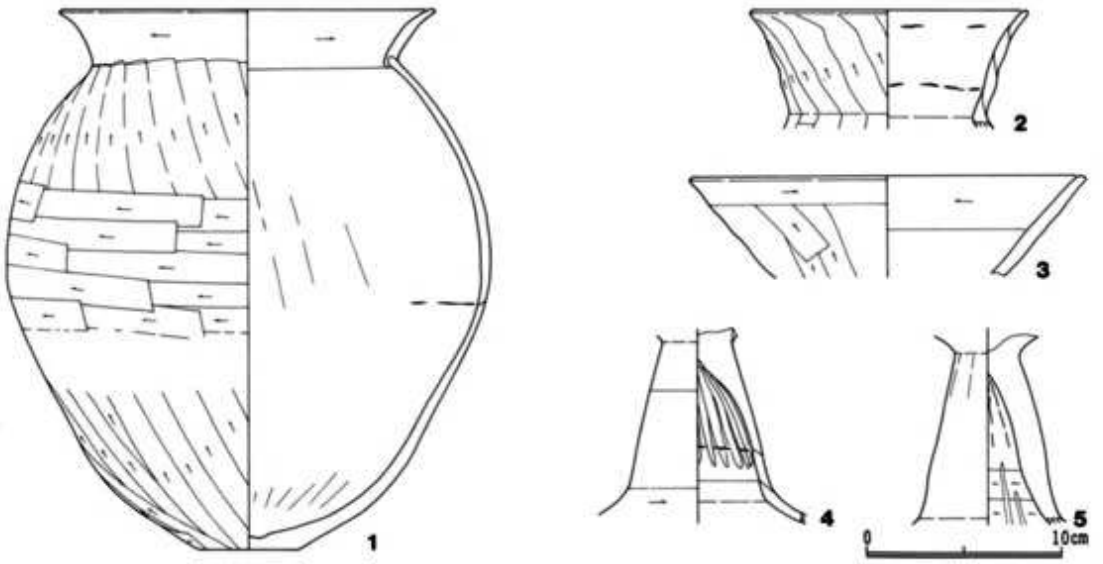
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(14.6cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－淡褐色 | 口縁部1/4。 |
| 2 | 小形丸底壺 | 残存高<br>6.0cm | 粘土紐積み上げ成形。体部はやや偏平ぎみで、底部は中央部が窪む平底を呈する。 | 体部外面上半ナデ、下半ケズリの後ナデ。内面上半ナデ、下半指ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>角閃石<br>内外－明茶褐色 | 体部のみ。 |
| 3 | 高坏 | 口縁部径<br>(19.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に開く。 | 口縁部内外面ナデ。 | 白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 口縁部1/2。 |
| 4 | 高坏 | 口縁部径<br>(16.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開く。 | 外面ケズリの後雑なミガキ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－橙褐色 | 口縁部1/4。 |

**第2号溝跡**

B地点調査区の北側に位置し、やや蛇行ぎみながら調査区内ではほぼ東西方向に流路をとっている。本溝跡は、西側で重複する第4・6・7号溝跡に切られており、中央部で重複する第7号方形周溝墓の方台部の一部を切っている。遺構の遺存状態は比較的良好である。

形態は、比較的整った形態を呈している。幅は50cm～70cmと比較的均一であり、確認面からの深さは50cm前後を測る。断面は、溝の両側とも若干傾斜して直線的に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、5層(第16図第4～8層)に分かれ、いわゆる自然堆積を示すが、覆土中に灰色粘土を主体とする層(第7層)が見られることから、水が流れていたことが推測され、水路として機能していたものと考えられる。

出土遺物は、量的には比較的少ないが、覆土中より和泉式土器が主体に出土している。第26図に図示したNo.1～5の土器は、ある程度器形が伺えるものであるが、これらはすべて第7号方形周溝墓と重複している箇所から出土している。本溝跡の時期は、覆土の状態や出土遺物より、古墳時代中期の和泉期のものと考えられる。




第26図　第２号溝跡出土土器

第２号溝跡出土土器観察表

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口径 19.4<br>器高(27.7)<br>底径 5.1 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部は張り、最大径を中位に有する。底部は小さな平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半ケズリの後ナデ、下半ケズリ。内面ナデ。 | 片岩粒<br>外－暗橙褐色<br>内－淡茶褐色 | 約1/3。胴部上半と下半は接合しない。器形は図上復元。 |
| 2 | 壺 | 口縁部径<br>(14.5cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、頸部は「く」の字状を呈する。 | 口縁部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－暗茶褐色<br>内－茶褐色 | 口縁部1/4。 |
| 3 | 高　坏 | 口縁部径<br>(20.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外反する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ナデの後一部ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・角閃石<br>赤色粒<br>内外－暗橙褐色 | 口縁部1/6。 |
| 4 | 高　坏 | | 粘土紐積み上げ成形。脚柱部は若干膨らみをもって広がり、脚端部は外反する。 | 脚柱部外面ナデの後上半ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－暗橙褐色 | 脚部1/3。 |
| 5 | 高　坏 | | 粘土紐積み上げ成形。脚柱部は若干膨らみをもって広がる。 | 脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 片岩粒・角閃石<br>内外－暗橙褐色 | 脚部1/2。 |

**第３号溝跡**

Ｂ地点調査区の南東側に位置する。調査区内では南西から北東方向に向かってほぼ直線的な流路をとっており、南側2.5mに位置する第８号溝跡とほぼ平行している。古代の所産と考えられる第４号土壙や第６号土壙と重複し、これらを切っている。確認面は耕作による強い削平を受けており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

形態は、比較的整った形態を呈し、幅は70cm～80cmと比較的均一であり、確認面からの深さは15

cm前後を測る。断面は、溝の両側とも若干傾斜して直線的に立ち上がり、底面は比較的広く平坦をなしている。覆土は、B軽石とローム粒子を含む黒褐色土の単一層である。

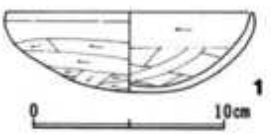
出土遺物は、古墳時代の土器片が数片混入して出土しているが、本溝跡に伴うと考えられる遺物はない。本溝跡の時期は、覆土の状態より中世以降のものと考えられる。

**第4号溝跡**

B地点調査区の西側に位置する。調査区内ではやや南西から北東方向に向かって流路をとり、隣接する第6号方形周溝墓の方台部を避けるように若干蛇行している。本溝跡は、重複する第6号方形周溝墓の周溝を切り、第5号溝跡に切られている。確認面は耕作による強い削平を受けており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

形態は、比較的整った形態を呈し、幅は25cm～35cmと比較的均一である。確認面からの深さは、溝の南北両側では10cmあり、比較的遺存状態の良い中央部では30cmを測る。断面は、溝の両側とも若干傾斜して直線的に立ち上がり、底面は狭いが平坦をなしている。覆土は、ローム粒子を微量含む黒色土の単一層である。

出土遺物は、鬼高式土器が少量出土している。本溝跡の時期は、出土遺物や覆土の状態より、鬼高期のものと考えられる。




**第27図　第4号溝跡出土土器**

**第4号溝跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径(12.8)<br>器高　4.1 | 体部は内湾しながら開き、口唇部は短く直立する。底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡茶褐色 | 約1/2。 |

**第5号溝跡**

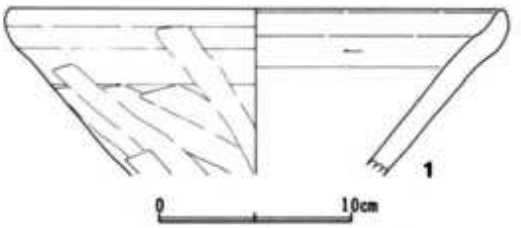
B地点調査区の西側に位置し、重複する第6号方形周溝墓や第4号溝跡を切っている。遺構の遺存状態は比較的良好である。

形態は、全長13.5m・幅80cmの比較的整った直線的な形態を呈し、確認面からの深さは20cm前後ある。断面は、溝の両側とも若干傾斜して直線的に立ち上がり、底面は比較的広く平坦である。覆土は、A軽石を多量に含む淡灰色土で、時期は覆土の状態より近世後半以降のものと考えられる。

**第6号溝跡**

B地点調査区中央部の西寄りに位置し、重複する第6号方形周溝墓や第2号溝跡・第4号溝跡を切っている。本溝跡の上面には、幅3m・深さ30cm前後の規模の大きな堀状の掘り込みが存在するが、これは調査前の現地表面で水田として利用されていたものであり、水田耕作による撹乱である。本溝跡は南北方向に流路をとり、形態は幅55cm前後の比較的整った形態を呈している。確認面からの深さは20cmであるが、掘削当初は40cm～50cmはあったものと思われる。断面は、やや丸みをもって立ち上がり、底面は平坦である。覆土はB軽石と鉄斑を均一に含む暗灰色粘土の単一層で、水路として機能していたものと考えられる。

出土遺物は、古墳時代を主体とする土器片が覆土中より少量出土しているが、本溝跡に伴うものとしては第28図の瓦質の片口鉢が1点だけ出土している。本溝跡の時期は、出土遺物や覆土の状態より中世のものと考えられる。




**第28図　第6号溝跡出土土器**

**第6号溝跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 片口鉢 | 口縁部径<br>(25.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は「半月」状を呈し、内面は凹線状に窪む。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面縦方向のナデ、内面横方向のナデ。 | 白色粒<br><br>内外－暗灰色 | 口縁部1/5。<br>環元焔焼成。<br>瓦質。 |

**第7号溝跡**

B地点調査区中央部の西寄りに位置し、重複する第6号方形周溝墓や第3号土壙を切っている。本溝跡は、西側に近接する中世の第6号溝跡とほぼ平行した流路をとっており、調査前の現地表面に存在した小道の直下にあたる。

形態は、幅70cm～95cmの比較的整った形態を呈し、確認面からの深さは15cmある。断面は、緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。覆土は、A軽石を多量に含む淡灰色土の単一層である。

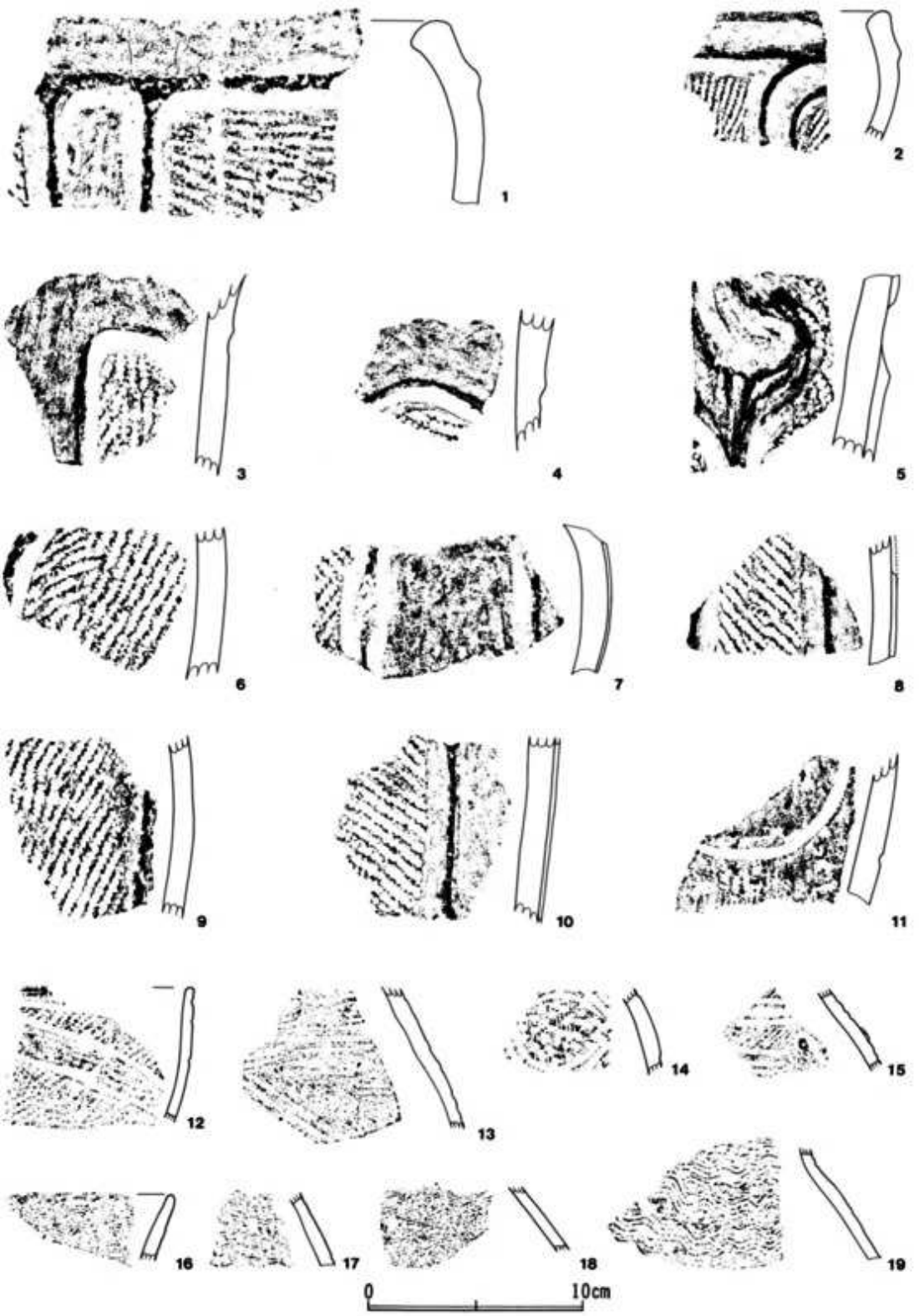
出土遺物はなく、時期は覆土の状態より近世後半以降のものと考えられる。

**第8号溝跡**

B地点調査区の南東側に位置し、中世の水田層と考えられる暗灰色粘土層下より検出されている。調査区内では南西から北東方向に向かってほぼ直線的な流路をとっており、北側2.5mに位置する中世以降の第3号溝跡とほぼ平行している。

形態は、幅25cm前後の比較的整った形態を呈し、確認面からの深さは15cmを測る。断面は、溝の両側とも若干傾斜して直線的に立ち上がり、底面は狭いが平坦をなしている。覆土は、B軽石と鉄斑を均一に含む黒褐色粘土の単一層である。

出土遺物は土器片が少量出土しているが、本溝跡に伴うものはない。本溝跡の時期は、覆土の状態より中世のものと考えられる。




**第29図　B地点出土縄文・弥生土器**

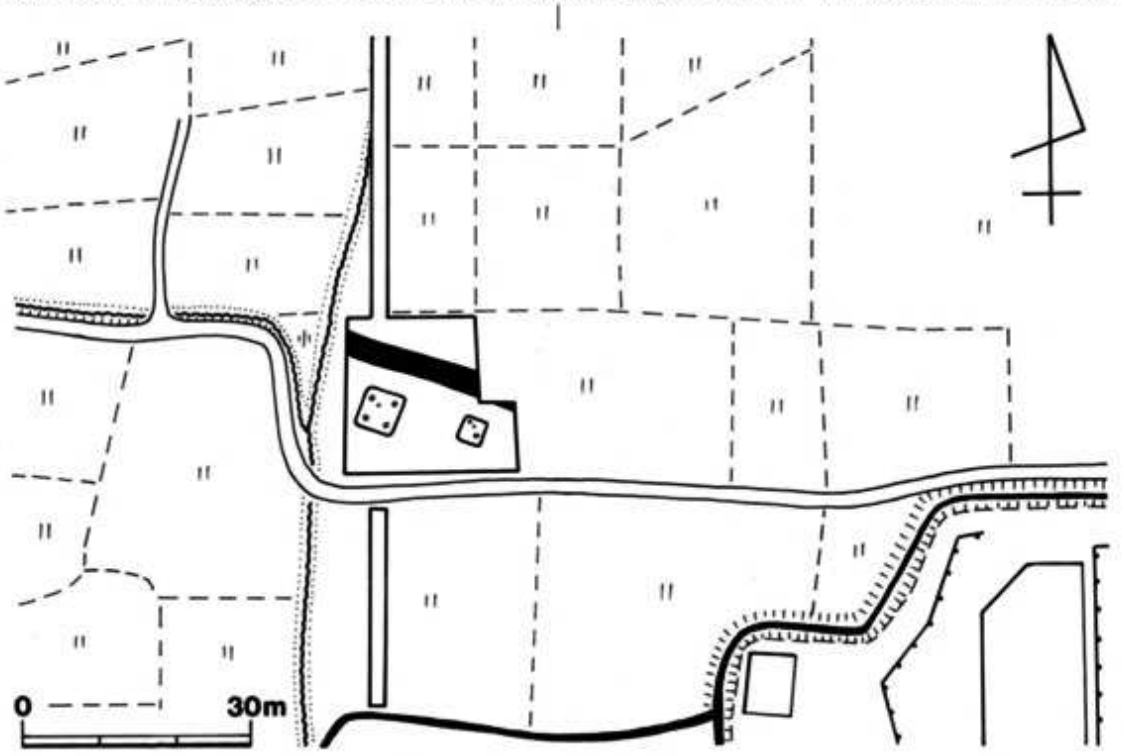
# 第Ⅳ章　高縄田遺跡の発掘調査

## 第１節　遺跡の概要

本遺跡は、児玉町大字吉田林字高縄田に所在し、沖積低地内の標高86mを測る現水田内に立地している。地形的には平坦で周囲との比高差はないが、北側に向かって非常に緩やかに傾斜している。調査地点は、表土が浅く現水田耕作土下で遺構が確認できるが、住居跡等の遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。このことから、調査地点及びその周辺は、本来は周辺の水田部よりも若干高い微高地状の地形か、あるいは自然堤防の西側縁辺部であったことが推測され、後世の開墾や耕作によりかなり強く削平を受けていることが推測される。なお、今回の調査地点では、その西側の第１号住居跡や第１号溝跡の上面に、氾濫によると思われる砂利層が薄く被覆していた。

調査区域は、南北に走る小排水路の調査で第１号住居跡と第１号溝跡の一部が確認されたが、周辺の表土が非常に浅いことから、ほ場整備の地成り整地作業によっても破壊される可能性が高いと考えられたため、その東側を拡幅して第２号住居跡を検出した。さらに調査区域の周辺を確認調査したが、関連する遺構はこれらの他にはまったく確認されず、比較的小規模な集落であったことが推測される。

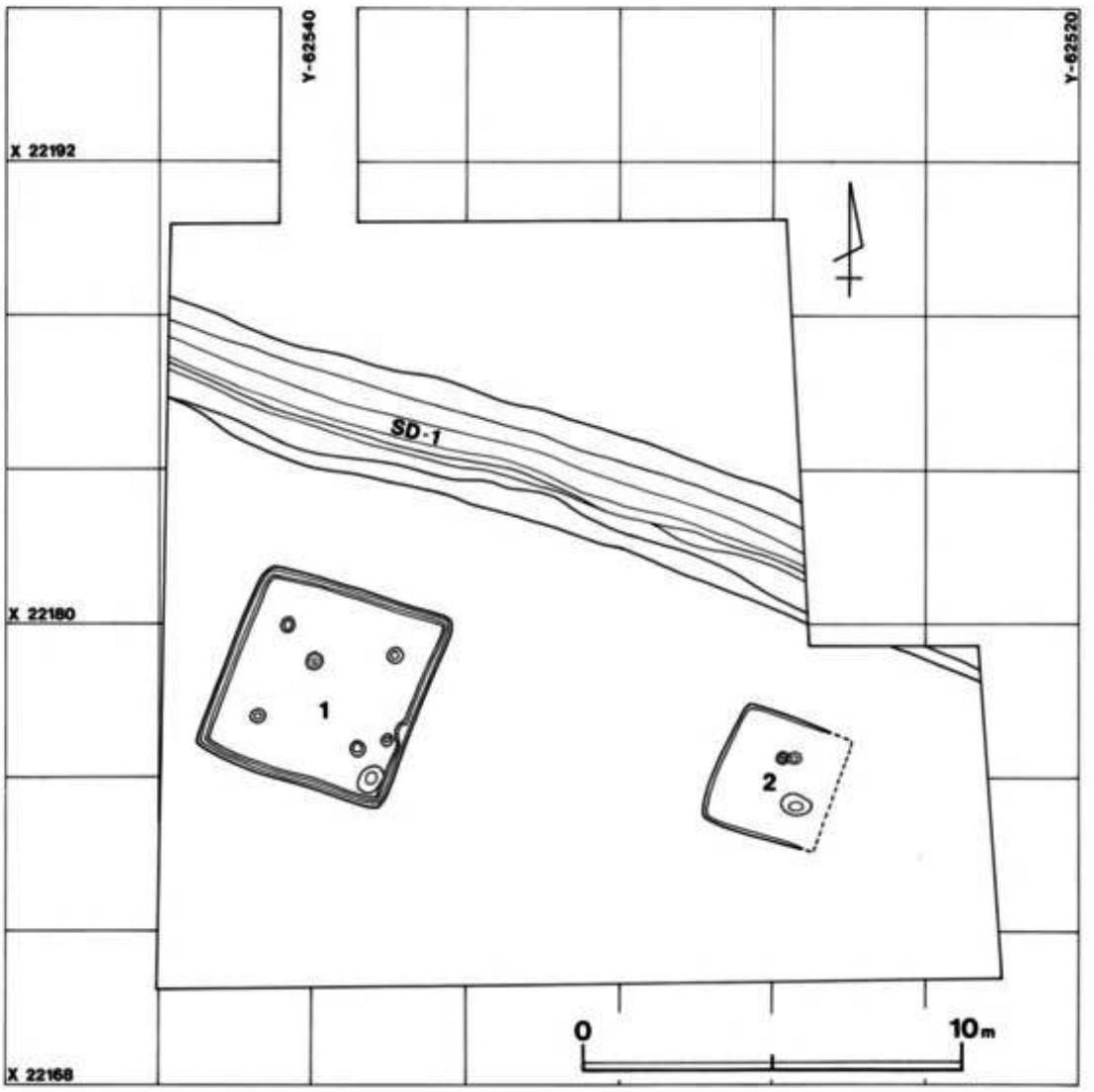
検出された遺構は、いずれも古墳時代の和泉期と考えられる住居跡２軒と溝跡１条である。住居跡は、第１号住居跡が規模５mの炉・主柱穴・貯蔵穴等の住居内施設をもつ中形の一般的な住居であるが、第２号住居跡は規模３mのかなり小形で炉以外の施設をもたないやや特異な住居と言えるも




第30図　高縄田遺跡調査位置図

のである。この２軒の住居跡は、住居の主軸方向をいずれも北東方向のＮ－20°－Ｅに揃え、さらに住居の北東側壁も同一線上に一致した計画的な配置をとっており、北側の第１号溝跡の流路に規制された配置であることが推測される。この２軒の住居跡は、ともに焼失したことが推測されることからも、おそらく同時に存在した可能性が高いと考えられるが、住居の規模や構造には大きな差異が見られ、極端に規模が小さい第２号住居跡は第１号住居跡に付属あるいは隷属した住居？である可能性も考えられよう。

第１号溝跡は、その規模や形態から幹線的な水路と考えられるもので、調査区内では北西から南東に向いた直線的な流路を取っている。どちらに向かって流れていたかは、調査区内では判断できなかった。溝の掘削時期は、住居跡との位置関係から住居跡と同時期か若干先行すると考えられるが、埋没時期は住居跡の廃絶よりも遅く、和泉期終末から鬼高期初頭と考えられる。




**第31図　高縄田遺跡全測図**

## 第２節　検出された遺構と遺物

### １．住 居 跡

#### 第１号住居跡(第32図)

第１号溝跡の南側３ｍに位置し、西側約８ｍには第２号住居跡がある。遺構上面には氾濫によると思われる砂利層が薄く被覆していたが、すでに周辺は強い削平を受けていたらしく、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、若干平行四辺形のように歪んだ方形を呈し、規模は北東～南西方向5.25m・北西～南東方向5.12mを測る。主軸方位は、N－20°－Eをとると考えられ、北側の第１号溝跡と住居の向きを直交させている。

壁は、各壁とも直線的にやや外傾して立ち上がり、北東側壁で最高20cm・南側コーナー部で最低３cm残存している。各壁下には、幅20cm・深さ５cm～10cmの壁溝が全周している。覆土は、焼土粒子と炭化粒子を含む暗褐色土である。

床面は、ロームブロックを埋め戻した貼床式で、ほぼ水平で平坦に作られている。主柱穴に囲まれた内側はロームブロックが顕著で比較的堅緻であるが、壁際に近い周辺部はロームブロックの少ない黒色土を主体として埋め戻されておりやや軟弱である。床面上からは焼土塊や炭化材が多く見られたが、特に住居の北側コーナー部周辺に大量の焼土塊や大きな炭化材が顕著に認められる。このことから、本住居跡は焼失したものと推測される。

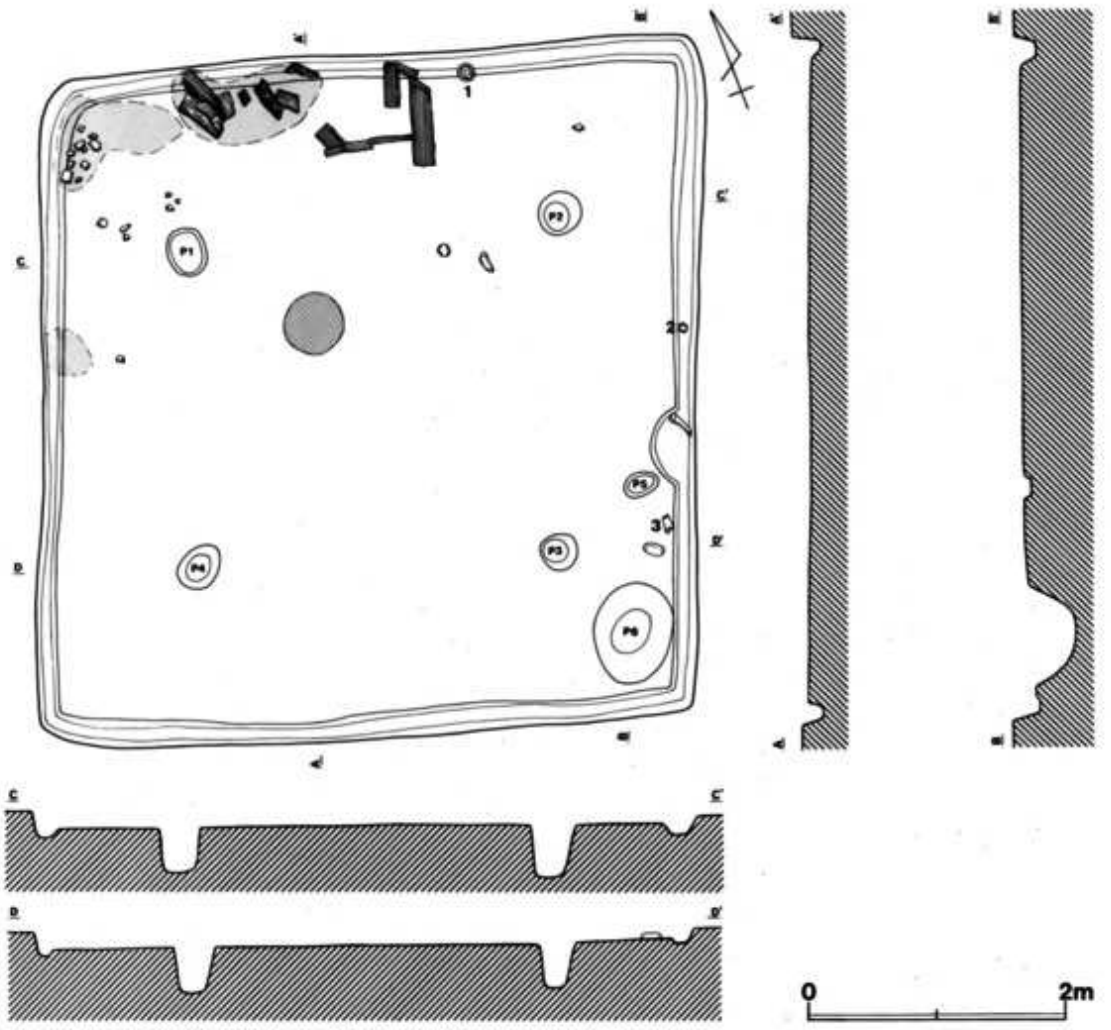
炉は、主柱穴に囲まれた住居中央部のやや北側コーナー側に寄った場所に位置する。掘り込みを伴わない床面がただ焼けているだけの地床炉で、直径46cmの円形に焼けている。

住居に伴うと考えられるピットは、６箇所検出されている。Ｐ１～４が主柱穴で、住居の対角線上に位置している。平面形は直径30cm～35cmの円形を呈し、深さはいずれも35cm程度とそろっている。Ｐ５は、南東側壁の壁際中央部に位置する。27cm×18cmの楕円形を呈し、深さは５cmを測る。Ｐ６は、いわゆる貯蔵穴と考えられるもので、南側コーナー部に位置し、77cm×61cmの楕円形を呈する。深さは37cmあり、中からは何も出土しなかった。

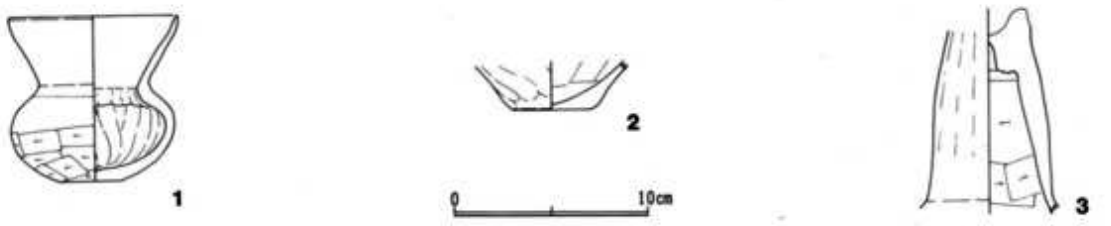
出土遺物は、土器が出土しているが破片を含めても非常に少ない。１は、和泉式に特徴的なほぼ完形の小形丸底壷で、住居北東側壁際中央の床面上より正位の状態で出土している。２は、小形鉢

**第１号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器　種 | 法　量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小形丸底壷 | 口径 8.8cm<br>器高 8.5cm<br>底径 3.2cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は短く上方に向く。体部は偏平ぎみで、底部は小さな平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面シボリ。体部外面上半ナデ、下半ケズリ。内面指ナデ。 | 片岩粒・角閃石白色粒<br>内外－明茶褐色 | ほぼ完形。<br>体部外面に帯状の黒斑あり。 |
| 2 | 小形鉢 | 底部径 4.0cm | 底部は薄く、平底を呈する。 | 外面ナデ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－黒褐色 | 底部のみ。 |
| 3 | 高　坏 | 残存高 10.5cm | 粘土紐巻き上げ成形。脚柱部はやや膨らみをもつ。 | 脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。 | 白色粒<br>内外－橙褐色 | 脚柱部のみ。 |




第32図　第１号住居跡

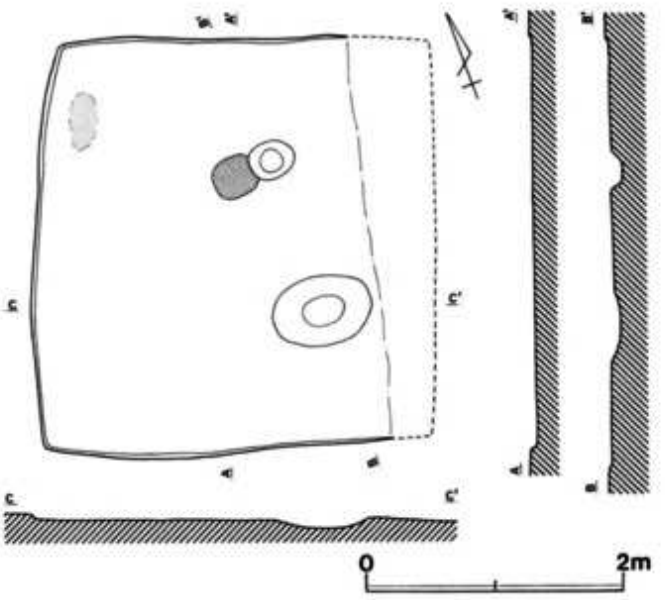



第33図　第１号住居跡出土土器

の底部と思われる破片で、住居南東側壁下の壁溝内から出土している。3は、高坏の脚柱部で、住居南東側壁際の床面より若干浮いた状態で出土している。本住居跡の時期は、これらの出土土器より古墳時代の和泉期と考えられる。

**第2号住居跡（第34図）**

第1号住居跡と同様に第1号溝跡の南側2.5mに位置し、第1号住居跡と住居の主軸方向と北東壁をそろえて配置されている。本住居跡の周囲では、西側の第1号住居跡の上面を被覆していた氾濫によると思われる砂利層はまったく見られなかった。遺存状態はあまり良好ではなく、かろうじて住居跡が残存していたような状態であり、また住居跡の東側はすでに削平されているため、その全容は不明である。




**第34図　第2号住居跡**

平面形は、残存する部分から推測すると、比較的整った方形もしくは長方形を呈すると思われる。規模は、北東～南西方向3.20m・北西～南東方向は2.72mまで測れる。主軸方位は、N－20°－Eをとると考えられ、第1号住居跡と同様に北側の第1号溝跡と住居の向きを直交させている。

壁は、かろうじて残存しているが、南東壁はすでに削平されているため不明である。確認面からの深さは、残存する各壁とも2～4cm程度である。各壁下とも壁溝は見られない。覆土は、焼土粒子と炭化粒子を含む暗褐色土である。

床面は、地山を直接床面にした直床式で、ほぼ水平で比較的平坦に作られている。床面上には焼土粒子や炭化粒子の分布が顕著に見られ、北側コーナー部付近では中央部の炉ほどではないが一部床面が焼けている箇所がある。明確ではないが、おそらく本住居跡も第1号住居跡と同様に焼失した可能性が考えられる。

炉は、住居中央部のやや北東壁に寄った場所に位置し、東端を後世の浅いピットに切られている。掘り込みを伴わない床面が焼けているだけの地床炉で、直径31cmの不整円形に焼けている。

住居内からはピットが2箇所検出されているが、これらは覆土の状態から本住居跡に伴うものではなく、後世のものである。

出土遺物は、遺構の遺存状態を反映してか非常に少なく、和泉式と思われる土器片がごく少量出土しただけである。本住居跡の時期は、出土遺物が極めて少ないため明確ではないが、住居跡の形態や他の遺構との計画的な位置関係から見ても、第1号住居跡や第1号溝跡と同一時期のものと推測されよう。

## 2．溝　跡

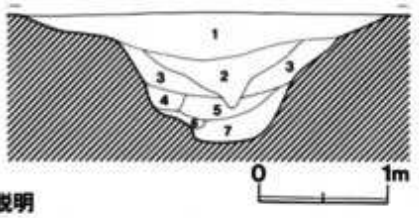
### 第１号溝跡(第35図)

本溝跡は、第１号住居跡と第２号住居跡の北側約２～３ｍに位置する。調査区内では北西方向～南東方向に直線的に延びており、おおよそ等高線に沿うような流路をとっている。規模は、確認面で上幅2.80ｍ～3.00ｍとほぼ均一の幅をなし、確認面からの深さは100cm～110cmあり、調査区内ではほぼ一定している。

断面形態は、上半部は非常に緩やかな傾斜で、中位より急激に方向を変えて直線的に落ち込み、底面は40cm～50cmの一定の幅で平坦である。溝の南側壁面の下部には段状の狭い平坦面が見られるが、部分的であるため、溝に付随する構造のものか掘り返しによる溝底面のずれによるものかは明らかではない。

覆土は、７層に分かれる。このうちの第２層と第４層は、自然的な堆積層(第３層・第５層)を切るような土層であり、掘り込みの形態はあまり整然としたものではないが、おそらく１～２回の掘り返しが行われたものと思われる。

出土遺物は、覆土中より比較的多くの土器が出土しているが、完形品はない。これらはいずれも和泉期のもので、溝の埋没過程中に投棄されたものであるが、３のような口縁部の外反が弱




**第１号溝跡土層説明**

第１層：暗灰色土層（小石・鉄斑を多量に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：黒灰色土層（白色粒子を均一に、鉄斑・マンガン塊・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

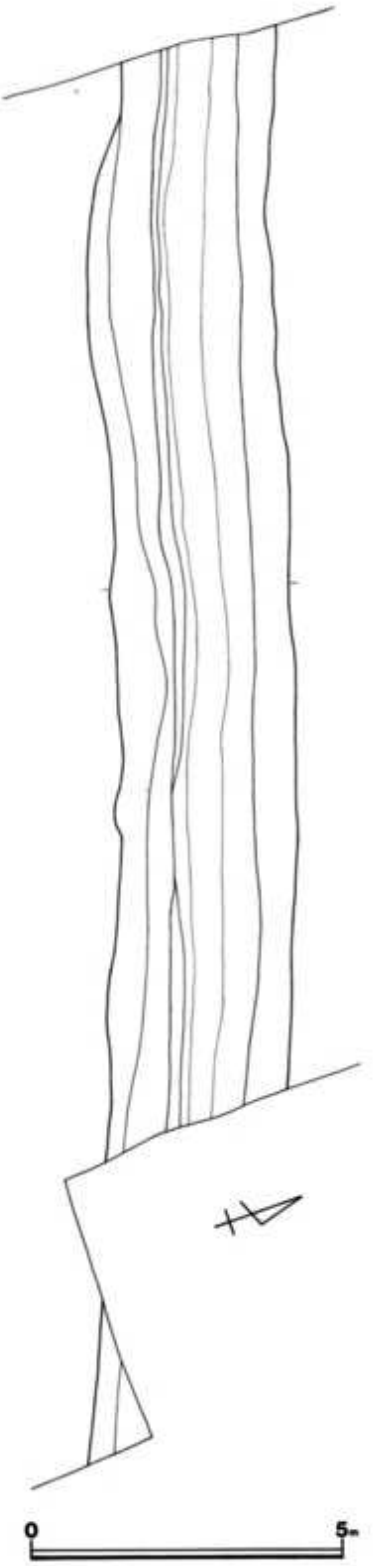
第３層：暗灰色土層（鉄斑を均一に、白色粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第４層：黒灰色土層（鉄斑･マンガン塊を微量含む。粘性･しまりともない。）

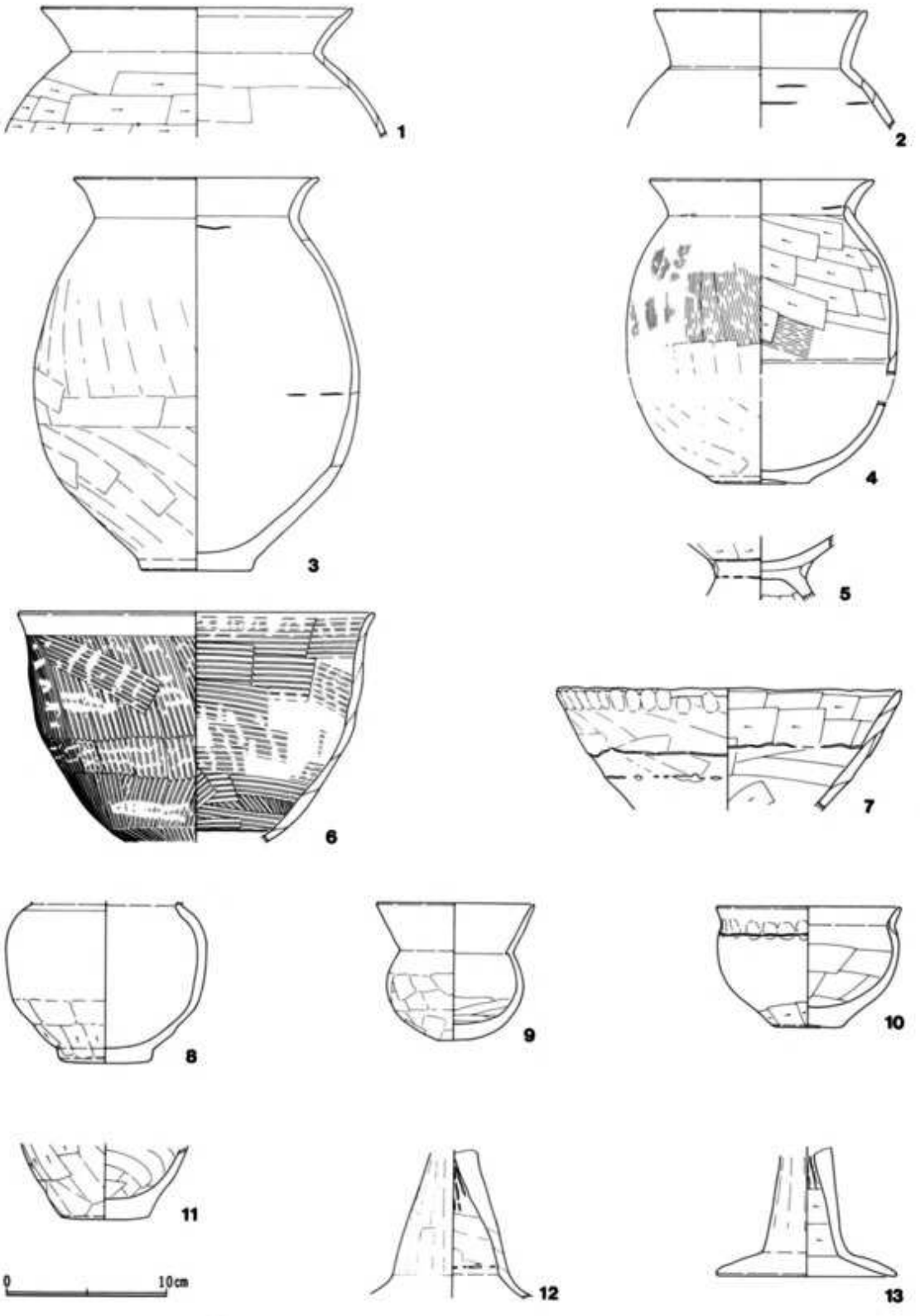
第５層：淡灰色土層（白色粒子・マンガン塊を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第６層：暗黄灰色土層（黄色粘土粒子・白色粘土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第７層：灰色土層（粘土ブロック・白色粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）




**第35図　第１号溝跡**




**第36図　第１号溝跡出土土器**

くやや長胴ぎみの甕など、他に比べてやや後出的なものもあり若干の時間幅が伺えるが、概ね第1号住居跡や第2号住居跡と同時期と見てよいであろう。

**第1号溝跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(19.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部内面は窪む。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・小石<br>外－淡褐色<br>内－黒褐色 | 口縁部1/3。 |
| 2 | 甕 | 口縁部径<br>(13.2cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は上方に向く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－淡橙褐色 | 口縁部1/2。 |
| 3 | 甕 | 口径(15.2)<br>器高 24.4<br>底径 6.8 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はやや長胴ぎみで、底部は突出する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後丁寧なナデ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－橙褐色 | 約1/2。<br>胴部下半は荒れている。 |
| 4 | 甕 | 口径(14.0)<br>推定高(18.8)<br>底径 6.0 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は中位に最大径を有し、底部は若干突出する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後丁寧なナデ。内面上半ハケの後ケズリ、下半ナデ。 | 片岩粒・小石<br>黒色粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 上半1/4。<br>下半1/2。 |
| 5 | 台付甕 | | 胴部と台部を接合後、外側に粘土を貼り付けて補強している。 | 胴部外面ケズリ、台部外面ナデ。内面ナデ。 | 白色粒<br>外－淡橙褐色<br>内－暗褐色 | 接合部のみ。 |
| 6 | 鉢 | 口縁部径<br>(22.2cm) | 粘土紐積み上げ成形。体部は内湾しながら開き、口縁部は緩やかに外反する。 | 口縁部外面ヨコナデ。体部内外面粗いハケの後ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－明茶褐色 | 約1/4。 |
| 7 | 小形甕 | 口縁部径<br>(21.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は粘土紐の積み上げによる雑な複合状を呈する。 | 口縁部内外面篦ナデ、外面上端指押さえ。体部外面ナデ、内面篦ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>外－暗褐色<br>内－暗茶褐色 | 口縁部1/4。 |
| 8 | 鉢 | 残存高10.0<br>底径 5.7 | 粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、最大径を中位に有する。底部は突出する。 | 頸部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ。内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－茶褐色<br>内－暗褐色 | 約1/4。<br>外面に黒斑あり。 |
| 9 | 小形丸底壺 | 口径( 9.9)<br>器高 8.5<br>底径 1.8 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。体部は張り、球形を呈する。底部は小さな平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面指ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>角閃石<br>内外－暗橙褐色 | 約3/4。 |
| 10 | 鉢 | 口径(11.4)<br>器高 7.5<br>底径 4.4 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。体部は膨らみを持つ。底部は突出し、中央部が若干窪む。 | 口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面指押さえ。体部外面上半ナデ、下半ケズリの後ナデ。内面篦ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>外－暗褐色<br>内－淡褐色 | 約2/3。<br>器表面は荒れている。 |
| 11 | 鉢 | 底部径<br>5.4cm | 粘土紐積み上げ成形。底部は厚くやや突出する。 | 体部外面ナデの後ケズリ、内面篦ナデ。 | 白色粒・赤色粒 | 底部のみ。 |
| 12 | 高坏 | 残存高<br>9.1cm | 粘土紐巻き上げ成形。脚柱部は膨らみをもって広がり、脚端部は緩やかに外反する。 | 脚柱部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－淡褐色 | 脚柱部のみ。 |
| 13 | 高坏 | 残存高<br>8.0cm | 粘土紐巻き上げ成形。脚柱部・脚端部は直線的に開く。 | 脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－淡橙褐色 | 脚部のみ。 |

# 第Ⅴ章　樋越遺跡の発掘調査

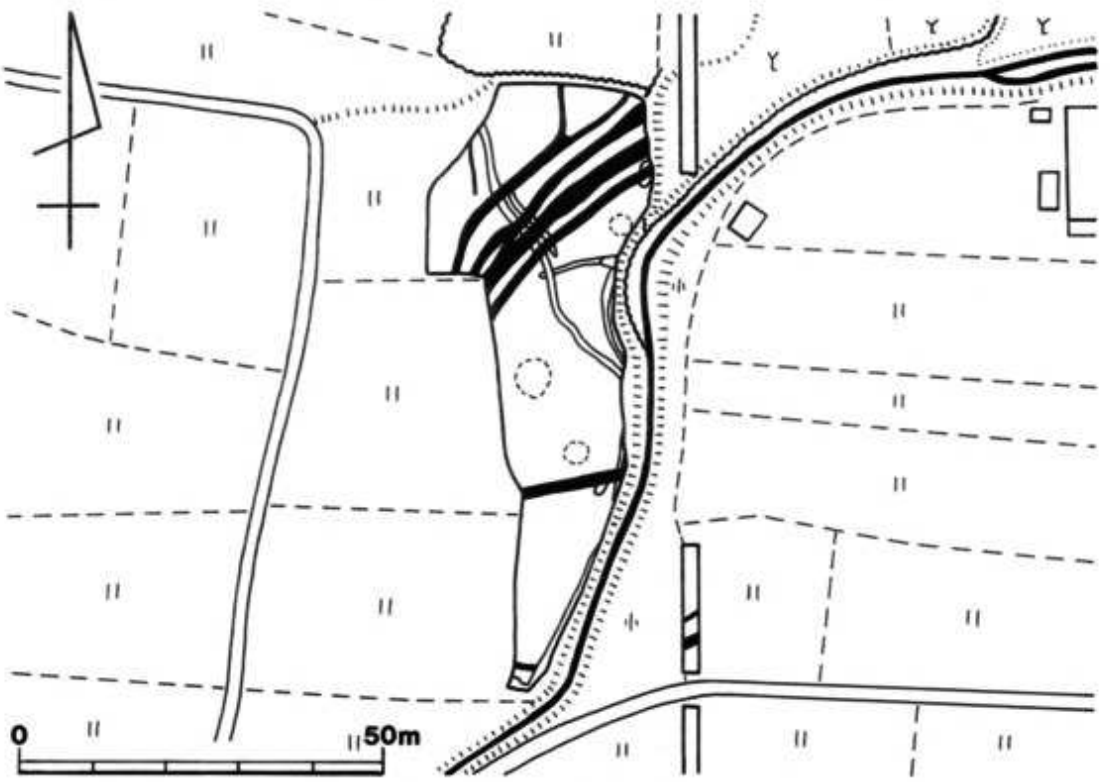
## 第１節　遺跡の概要

本遺跡は、児玉町大字吉田林字樋越に所在し、標高85mを測る微高地の北東側縁辺部に立地している。本遺跡の南側約150mには本書の第Ⅳ章で述べた高縄田遺跡があり、北東側約150mには本書の第Ⅶ章で述べる鶴蒔遺跡が位置する。また、本遺跡の北西側約100mには女堀川が北流している。

調査区域は、主に畑として利用されていたが、調査区と水路を挟んで東側の水田とは標高差がほとんどなく、西側の水田との比高差は15cm～40cm程度であった。調査区近辺の水田部の地割り区画には、かなり崩れてはいるものの、条里形地割りの痕跡が部分的に認められ、調査区の東側に接して流れている現在の水路も、ほぼ条里の坪線に部分的に沿った流路をとっている。

検出された遺構は、溝跡12条と土壙４基である。この他には、調査区の中央部から北側にかけて、縄文時代中期(加曽利ＥⅢ式)の倒木痕が４箇所検出されている。溝跡は、そのほとんどが水路と考えられるものである。時期は、古代(真間期前半)及びその可能性の高いもの（第３・７・８・９・10号溝跡)、中世後半頃のもの(第２・12号溝跡)、近世後半以降のもの(第１・４・５・６・11号溝跡)の３時期に分けられる。古代～中世の溝跡は流路を東西方向かあるいは南西から北東方向にとり、近世後半以降の溝跡は南北方向にとっているものが主体的である。

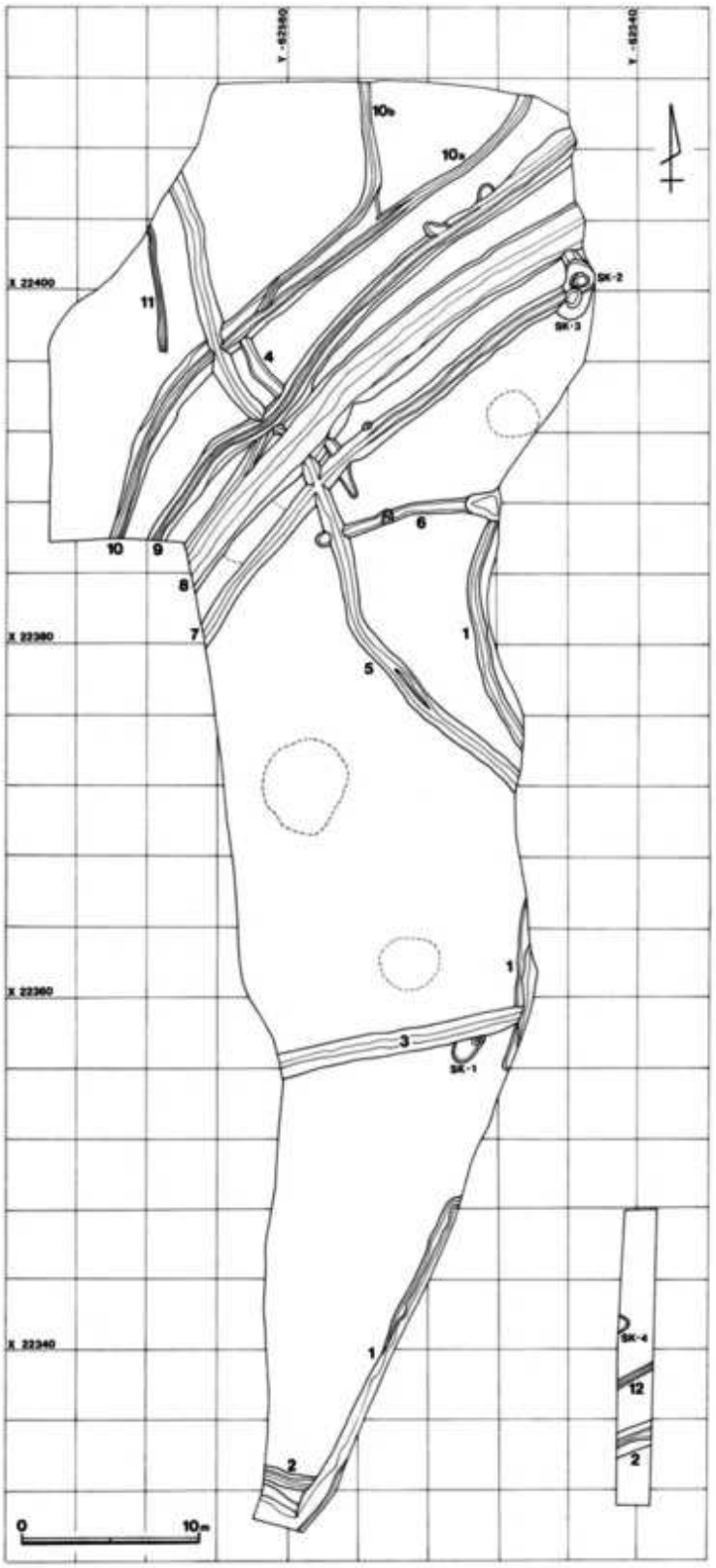
古代(真間期前半)の溝跡は、調査区の北側で４条の溝跡(第７～10号溝跡)が密集して検出されて




**第37図　樋越遺跡調査位置図**

いる。これらの溝跡は、ほとんど重複せずにいずれも一定の距離を置いて南西から北東方向に向かってほぼ並行した流路をとっており、覆土の類似性からも、ほぼ同時に存在した溝群として捉えられるものである。この溝群は、中央の幹線水路（第８号溝跡）と西側調査区外の上流でこの幹線水路から分岐した枝溝群(第７・９・10号溝跡)と考えられ、ほ場整備施工前の水田部で多く見られた、水温調節のために幹線水路の分水口から各水田の水口までの導水路の距離を非常に長くとる枝溝が複数並走する導水形態が、古代にすでに行われていたことが具体的に明らかになったことは注目される。また、この溝群は条里形地割りとまったく一致しない流路をとっていることから、その掘削において条里の地割りに規制されていないことが伺え、調査地点の周辺に部分的に見られる条里形地割りの痕跡から推測される本遺跡周辺における条里形地割りの施工が、この溝群が掘削された古代の時期まで溯らないことを示唆している。

土壙は、いずれも出土遺物がないため、その明確な時期や性格はよく解らないが、覆土の観察や重複関係から見て、古代以前(第１号土壙)と中世以降のもの(第２～４号土壙)がある。




**第38図　樋越遺跡全測図**

## 第２節　検出された遺構と遺物

### １．溝　跡

#### 第１号溝跡

Ａ地点東側の調査区に沿って断続的に検出されている。調査区内では溝の西側の壁しか検出されていないため、その全容は不明であるが、そのすぐ東側には現在の水路が同様の流路をとって北流しており、その元水路か掘り返し以前の旧流路と考えられる。覆土は、Ａ軽石を多量に含む細砂を主体としている。時期は、近世後半以降である。

#### 第２号溝跡（第39図）

Ａ・Ｂ両地点の調査区南端付近に位置する。Ｂ地点に比べてＡ地点の調査区南端は、後世の耕作により南に向かってかなり強く削平されているため、遺構の遺存状態が悪く、溝の下半部しか残存していなかった。本溝跡は、ほぼ東西方向に流路をとっているが、調査区域が狭くまたＡ・Ｂ両地点が離れているため明確ではないが、おそらく西から東に向かって流れていたものと思われる。

規模は、Ｂ地点で幅122cm～130cmを測り、確認面からの深さは34cmある。断面の形態は二段になっており、上半部はかなり緩やかに傾斜しているが、下半部は方向を変えてやや急傾斜になっている。底面は40cmの均一な幅で、平坦である。

本溝跡の時期は、出土遺物がないため、明確な時期は不明であるが、覆土中にＢ軽石を均一に含むことから、中世のものと考えられる。

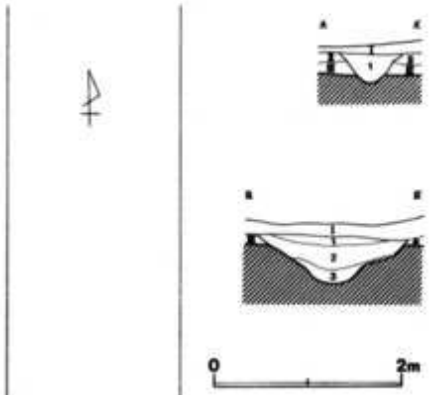
#### 第３号溝跡（第40図）

Ａ地点の調査区中央部に位置し、重複する第１号土壙を切っている。調査区内ではほぼ東西方向に向いて直線的な流路をとっている。規模は、上幅130cmの均一な幅で、確認面からの深さは40cmを測る。壁は、内湾しながら緩やかに立ち上がる。底面は、幅30cm～40cmの平坦な面をなすが、調査区内の東西両端ではほとんど比高差はない。

本溝跡の時期は、出土遺物がまったくないため明確にできないが、覆土の状態は調査区北側の古代の溝群（第７～10号溝跡）と類似しており、おそらくそれらの溝群と同時期の可能性が高いと考えられる。おそらくは、その流路の方向からすると、上流において北側溝群の幹線的水路である第８号溝跡から分岐した可能性が推測される。

#### 第４号溝跡

Ａ地点の調査区北側に位置し、重複する第７～10号溝跡を切っている。流路は、南北方向に蛇行しており、西側に位置する第５号溝跡と並走している。両者は覆土も同一で、おそらく同時期のものと考えられる。調査区内では約11ｍほど確認されているが、南北両側はすでに削平されている。幅は60cm～80cmあり、確認面からの深さは８cm程度を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦であるが、北に向かって低くなっている。覆土は、Ａ軽石を多量に含む細砂を主体としている。時期は、近世後半以降である。




SK-4

12

2

**第12号溝跡土層説明**

第１層：黒茶褐色土層（鉄斑・Ｂ軽石を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**第２号溝跡土層説明**

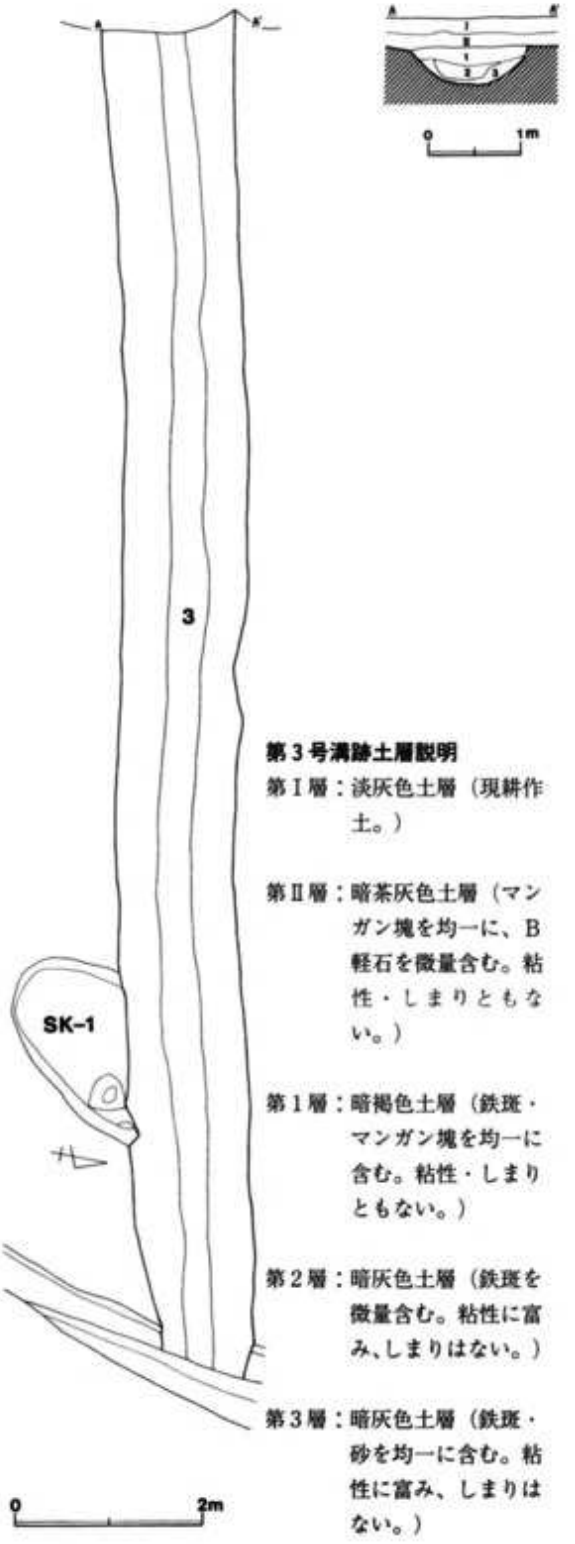
第１層：暗灰褐色土層（鉄斑Ｂ軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗灰色土層（鉄斑・Ｂ軽石を均一に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：黒灰色土層（鉄斑を多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

**第39図　第２・12号溝跡**




**第３号溝跡土層説明**

第Ⅰ層：淡灰色土層（現耕作土。）

第Ⅱ層：暗茶灰色土層（マンガン塊を均一に、Ｂ軽石を微量含む。粘性・しまりともない。）

第１層：暗褐色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第２層：暗灰色土層（鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第３層：暗灰色土層（鉄斑・砂を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

**第40図　第３号溝跡**

**第５号溝跡**

Ａ地点の調査区北側に位置し、重複する第７～10号溝跡を切っている。流路は南北方向に蛇行しており、おそらくその南端で第１号溝跡より分岐したものであろう。本溝跡の東側には約90cmの間隔をもって第４号溝跡が並走しており、両者の間には畦が存在したものと考えられる。規模は、上幅１ｍとほぼ均一で、確認面からの深さは最高で30cmを測る。壁は直線的に立ち上がる。底面は幅20cm～40cmあり、北に向かって低くなっている。覆土は、第１号溝跡や第４号溝跡と同じく、Ａ軽石を多量に含む細砂を主体としている。時期は、近世後半以降である。

**第６号溝跡**

Ａ地点の調査区北側に位置する。重複する第５号溝跡を切っている。流路は、ほぼ東西方向を向いているが、西側は途中で切れており、東端は第１号溝跡に合流している。規模は、上幅60cmと均一で、確認面からの深さは15cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、東に向かって低くなっているが、東端の第１号溝跡と合流する部分では、一段深くなっている。これらの形態より、おそらく、本溝跡は第１号溝跡に水を落とすための排水と考えられる。覆土は、第１号溝跡や第４号溝跡及び第５号溝跡と類似するＡ軽石を多量に含む細砂を主体としている。時期は、近世後半以降である。

**第７号溝跡（第41図）**

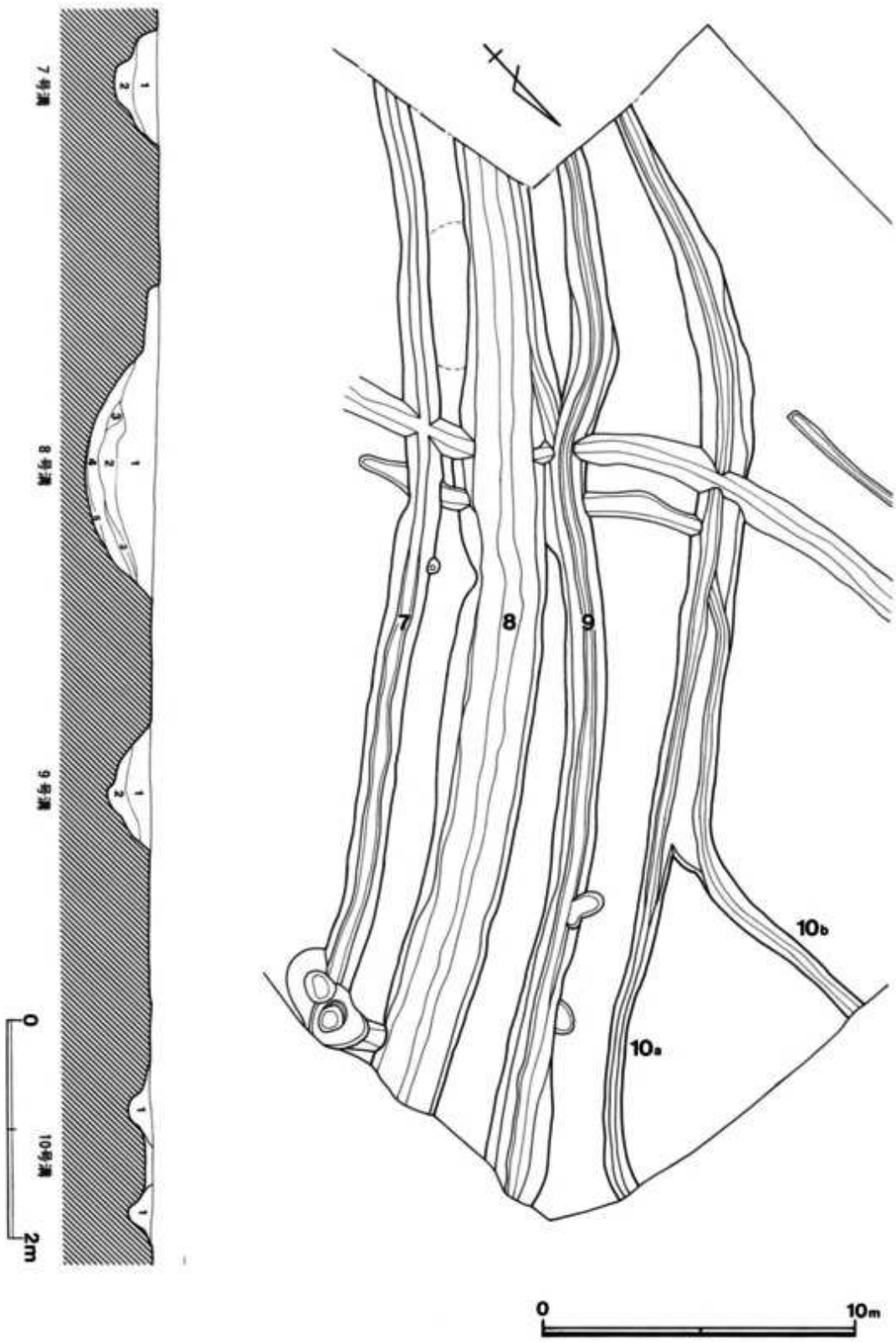
Ａ地点の調査区北側に位置し、重複する第４・５号溝跡や第２・３号土壙に切られている。流路は、若干湾曲ぎみに南西から北東方向に向いており、調査区内で検出された溝跡の中では最も規模の大きい北西側に近接する第８号溝跡と流路を同じくして並走している。規模は、上幅が90cm～110cmあり、確認面からの深さは30cmを測る。壁は、内湾ぎみに緩やかに立ち上がっているが、溝の東側半分からは壁の下半で段をもち、そこから方向を変えて急傾斜になっている。底面は、約30cmの均一な幅で平坦をなすが、やや小さな凹凸が見られる。

出土遺物は、縄文時代中期の加曽利ＥⅢ式土器、古墳時代後期以降の土師器の破片が覆土中より少量出土しただけである。本溝跡の時期は、出土遺物がごく少量であるため明確にできないが、覆土の状態は北西側の第９号溝跡と同一で、古代の第８号溝跡と類似することから、それと同時期のものと考えられる。おそらく調査区外の上流で北西側の第８号溝跡から分岐されたものと思われる。

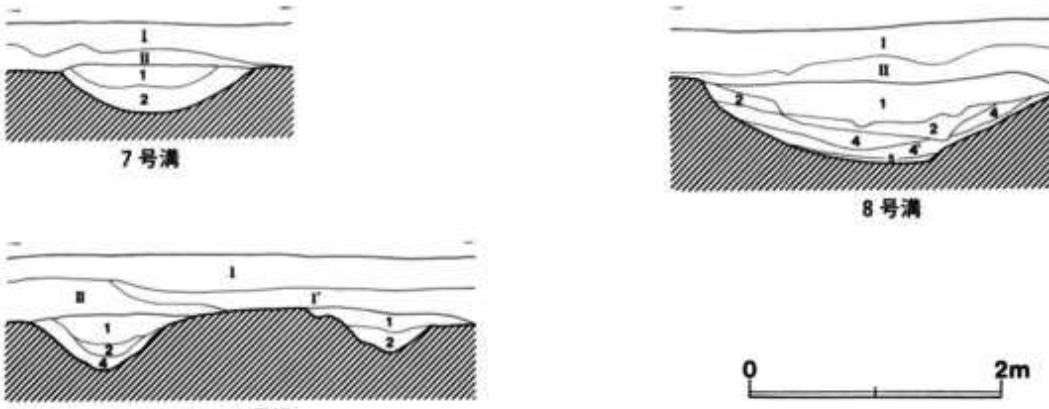
**第８号溝跡（第41図）**

Ａ地点の調査区北側に位置し、重複する第４・５号溝跡に切られている。流路は、第７号溝跡と同じく若干湾曲ぎみに南西から北東方向に向いており、第７号溝跡と約1.3m離れて並走している。北西側にも第７号溝跡と類似した形態の第９号溝跡が同程度離れて並走しており、本溝跡の南西側には第９号溝跡の旧分水口が見られる。

規模は、上幅で2.5m～2.9mあり、確認面からの深さは60cmを測る。溝断面の形態は、緩やかな弧状を呈し、底面は丸みをもち北東に向かって低くなっている。覆土は暗褐色土を主体とするが、



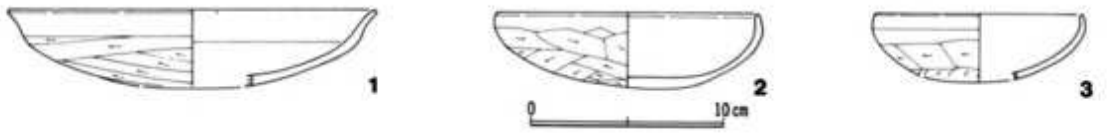

第41図　第７～10号溝跡




第42図　第７～10号溝跡土層断面図

**第７～10号溝跡土層説明**

第Ⅰ層：淡灰色土層（現耕作土。）
第Ⅰ′層：淡灰褐色土層（旧耕作土。）
第Ⅱ層：暗茶灰色土層（マンガン塊を均一に、B軽石を微量含む。粘性・しまりともない。）
第１層：暗褐色土層（白色粒子・鉄斑を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗灰色土層（鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第３層：暗茶褐色土層（鉄斑を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第４層：暗褐色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第4′層：暗褐色土層（砂を多量に、鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第５層：暗褐色土層（砂利を多量に、鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性・しまりともない。）




第43図　第８号溝跡出土土器

**第８号溝跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 皿 | 口縁部径<br>(19.0cm)<br>推定高<br>( 4.0cm) | 口縁部は比較的短く、緩やかに外反する。器高は低く、体部は内湾しながら開く。底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br><br>内外－橙褐色 | 口縁部1/4。<br><br>内面に煤の付着あり。 |
| 2 | 坏 | 口径13.4cm<br><br>器高 3.9cm | 口縁部は短く内湾する。体部は内湾ぎみに開き、底部は丸底を呈する。 | 内面及び口縁部外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。 | 黒色粒・白色粒<br><br>内外－明茶褐色 | 約3/4。 |
| 3 | 坏 | 口縁部径<br>(10.8cm) | 口縁部は短く内湾する。体部は内湾ぎみに開き、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 角閃石・白色粒<br><br>内外－暗褐色 | 約3/4。 |

底面付近には砂や砂利の堆積が顕著に見られる。

出土遺物は、真間期前半の土器片が比較的多く出土している(第43図)。この他では、縄文時代中期後半の土器片や石鏃1点及び古墳時代後期の鬼高式土器の破片などが少量出土している。本溝跡の時期は、出土遺物より古代の真間期前半頃と考えられる。

本溝跡は、調査区内で検出された溝跡の中では最大の規模であることから、並走する同時期と推測される溝群の幹線的水路と考えられる。本溝跡の両側に並走する第7・9・10号溝跡は、おそらく上流において本溝跡から分水のために分岐した枝溝であろう。

**第9号溝跡（第41図）**

A地点の調査区北側に位置し、重複する第4・5号溝跡に切られている。流路は、南東側の第7号溝跡や第8号溝跡と同じく、若干湾曲ぎみに南西から北東方向に向いており、幹線水路と考えられる第8号溝跡と1.2m～1.5m離れて並走している。規模は、上幅が1.2m～1.4mあり、確認面からの深さは40cmを測る。壁は、直線的に緩やかに立ち上がるが、壁の下半で段をもち、そこから方向を変えて急傾斜になっている。底面は、溝跡の南西側は約20cmであるが、北東側は約30cmと若干広くなっている。全体に細かな凹凸が顕著に見られる。本溝跡では、ちょうど近世後半以降の第4・5号溝跡と重複している付近で、南東側の第8号溝跡に近接するように若干蛇行し、その南西側延長に第8号溝跡と本溝跡を結ぶ浅い溝跡が見られる。これは、本溝跡が掘削された当初の分水口と考えられ、本溝跡はこの第8号溝跡からの分水口が、後に調査区外のもっと上流に付け替えられたことにより、掘り返されたものであることが伺える。

出土遺物は、真間期の土師器の破片が少量出土しただけである。本溝跡の時期は、出土遺物がごく少量であるため明確にできないが、覆土の状態は南東側の第8号溝跡と類似し、またそれから分岐された水路と考えられることから、第8号溝跡と同時期の真間期前半頃のものと推測される。

**第10号溝跡（第41図）**

A地点の調査区北側に位置し、重複する第4・5号溝跡に切られている。流路は、南東側の第7～9号溝跡と同じく、若干湾曲ぎみに南西から北東方向に向いており、第9号溝跡から1.4m～2.0m離れて、それらの溝群と並走している。本溝跡は、その中央付近から第10a号溝跡と第10b号溝跡の2本に分岐しており、その分水口から約8m並走した後、北側の第10a号溝跡は北に向かって大きく流路を変え、南側の第10b号溝跡も調査区の北東端で北に流路を変えるようである。

規模は、溝の南西側で上幅が1.6mあるが、北東側で第10a号溝跡と10b号溝跡の2本に分岐した後は、それぞれ50cm程度の規模となっている。確認面からの深さは15cmを測る。溝断面は、並走する南東側の第7号溝跡や第9号溝跡と類似した形態を呈している。底面は、分岐前と分岐後も幅20cmと均一で、比較的平坦である。

出土遺物がまったくないため、本溝跡の時期は明確にできないが、覆土は南東側の第7～9号溝跡と類似しており、また流路も並走していることから、それらの溝群と同時期の可能性が高いと推測される。おそらく、調査区外の上流で第8号溝跡から分岐した水路であろう。

**第11号溝跡**

A地点の北側に位置する。調査区内ではほぼ南北方向を向き、直線的に約6.5mにわたって検出されているが、溝の南端は途切れている。幅は20cm～30cmあり、確認面からの深さは最高で8cmを測る。底面は10cmの均一な幅で、比較的平坦である。覆土は、ローム粒子を微量に含む黒褐色土の単一層である。本溝跡の時期は、出土遺物がまったくないため明確にできないが、覆土の状態は南側の第7～10号溝跡と類似しており、それらの溝群と近時した時期の可能性が高いと思われる。

本溝跡は、他の古代の溝群と異なり、小規模で直線的な形態を呈している。調査区内で検出された部分が短いためその性格は不明であるが、溝の南端部が途切れていることから、水路とは異なる性格の溝である可能性も考えられる。

**第12号溝跡（第39図）**

B地点の調査区中央部に位置する。流路は、南西から北東方向にとり、南側の第2号溝跡とほぼ同じ方向に向いている。規模は、上幅で62cmあり、深さは30cmを測る。断面の形態は、Vの字状に壁が直線的に立ち上がる形態を呈している。底面は、15cm前後の比較的均一な幅でやや丸みをもち、北東側に向かって低くなっている。本溝跡の時期は、出土遺物がまったくないため明確にできないが、覆土にB軽石を均一に含むことから中世のものと考えられる。あるいは、AB両地点の中間あたりで、南側の第2号溝跡から分岐された溝である可能性も推測される。

**2．土　壙**

**第1号土壙（第44図）**

A地点の調査区中央部南寄りに位置する。重複する古代と推測される第3号溝跡によって、土壙の北側を切られているため、その全容は不明である。

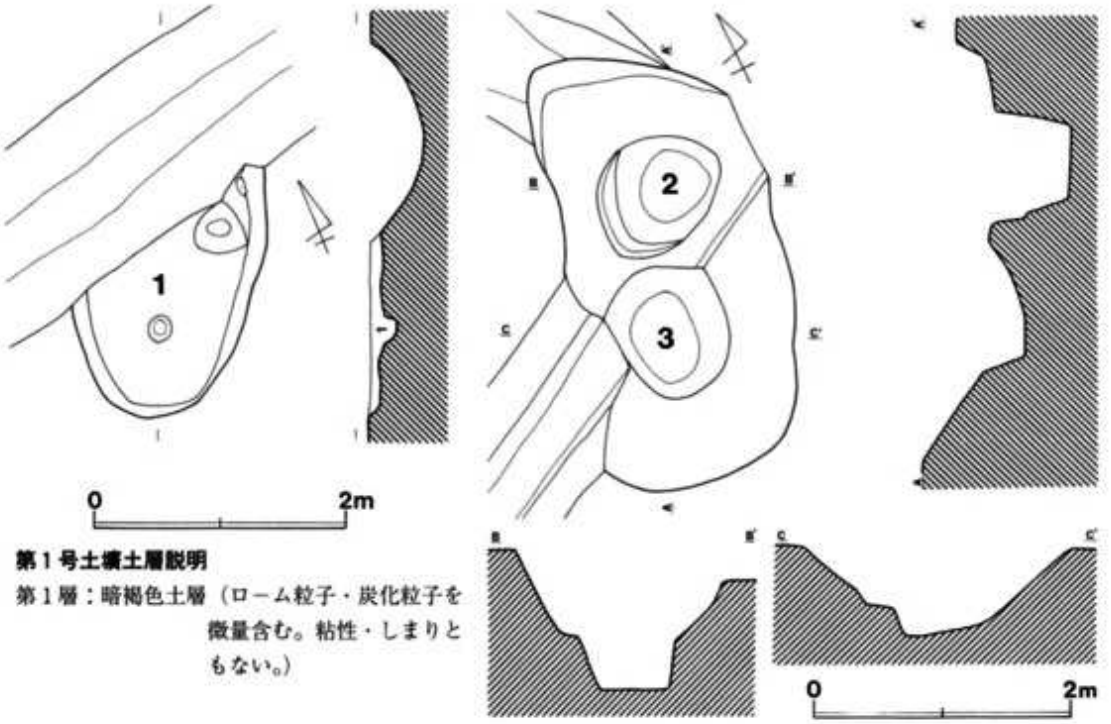
平面形は、残存する部分から判断すると楕円形に近い形態を呈するものと推測される。規模は、南北方向は190cm、東西方向は152cmまで測れる。確認面からの深さは10cmあり、比較的浅い。底面は平坦でほぼ水平をなし、中央部の南西寄りと東寄りの2箇所に浅いピットがある。土壙の長軸方向は、N－22°－Eをとる。

出土遺物は、西側の壁際より自然石が1個出土しただけである。本土壙の時期は、出土遺物がほとんどないため明確にできないが、第3号溝跡に切られていることから、古代以前の所産であることが伺える。

**第2号土壙（第44図）**

A地点の調査区北側の東端に位置し、重複する第7号溝跡と第3号土壙を切っている。平面形は不整形を呈し、規模は南北方向194cm・東西方向198cmある。上半部は深さ50cmで平坦になっているが、中央部は86cm×105cmの不整円形の筒状に深くなっている。確認面からの深さは114cmを測る。

本土壙の形状は井戸に類似しているが、その性格は不明である。時期は、出土遺物がないため明確ではないが、覆土中にB軽石を均一に含むことから、中世のものと推測される。




**第1号土壙土層説明**

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

**第44図　第1～3号土壙**

**第3号土壙（第44図）**

A地点の調査区北側の東端に位置する。重複する第7号溝跡を切り、第2号土壙に切られている。

平面形は、北側を第2号土壙に切られているため不明である。規模は、東西方向182cm・南北方向は112cmまで測れる。形状は第2号土壙と類似し、上半部は緩やかに立ち上がっているが、中央部は不整楕円形の土壙状に深くなっている。確認面からの深さは67cmを測り、底面は平坦であるが北東側に向かって若干傾斜している。覆土は、上半がB軽石とローム粒子を均一に含む黒褐色土で、下半は鉄斑やマンガン塊をふくむ暗褐色土であった。遺物はまったく出土しなかった。

本土壙の時期は、覆土の状態より中世のものと推測される。

**第4号土壙（第39図）**

B地点の調査区中央部に位置する。調査区内で検出されたのは、土壙の東側半分だけであるため、本土壙の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、南東から北西方向72cm・南西～北東方向は83cmまで測れる。確認面からの深さは10cm程度で、比較的浅い。底面は広く平坦をなしている。覆土は、B軽石・ローム粒子・炭化粒子を微量に含む暗褐色土を主体にしている。遺物はまったく出土しなかった。

本土壙の時期は、出土遺物がまったくないため明確にできないが、覆土の状態からは中・近世のものと推測される。

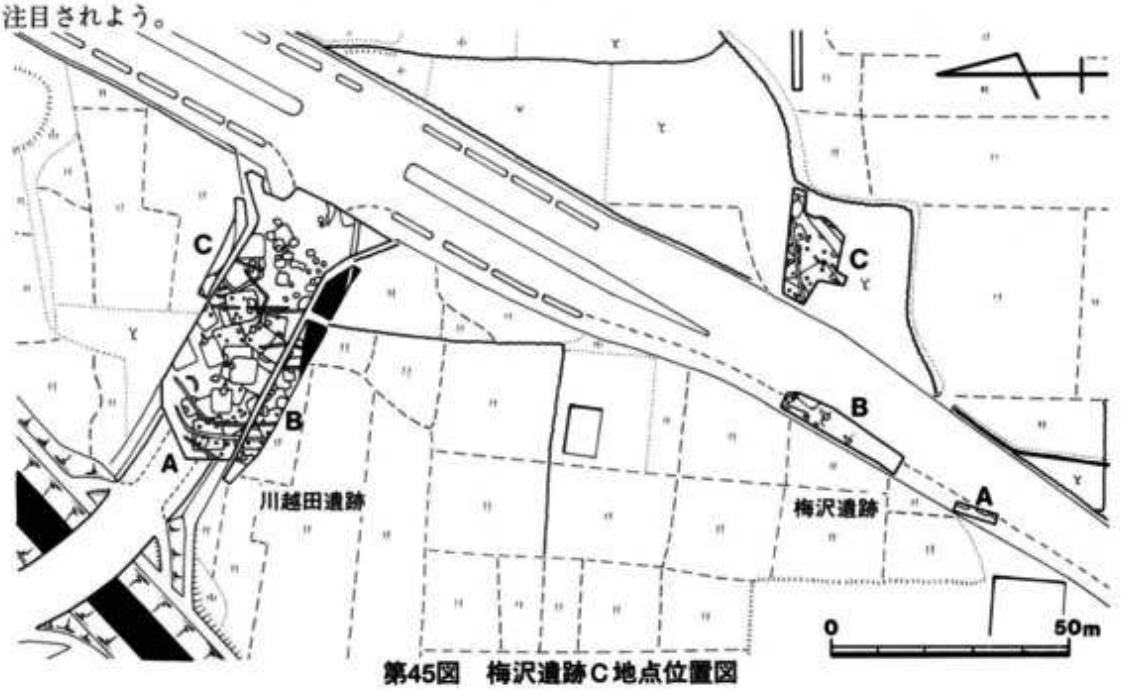
# 第Ⅵ章　梅沢遺跡Ｃ地点の発掘調査

## 第１節　遺跡の概要

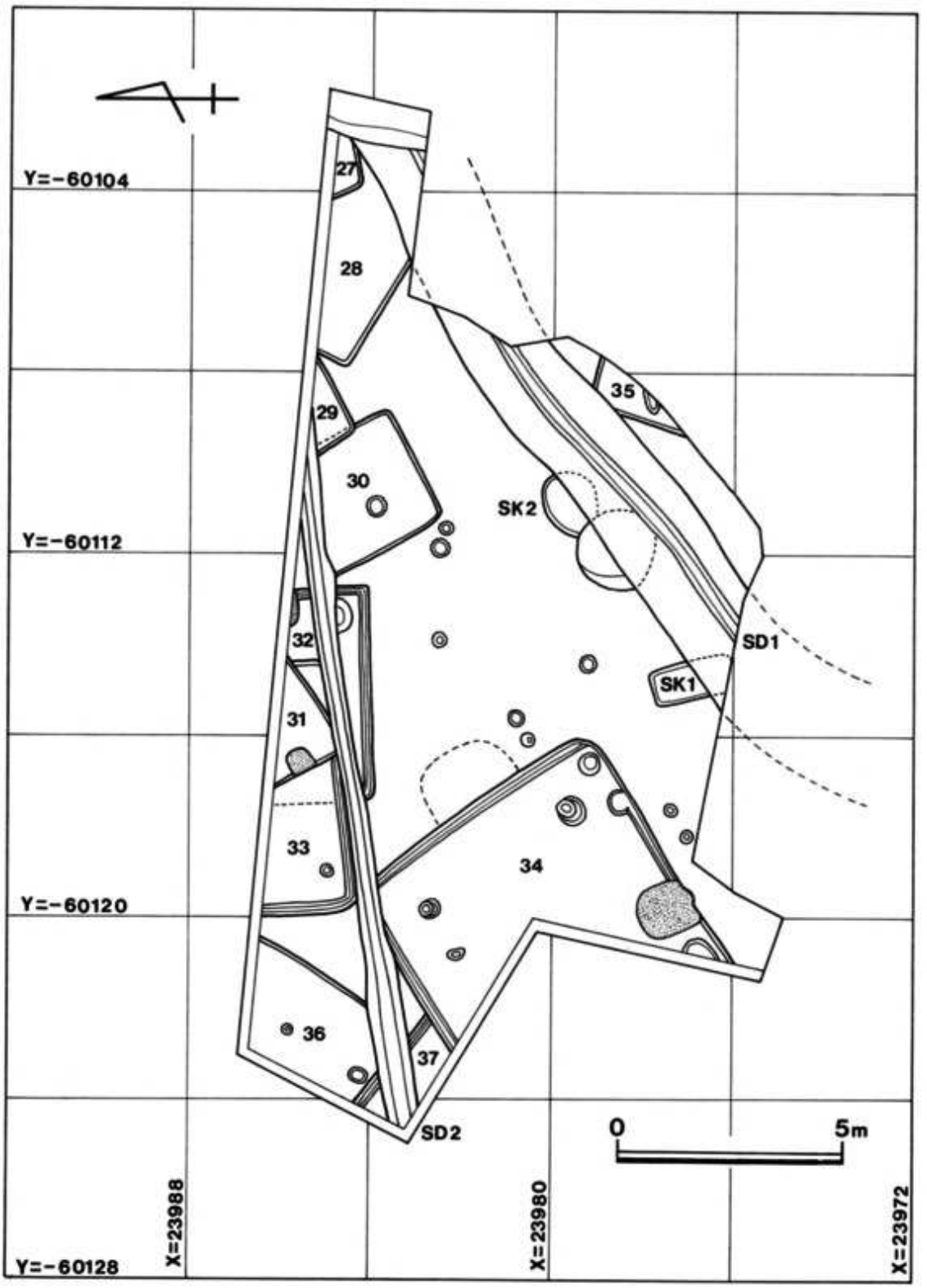
本遺跡は、女掘川中流域の標高70mを測る自然堤防上に立地する古墳時代の集落跡である。この集落跡は、本地点の北側約100mの川越田遺跡(富田・赤熊1985、恋河内1993)や北東側約300mの後張遺跡(立石1982・1983)と有機的に連環する様相が見られ、古墳時代を通じて営まれた当地域の中心的大集落の一部を構成していたものと推測される。

本遺跡の発掘調査は、昭和57年に児玉工業団地の取り付け道路建設に伴う県道(現国道　462号線)拡幅工事に伴って、埼玉県埋蔵文化財調査事業団によりＡ区とＢ区の２地点が調査されている（富田・赤熊1985)。そのため、今回の調査地点をＣ地点と呼称し、遺構番号はＡＢ両地点からの続き番号をつけている。

今回のＣ地点の発掘調査で検出された遺構は、竪穴式住居跡11軒・土壙２基・溝跡２条であり、時期不明の土壙２基と近世後半以降の第２号溝跡以外は、すべて古墳時代に属するものである。これらの遺構は調査区内での密集度が高く、すべてが重複しているため、遺構の全容が判断できるものは少ない。時期は、第36号住居跡が前期に溯る可能性がある他は、すべて和泉期～鬼高期である。この中で特に注目されるものは、和泉期の第37号住居跡から出土した羽口である。その大きさや形態より小鍛治に使用されたものであることが推測されるが、該期のものは他にあまり例がなく、貴重な資料と言えよう。また、調査区の南東側に位置する第１号溝跡は、古墳時代後期に埋没したもので、その埋没の様相や時期が川越田遺跡Ｂ地点(恋河内1993)で検出された河川跡と類似していることは、両者の有機的な関係が伺え、本集落周辺の開発や自然環境の変化の一面を示すものとして注目されよう。




第45図　梅沢遺跡Ｃ地点位置図




第46図　梅沢遺跡C地点全測図

## 第２節　検出された遺構と遺物

### １．住居跡

#### 第27号住居跡（第47図）

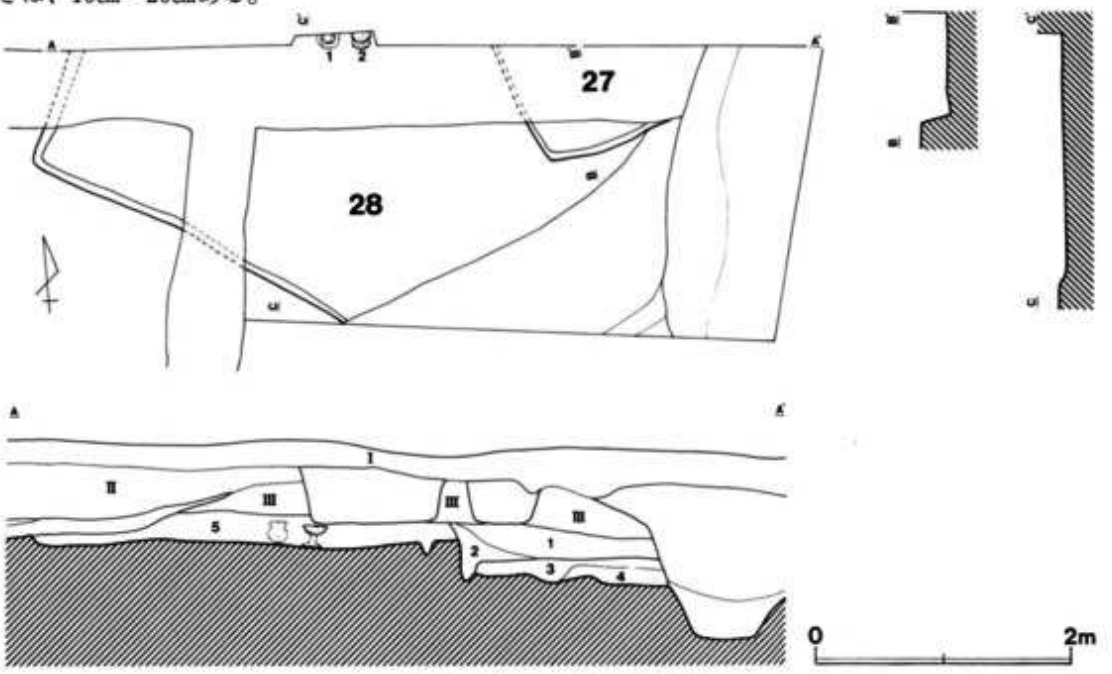
調査区の北東端に位置する。重複する第28号住居跡を切っているが、住居跡の東側を第１号溝跡や近代以降の溝によって切られている。調査区内では住居の南西コーナー部付近が検出されただけであるため、本住居跡の全容は不明である。

床面は、暗黄褐色土や暗褐色土を埋め戻した貼床式で、確認面からの深さは25cmある。南西壁下には一部壁溝を伴う。出土遺物は、覆土中より鬼高式の土器片がごく少量出土している。

#### 第28号住居跡（第47図）

調査区の北東端に位置し、重複する第27号住居跡や第１号溝跡に住居跡の一部を切られている。調査区内では、住居の南西側の一部が検出されただけなので、本住居跡の全容は不明であるが、方形かあるいは長方形を呈する比較的大形の住居跡のようである。

壁は、緩やかに立ち上がり、調査区内で検出された壁下には壁溝は見られない。確認面からの深さは、10cm～20cmある。



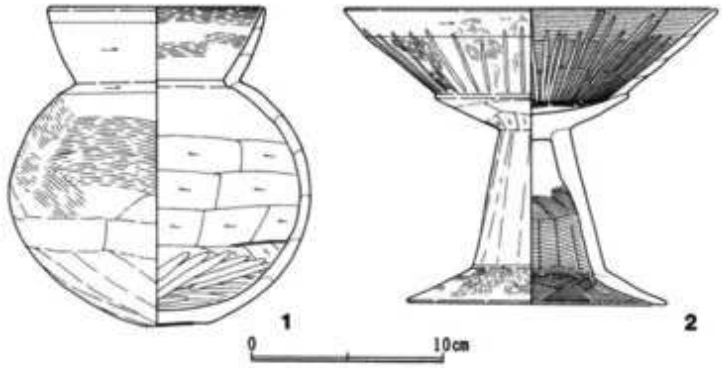

第47図　第27・28号住居跡

**第27・28号住居跡土層説明**

第１層：暗茶褐色土層（白色粒子・鉄斑を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第３層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第４層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第５層：暗茶褐色土層（白色粒子を多量に、鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

床面は、地山を直接掘り窪めた直床式で、掘り方は伴わないようである。比較的平坦であるが、全体にやや緩やかな起伏が見られ、調査区内ではあまり堅緻な部分は見られない。

出土遺物はあまり多くはないが、住居跡中央部の床面上より、ほぼ完形の小形壷と高坏が正位で並んで出土している。




第48図　第28号住居跡出土土器

**第28号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小形壷 | 口径11.3<br>器高16.4<br>底径 3.3 | 粘土紐輪積み成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、最大径を中位に有す。底部は小さな平底。 | 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面上半ハケの後ナデ、下半ナデ。胴部内面ケズリの後下半指ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－茶褐色 | ほぼ完形。<br>外面に黒斑あり。 |
| 2 | 高坏 | 口径19.4<br>器高15.2<br>脚端径13.5 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、坏部下端はやや小さい。脚柱部・脚端部とも直線的に開く。 | 口縁部内外面ハケの後ナデ、その後雑なミガキを加える。脚柱部外面ケズリの後ナデ、脚端部外面ハケの後ヨコナデ、内面ハケ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－明茶褐色 | ほぼ完形。 |

**第29号住居跡（第49図）**

調査区の北東側に位置する。重複する第30号住居跡を切り、第２号溝跡に切られている。調査区内では住居の南側コーナー部付近が検出されただけであるため、本住居跡の全容は不明である。

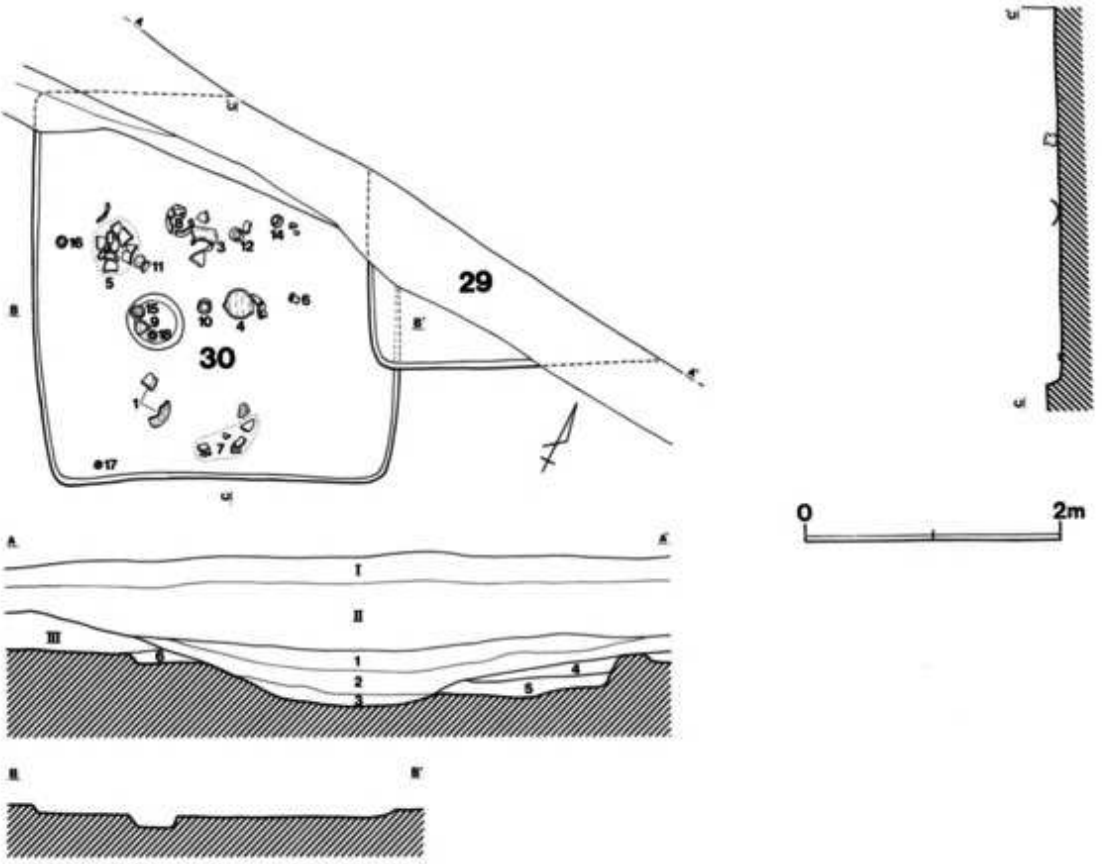
壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは５cm～10cmある。床面は、地山を荒掘りした後、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土(第５層)を埋め戻して構築した貼床式で、比較的平坦である。出土遺物は、土器の小破片が数片しただけである。

**第30号住居跡（第49図）**

調査区北東側の第29号住居跡の西側に位置する。住居北東側壁の一部を重複する第29号住居跡に、住居北西側壁を第２号溝跡によって切られている。

平面形は、比較的整った長方形を呈するものと推測される。規模は、南西～北東方向2.82m、南東～北西方向は2.72mまで測れる。住居跡の長軸方位は、N－28°－Wをとる。

壁は、緩やかに立ち上がり、確認された各壁下には壁溝は存在しない。確認面からの深さは５～10cm程度ある。床面は、地山を掘り窪めた直床式で、掘り方を伴わないようである。比較的平坦に作られているが、全体にやや軟弱である。住居中央部のやや南側寄りに円形の掘り込みを伴うが、炉や主柱穴等の施設はない。




**第49図　第29・30号住居跡**

**第29・30号住居跡土層説明**

**〈第２号溝跡〉**

第１層：暗灰褐色土層（A軽石・鉄斑を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第２層：黒灰色土層（A軽石・鉄斑・マンガン塊を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（A軽石を均一に、ローム粒子・鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**〈第29号住居跡〉**

第４層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第５層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）

**〈第30号住居跡〉**

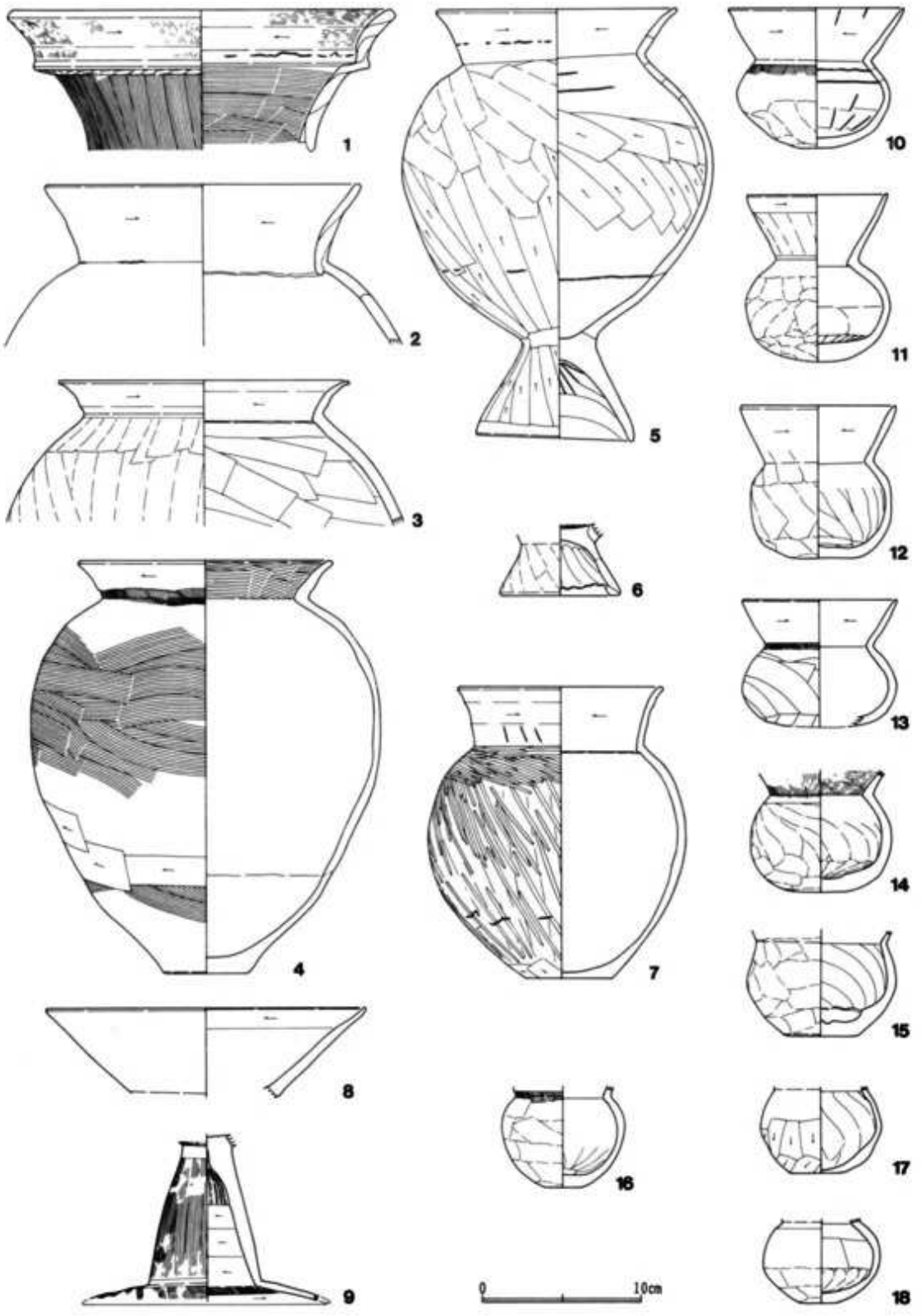
第６層：暗褐色土層（鉄斑を多量に、白色粒子・マンガン塊を微量含む。粘性・しまりともない。）

出土遺物は、住居中央部の床面上を中心に、比較的多くの土器が出土している。これらの土器は、その出土状態より住居内で使用されていたものがそのまま廃棄されたものと推測され、良好な一括資料と言える。

**第30号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺 | 口縁部径 24.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は二重口縁を呈し、口唇部は平坦面を有する。 | 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。頸部内外面ハケ。段部外面指押さえ痕。 | 赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色 | 口縁部1/2。内外面に黒斑あり。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 甕 | 口縁部径<br>(19.5cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反し、口唇部はやや内湾する。胴部は張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。 | 片岩粒・白色粒・赤色粒<br>外－赤茶褐色<br>内－淡茶褐色 | 口縁部1/3。 |
| 3 | 甕 | 口縁部径<br>(18.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや強く外反する。胴部は張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後篦ナデ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 口縁部2/3。 |
| 4 | 甕 | 口径(15.8)<br>器高 25.5<br>底径 5.1 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は長胴ぎみで、最大径をやや上位に有する。底部は小さな平底を呈する。 | 口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ナデの後部分的にハケとケズリを加える。胴部内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－淡茶褐色 | 約1/3。 |
| 5 | 台付甕 | 口縁部径<br>14.9cm<br>器高<br>26.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位に有する。台部は内湾ぎみに開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデの後部分的にケズリ。台部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | ほぼ完形。<br>外面に黒斑あり。 |
| 6 | 台付甕 | 台端部径<br>7.5cm | 粘土紐積み上げ成形。台部は「ハ」の字状に開き、端部は内側に折り返している。 | 台部外面ナデ、内面指ナデ。底部内面ハケ。 | 白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 台部のみ。 |
| 7 | 甕 | 口径(12.8)<br>器高 18.0<br>底径 5.2 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位に有する。底部は平底を呈す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後雑なミガキ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－茶褐色<br>内－暗褐色 | 約1/3。<br>外面に黒斑あり。 |
| 8 | 高坏 | 口縁部径<br>19.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部はやや内湾する。 | 口縁部内面ヨコナデ。坏部内外面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－赤茶褐色 | 口縁部のみ。 |
| 9 | 高坏 | | 粘土紐巻き上げ成形。脚柱部は膨らみをもって開き、脚端部は内湾ぎみに開く。 | 脚柱部外面ハケ、内面シボリの後ケズリ。脚端部内外面ハケの後ヨコナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－淡橙褐色 | 脚部のみ。 |
| 10 | 小形丸底壺 | 口縁部径<br>10.9cm<br>器高<br>8.8cm | 粘土紐巻き上げ成形。口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。体部は張り、底部は小さな平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ハケの後ナデ、下半ケズリの後ナデ。体部内面篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－明茶褐色 | 完形。 |
| 11 | 小形丸底壺 | 口縁部径<br>8.7cm<br>器高<br>10.3cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。体部は張り、底部は厚く、丸底を呈する。 | 口縁部外面篦ナデの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半ケズリの後ナデ。体部内面指ナデ。 | 白色粒<br>内外－明茶褐色 | ほぼ完形。 |
| 12 | 小形丸底壺 | 口縁部径<br>9.6cm<br>器高<br>9.5cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。体部は張り、底部は中央部がやや窪む平底風を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面指ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－橙褐色 | 完形。<br>底部外面に黒斑あり。 |
| 13 | 小形丸底壺 | 口縁部径<br>9.5cm<br>器高<br>7.9cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。体部は張り、偏平ぎみである。底部は丸底を呈する。 | 口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－茶褐色 | 3/4。 |




**第50図　第30号住居跡出土土器**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 小形丸底壺 | 残存高 7.5cm | 粘土紐積み上げ成形。体部は張ってやや偏平をなし、底部は丸底ぎみである。 | 口縁部内外面ハケの後ナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面指ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－明茶褐色 | 体部のみ。 |
| 15 | 小形丸底壺 | 残存高 6.5<br>底部径 4.6 | 粘土紐巻き上げ成形。頸部は広く、体部はあまり張らない。底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－淡茶褐色<br>内－茶褐色 | 体部のみ。外面に黒斑あり。 |
| 16 | 小形丸底壺 | 残存高 6.3<br>底部径 2.3 | 粘土紐積み上げ成形。体部は張り、底部は小さな平底を呈する。 | 口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－暗褐色 | 体部4/5。 |
| 17 | 小形丸底壺 | 残存高 6.3<br>底部径 3.0 | 粘土紐積み上げ成形。比較的小ぶりで、体部は張り、底部は小さな平底を呈する。 | 体部外面ナデの後ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 体部のみ。 |
| 18 | 小形丸底壺 | 残存高 5.2<br>底部径 2.3 | 粘土紐積み上げ成形。比較的小ぶりで、体部は張り、底部は小さな平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ。内面下半指ナデ、上半篦ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－茶褐色 | 体部のみ。 |

**第31号住居跡（第51図）**

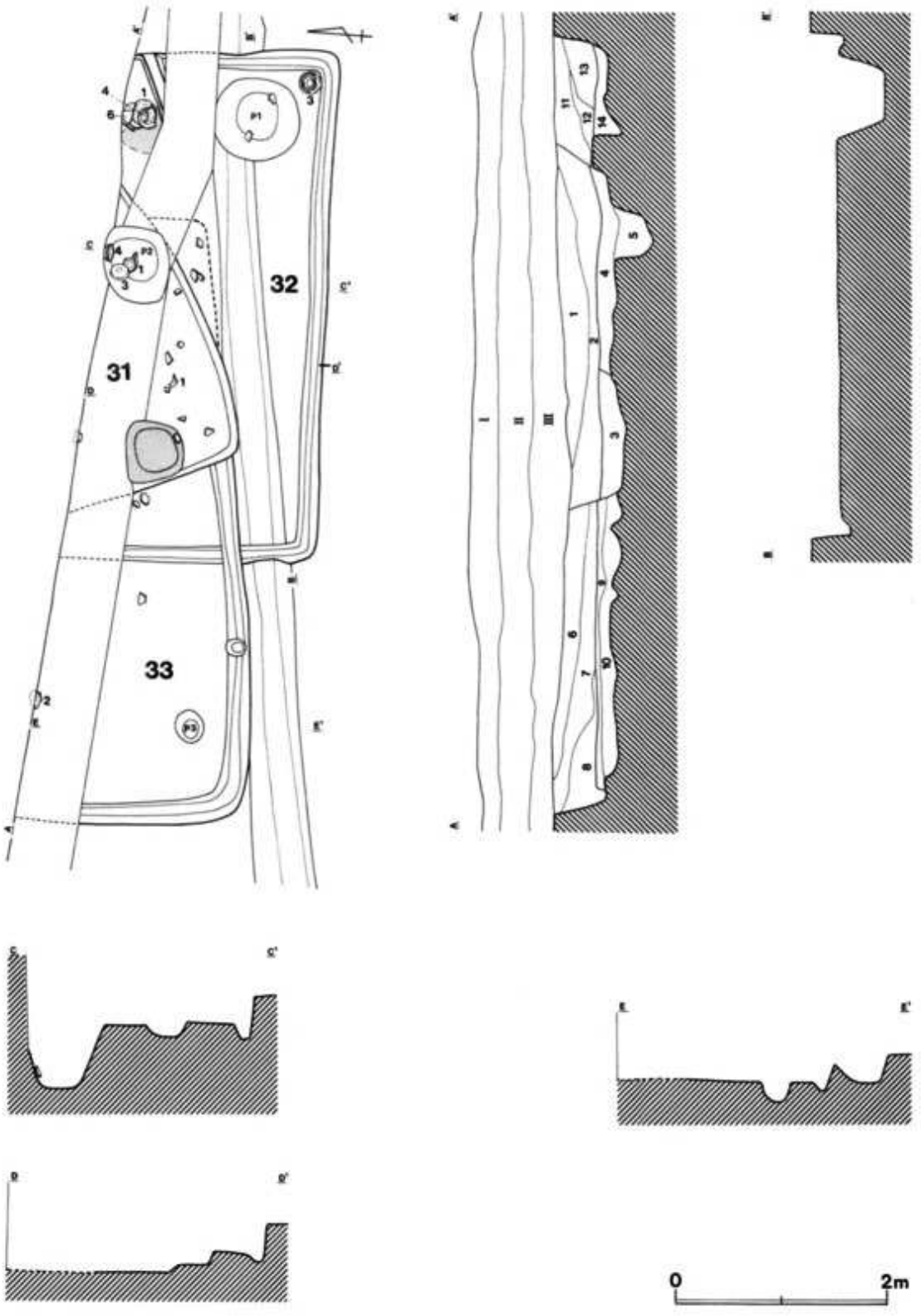
調査区北側の中央部に位置する。第32号住居跡や第33号住居跡と重複し、それらを切って構築されている。調査区内では住居の南側半分が検出されただけなので、本住居跡の全容は不明である。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。調査区内で検出された部分には、壁溝は見られない。床面は、地山を荒掘りした後、暗黄褐色土を埋め戻して構築した貼床式である。比較的堅緻であり、やや起伏が見られる。

カマドは、住居南西側壁の南側コーナー部寄りに付設されていたようであり、ローム粒子と焼土粒子を多量に含む方形ぎみのカマド掘り方が検出されている。カマド本体はすでに崩壊しており、その形状は不明である。

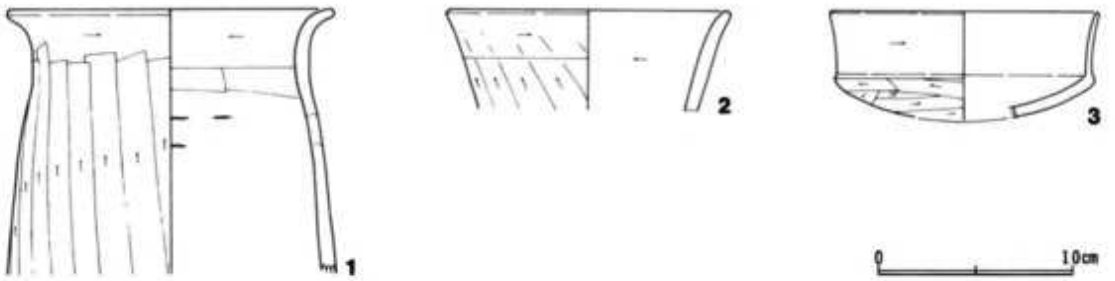
出土遺物は、覆土中より鬼高式の土器片が少量出土しただけである。

**第30・31・32号住居跡土層説明**

第1層：暗褐色土層（白色粒子・鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に、焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第5層：黒褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第6層：暗褐色土層（白色粒子・鉄斑を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第7層：暗褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第8層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第9層：黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第10層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第11層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第12層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第13層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第14層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）




第51図　第31・32・33号住居跡




第52図　第31号住居跡出土土器

第31号住居跡出土土器観察表

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(16.8cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部はあまり張らない。 | 口縁部内外面左回りのヨコナデ。胴部外面縦方向のケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・小石<br>内外－橙褐色 | 口縁部1/3破片。 |
| 2 | 鉢 | 口縁部径<br>(14.6cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は胴部からそのまま外傾し、口唇部はやや外反する。 | 口縁部内外面左回りのヨコナデ。胴部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>外-明茶褐色<br>内-暗褐色 | 口縁部1/3破片。 |
| 3 | 坏 | 口縁部径<br>(13.8cm) | 口縁部は器肉が薄く、外反ぎみに直立する。体部は比較的浅く、丸底を呈する。 | 口縁部内外面左回りのヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－橙褐色<br>内－明橙褐色 | 約1/2。 |

**第32号住居跡（第51図）**

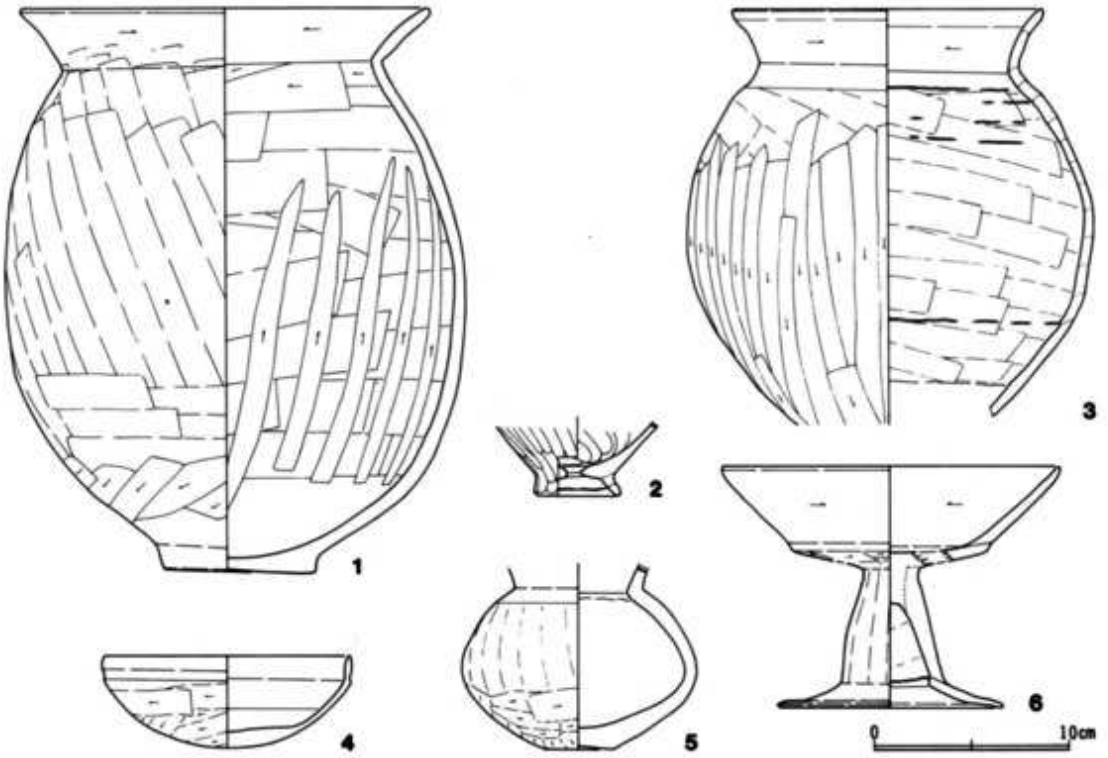
調査区北側の中央部に位置する。住居跡の西側を重複する第31号住居跡に、南側を第２号溝跡によって切られている。調査区内で検出されたのは、住居の南側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、比較的整った方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向4.73m、南北方向は2.35mまで測れる。主軸方位は、Ｎ－88°－Ｅをとる。

壁は、直線的に立ち上がり、確認面からの深さは25cm前後ある。調査区内で検出された各壁下には、幅16cm前後の壁溝が連続して巡っている。床面は、地山を荒掘りした後、暗黄褐色土を埋め戻した貼床式である。全体に平坦で、比較的堅緻である。

カマドは、住居東側壁に付設されている。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、良く焼けており、No６の高坏を伏せて支脚に転用している。貯蔵穴（Ｐ１）は、住居の南東コーナー部にある。直径80cmの不整円形を呈し、床面からの深さは40cmある。主柱穴は見られない。

出土遺物は、カマド内や貯蔵穴周辺を主体に、土器が出土している。No１の甕は、カマド内より出土しており、その中には完形の坏（No４）が入っていた。No３の甕は、住居南東コーナー部の床面上に正位に置かれていたもので、その出土状態や胴部下半の接合痕のところできれいに割れていることから、甑として再利用されたものと推測される。No２の小形甑は、底部に高台の付くもので、特異な形態を呈している。




**第53図　第32号住居跡出土土器**

**第32号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口径21.0<br>器高28.9<br>底径 7.7 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや外反ぎみに外傾する。胴部は張り、最大径を中位に有する。底部は突出し、平底を呈する。 | 口縁部内外面左回りのヨコナデ。胴部外面上半篦ナデ、下半ナデの後ケズリ。胴部内面篦ナデの後ケズリ。底部外面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－淡褐色 | 約4/5。<br>外面に黒斑あり。<br>カマド内出土。 |
| 2 | 小形甑 | 高台部径<br>4.4cm | 粘土紐積み上げ成形。底部は小さな平底を呈し、雑な作りの高台が付く。 | 胴部下半外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>外－淡橙褐色<br>内－明茶褐色 | 底部のみ。<br>底部穿孔は焼成前。 |
| 3 | 甕 | 口縁部径<br>16.0cm<br>残存高<br>21.2cm | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位に有する。 | 口縁部内外面左回りのヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－淡茶褐色<br>内－明茶褐色 | ほぼ完形。<br>（底部欠失）<br>甑に転用された可能性あり。 |
| 4 | 坏 | 口縁部径<br>12.5cm<br>器高<br>4.7cm | 口縁部は短く直立し、体部との境に凹線状の窪みを有する。体部は比較的深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面下端棒状工具によるナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>角閃石<br>外－淡褐色<br>内－橙褐色 | 完形。<br>カマド内のNo.1の甕内より出土。 |
| 5 | 小形壺 | 残存高<br>9.5cm<br>底部径<br>3.5cm | 粘土紐輪積み成形。胴部はやや張り、最大径を下位に有す。底部は小さく中央部がやや窪む。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半ナデ、下半ケズリの後ナデ。内面ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>外－明茶褐色<br>内－暗褐色 | 胴部のみ。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 高坏 | 口縁部径<br>(17.4cm)<br>推定高<br>(12.3cm) | 粘土紐輪積み成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部やや上方に向く。脚柱部は太く短い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリ、内面ナデ。脚柱部内外面ナデ。脚端部内面ヨコナデ。 | 白色粒・赤色粒<br><br>内外－明茶褐色 | 坏部3/4。<br>脚部完形。<br><br>カマド支脚。 |

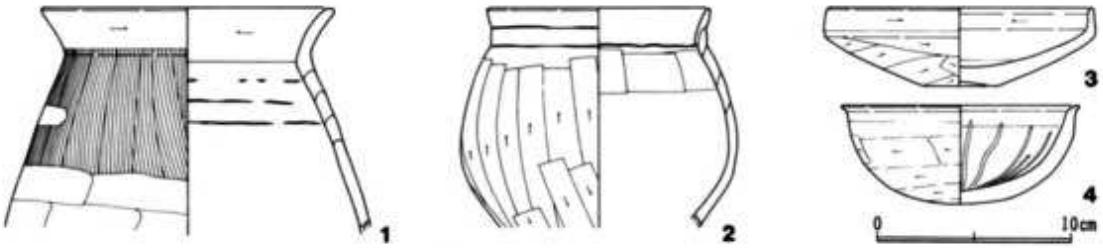
**第33号住居跡（第51図）**

調査区の北西側に位置する。住居跡の東側を重複する第31号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは、住居の南側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、比較的整った方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向は推定で5.60m、南北方向は2.10mまで測れる。主軸方位は、N－86°－Eをとると推測される。

壁は、直線的に立ち上がり、確認面からの深さは30cm前後ある。西側と南側壁には連続して幅20cm前後の壁溝が巡っている。床面は、地山を荒掘りした後、暗黄褐色土を埋め戻した貼床式である。全体に平坦で、比較的堅緻である。P2は本住居跡の貯蔵穴と推測され、ほぼ住居の南東側コーナー部に位置する。直径70cmの不整形を呈し、床面からの深さは60cmある。カマドや主柱穴は、調査区内では検出されなかった。

出土遺物は、土器が出土しているが、No.1・3・4はP2の貯蔵穴内から出土し、No.2は覆土中からの出土である。




**第54図　第33号住居跡出土土器**

**第33号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(15.0cm) | 粘土紐輪積み成形。口縁部は短く緩やかに外反する。胴部はやや張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後、中位ナデ。内面丁寧なナデ。 | 白色粒・角閃石<br><br>内外－橙褐色 | 口縁部1/4。<br>P2貯蔵穴内出土。 |
| 2 | 小形甕 | 口縁部径<br>(11.4cm) | 粘土紐輪積み成形。口縁部は短く直立ぎみに外反し、胴部はやや張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－淡褐色<br>内－黒褐色 | 約1/3。 |
| 3 | 坏 | 口径13.6<br>器高 4.0<br>底径 3.8 | 口縁部は短く、やや内傾する。体部は比較的浅く、底部は中央部がやや窪む平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後、上半ナデ。内面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。 | 白色粒・角閃石<br>赤色粒<br><br>内外－明茶褐色 | 完形。<br><br>P2貯蔵穴内出土。 |
| 4 | 埦 | 口縁部径<br>12.2cm<br>器高<br>5.0cm | 口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部は短く外傾する。体部は深く、丸底を呈する。器肉はやや厚い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後、雑なナデと部分的なミガキ。内面ナデの後、放射状暗文。 | 白色粒・角閃石<br>赤色粒<br><br>内外－淡茶褐色 | 完形。<br>内外面に黒斑あり。貯蔵穴内出土。 |

**第34号住居跡（第56図）**

調査区の南西側に位置する。重複する第37号住居跡を切っているが、住居の北側コーナー部を第2号溝跡によって切られている。調査区内で検出されたのは、住居の北東側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

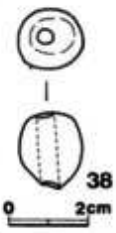
平面形は、比較的整った方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、北西から南東方向6.35m、北東から南西方向は6.50mまで測れる。主軸方位は、N－147°－Eをとる。

壁は、直線的に立ち上がり、確認面からの深さは45cmある。北西側壁下と北東側壁下には、幅20cm前後の壁溝が連続して巡っている。床面は、住居中央部に暗黄褐色土（第5層）を若干埋め戻した貼床式である。やや緩やかな起伏があり、非常に堅緻である。

カマドは、南東側壁の中央やや南寄りに付設されている。規模は、全長126cm、最大幅118cmを測る比較的大形のカマドである。天井部はすでに崩壊している。袖は、粘土を主体とする黄褐色土を壁に直接貼り付け、非常に厚く構築されている。左側袖の中央付近は、上部を後世のピットによって壊されている。燃焼部は、底面が床面よりも若干掘り窪めて作られており、支脚は設置されていない。底面や袖の内側は非常に良く焼けている。

ピットは、住居内より6箇所検出されている。P1とP2は、その位置や形態から本住居跡の主柱穴と考えられるものである。いずれも二段に掘られており、床面からの深さは約40cmある。P3は、貯蔵穴と推測されるもので、カマド右側の住居南側コーナー部付近に位置する。形態は不整形を呈し、二段に掘られている。床面からの深さは40cmあり、底面は平坦である。P4～P6は本住居跡に伴うと考えられるものであるが、その性格は不明である。

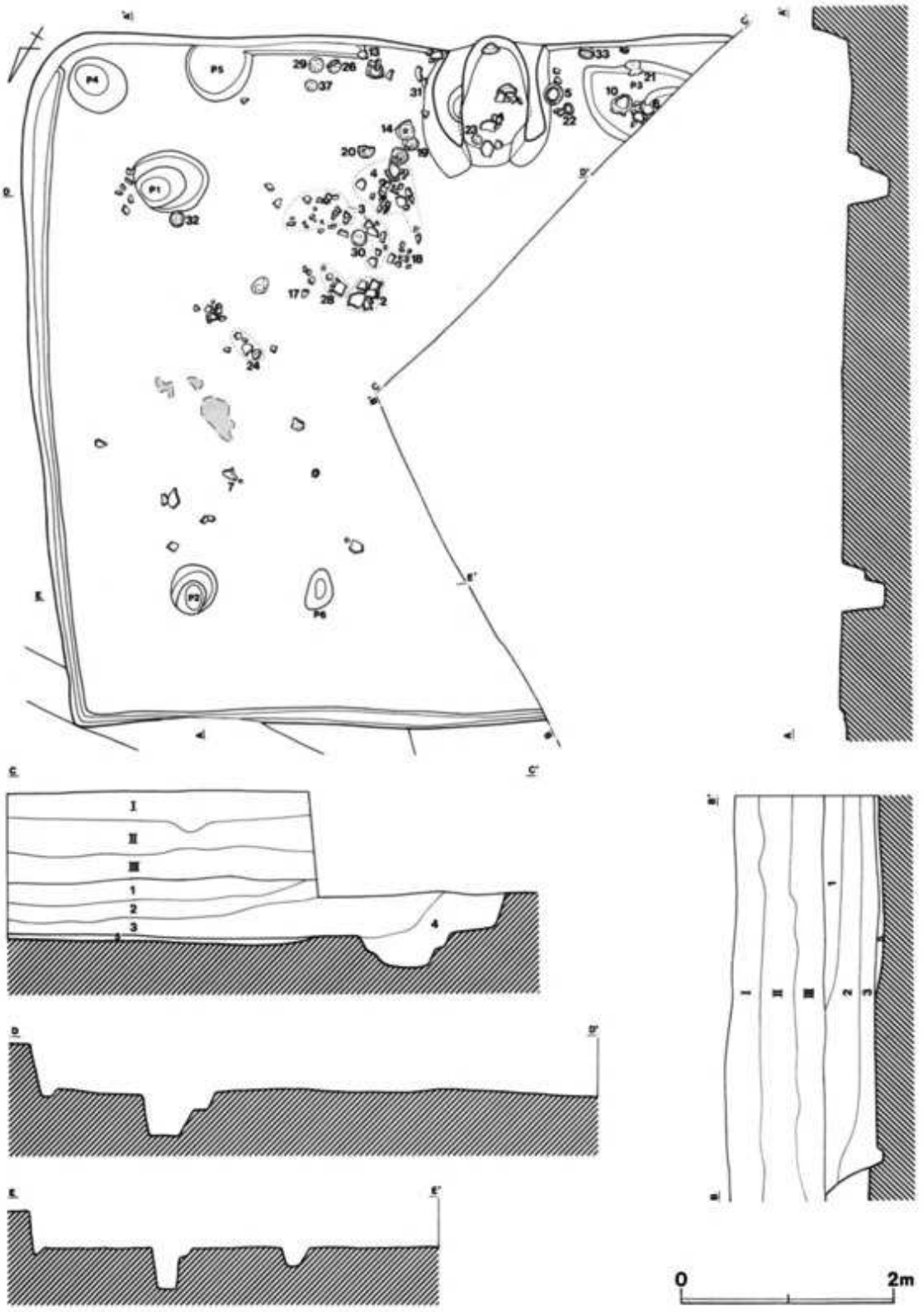
出土遺物は、土器が多量に出土している。これらの土器は、カマド及び貯蔵穴の中やその周辺の床面上から出土した本住居跡の廃棄に伴ってそのまま遺棄された和泉式後半のものと、住居廃絶後に住居中央部の覆土中に一括投棄された鬼高式初頭のものがある。土器以外では、覆土中より土玉（第55図）が1点出土している。



**第55図　土玉**

**第34号住居跡出土土器観察表**

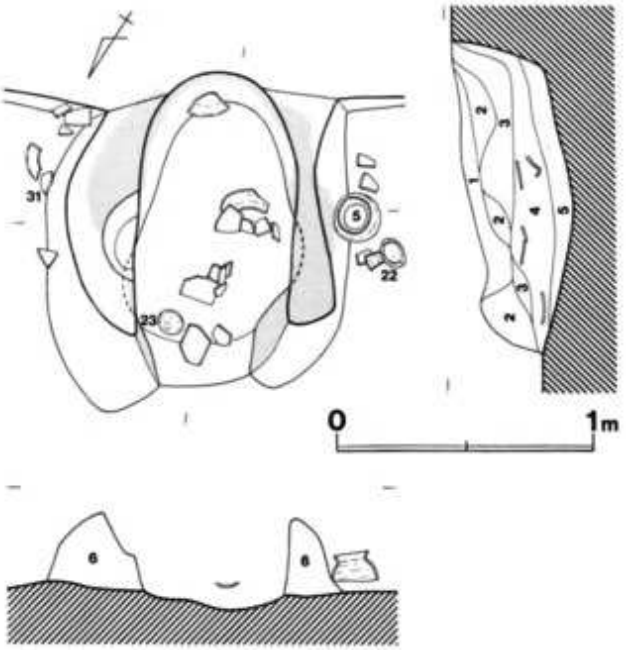
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺 | 残存高28.1<br>底径　9.8 | 粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、最大径を中位に有する。底部はやや突出する。 | 胴部外面ケズリの後上半ミガキ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 約2/3。<br>外面に黒斑あり。 |
| 2 | 甕 | 口径(17.0)<br>残存高25.0 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部はやや長胴ぎみである。 | 口縁部外面ヨコナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>外－橙褐色<br>内－淡橙褐色 | 約1/3。 |
| 3 | 甕 | 口縁部径<br>19.4cm<br>残存高<br>25.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は張り、最大径を中位に有する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 約2/3。<br>外面に格子状の刻線。 |
| 4 | 甕 | 口縁部径<br>17.6cm<br>残存高<br>22.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位に有する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後部分的なナデ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・黒色粒<br>内外－淡褐色 | 残存部ほぼ完形。<br>外面に煤の付着あり。 |




**第56図　第34号住居跡**

**第34号住居跡土層説明**

第1層：暗褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第4層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

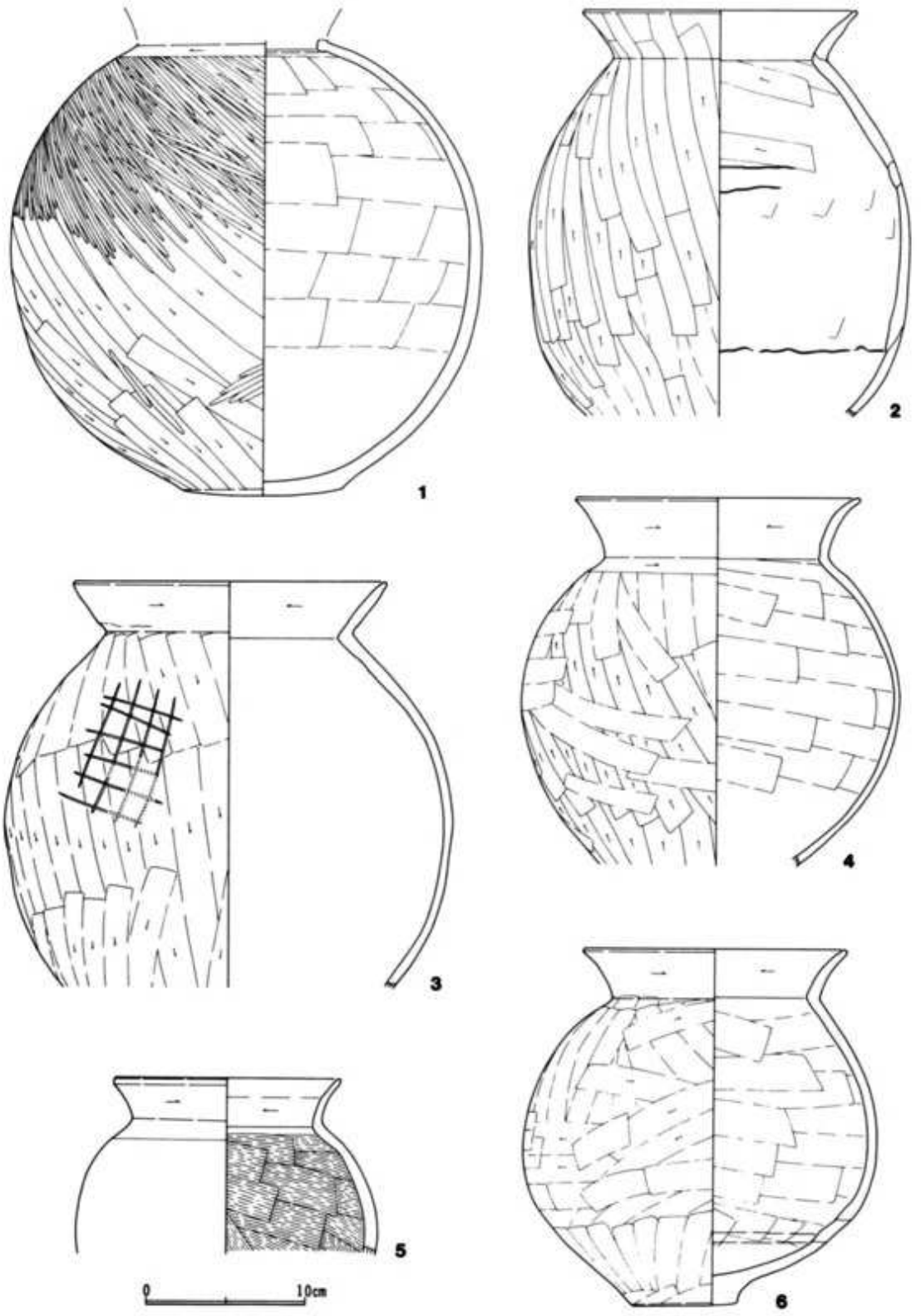



**第34号住居跡カマド土層説明**

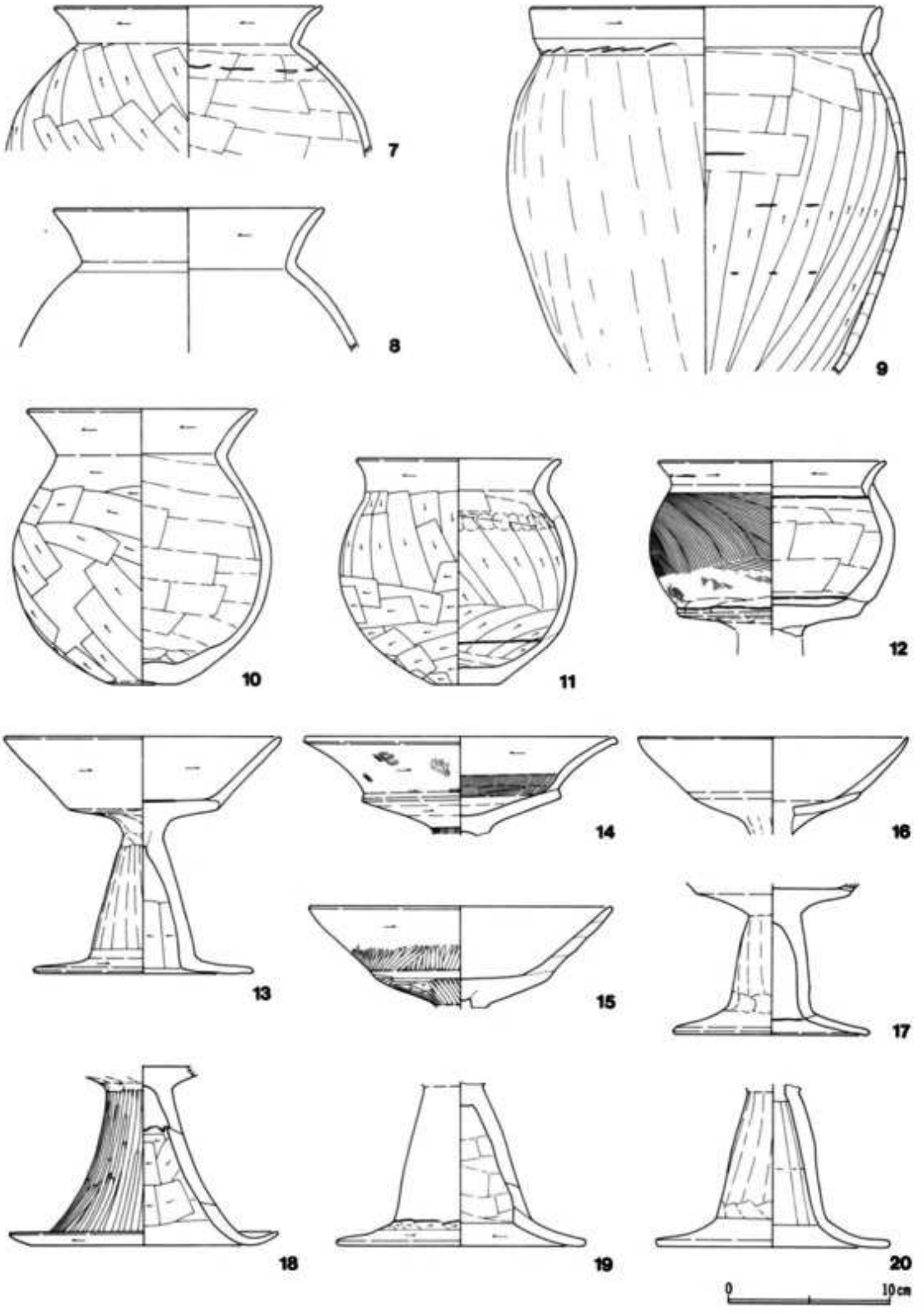
第1層：暗褐色土層（粘土粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第2層：淡黄褐色土層（粘土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量に、粘土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第4層：黒褐色土層（炭化粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：暗褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第6層：黄褐色土層（粘土ブロックを多量に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**第57図　第34号住居跡カマド**

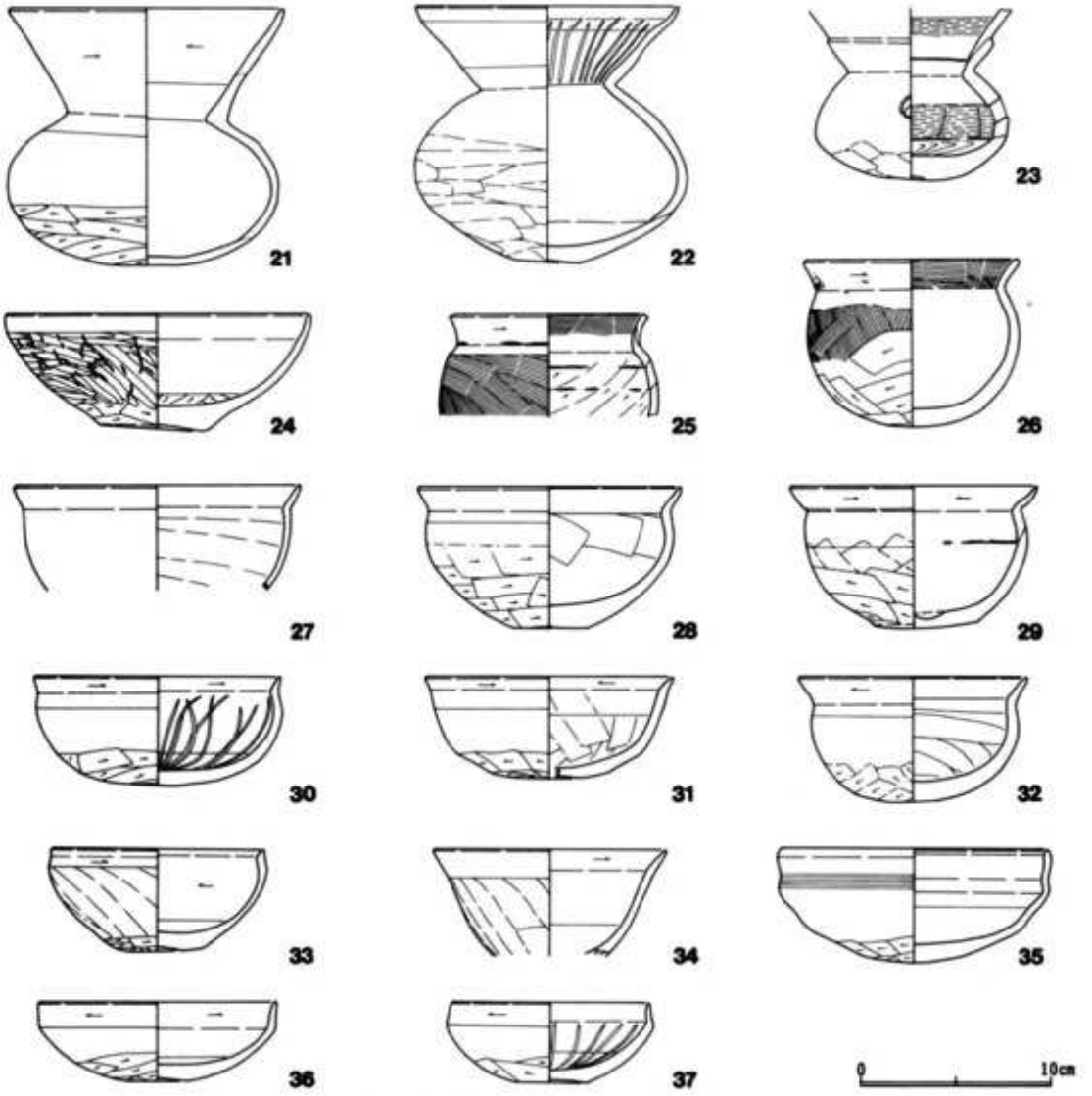
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 甕 | 口縁部径<br>14.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面丁寧なナデ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・黒色粒<br>白色粒<br>内外－茶褐色 | 残存部ほぼ完形。 |
| 6 | 甕 | 口径16.3<br>器高22.0<br>底径 6.6 | 輪積み成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径をやや下位にもつ。底部は突出する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面篦ナデ。底部外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－暗茶褐色<br>内－暗褐色 | 約3/4。<br>外面に煤の付着あり。 |
| 7 | 甕 | 口縁部径<br>(16.6cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部は張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後部分的なケズリ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－淡褐色<br>内－淡橙褐色 | 口縁部1/4。 |
| 8 | 甕 | 口縁部径<br>(16.8cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部は張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部は内外面ナデ。 | 白色粒<br>内外－明茶褐色 | 口縁部1/2。<br>外面に黒斑あり。 |
| 9 | 大形甕 | 口縁部径<br>21.8cm<br>残存高<br>22.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は肥厚して直立し、複合状を呈す。胴部はあまり張らず、最大径を上位に有す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後部分的に雑なケズリ、内面ケズリの後、上半篦ナデ。 | 赤色粒<br>内外－明茶褐色 | 約1/2。 |




**第58図　第34号住居跡出土土器(1)**




第59図　第34号住居跡出土土器（2）




**第60図　第34号住居跡出土土器（3）**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 小形甕 | 口径(14.2)<br>器高(17.0)<br>底径 4.4 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位に有す。底部の中央部は窪む。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ、内面指ナデ。 | 赤色粒・小石<br>外－淡橙褐色<br>内－淡茶褐色 | 約3/4。<br>胴部と底部は接合しない。器形は図上復元。外面煤の付着あり。 |
| 11 | 小形甕 | 口径12.7<br>器高13.9<br>底径 4.0 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位に有す。底部は小さな平底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ケズリの後上半ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・片岩粒<br>白色粒<br>外－淡橙褐色<br>内－淡茶褐色 | ほぼ完形。外面は二次焼成により荒れている。 |
| 12 | 台付鉢 | 口縁部径<br>14.0cm<br>残存高<br>10.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はあまり張らず、底部との境には稜を有する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ナデ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。 | 赤色粒・片岩粒<br>内外－暗橙褐色 | 鉢部ほぼ完形（脚部欠失）。 |

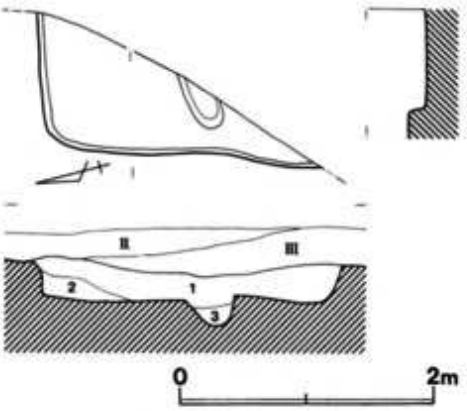
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | 高坏 | 口縁部径<br>(17.1cm)<br>器高<br>14.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。脚部は膨らみをもって広がり、脚端部は水平に開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。脚部外面ミガキの後ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 赤色粒・白色粒<br><br><br>内外－明茶褐色 | 約2/3。 |
| 14 | 高坏 | 口縁部径<br>19.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は平坦な面をもつ。 | 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。坏部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。 | 白色粒<br><br>内外－明茶褐色 | 坏部のみ。 |
| 15 | 高坏 | 口縁部径<br>18.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。 | 口縁部ヨコナデの後外面ミガキ、内面ナデ。坏部外面ケズリの後ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>片岩粒<br>内外－明茶褐色 | 坏部のみ。 |
| 16 | 高坏 | 口縁部径<br>16.7cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。 | 口縁部内外面ナデ。脚部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－橙褐色 | 坏部3/4。 |
| 17 | 高坏 | 残存高<br>9.3cm | 粘土紐巻き上げ成形。脚部は膨らみをもち、脚端部は直線的に開く。 | 脚部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 赤色粒・白色粒<br><br>内外－淡茶褐色 | 脚部のみ。 |
| 18 | 高坏 | 残存高<br>11.0cm | 粘土紐巻き上げ成形。脚部は緩やかに外反し、脚端部は反り返る。 | 脚部外面ケズリの後ミガキ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 赤色粒・白色粒<br><br>内外－明茶褐色 | 脚部1/2。 |
| 19 | 高坏 | 残存高<br>10.1cm | 粘土紐巻き上げ成形。脚部は膨らみをもって広がり、脚端部は緩やかに外反する。 | 脚部内外面ナデ。脚端部外面ケズリの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－淡褐色<br>内－明茶褐色 | 脚部のみ。 |
| 20 | 高坏 | 残存高<br>10.0cm | 粘土紐巻き上げ成形。脚部はやや膨らみをもって広がり、脚端部は外反する。 | 脚部外面ナデ,内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 赤色粒・白色粒<br><br>内外－淡褐色 | 脚部のみ。 |
| 21 | 小形壺 | 口縁部径<br>14.4cm<br>器高<br>13.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は偏平に強く張り、最大径を中位に有す。底部は丸底ぎみの小さな平底を呈す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半ナデ、外面下半ケズリ。内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br><br><br>外－明茶褐色<br>内－茶褐色 | ほぼ完形。<br><br>器表面はやや荒れている。 |
| 22 | 小形壺 | 口径13.8<br><br>器高13.4<br><br>底径 3.3 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は蛇行ぎみに外傾し、口唇部は短く上方に向く。胴部は偏平ぎみに強く張り、底部は小さな平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半ナデ、外面下半ケズリの後丁寧なナデ。内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br><br><br><br>内外－明茶褐色 | ほぼ完形。<br>内面放射状暗文あり。<br>口縁部外面に黒斑あり。 |
| 23 | 甕 | 残存高<br>8.9cm | 粘土紐輪積み成形。口縁部中位に段を有し、複合を呈する。胴部は強く張り、偏平を呈する。底部中央に小さな窪みを有する。 | 口縁部内外面ハケの後、ヨコナデ。胴部外面上半ナデ、下半ケズリの後ナデ。内面ハケの後、篦ナデ。 | 白色粒<br><br><br><br>内外－淡橙褐色 | 口唇部欠失。<br>頸部内面煤の付着あり。<br>胴部中位に焼成前穿孔。 |
| 24 | 埦 | 口径16.0<br>器高 6.5<br>底径 5.5 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は体部より内湾しながら開く。底部は突出する。 | 口縁部外面及び内面上半ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ。底部内面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－淡茶褐色<br>内－淡褐色 | 約2/3。<br>体部外面縦亀裂顕著。 |
| 25 | 鉢 | 口縁部径<br>(10.4cm) | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部に若干窪んだ平坦面を持つ。 | 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ハケ、内面篦ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－茶褐色<br>内－橙褐色 | 約1/2。<br>外面に煤の付着あり。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 26 | 鉢 | 口径11.4<br>器高 8.7 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、底部は丸底。 | 口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面上半ハケ、下半ケズリ。 | 白色粒<br>内外－橙褐色 | 完形。 |
| 27 | 壺 | 口縁部径<br>(15.0cm) | 口縁部は直線的に短く外傾する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－橙褐色 | 口縁部1/3<br>破片。 |
| 28 | 壺 | 口径(13.8)<br>器高 7.4<br>底径 3.8 | 口縁部は若干内湾ぎみに短く外傾する。体部は深く、底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後上半ナデ。内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内－赤橙褐色<br>外－橙褐色 | 約3/4。 |
| 29 | 壺 | 口径13.0<br>器高 7.5<br>底径 5.3 | 口縁部は内湾ぎみに短く外傾する。体部は深く、底部は平底を呈する | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後上半ナデ。内面ナデ。 | 白色粒<br>内外－赤茶褐色 | 完形。 |
| 30 | 壺 | 口径12.9<br>器高 5.7 | 口縁部は短く外傾する。体部は比較的浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部外面及び体部内面ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | ほぼ完形。<br>内面放射状<br>暗文あり。 |
| 31 | 壺 | 口径(13.0)<br>器高 5.3 | 口縁部は短く外傾する。体部は比較的浅く、底部は若干上げ底ぎみの平底を呈す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半ケズリ。体部内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗橙褐色 | 口縁部1/4。 |
| 32 | 壺 | 口径12.0<br>器高 6.5<br>底径 2.6 | 口縁部は短く外傾する。体部は深く、底部は小さな平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半ケズリ。体部内面指ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－橙褐色 | ほぼ完形。 |
| 33 | 壺 | 口径11.1<br>器高 5.3<br>底径 4.5 | 口縁部は短く内湾ぎみに立ち、口唇部内面に平坦面を持つ。体部は浅く、底部は上げ底ぎみの平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半ケズリ。体部内面ナデ。底部外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－明茶褐色 | 完形。 |
| 34 | 壺 | 口縁部径<br>(12.2cm) | 口縁部は短く若干外傾する。体部はやや深い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 口縁部1/3。 |
| 35 | 坏 | 口径13.9<br>器高 6.0 | 口縁部は蛇行しながら直立する。体部は比較的深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデの後外面ハケ。体部外面上半ナデ、下半ケズリ。体部ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－茶褐色 | 約2/3。 |
| 36 | 坏 | 口径(12.4)<br>器高 4.2<br>底径 3.2 | 口縁部は短く直線的に直立する。体部は浅く、底部は上げ底ぎみの平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半ケズリ。内面ナデ。 | 赤色粒・黒色粒<br>外－淡褐色<br>内－淡橙褐色 | 約1/3。<br>内面斑点状<br>剥落顕著。 |
| 37 | 坏 | 口径10.3<br>器高 4.2<br>底径 3.7 | 口縁部は短く直線的に内傾する。体部は浅く、底部は上げ底ぎみの平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半ケズリ。内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | ほぼ完形。<br>内面放射状<br>暗文あり。 |
| 38 | 土玉 | 長さ 1.9<br>幅 1.7 | 側面・断面とも楕円形を呈する。 | 表面はナデ。穿孔は焼成前で、片面穿孔。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗茶褐色 | 完形。<br>穿孔径0.4cm |

**第35号住居跡（第61図）**

調査区の南東側に位置する。住居跡の北西コーナー部を第1号溝跡に切られている。調査区内で検出されたのは、住居西側の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

壁は、直線的に立ち上がり、確認面からの深さは10cm～35cmある。壁溝は伴わない。床面は、掘り方を伴わない直床式で、やや緩やかな起伏がある。住居内より不定形のピットが1箇所検出されているが、その性格は不明である。出土遺物は、鬼高式の土器片が少量出土しただけである。




**第35号住居跡土層説明**

第１層：黒色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第３層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

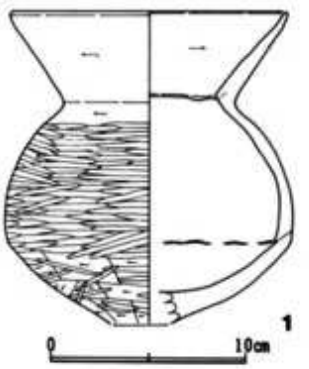
**第61図　第35号住居跡**

**第36号住居跡（第63図）**

調査区の北西端に位置する。住居跡の南西側を第37号住居跡と第２号溝跡によって切られている。調査区内で検出されたのは、住居の南東側の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

壁は、直線的に立ち上がり、確認面からの深さは10cm～15cmある。床面は、部分的に暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に堅緻で平坦であるが、若干緩やかな起伏が見られる。住居内からはピットが２箇所（Ｐ１・Ｐ２）検出されているが、その性格は不明である。

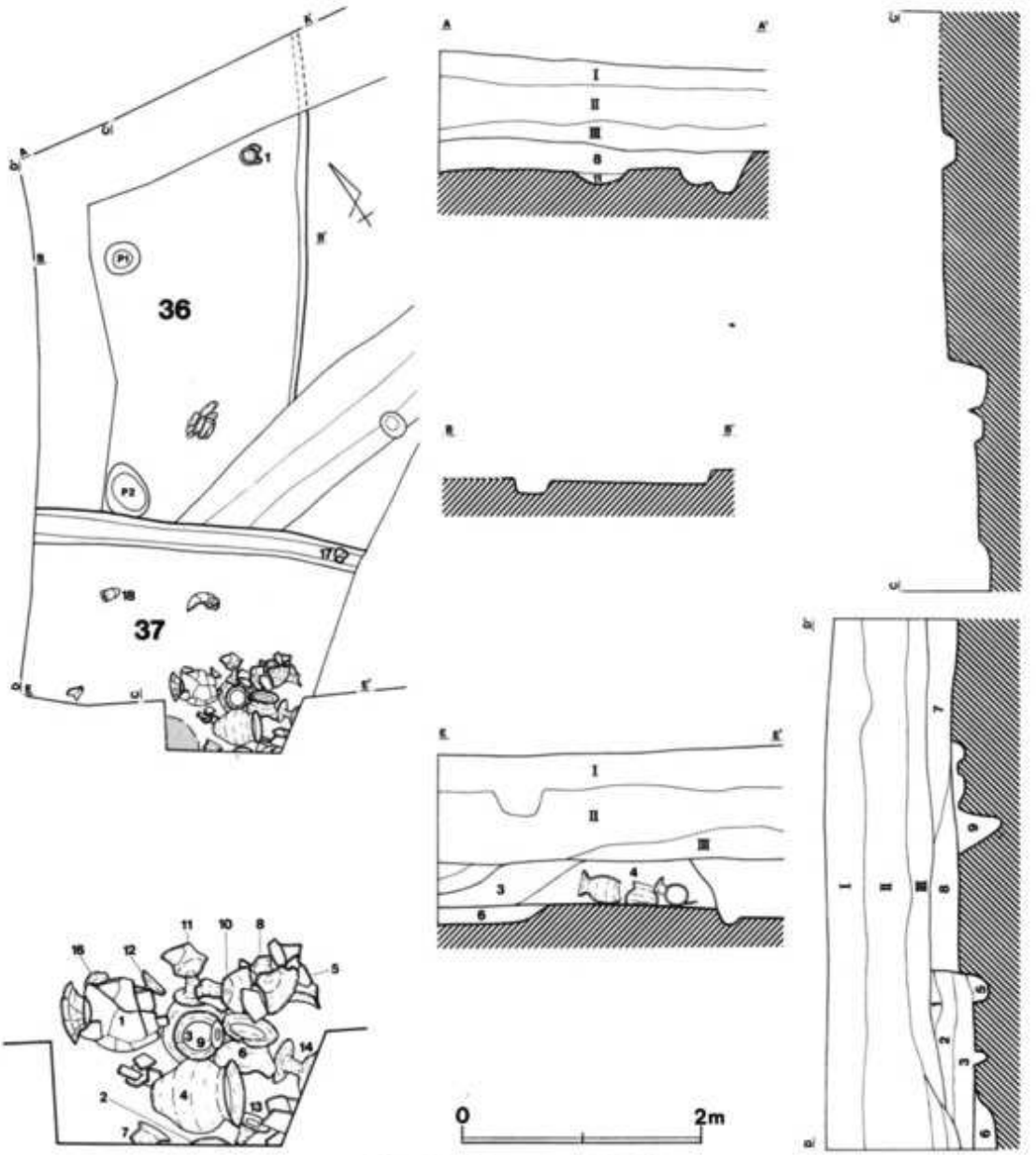
出土遺物は、住居北東側の床面上より小形壷が１個体出土している。この他では、住居南側の床面上に15cm～20cmの偏平な棒状の片岩が方向を揃えて８個重なって出土している。これらの集石は、いわゆる「編物石」と呼ばれるものに類似するが、その性格や用途について検討を要する。




**第62図　第36号住居跡出土土器**

**第36号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小形壷 | 口縁部径（14.2cm）<br>器高 15.9cm | 粘土紐輪積み成形。口縁部直線的に外傾し、口唇部はやや上方に向く。胴部は張り、最大径を下位に有する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後雑なミガキ、内面ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>外－茶褐色<br>内－淡褐色 | 約2/3。<br>胴部外面に黒斑あり。 |




**第63図　第36・37号住居跡**

**第36・37号住居跡土層説明**

第1層：暗茶褐色土層（焼土粒子を多量に、ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第3層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第6層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
第7層：暗褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第8層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第9層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

**第37号住居跡（第63図）**

調査区の北西端に位置する。住居跡の北側上面を第２号溝跡に、東側を第34号住居跡によって切られている。調査区内で検出されたのは、住居の北東側の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

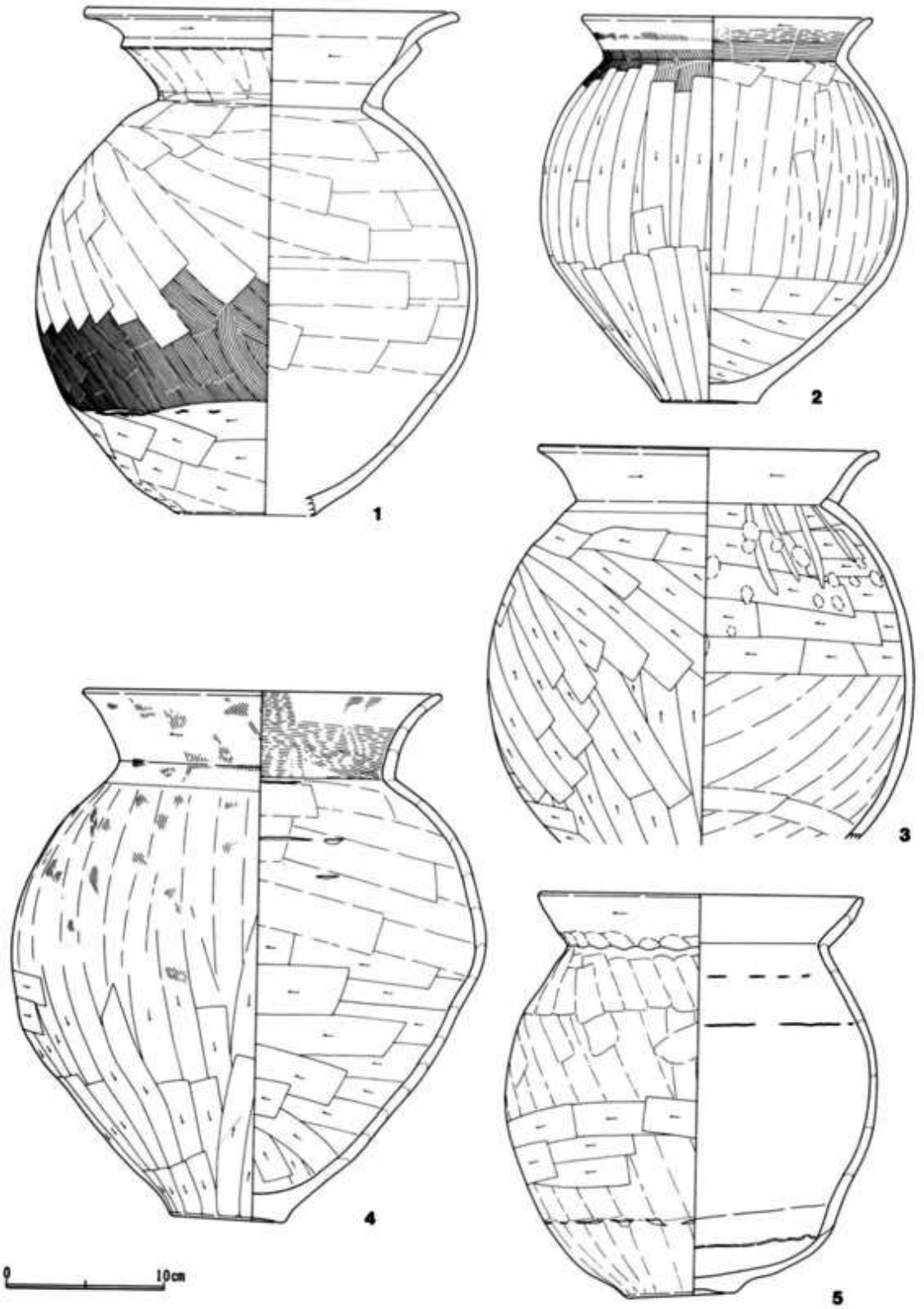
壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。調査区内で唯一検出された住居の北東側壁下には、幅20cmの壁溝が巡っている。床面は、部分的に黒褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に堅緻で平坦である。

炉は、大部分が調査区外にあるため、その全容は不明である。調査区内で検出した部分では、掘り込みをもたない地床炉のようであり、赤褐色に非常に良く焼けて硬化している。

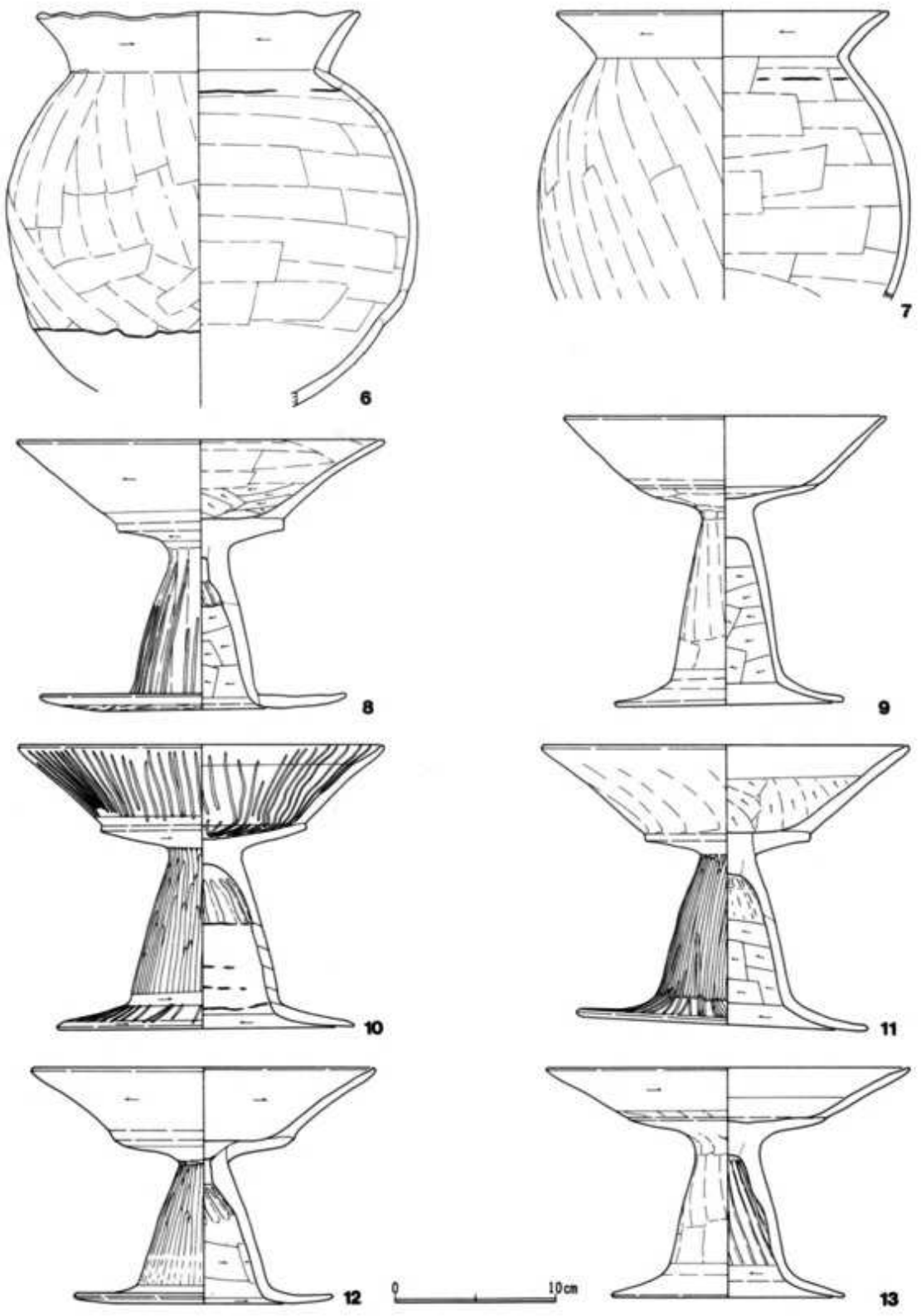
出土遺物は、炉の西側の床面上に壷・甕・高坏が多量に密集した状態で出土している。この他に注目されるものとして、床面よりやや浮いた状態で羽口(No18)が１点出土している。これは、本住居跡には鉄屑などがまったく見られないことから、おそらく本住居跡で使用されていたものではなく、本住居跡が廃絶された後に覆土中に投棄されたものと考えられる。

**第37号住居跡出土遺物観察表**

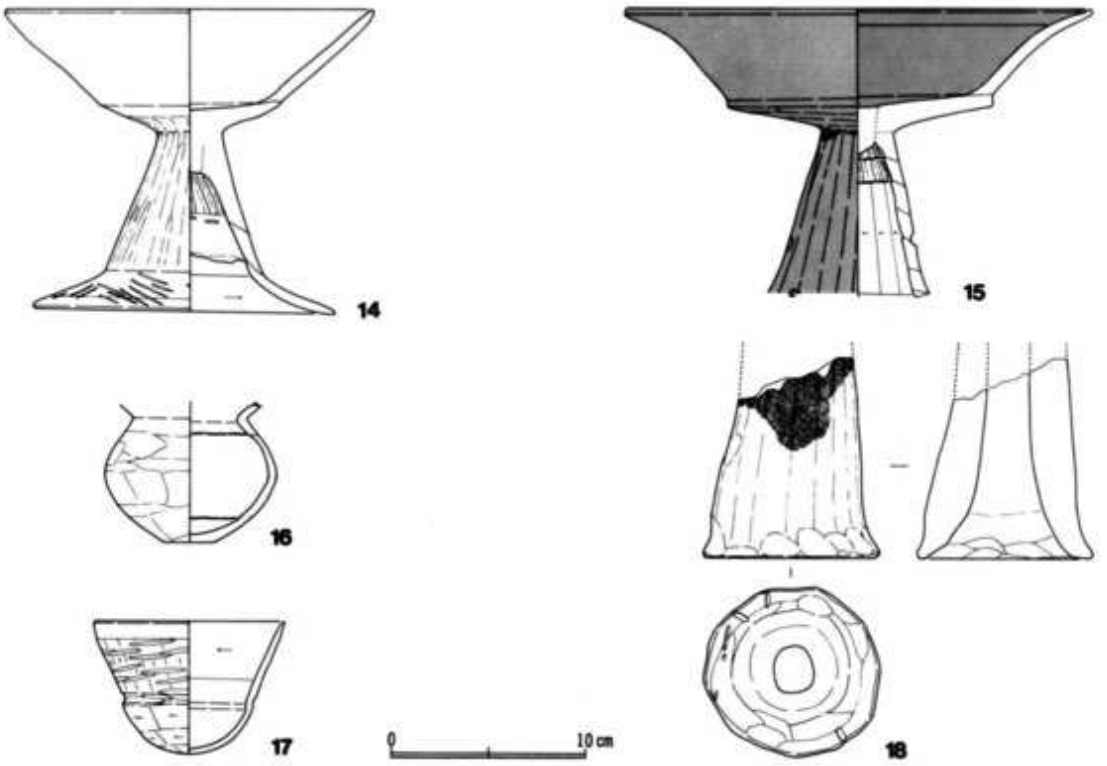
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壷 | 口縁部径 23.4cm<br>器高 31.4cm<br>底部径 ( 8.6cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は二重口縁を呈し、強く外反する。胴部は強く張り、最大径を中位に有する。底部はあまり突出しない平底を呈する。 | 口縁部外面上半ヨコナデ、下半篦ナデ。口縁部内面ヨコナデ。胴部外面ハケの後篦ナデ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>外上半－茶褐色<br>外下半－暗褐色<br>内－暗褐色 | ほぼ完形(底部欠失)。<br>外面に煤の付着・黒斑あり。 |
| 2 | 甕 | 口径18.2<br>器高24.0<br>底径 6.0 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部は強く張る。底部は若干突出する平底を呈する。 | 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケの後ケズリ、内面ケズリの後上半ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－淡褐色 | ほぼ完形。 |
| 3 | 甕 | 口縁部径 21.3cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は強く外反する。胴部は張り、最大径を中位に有す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後上半ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 胴部下半欠失。<br>胴部内面上半指頭圧痕。 |
| 4 | 甕 | 口径22.4<br>器高33.0<br>底径 7.1 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を上半に持つ。底部はやや突出し、上げ底風の平底を呈する。 | 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケの後上半ナデ、下半ケズリ。胴部内面上半篦ナデ、下半ケズリ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>外－暗褐色<br>内－淡褐色 | ほぼ完形。<br>器形はやや歪んでいる。 |
| 5 | 甕 | 口径20.0<br>器高25.1<br>底径 6.6 | 粘土紐輪積み成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部はやや張り、最大径を中位に持つ。底部はは突出し、上げ底風の平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面篦ナデの後中位に部分的なケズリを加える。胴部内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－明茶褐色 | 約3/4。<br>外面に黒斑あり。 |
| 6 | 甕 | 口縁部径 20.0cm | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は強く張り、球胴を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面上半篦ナデ、下半ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－明茶褐色<br>内－暗褐色 | 底部欠失。<br>外面に黒斑あり。 |
| 7 | 甕 | 口縁部径 (20.6cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は強く張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面篦ナデ。 | 白色粒<br>内外－淡褐色 | 約1/2。 |




第64図　第37号住居跡出土土器(1)




**第65図　第37号住居跡出土土器（2）**




第66図　第37号住居跡出土土器(３)

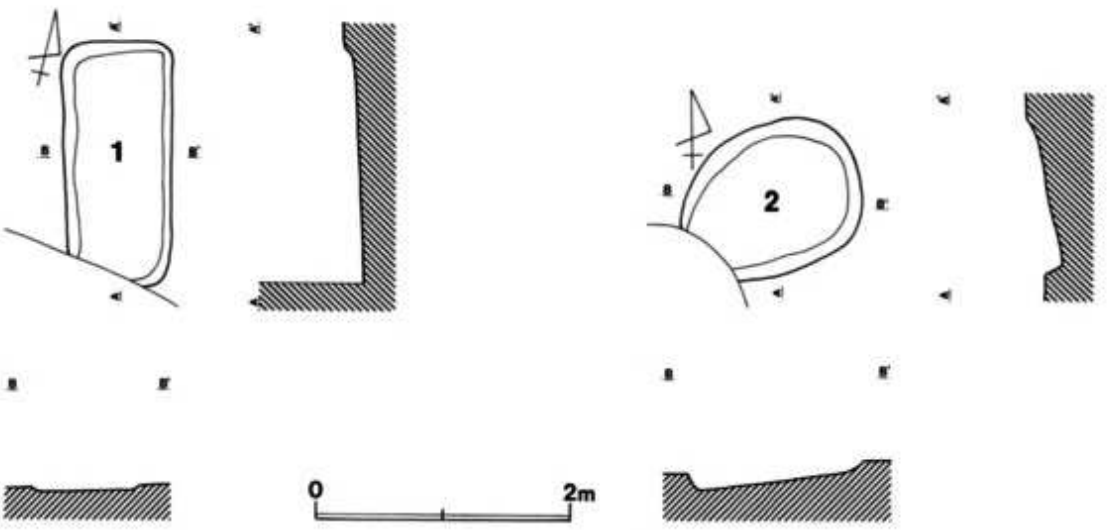
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 高坏 | 口縁部径 22.8cm<br>器高 16.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに開く。脚部は膨らみ、脚端部は水平方向に開く。 | 口縁部外面ヨコナデ、内面ケズリの後篦ナデ。脚部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 約4/5。<br>脚部外面縦方向の暗文。 |
| 9 | 高坏 | 口縁部径 20.0cm<br>器高 18.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。脚部は比較的長く、脚端部は外反ぎみに開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。脚部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－橙褐色 | ほぼ完形。 |
| 10 | 高坏 | 口縁部径 22.6cm<br>器高 17.7cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに開き、口唇部はやや内湾する。脚部は太く、脚端部は強く開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ナデ。脚部外面ミガキ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | ほぼ完形。<br>坏部内外面<br>脚端部外面<br>暗文あり。 |
| 11 | 高坏 | 口縁部径 22.7cm<br>器高 17.7cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に開く。脚部は太く、脚端部は外反ぎみに強く開く。 | 口縁部内外面ケズリの後ヨコナデ。脚部外面ケズリの後ミガキ、内面後ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 口縁部1/4<br>欠損。 |
| 12 | 高坏 | 口縁部径 21.4cm<br>器高 14.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや外反ぎみに開く。脚部は太く、脚端部は外反ぎみに水平方向に開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ナデ。脚部外面ミガキ、内面ナデの後ケズリ。脚端部分内外面ヨコナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 坏部3/4、脚部1/2。<br>脚端部に黒斑あり。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | 高坏 | 口縁部径 (22.6cm) 器高 14.2cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に強く外傾する。脚部は太く膨らみ、脚端部は直線的に開く。 | 口縁部内外面ナデの後ヨコナデ。坏部外面ナデ。脚部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | 約2/3。 |
| 14 | 高坏 | 口縁部径 18.9cm 器高 15.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に開く。脚部は太く開き、脚端部はやや外反ぎみに開く。 | 口縁部内外面ナデ。脚部外面ミガキ、内面ナデ。脚端部ヨコナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | ほぼ完形。脚端部外面に不規則な刻線あり。 |
| 15 | 高坏 | 口縁部径 24.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反しながら開く。脚部は太く、中位に穿孔痕。 | 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ナデ。脚部外面ナデ、内面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－明茶褐色<br>内－淡茶褐色 | 約1/2。<br>全面赤彩。 |
| 16 | 小形丸底壷 | 残存高7.2<br>底径 2.4 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は強く外傾する。体部は張り、底部は小さな平底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | 約1/2。外面に黒斑あり。 |
| 17 | 小形丸底壷 | 口縁部径 9.8cm 器高 6.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。体部は張らずに浅く、丸底を呈する。 | 口縁部外面ケズリの後ミガキ、上端部及び内面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | ほぼ完形。 |
| 18 | 羽口 | 口径 9.0<br>残存高10.2 | 粘土紐積み上げ成形。端部は「ハ」の字状に開き、先端部は薄くなる。 | 先端部外面指押さえ、内面指ナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－茶褐色 | 内面赤色化、外面暗灰色化。 |

## 2．土　壙

### 第1号土壙（第67図）

調査区の南端に位置する。土壙の南側上面を第1号溝跡によって切られている。平面形は、比較的整った長方形を呈している。規模は、南北方向1.87m、東西方向0.83mを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cm前後ある。底面は、全体的に平坦であるが、南側に向かって




第67図　土　壙

緩やかに傾斜している。覆土は、白色粒子とローム粒子を微量含む黒褐色土である。出土遺物がまったくないため、本土壙の時期や性格は明確にできないが、第２号溝跡に切られていることから、古墳時代後期以前のものであることが解る。

**第２号土壙（第67図）**

調査区中央部の南東側寄りに位置する。土壙の南東側上面を第１号溝跡に、南西側の一部を倒木痕によって切られている。平面形は、やや楕円形に近い不整円形を呈している。規模は、北西～南東方向1.12m、北東～南西方向は1.44mまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。底面は、全体的に平坦であるが緩やかな起伏が見られ、南西側に向かって傾斜している。覆土は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土である。第１号土壙と同じく、出土遺物がまったくないため、本土壙の時期や性格は明確にできないが、第２号溝跡に切られていることから、古墳時代後期以前のものであることが解る。

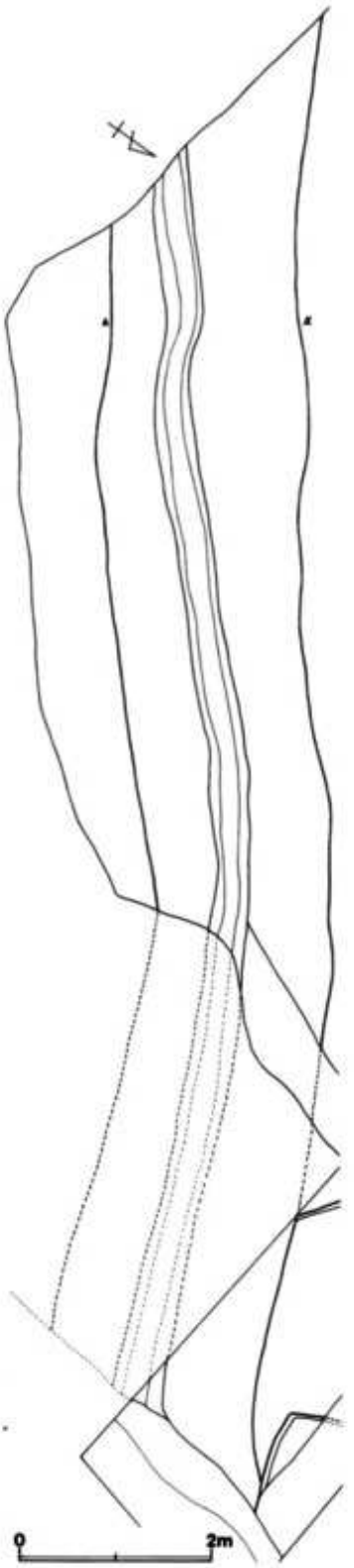
## ３．溝　跡

**第１号溝跡（第68図）**

調査区の南側から東端にかけて位置する。和泉期の第28号住居跡や鬼高期の第27号住居跡及び第35号住居跡を切り、調査区東端で現在の水路によって切られている。調査区内では南西から北東に向かって若干蛇行する流路を取っているが、南側の調査区外ではその流路を南に変える。

**第１号溝跡土層説明**

第１層：灰褐色土層（細砂を均一に、小石・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗灰色土層（小石を多量含む。粘性・しまりともない。）
第３層：暗褐色土層（細砂・小石を多量含む。粘性・しまりともない。）
第４層：灰褐色土層（細砂を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第５層：灰褐色土層（細砂を多量含む。粘性・しまりともない。）
第６層：暗灰色土層（細砂を多量に、ローム粒子・小石を微量含む。粘性・しまりともない。）
第７層：淡褐色土層（細砂を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第８層：暗褐色土層（マンガン塊・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

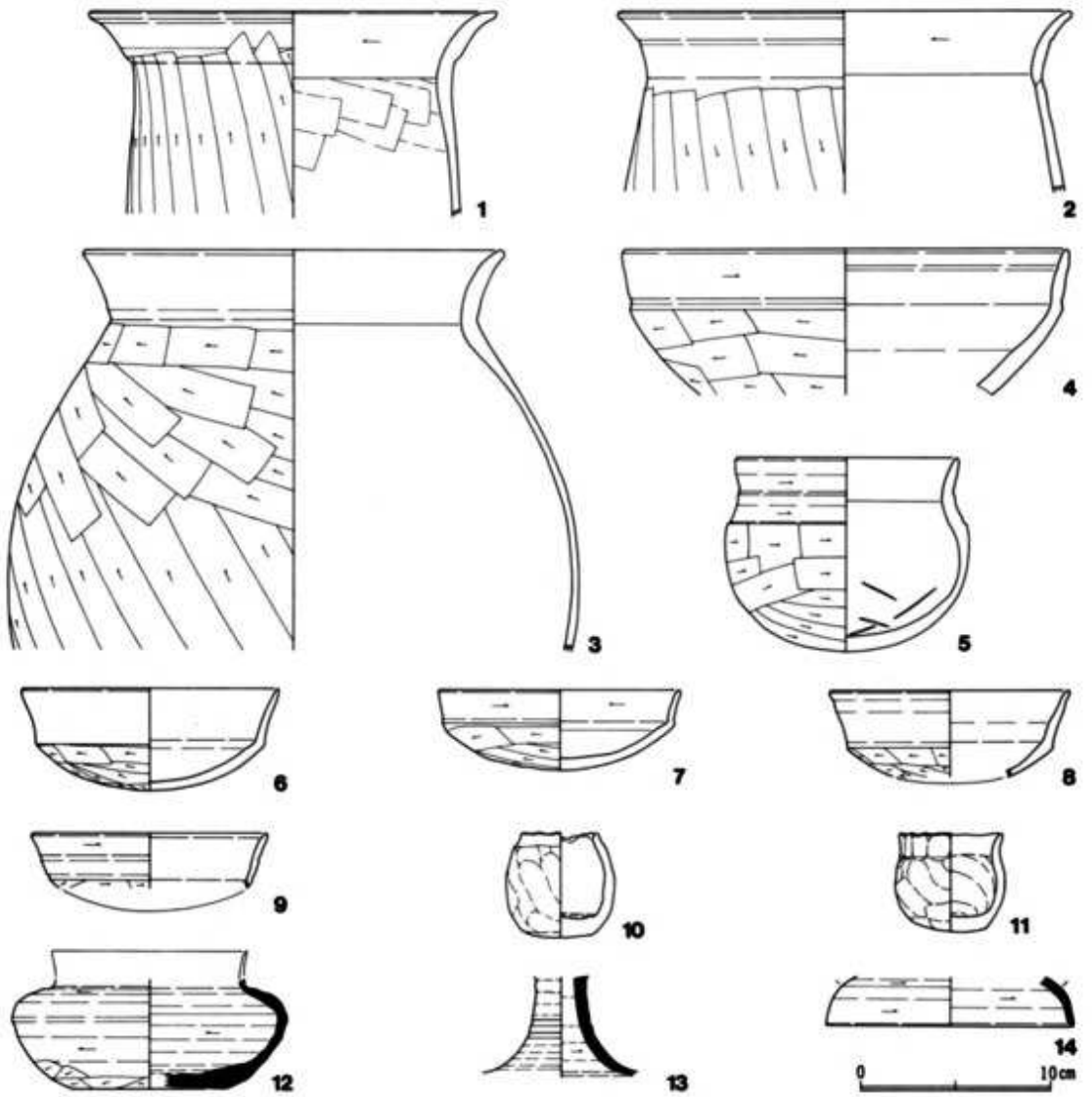



**第68図　第１号溝跡**

規模は、上幅がほぼ２ｍと均一の形態を呈し、確認面からの深さは70cmを測る。断面の形態は、溝の南東側壁が比較的急に内湾して立ち上がるのに対して、反対側の北西側壁は緩やかに内湾しながら立ち上がる。溝の中央部は、幅40cm弱のほぼ均一で底面が平坦な溝のように深くなっており、集水的な構造になっている。

覆土中には細砂粒や小石が顕著に見られ、かなり頻繁に水が流れていたことが伺え、幹線水路的な役割をもった溝であったと推測される。しかしながら、溝の掘り返しの痕跡が見られないことから、溝の管理はそれほど行われていなかったようであり、流水によって運ばれた砂や小石の堆積によって次第に埋没していったようである。

出土遺物は、覆土中より鬼高式を主体とする多量の土器片が出土している。本溝跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。



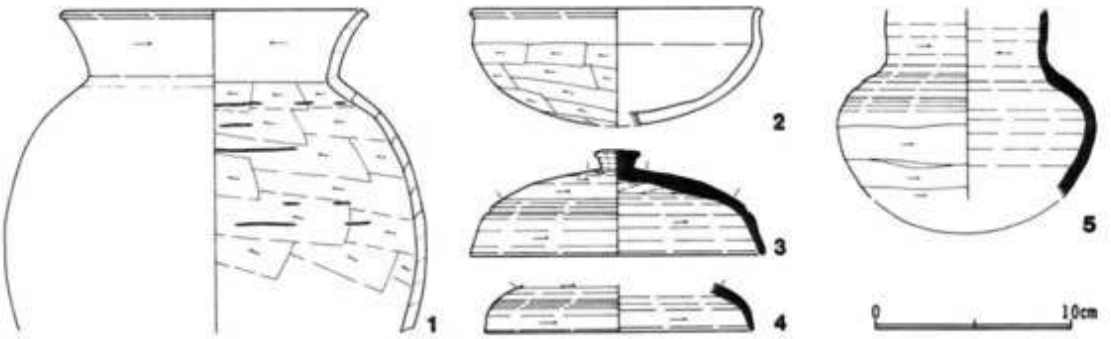

**第69図　第１号溝跡出土土器**

**第1号溝跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(21.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らない。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半篦ナデ、下半ナデ | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－淡黄褐色 | 口縁部1/4。 |
| 2 | 甕 | 口縁部径<br>(23.8cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らない。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－暗茶褐色<br>内－明茶褐色 | 口縁部1/4。 |
| 3 | 甕 | 口縁部径<br>22.1cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 約1/3。 |
| 4 | 鉢 | 口縁部径<br>(23.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は若干外傾する。体部は深く、器肉は厚い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－淡橙褐色 | 口縁部1/3。 |
| 5 | 鉢 | 口径11.7<br>器高10.2 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内傾し上半は外反する。体部は浅く丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・黒色粒<br>白色粒<br>内外－橙褐色 | 約3/4。 |
| 6 | 坏 | 口径13.5<br>器高 5.4 | 口縁部はやや長く、緩やかに外反する。体部は浅く、丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | ほぼ完形。 |
| 7 | 坏 | 口径12.8<br>器高 4.2 | 口縁部はやや短く、緩やかに外反する。体部は浅く、丸底を呈する。 | 口縁部外面ヨコナデ、内面軟質刷毛状工具によるヨコナデ。体部外面ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 完形。 |
| 8 | 坏 | 口縁部径<br>(12.6cm) | 口縁部はやや長く、緩やかに外反する。体部は浅く、丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・黒色粒<br>内外－橙褐色 | 約1/3。 |
| 9 | 坏 | 口縁部径<br>12.4cm | 口縁部は緩やかに外反する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。 | 白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 口縁部のみ。 |
| 10 | 手捏 | 口径( 4.0)<br>器高 5.5<br>底径 3.5 | 手捏成形。口縁部は短く内傾する。胴部はやや張り、底部は平底を呈する。 | 口縁部外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>片岩粒<br>内外－暗茶褐色 | 約2/3。 |
| 11 | 手捏 | 口径 5.4<br>器高 5.2 | 手捏成形。口縁部は短く緩やかに外反する。胴部はやや張り、底部は丸底ぎみ。 | 口縁部外面指押さえの後ヨコナデ、内面ナデ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | ほぼ完形。<br>外面に黒斑あり。 |
| 12 | 須恵器<br>広口短頸壷 | 残存高 5.7<br>底径( 8.0) | 胴部は低く、強く張る偏平ぎみの器形をなし、底部は広い平底を呈する。 | 胴部内外面回転ナデ。底部外面手持ち篦ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗灰色 | 約1/2。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 13 | 須恵器<br>高坏 | | 脚部は比較的細く、脚端部に向かって緩やかに外反する。器肉は薄い。 | 脚部内外面回転ナデ。 | 白色粒<br>内外－暗灰褐色 | 脚部のみ。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 14 | 須恵器<br>坏蓋 | 口縁部径<br>(13.0cm) | 口縁部は直線的に外傾する。 | 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転篦ケズリ。 | 白色粒<br>内外－淡灰色 | 口縁部1/5。 |

**第２号溝跡**

調査区の北側に位置する。重複する古墳時代の住居跡を切り、ほぼ東西方向に向いて直線的な流路をとる。規模は、上幅が50cm～75cmあり、確認面からの深さは30cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。出土遺物はないが、覆土中にＡ軽石を含むことから、本溝跡の時期は近世後半以降と考えられる。




**第70図　梅沢遺跡調査区外出土土器**

**遺構外出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径 15.8cm<br>残存高 16.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部に平坦面を持つ。胴部は張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面丁寧なナデ。内面ケズリ状の強いナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 1/2。<br>外面に黒斑あり。 |
| 2 | 坏 | 口径 19.4<br>器高( 6.0) | 口縁部は短く直立し、口唇部は若干外傾する。体部はやや深く、丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡褐色 | 1/2。<br>器形はやや歪んでいる。 |
| 3 | 須恵器<br>坏　蓋 | 口径(15.1)<br>器高　5.4 | 口縁部は直線的に外傾する。天井部は低く、つまみ部は小さくやや偏平ぎみである。 | 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転篦ケズリ、内面一定方向のナデ。 | 白色粒<br>内外－淡灰色 | 約1/4。<br>ロクロ回転右回り。 |
| 4 | 須恵器<br>坏　蓋 | 口縁部径<br>(13.8cm) | 口縁部は短く直線的に外傾する。 | 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転篦ケズリ。 | 白色粒<br>内外－淡白色 | 口縁部1/8。 |
| 5 | 須恵器<br>壺 | | 頸部は直立する。胴部は張り、最大径を上半に持つ。 | 内外面回転ナデ。胴部外面下半回転篦ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>外－暗灰色 | 1/4。 |

第71図　東牧西分遺跡調査位置図

# 第Ⅶ章　東牧西分遺跡の発掘調査

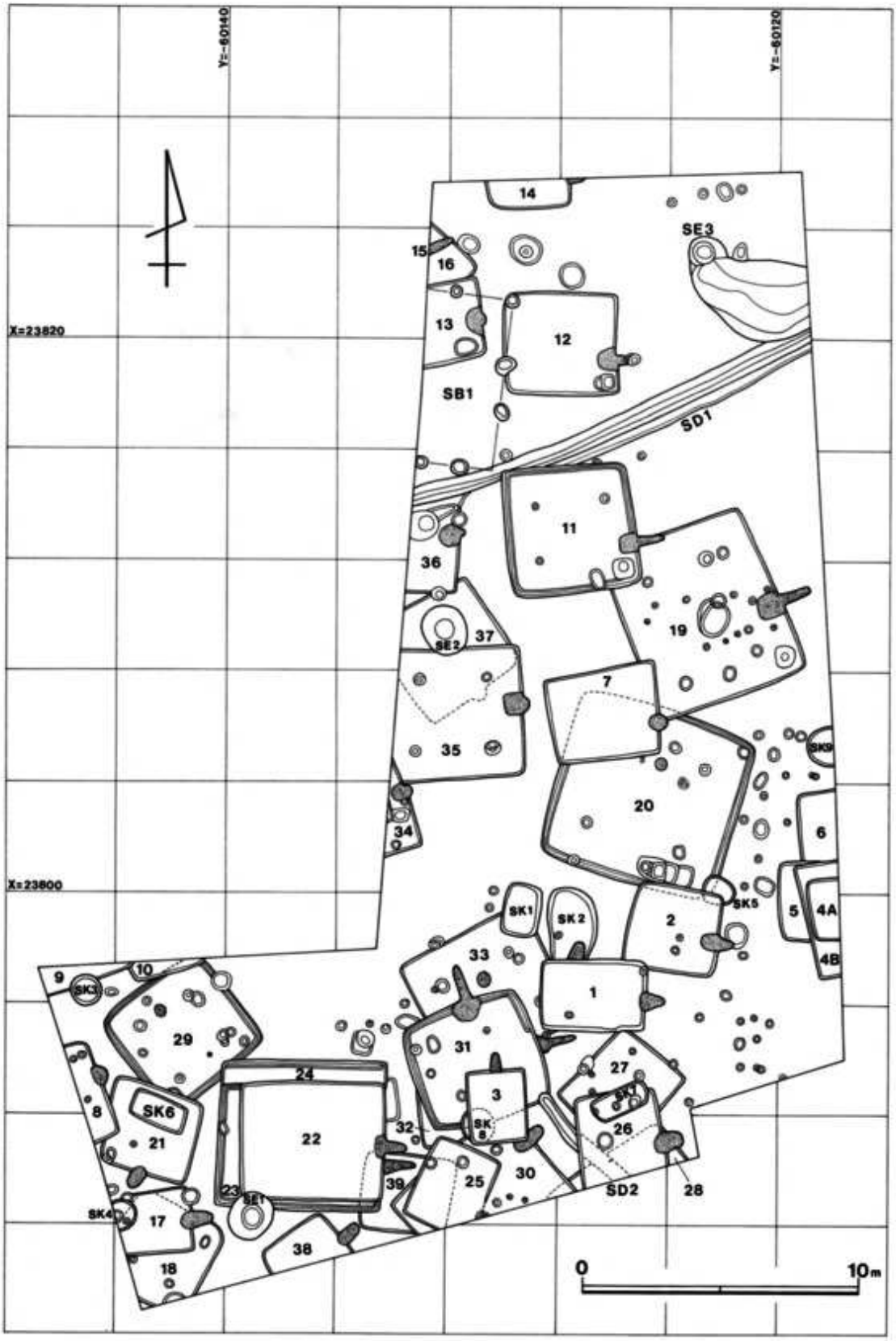
## 第１節　遺跡の概要

本遺跡は、児玉町大字高関字東牧西分から大字下浅見字柳町にかけて所在する、古墳時代～平安時代にわたる集落跡である。本遺跡の北側約100mには第Ⅵ章で述べた梅沢遺跡があり、東側約400mには第Ⅲ章で述べた飯玉東遺跡が位置している。

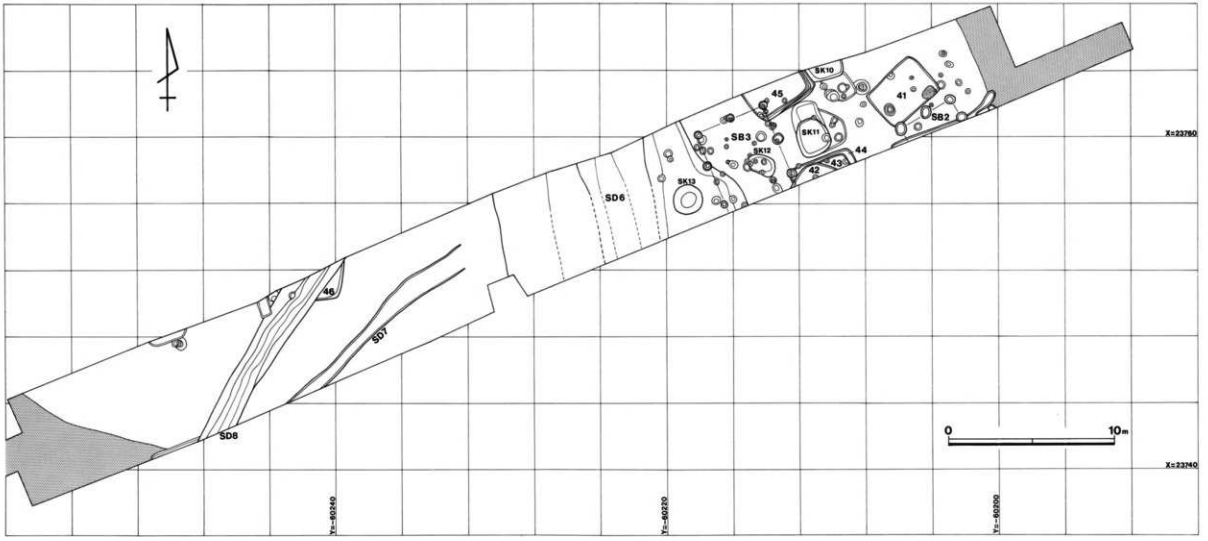
今回調査した本遺跡のA・B・C地点は、標高70mの東西方向に延びる比較的広い自然堤防上の中央部から東側に位置している。本遺跡の立地するこの自然堤防は、ほとんどがすでに水田化されており、その耕作による削平が著しいため、検出された遺構も遺存状態があまり良好とは言えないものが大半を占めている。そのため本遺跡では、すでに耕作によって削平された遺構もかなりあるのではないかと推測される。その中でA地点だけは、唯一畑として利用されていたため、他の地点に比べて遺構の遺存状態がやや良好であり、自然堤防の東端部であるにもかかわらず、当初の予想を遥かに上回る数の遺構が高い密度で検出されている。

A・B・C地点で検出された遺構は、住居跡47軒・掘立柱建物跡３棟・井戸跡３基・土壙13基・溝跡８条である。これらの遺構の大半は、古墳時代～平安時代に属すると考えられるものであり、５世紀後半と８世紀前半に欠落する時期が見られるものの、比較的継続性のある集落跡と思われる。

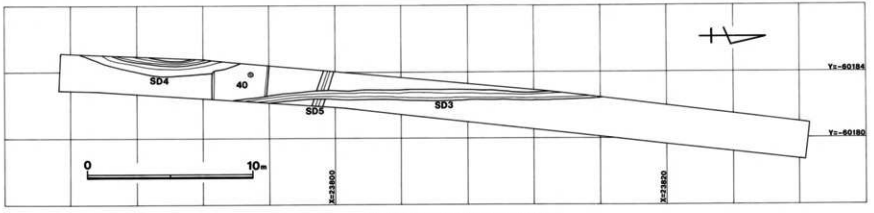
五領期の遺構は、住居跡８軒と溝跡１条(第６号溝跡)である。該期の住居跡は、他時期の住居跡に比べて掘り込みが深く、焼失住居が多く見られるのが特徴である。形態は方形を呈するものが多く、大型や小型など一般的な住居跡とは異なった規模を有するものもある。第６号溝跡は、C地点の谷状地形を利用したもので、比較的規模が大きく排水的な水路と考えられるものである。和泉期の遺構は、住居跡２軒と土壙１基(第13号土壙)である。第33号住居跡は炉をもつが、第41号住居跡にはカマドが付設されており、当地方における出現期のカマドとして注目される。鬼高期の遺構は、住居跡６軒と溝跡２条であり、いずれも鬼高期の後半～終末のものである。住居跡は、その全容のわかるものが少ないが、第19号住居跡のように大型のものもある。溝跡は、A地点の第１号溝跡とB地点の第５号溝跡があるが、これらは形態が類似していることから、同一の溝である可能性が高いものである。真間期の遺構は、住居跡14軒・土壙２基(第４・６号土壙)・井戸跡１基(第３号井戸跡)であり、これらは真間期前半の７世紀後半を主体としている。当地域では、本遺跡のような沖積低地内の自然堤防上に立地する集落は鬼高期の終末に廃絶され、沖積低地周辺の台地上や丘陵上に移動する現象が認められることからすれば、本遺跡はその後も継続して集落が営まれる特異な集落として注目されよう。住居跡では、A地点調査区北側の第７・11・12・14号住居跡の４軒が、ほぼ直線上に並ぶ配置を取っていることが注目される。第３号井戸跡は、井戸本体から調査区外に溝が延びるもので、いわゆる「溜井」の形態に類似している。国分期の遺構は、住居跡15軒・掘立柱建物跡３軒・井戸跡２基・土壙５基・溝跡２条である。該期の遺構は、A地点の南半からC地点の東側にかけて分布しているが、他時期のものに比べて遺存状態が悪く、また重複しているものがほとんどであるため、出土遺物にも混入品が多く見られる。A地点の調査区南西側に位置する第22～24号住居跡は大型住居跡で、同一地点での建て直しによる重複と考えられるものである。



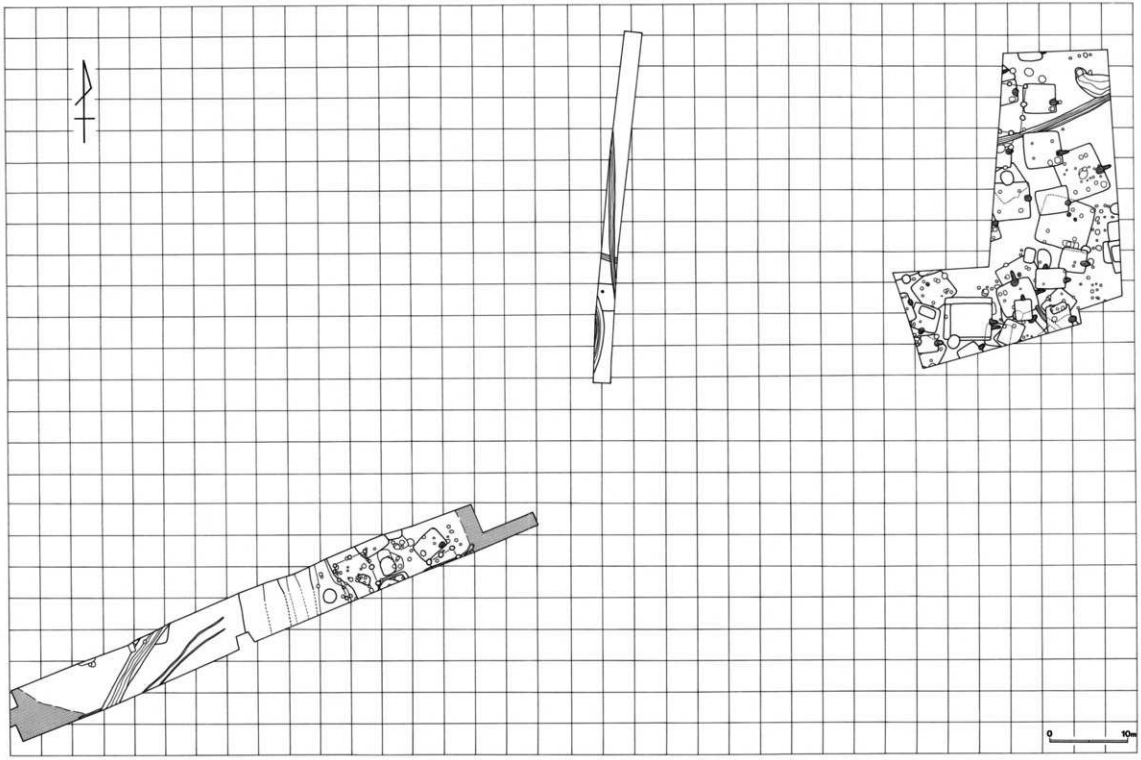

第72図　東牧西分遺跡Ａ地点全測図




第73図　東牧西分遺跡C地点全測図




第74図　東牧西分遺跡B地点全測図




第75図　東牧西分遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ地点全体図

## 第２節　検出された遺構と遺物

### １．住居跡

#### 第１号住居跡（第78図）

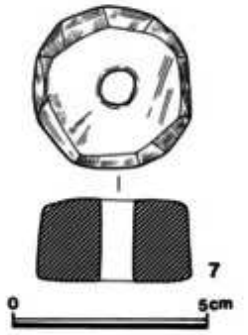
Ａ地点の調査区南側に位置する。重複する第33号住居跡と第２号土壙を切り、第２号住居跡と第27号住居跡に切られている。遺構の遺存状態は、本遺跡の中では比較的良好な方である。

平面形は、東西方向3.80m・南北方向2.66mの比較的整った長方形を呈する。住居の主軸方位は、Ｎ－91°－Ｅをとる。確認面からの深さは20cm程度あり、壁は緩やかに立ち上がる。壁溝は各壁下ともまったく見られない。床面は、平坦で堅緻である。貯蔵穴や主柱穴等の施設はないが、住居の南西側に性格不明の浅い小ピットを伴っている。

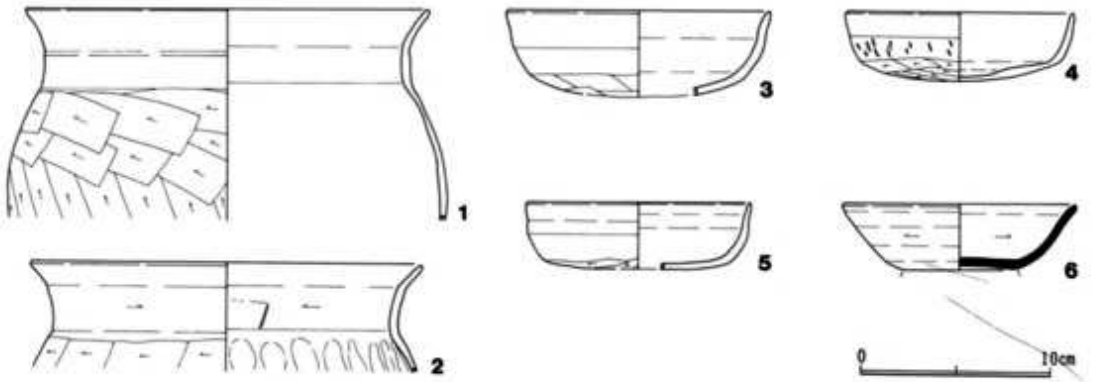
カマドは、北側壁の西寄り（北カマド）と東側壁中央の２箇所に見られるが、これらは同時に存在したものではなく、北カマドから東カマドに作り替えられたものである。住居廃絶時に伴う東カマドは、全長83cm・最大幅70cmを測り、壁に対してほぼ直角に付設されている。袖はなく、煙道部はすでに削平されている。燃焼部は、床面を若干掘り窪めて作られている。覆土中には焼土粒子や焼土ブロックが顕著に見られるが、底面や壁面はあまり焼けていない。本住居跡の構築当初に作られた北カマドは、住居壁外に残存する部分では、全長166cm・幅100cmを測り、壁に対してやや斜めに付設されている。燃焼部は、床面を若干掘り窪めて作られており、壁面は部分的に良く焼けている。煙道部はすでに削平されている。

出土遺物は、住居中央部の床面付近やカマド内より、土師器の甕や坏と須恵器の坏が出土しているが、いずれも破片であり、またNo５のような混入品も見られる。この他、土器以外では床面上より石製の紡錘車（第76図）が１点出土している。

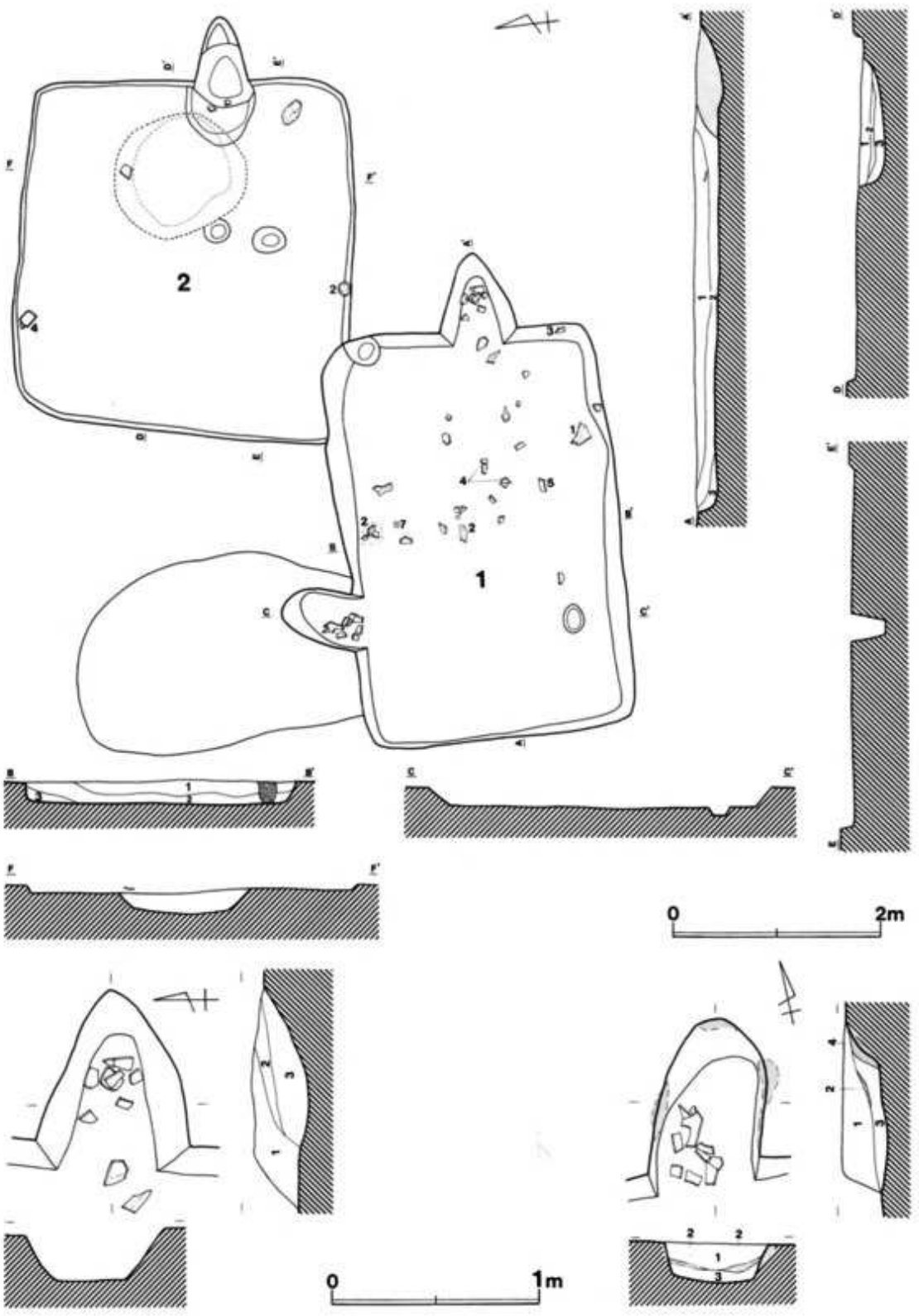
本住居跡の時期は、出土遺物より国分期の所産と考えられる。




第76図　石製紡錘車




第77図　第１号住居跡出土土器




第78図　第1・2号住居跡

**第１号住居跡土層説明**

第１層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗茶褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

**第１号住居跡東カマド土層説明**

第１層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量に、焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

**第１号住居跡北カマド土層説明**

第１層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：赤褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：黒褐色土層（炭化粒子を多量に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

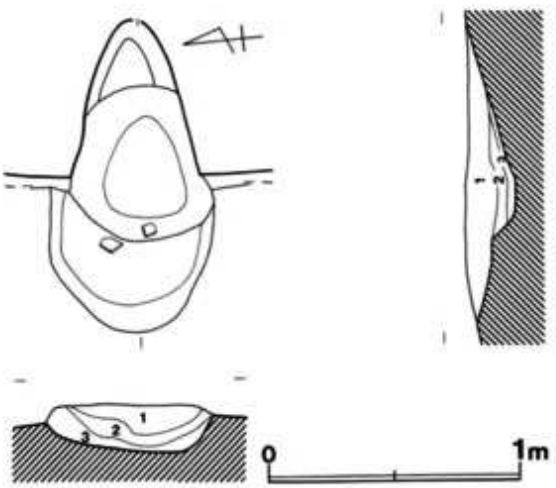
第４層：暗赤褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

**第２号住居跡土層説明**

第１層：暗灰色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第２層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第３層：黒褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）




**第２号住居跡カマド土層説明**

第１層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第２層：黒褐色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

**第79図　第２号住居跡カマド**

**第１号住居跡出土遺物観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(21.2cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は下半が直立し、上半は長く直線的に外反する。胴部は張る。器肉は薄い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br><br>内外－淡橙褐色 | 約3/4。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 甕 | 口縁部径<br>(20.6cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は下半が直立し、上半は直線的に外傾する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指押さえの後ナデ。 | 白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 口縁部1/3。 |
| 3 | 坏 | 口縁部径<br>(14.0cm) | 口縁部はやや外反ぎみに立つ。体部は比較的深く、底部は偏平の丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半ナデ、下半～底部ケズリ。 | 白色粒<br>内外－淡褐色 | 約1/3。 |
| 4 | 坏 | 口径(12.0)<br>器高 3.5 | 口縁部は体部よりやや内湾ぎみに立つ。底部は偏平ぎみの丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 約1/2。 |
| 5 | 坏 | 口径(11.8)<br>器高 3.5 | 口縁部は体部より蛇行しながら立つ。底部は偏平ぎみの丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・片岩粒<br>内外－淡褐色 | 約1/3。 |
| 6 | 須恵器<br>坏 | 口径12.4<br>器高 3.5<br>底径 6.0 | 口縁部は体部より内湾ぎみに開き、口唇部はやや肥厚する。底部は平底を呈する。 | 体部内外面右回りの回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 片岩粒・白色粒 | 4/5。<br>末野産。 |
| 7 | 石製<br>紡錘車 | 直径 4.0<br>厚さ 2.1<br>重量 58g | 平面形はほぼ円形で、断面は上面が若干小さい台形を呈する。 | 上下面とも丁寧な研磨。側面はケズリの後、雑な研磨。 | 凝灰岩 | 完形。 |

**第２号住居跡（第78図）**

Ａ地点の調査区南側に位置し、重複する第１号住居跡と第20号住居跡及び第５号土壙を切っている。遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

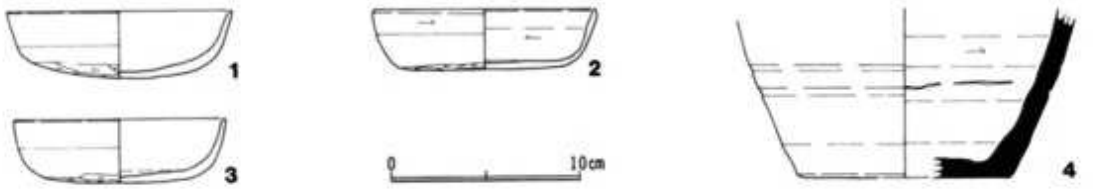
平面形は、東西方向3.28m・南北方向3.14mの方形を呈しているが、西側壁は南に向かって若干開いている。住居の主軸方位は、Ｎ－102°－Ｅをとる。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは５cm～13cmある。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが、壁に寄った周辺部はやや軟弱である。貯蔵穴や主柱穴及び壁溝等の施設はまったくないが、住居中央部に２箇所性格不明の浅い小ピットがある。

カマドは、東側壁中央のやや南寄りに位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長120cm・最大幅64cmを測る。袖はなく、煙道部はすでに削平されている。燃焼部は、焚口部よりさらに一段掘り窪められている。焼土は顕著でなく、壁はあまり焼けていない。

本住居跡では、カマド前面の床下より、いわゆる床下土壙が１基検出されている。平面形は、不整円形を呈し、規模は122cm×108cmを測る。床面からの深さは25cmあり、底面は平坦をなしている。覆土最下層には焼土粒子や炭化粒子が顕著に見られ(第３層)、その上をロームブロックを主体とする暗黄褐色土(第２層)で薄く被覆し、さらに暗灰色土(第１層)によって埋め戻している。

出土遺物は、土師器や須恵器の破片が覆土中より少量出土している。No２の完形の坏は、住居南側の床面上より壁に立て掛けられたような状態で出土している。この他では、カマド南側の床面上より比較的大きな自然石が１個出土している。

本住居跡の時期は、出土遺物より国分期の所産と考えられる。




第80図　第２号住居跡出土土器

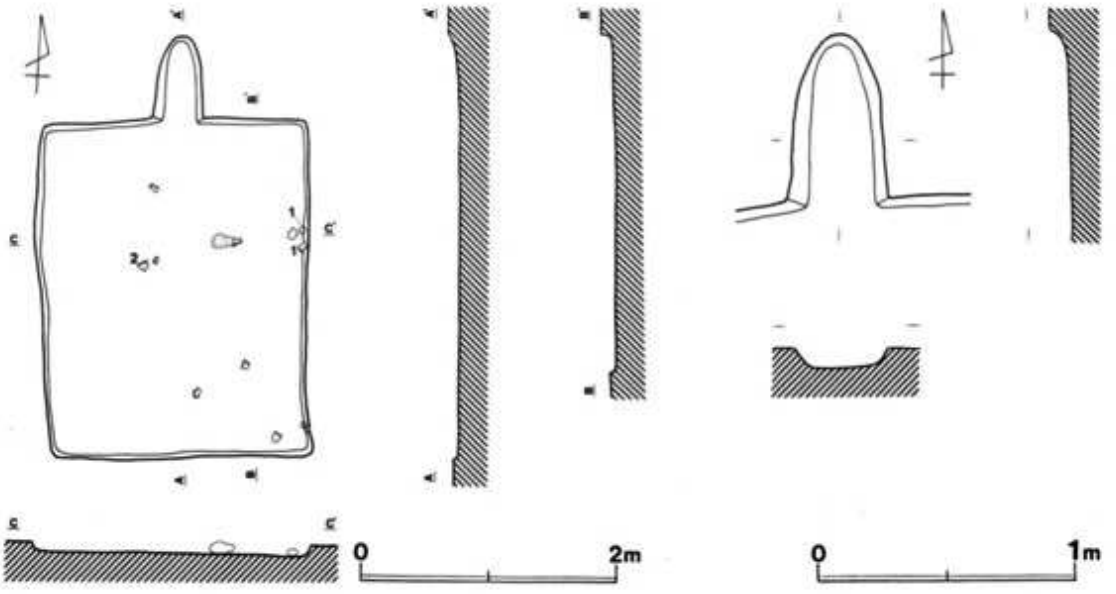
第２号住居跡出土土器観察表

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径11.8<br>器高 3.5 | 口縁部は体部より直線的に外傾する。底部は偏平ぎみの丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－橙褐色 | 1/3。 |
| 2 | 坏 | 口径11.8<br>器高 3.2 | 口縁部は体部より直線的に外傾し、口唇部はやや上方に向く。底部は平底ぎみ。 | 口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | ほぼ完形。 |
| 3 | 坏 | 口径(11.2)<br>器高 3.4 | 口縁部は体部よりやや内湾ぎみに開く。底部はかなり偏平ぎみの丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/4。 |
| 4 | 須恵器<br>甕 | 底部径<br>(11.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。底部はやや薄い平底を呈し、胴部は内湾ぎみに立ち上がる。 | 胴部外面回転ナデの後ナデ、内面回転ナデ。底部内外面ナデ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－暗灰色 | 1/3。 |

## 第３号住居跡（第81図）

A地点の調査区南側に位置し、重複する第30号住居跡と第31号住居跡及び第８号土壙を切っている。遺構の遺存状態はあまり良好とは言えず、かろうじて残存しているような状況である。

平面形は、南北方向2.62m・東西方向2.12mの比較的整った長方形を呈する。住居の主軸方位は、



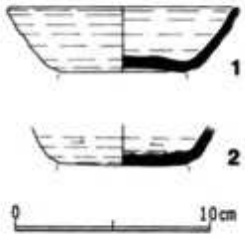

第81図　第３号住居跡

N－4°－Wをとる。確認面からの深さは2㎝～8㎝ある。床面は、比較的堅緻で平坦である。

カマドは、北側壁のほぼ中央に壁に対して直角に付設されている。規模は、全長67㎝・最大幅40㎝を測る。袖はなく、壁外に燃焼部が延びるタイプである。燃焼部は、住居の床面とほぼ同じ高さで、あまり焼けていない。

出土遺物は、土師器や須恵器の破片がごく少量出土しただけである。この他では、住居中央部の床面上に置かれたような状態で、比較的大きな自然石が1個出土している。

本住居跡の時期は、出土遺物より国分期の所産と推測される。




**第82図　第3号住居跡出土土器**

**第3号住居跡出土土器観察表**

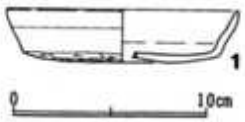
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.0)<br>器高 3.3<br>底径 6.4 | 体部は底部より内湾ぎみに開き、口唇部は若干肥厚する。底部は平底を呈する。 | 体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－淡灰色 | 1/2。 |
| 2 | 須恵器<br>坏 | 底部径<br>6.6㎝ | 体部は底部より直線的に開く。底部は平底を呈す。 | 体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－暗灰色 | 1/4。 |

## 第4A号住居跡（第84図）

A地点の調査区南側の東端に位置する。入れ子状に重複する第4B号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、本遺跡の中では比較的良好な方である。住居跡の東側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われ、南北方向2.18m・東西方向は1.16mまで測れる。確認面からの深さは30㎝あり、壁は直線的に立ち上がる。床面は、地山を直接掘り窪めた直床式で、全体に堅緻であるが若干起伏が見られる。出土遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土遺物より国分期の所産と考えられる。




**第83図　第4号住居跡出土土器**

**第4号住居跡出土土器観察表**

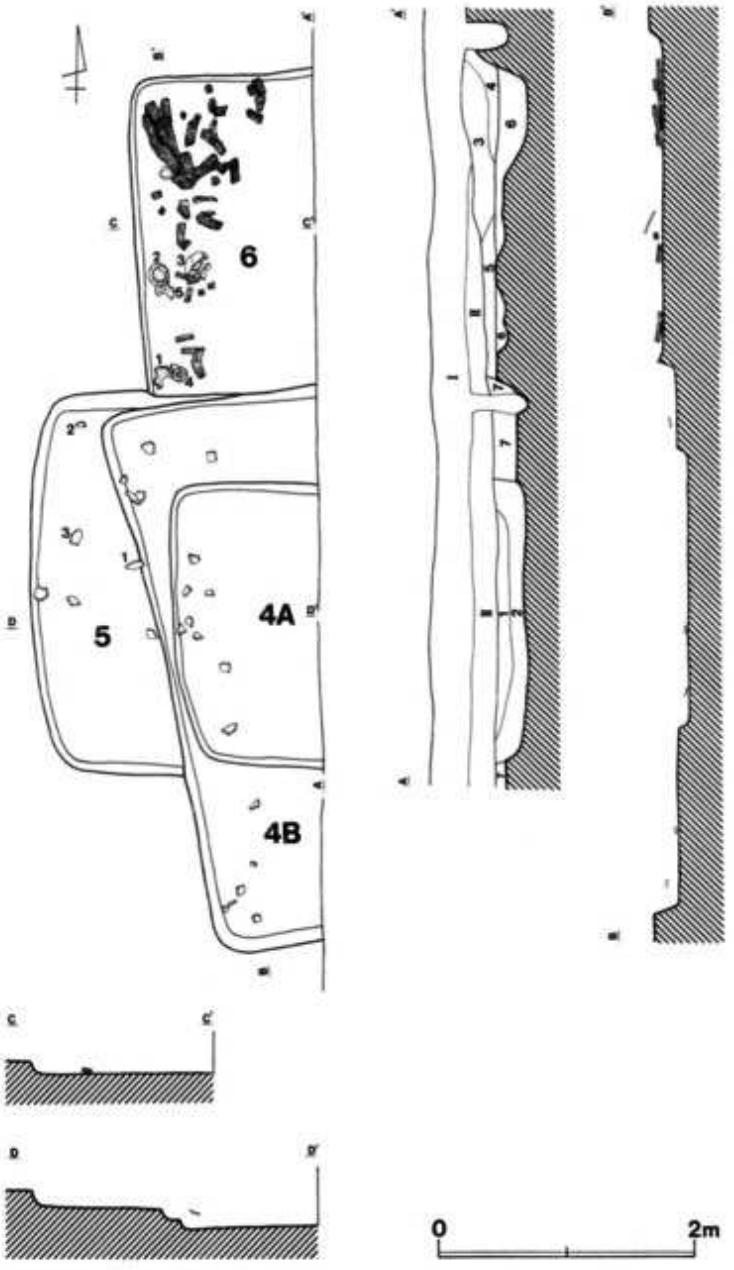
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口縁部径<br>12.0㎝<br>器高<br>2.7㎝ | 体部は底部より外反ぎみに開き、口縁部は体部より内湾ぎみに立つ。底部は偏平で平底ぎみである。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 2/3。 |

## 第4B号住居跡（第84図）

A地点の調査区南側の東端に位置する。住居跡の中央部を第4A号住居跡に切られ、重複する第5号住居跡と第6号住居跡を切っている。遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。住居跡の東側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われ、南北方向4.30m・東西方向は1.66mまで測れる。確認面からの深さは6㎝～20㎝あり、壁は緩やかに立ち上がっている。床面は、地山を直接掘り窪めた直床式で、平坦であるが北側に向かってやや傾斜している。出土遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土遺物や遺構の重複関係より国分期の所産と思われる。




**第4～6号住居跡土層説明**

**<第4A号住居跡>**

第1層：暗灰色土層（マンガン塊を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰色土層（マンガン塊を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

**<第6号住居跡>**

第3層：暗褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第4層：暗褐色土層（炭化材を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第5層：暗灰色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第6層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**<第4B号住居跡>**

第7層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

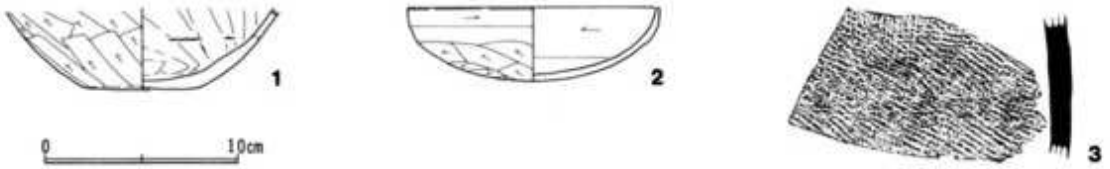
**第84図　第4～6号住居跡**

### 第５号住居跡（第84図）

Ａ地点の調査区南側の東端に位置する。重複する第６号住居跡を切っているが、住居跡の東側を第４Ｂ号住居跡に切られているため、本住居跡の全容は不明である。遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われ、南北方向2.94m・東西方向は1.65mまで測れる。確認面からの深さは５cm～14cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。床面は、地山を直接掘り窪めた直床式で、全体に平坦であるがやや軟弱である。出土遺物は、床面近くより土器破片が少量出土している。

本住居跡の時期は、出土遺物より真間期の所産と考えられる。




第85図　第５号住居跡出土土器

第５号住居跡出土土器観察表

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鉢 | 底部径 6.0cm | 粘土紐積み上げ成形。胴部内湾しながら大きく開く。底部は平底を呈する。 | 胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 約1/2。 |
| 2 | 坏 | 口径(13.0)<br>器高 3.8 | 口縁部は内湾ぎみに外傾する。体部は比較的浅く、丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 約1/4。 |
| 3 | 須恵器<br>甕 | | | 外面平行叩き、内面ナデ。 | 白色粒<br>内外－暗灰色 | 破片。 |

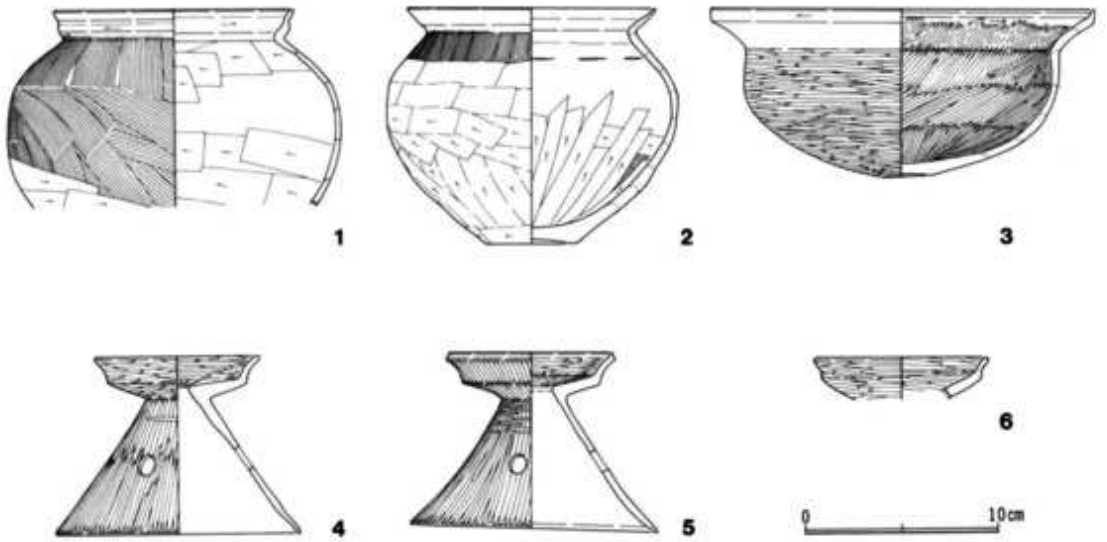
### 第６号住居跡（第84図）

Ａ地点の調査区南側の東端に位置し、住居跡の南側を重複する第４Ｂ号住居跡と第５号住居跡に切られている。遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。住居跡の東側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。確認面からの深さは、調査区断面で23cmを測る。床面は、地山を周溝状もしくはドーナツ状に荒掘りした後、ロームブロックを含む暗茶褐色土(第６層)を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅緻である。調査区内で検出された部分では、主柱穴や壁溝等の施設はまったく見られなかった。床面上には炭化材が多く残存しており、覆土中には焼土ブロックや焼土粒子が顕著に見られることから、本住居跡は焼失したものと考えられる。

出土遺物は、住居の西側壁に近い床面上から、甕・鉢・器台などの比較的形状を止めた土器がまとまって出土している。

本住居跡の時期は、出土遺物より五領期の所産と考えられる。




第86図　第６号住居跡出土土器

**第６号住居跡出土土器観察表**

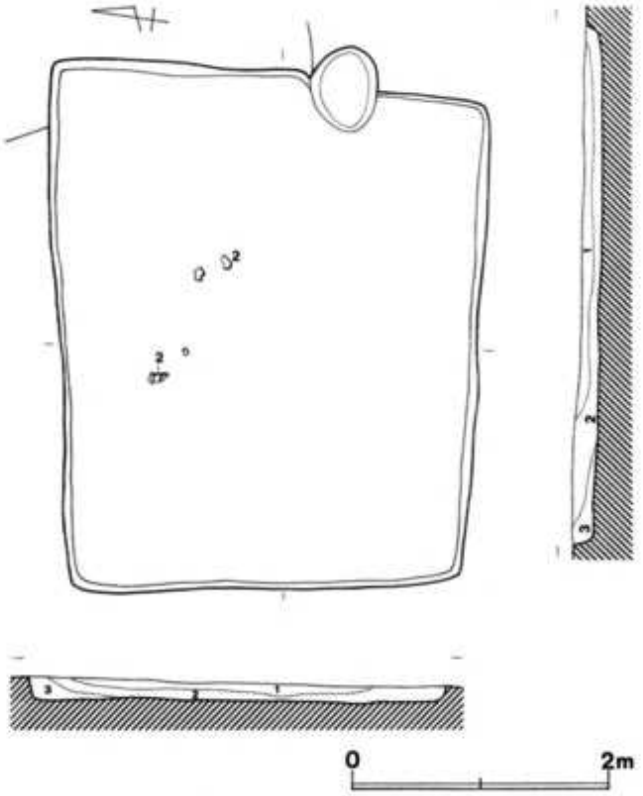
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 台付甕 | 口縁部径<br>12.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状を呈し、胴部は張る。器肉は薄い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ケズリ、内面ナデの後一部ケズリ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 約1/2。<br>外面に煤の付着あり。 |
| 2 | 甕 | 口径(12.8)<br>器高 12.1<br>底径 4.6 | 粘土紐輪積み成形。口縁部は薄く内湾ぎみに外傾する。胴部は偏平ぎみに強く張り、底部は上底風の平底を呈す。 | 口縁部内外面ナデ。胴部外面上部ハケ、下半ケズリの後ナデ。内面ナデの後ケズリ。底部ケズリの後ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 胴部完形、<br>口縁部1/4。<br>外面煤の付着あり。 |
| 3 | 鉢 | 口径19.8<br>器高 8.6<br>底径 2.4 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は強く外反し、口唇部は短く上方に向き、外面に平坦面をもつ。器高は低く、底部は小さな平底を呈する。 | 口唇部内外面ヨコナデ。口縁部外面ナデ、内面ミガキ。胴部内外面細かなミガキ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－暗赤茶褐色<br>内－黒色 | 2/3。 |
| 4 | 器台 | 口縁部径<br>8.5cm<br>器高<br>9.1cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。穿孔部は筒状をなさず、脚部は接合部より直線的に開く。 | 口縁部内外面ミガキ。器受部外面ケズリの後ミガキ、内面ミガキ。脚部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－明褐色 | 1/2。<br>脚部穿孔は３箇所と思われる。 |
| 5 | 器台 | 口縁部径<br>8.4cm<br>器高<br>9.2cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は短く上方に向き、外面に凹線を有する。穿孔部は筒状をなさず、脚部は接合部より外反ぎみに開き、端部内面は窪む。 | 口唇部内外面ヨコナデ。器受部内外面ミガキ。脚部外面ケズリの後ミガキ、内面ケズリの後ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒・赤色粒<br>外－黒灰褐色<br>内－淡茶褐色 | 4/5。<br>脚部穿孔は３箇所。 |
| 6 | 器台 | 口縁部径<br>( 9.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は器肉が薄く、緩やかに短く外反する。 | 口縁部内外面ミガキ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－明褐色<br>内－黒褐色 | 口縁部1/3。 |

**第７号住居跡（第87図）**

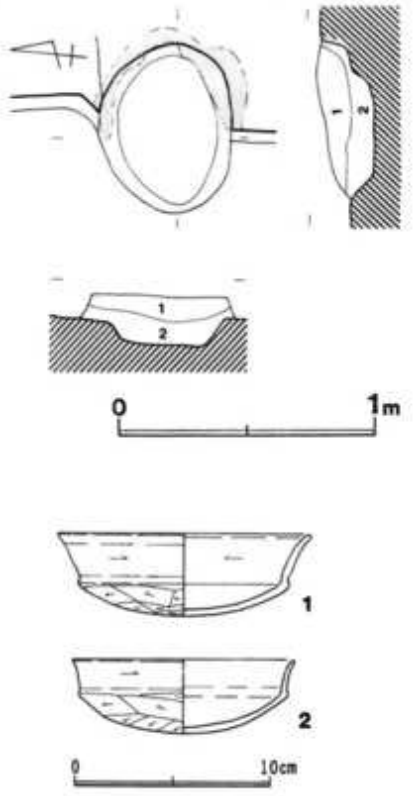
Ａ地点の調査区中央部に位置し、重複する第19号住居跡と第20号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、長方形を呈するが、住居の東西両壁とも北に向かって若干開いている。規模は、東西方向4.00m・南北方向3.36mを測る。住居の主軸方位は、Ｎ－80°－Ｅをとる。確認面からの深さは20cm程度あり、壁は直線的に立ち上がっている。床面は直床式と考えられ、全体に平坦で堅緻である。貯蔵穴･主柱穴･壁溝等の住居内施設はまったく存在しない。

カマドは、住居東側壁の中央よりやや南に寄った位置に、壁を若干掘り込んで付設されている。袖はすでに崩壊してその痕跡すら認められず、煙道部も削平されている。燃焼部は長さ65cm・幅51




第87図　第７号住居跡




第88図　第７号住居跡出土土器

**第７号住居跡土層説明**

第１層：暗茶褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

**第７号住居跡カマド土層説明**

第１層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量に、炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗褐色土層（焼土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

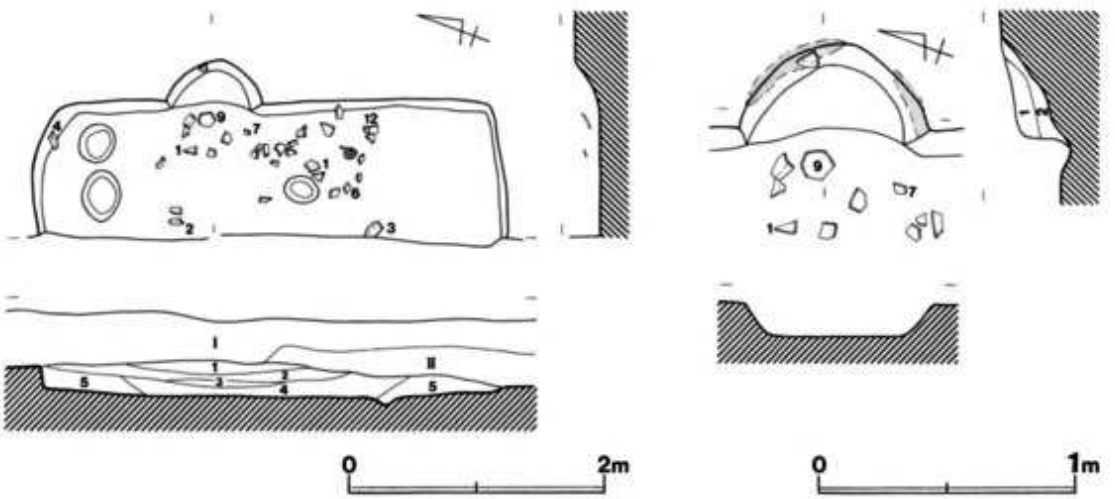
cmの楕円形に近い形態を呈している。床面よりも一段低く掘り込んで作られており、壁面は非常に良く焼けている。

出土遺物は、住居跡の覆土中より鬼高式や真間式の土器片がごく少量出土している。第88図に図示した鬼高式の坏は、覆土中から出土した破片であるため混入の可能性もあり、本住居跡に伴うものか不明である。

本住居跡の時期は、出土遺物が少量であり混入も考えられることから明確にしがたいが、カマドの燃焼部が壁を掘り込む形態であることからみて、鬼高期終末から真間期の所産と推測される。

**第7号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径(13.0)<br>器高 4.2 | 口縁部は外反ぎみに開く。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗橙褐色 | 1/4。 |
| 2 | 坏 | 口径(11.4)<br>器高 3.8 | 口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>片岩粒<br>内外－明橙褐色 | 1/3。 |




**第89図　第8号住居跡**

**第8号住居跡土層説明**

第1層：黒灰色土層（焼土粒子を多量に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：淡灰色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第3層：淡灰色土層（マンガン塊を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第4層：暗灰色土層（マンガン塊を均一に、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第5層：暗灰色土層（マンガン塊を多量に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

**第8号住居跡カマド土層説明**

第1層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗灰色土層（マンガン塊を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

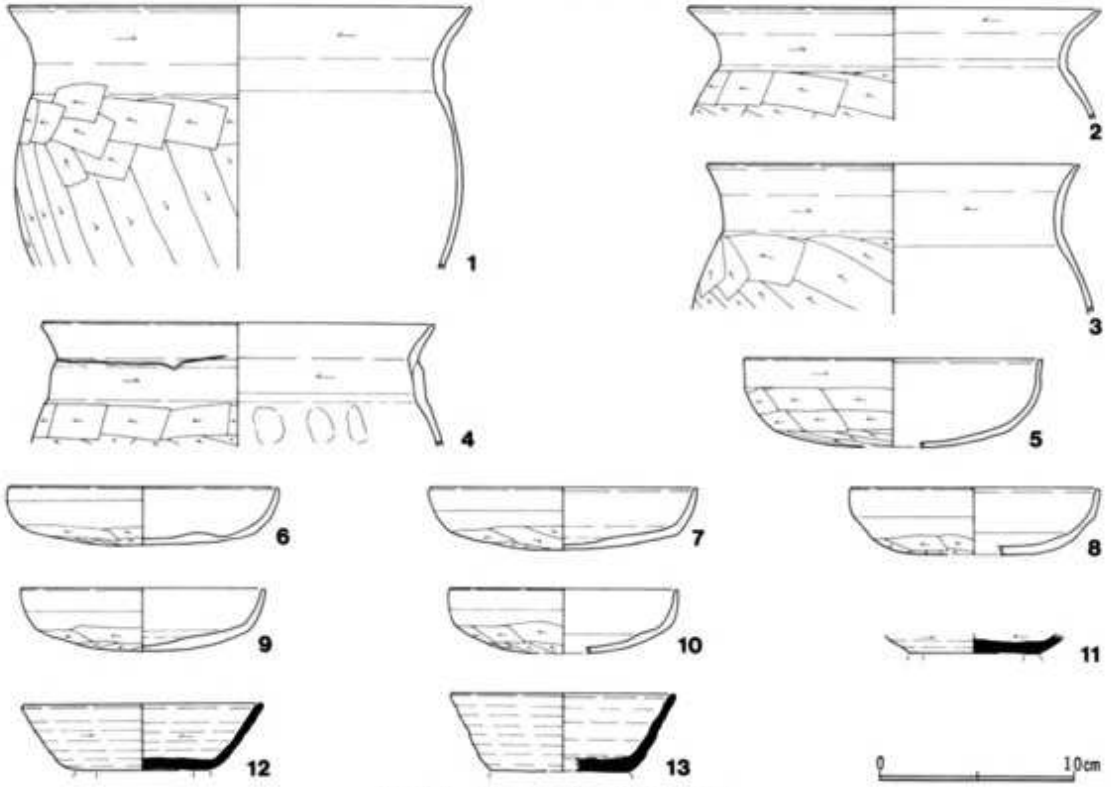
**第８号住居跡（第89図）**

Ａ地点の調査区南西側の西端に位置し、重複する第21号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。住居跡の西側は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向3.66m・東西方向は1.12mまで測れる。確認面からの深さは３cm～16cmあり、壁は直線的に立ち上がっている。床面は直床式で、全体に平坦で堅緻である。住居内ではピットが３箇所検出されているが、北側のやや規模の大きい２箇所のピットは、本住居跡に伴うものではなく、後世の所産である。

カマドは、住居東側壁の中央やや北寄りの位置に付設されている。袖はなく、煙道部はすでに削平されている。燃焼部は、床面とほぼ同一の高さで、壁面は良く焼けている。出土遺物は、住居の床面上や覆土中より、土器片が比較的多く出土している。

本住居跡の時期は、出土遺物より国分期の所産と考えられる。




**第90図　第８号住居跡出土土器**

**第８号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(23.8cm) | 口縁部は直立する頸部より直線的に長く外傾する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/4。 |
| 2 | 甕 | 口縁部径<br>(21.2cm) | 口縁部は緩やかに外反するが、上半部は強く外傾する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 1/3。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 甕 | 口縁部径<br>19.2cm | 口縁部は直立ぎみの頸部より直線的に外傾する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 口縁部のみ。 |
| 4 | 甕 | 口縁部径<br>(20.2cm) | 口縁部は内傾する頸部より直線的に外傾する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/4。<br>煤付着。 |
| 5 | 坏 | 口径(15.4)<br>器高( 4.5) | 口縁部は体部より直立する。体部は比較的深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部及び底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/2。 |
| 6 | 坏 | 口径14.0<br>器高 3.0 | 口縁部は内湾ぎみに開く。体部は浅く、底部は偏平ぎみの丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/2。 |
| 7 | 坏 | 口径(13.8)<br>器高 3.2 | 口縁部は内湾ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は偏平ぎみの丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ、底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 2/3。 |
| 8 | 坏 | 口径(12.8)<br>器高( 3.4) | 口縁部は内湾ぎみに開く。体部は浅く、若干湾曲する。底部は平底ぎみである。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ、底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/4。 |
| 9 | 坏 | 口径(12.6)<br>器高 3.2 | 口縁部は内湾ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は偏平ぎみの丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ、底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 2/3。 |
| 10 | 坏 | 口径(11.8)<br>器高( 3.3) | 口縁部は内湾ぎみに若干外傾する。体部は浅く、底部は偏平ぎみの丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡褐色 | 1/3。 |
| 11 | 須恵器<br>坏 | 底部径<br>6.2cm | 底部は平底を呈する。 | 体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後外周回転施ケズリ。 | 白色針状物質<br>白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 1/2。<br>南比企産。 |
| 12 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.4)<br>器高 3.4<br>底径 6.8 | 口縁部は直線的に外傾する。底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後外周回転施ケズリ。 | 白色針状物質<br>内外－淡褐色 | 1/2。<br>南比企産。 |
| 13 | 須恵器<br>坏 | 口径(11.6)<br>器高 4.0<br>底径( 7.0) | 口縁部は直線的に外傾する。底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 白色粒<br>内外－暗灰色 | 1/4。 |

**第9号住居跡（第92図）**

A地点の調査区南西側の西端に位置する。住居南側壁の一部を第3号土壙に切られ、南東側コーナー部は第10号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は比較的良好な方ではあるが、住居跡の大半は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

確認面からの深さは20cm程度あり、壁は直線的に立ち上がる。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土（第4層）を部分的に埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅緻である。出土遺物は、覆土中より真間式前半の土器片がごく少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土遺物より真間期の所産と考えられる。

**第10号住居跡（第92図）**

A地点の調査区南西側に位置し、重複する第９号住居跡に切られ、第29号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は比較的良好な方ではあるが、住居跡の大半は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

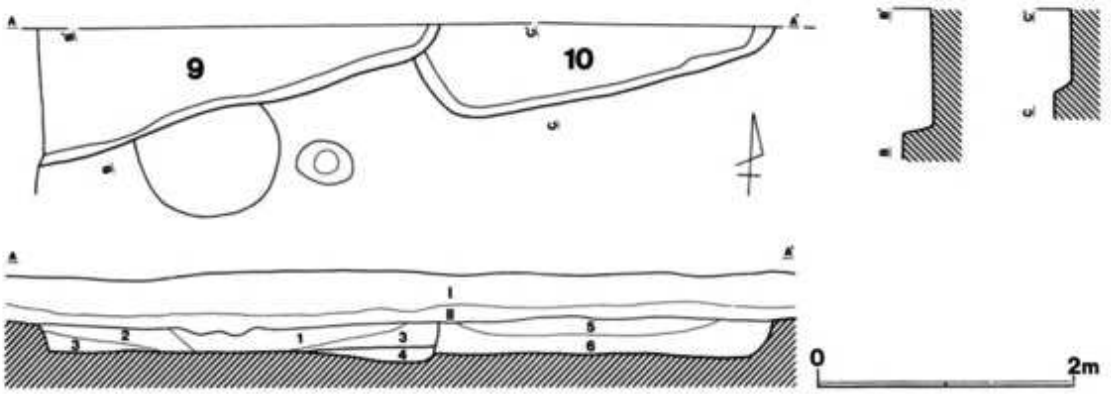
平面形は、方形もしくは長方形を基本形にするものと思われるが、コーナー部の丸みが強く、西側壁は北に向かって開いている。規模は、東西方向は2.80mまで、南北方向は73cmまで測れる。確認面からの深さは25cm程度あり、壁は直線的に立ち上がる。床面は、地山を直接削り出した直床式で、全体に平坦である。調査区内で検出された範囲が住居の壁際であるためか、やや軟弱である。出土遺物は、覆土中より鬼高式の土器片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土遺物より鬼高期の所産と考えられる。

**第91図　第10号住居跡出土土器**

**第10号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器　種 | 法　量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径13.8<br>器高 4.0 | 口縁部は直線的に外傾し、外面に２本の凹線を施す。体部は浅く、丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデの後雑な放射状の暗文を施す。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 約3/4。外面に黒斑あり。 |




**第92図　第９・10号住居跡**

**第９～10号住居跡土層説明**

**＜第９号住居跡＞**

第１層：暗褐色土層（マンガン塊を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第３層：暗褐色土層（マンガン塊を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第４層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

**＜第10号住居跡＞**

第５層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第６層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

**第11号住居跡（第94図）**

A地点の調査区中央部に位置し、重複する第19号住居跡と第1号溝跡を切っている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

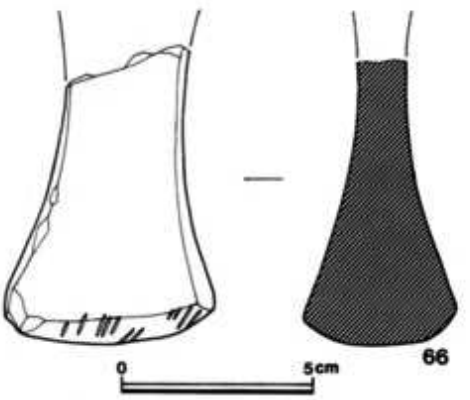
平面形は、比較的整った方形を呈し、規模は東西方向4.74m・南北方向4.62mある。住居の主軸方位は、N－87°－Eをとる。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、カマド南側の南東コーナー部を除く各壁下には、幅15cm前後深さ8cm程度の壁溝が巡っている。確認面からの深さは40cm程度ある。床面は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体的に平坦であるが若干起伏が見られる。カマド焚口部前面や主柱穴に囲まれた住居中央部は堅緻であるが、壁際に近い住居周辺部はやや軟弱である。

主柱穴は、住居のほぼ対角線上に3箇所検出されている。南東側には主柱穴が掘り込まれていないが、その配置からみて4本主柱であったものと考えられる。形態は、直径15cm～35cmの円形を呈し、深さは18cm～32cmあり、西側の主柱穴は2箇所とも東側に比べて規模が小さい。貯蔵穴は、南東コーナー部に位置している。方形ぎみの平面形を呈し、規模は80cm×75cmある。床面からの深さは25cmあり、底面は平坦である。この他、住居南側壁の中央やや東寄り付近に楕円形を呈する土壙状の掘り込みが見られるが、これは本住居跡に伴うものではなく後世の攪乱である。

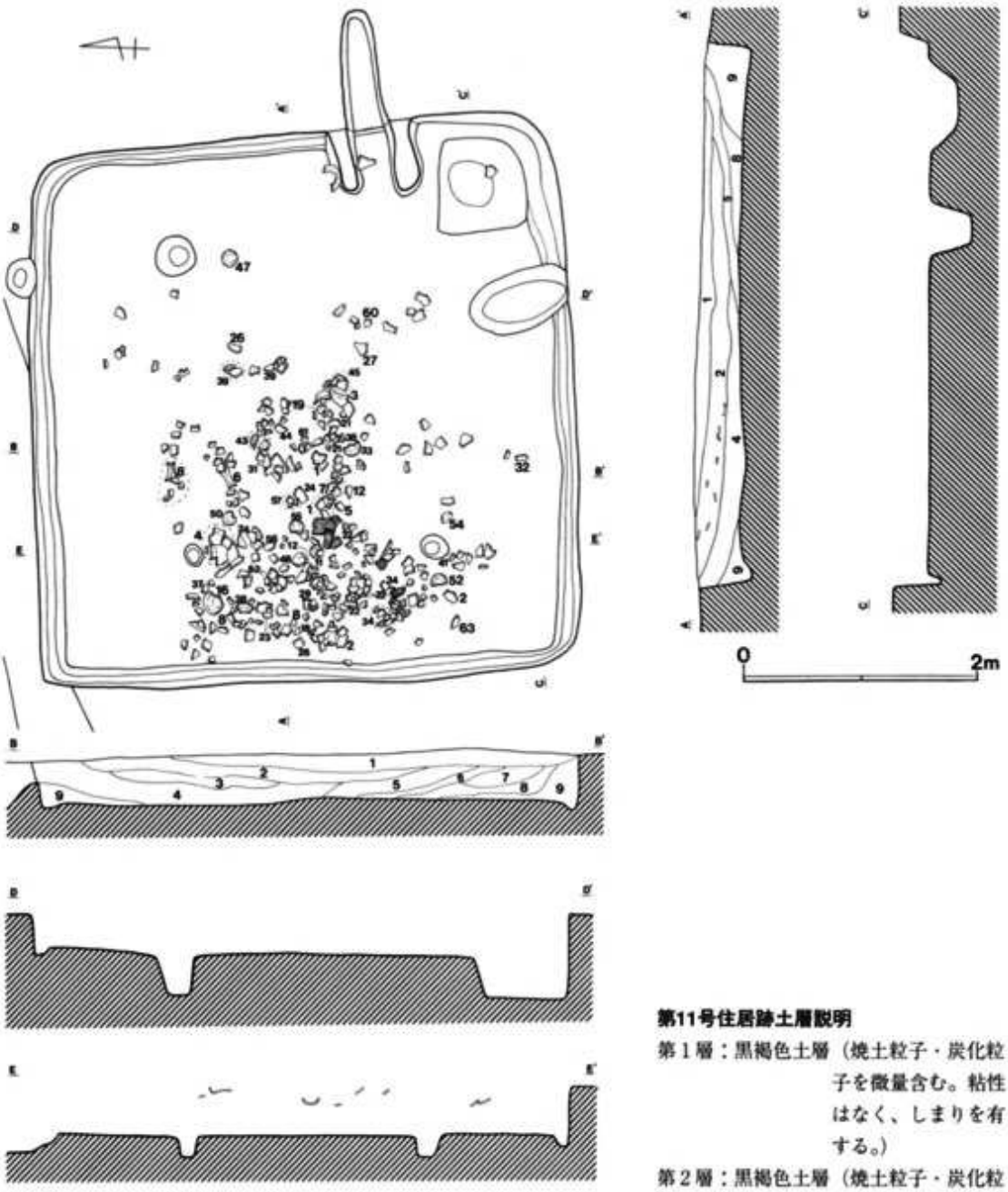
カマドは、住居の東側壁中央のやや南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長163cm・最大幅78cmを測る。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土（第5層）を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を掘り込まない形態で、底面は床面よりも若干低く、壁は良く焼けている。煙道部は、住居の壁を境にして燃焼部より一段高くなっており、壁外に約1mほど直線的に延びている。

出土遺物は、住居中央から西側の覆土中より、大量の土器片がまとまって出土している。これらの土器は、住居廃絶後の覆土埋没過程中に西側から一括廃棄されたものであるが、この大量の土器片を含む覆土第2層は、上下の土層に比べて焼土粒子や炭化粒子を極端に多く含んでおり、また土器片が密集しているところでは焼土ブロックも顕著に見られることから、窪みとなった廃屋を利用して、火を使った何だかの行為が行われたことが推測されるものであり、おそらくその行為に関係した土器群ではないかと思われる。このような住居跡の覆土中より大量の土器が出土した例は、上里町の八幡太神南遺跡や立野南遺跡（富田・赤熊1985）に好例があるが、それらに比べて本住居跡のものには須恵器が極端に少ない点が注目される。なお、No64の須恵器蓋は覆土中から出土した小破片で、他の土器群に比べてやや新しいと思われるもので、混入した可能性もある。土器以外では、覆土中の大量の土器片に混じって砥石の破片（No66）が1点出土している。

本住居跡の時期は、その出土状態から見て住居に直接伴う可能性が高いNo32の坏やカマド脇の甕などの土器から、真間期の所産と考えられる。




**第93図　第11号住居跡出土砥石**




**第94図　第11号住居跡**

**第11号住居跡土層説明**

第1層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第3層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、小石・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

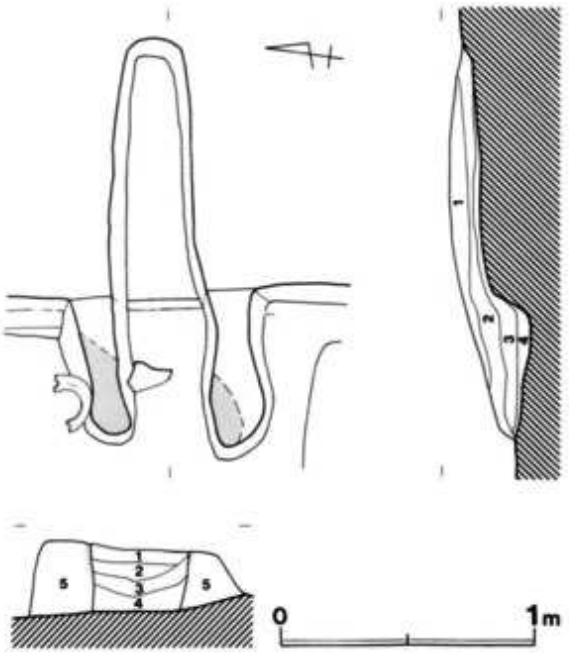
第5層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：黒褐色土層（炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第7層：暗褐色土層（炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第9層：暗褐色土層（マンガン塊を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）




**第11号住居跡カマド土層説明**

第１層：暗灰色土層（鉄斑を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）

第３層：黒灰色土層（炭化粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

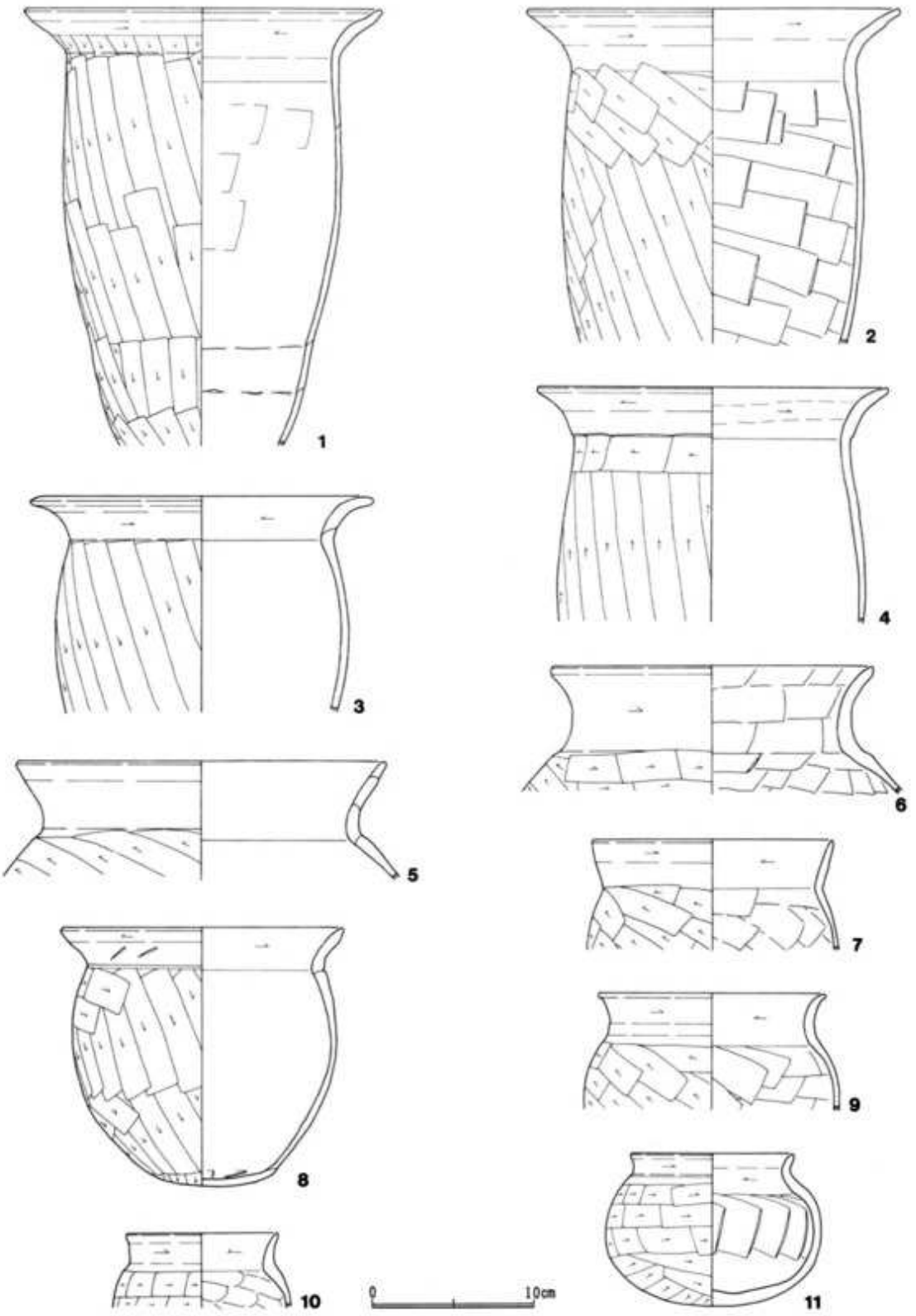
第４層：暗灰色土層（ローム粒子・鉄斑・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第５層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**第95図　第11号住居跡カマド**

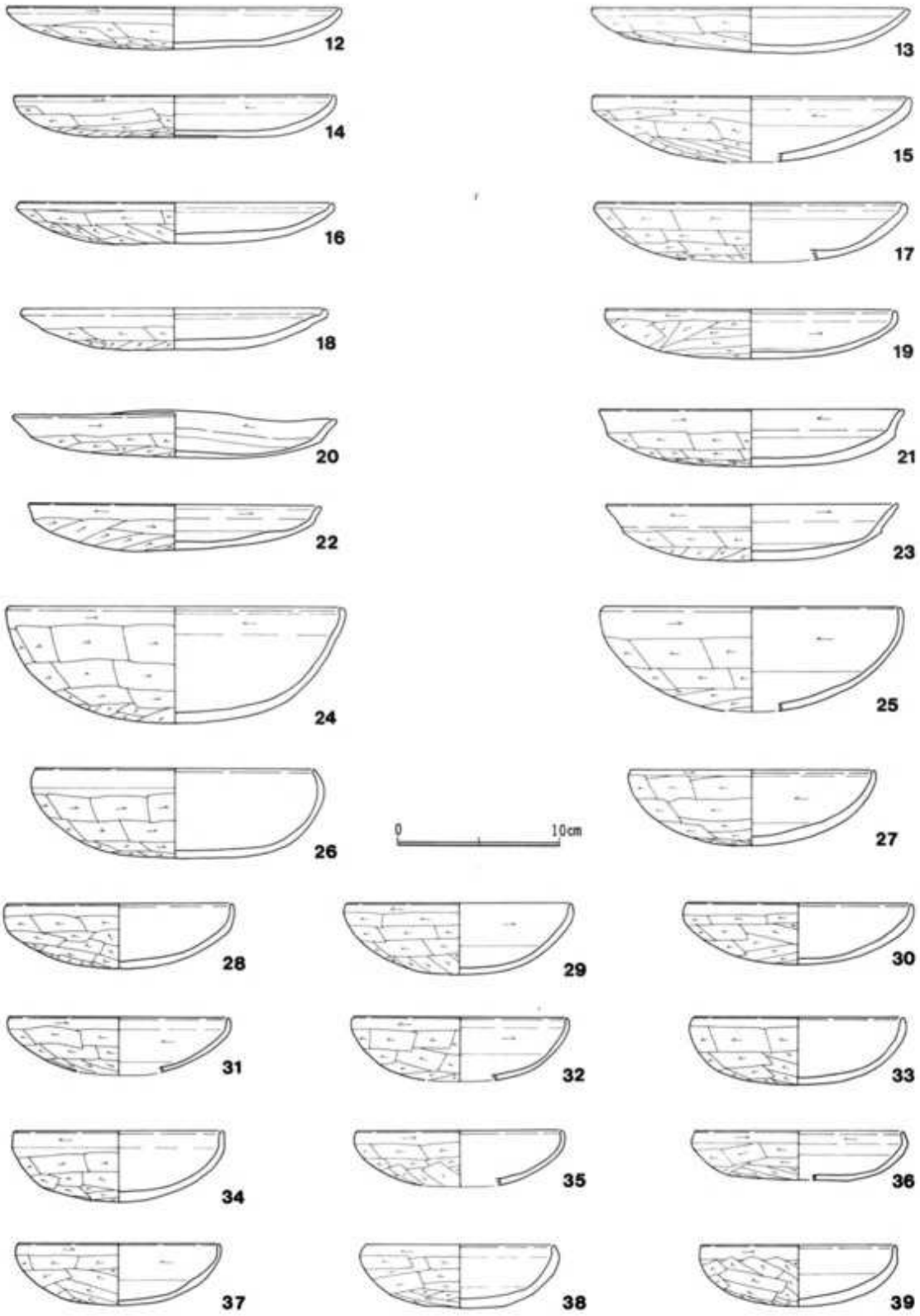
**第11号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(22.2cm)<br>残存高<br>27.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は強く外反し、口唇部はやや内湾ぎみに方向を変える。胴部はあまり張らない。 | 口縁部外面下半ケズリの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/4。 |
| 2 | 甕 | 口縁部径<br>23.2cm<br>残存高<br>20.7cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は薄くなる。胴部はあまり張らない。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>外－淡褐色<br>内－黒褐色 | 1/2。 |
| 3 | 甕 | 口縁部径<br>(21.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はあまり張らない。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－暗橙褐色 | 1/4。<br>内面は荒れている。 |
| 4 | 甕 | 口縁部径<br>(21.8cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はあまり張らなず、口縁部との境に段を有する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>赤色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/4。<br>口縁部内面に帯状の変色あり。 |
| 5 | 広口壷 | 口縁部径<br>(23.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外傾する。胴部は強く張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡褐色 | 1/3。 |
| 6 | 広口壷 | 口縁部径<br>20.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は境に段をもち、張る。 | 口縁部外面ヨコナデ、内面篦ナデの後ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒・赤色粒<br>内外－暗褐色 | 口縁部のみ。 |
| 7 | 小形甕 | 口縁部径<br>(15.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部はやや張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/4。 |



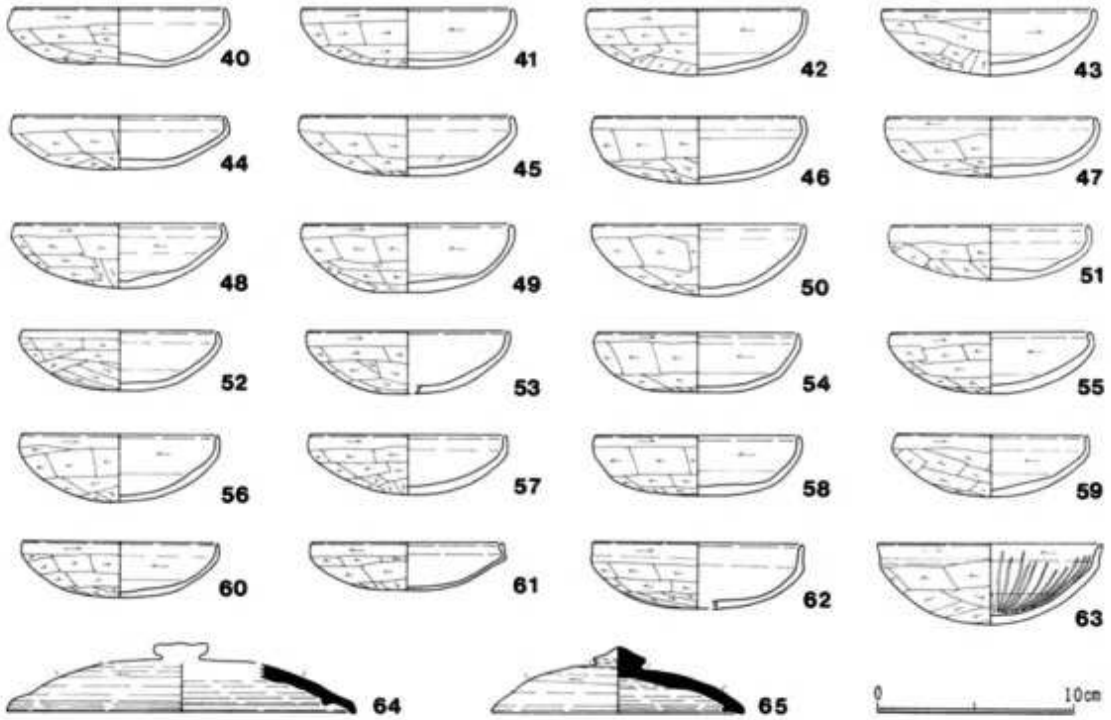

**第96図　第11号住居跡出土土器(1)**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 小形甕 | 口径17.6<br>器高16.0<br>底径 7.6 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はやや張り、底部は不安定な丸底ぎみを呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－淡橙褐色<br>内－明橙褐色 | 3/4。<br>外面は二次焼成を受けている。 |
| 9 | 小形甕 | 口縁部径<br>(14.2cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直立ぎみに緩やかに外反する。胴部はやや張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－暗橙褐色<br>内－淡褐色 | 1/3。 |
| 10 | 小形広口壷 | 口縁部径<br>( 9.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く直立ぎみに外反し、口唇部は若干肥厚する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗橙褐色 | 1/3。<br>外面二次焼成を受ける。 |
| 11 | 小形広口壷 | 口縁部径<br>15.2cm<br>器高<br>9.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く外反する。胴部は偏平ぎみに張り、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－明橙褐色 | ほぼ完形。<br>底部外面に黒斑あり。 |
| 12 | 皿 | 口径20.8<br>器高 2.6 | 口縁部は体部より大きく緩やかに内湾しながら開き、口唇部外面に面をもつ。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－淡褐色 | 3/4。<br>器形はやや歪んでいる。 |
| 13 | 皿 | 口径19.8<br>器高 2.8 | 口縁部は体部より大きく緩やかに内湾しながら開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/3。 |
| 14 | 皿 | 口径19.8<br>器高 2.6 | 口縁部は体部より大きく緩やかに内湾しながら開き、口唇部は短く直立する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・赤色粒<br>内外－淡褐色 | 2/3。 |
| 15 | 皿 | 口径(19.8)<br>器高( 4.1) | 口縁部は体部より大きく開き、口唇部は短く直立する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/2。 |
| 16 | 皿 | 口径19.4<br>器高 2.6 | 口縁部は体部より大きく緩やかに内湾しながら開き、口唇部外面に面をもつ。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡褐色 | 4/5。 |
| 17 | 皿 | 口径(19.6)<br>器高( 3.7) | 口縁部は体部より大きく緩やかに内湾しながら開き、口唇部外面に面をもつ。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/2。 |
| 18 | 皿 | 口径(19.0)<br>器高 2.5 | 口縁部は体部より大きく緩やかに内湾しながら開き、口唇部は短く上方に向く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/3。 |
| 19 | 皿 | 口径(18.0)<br>器高 3.0 | 口縁部は体部より大きく開き、口唇部は短く内湾ぎみに直立する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－明茶褐色 | 1/3。 |
| 20 | 皿 | 口径20.2<br>器高 3.0 | 口縁部は比較的短く、強く外反しながら開く。体部は浅く、器肉は薄い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－赤橙褐色<br>内－淡褐色 | 1/2。<br>二次焼成を受ける。 |
| 21 | 皿 | 口径19.0<br>器高 3.5 | 口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、器肉は厚い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 3/4。 |
| 22 | 皿 | 口径(18.2)<br>器高 2.9 | 口縁部は短く、緩やかに外反する。体部は浅い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－暗橙褐色 | 1/2。 |
| 23 | 皿 | 口径(18.2)<br>器高 3.5 | 口縁部はやや強く外反し、体部との境に凹線を有する。体部は浅く、器肉は厚い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－暗橙褐色 | 1/3。<br>外面に黒斑あり。 |




第97図　第11号住居跡出土土器(2)

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 24 | 坏 | 口縁部径 21.0cm<br>器高 7.2cm | 口縁部は体部より内湾しながら開き、口唇部は短く内屈する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 2/3。 |
| 25 | 坏 | 口縁部径 (18.4cm)<br>器高 ( 6.5cm) | 口縁部は体部より内湾しながら立ち、口唇部は若干内湾する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/3。 |
| 26 | 坏 | 口径17.2<br>器高 5.5 | 口縁部は体部より強く内湾する。体部はやや偏平ぎみで、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－明橙褐色 | 2/3。 |
| 27 | 坏 | 口縁部径 (15.4cm)<br>器高 4.7cm | 口縁部は体部より内湾しながら開き、口唇部は短く内屈する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口唇部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－暗褐色<br>内－淡茶褐色 | 1/2。<br>外面に黒斑あり。 |
| 28 | 坏 | 口径(14.0)<br>器高 4.0 | 口縁部は体部より内湾ぎみに立つ。体部はやや深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－黒褐色<br>内－明橙褐色 | 1/3。 |
| 29 | 坏 | 口径13.8<br>器高 4.4 | 口縁部は体部より内湾ぎみに短く直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 2/3。<br>内面に黒色付着物あり。 |
| 30 | 坏 | 口径(14.0)<br>器高 3.8 | 口縁部は体部より内湾ぎみに短く直立する。体部はやや深く、底部は丸底を呈す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/3。 |
| 31 | 坏 | 口径(13.6)<br>器高( 3.6) | 口縁部は体部より内湾ぎみに短く直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/2弱。 |
| 32 | 坏 | 口径(13.2)<br>器高( 4.0) | 口縁部は体部より内湾ぎみに短く直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/3。 |
| 33 | 坏 | 口径13.0<br>器高 4.2 | 口縁部は体部より短く内傾する。体部は深く、底部は丸底を呈する。器肉は厚い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面は不明。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 2/3。 |
| 34 | 坏 | 口径(13.0)<br>器高 4.4 | 口縁部は体部より短く直線的にやや内傾する。体部はは深く、底部は丸底を呈す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面は不明。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－暗橙褐色 | 2/3。 |
| 35 | 坏 | 口径(12.6)<br>器高( 3.5) | 口縁部は体部より内湾ぎみに短く内傾する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面は不明。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/2。 |
| 36 | 坏 | 口径12.8<br>器高 3.0 | 口縁部は体部より短く直線的に内屈する。体部はやや浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | ほぼ完形。 |
| 37 | 坏 | 口径12.4<br>器高 3.9 | 口縁部は体部より短く内湾する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 2/3。 |




第98図　第11号住居跡出土土器（3）

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 38 | 坏 | 口径(11.6)<br>器高 3.9 | 口縁部は体部より短く内屈する。体部は深く、底部は丸底を呈する。器肉は厚い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/。 |
| 39 | 坏 | 口径12.0<br>器高 3.8 | 口縁部は体部より短く内湾ぎみに直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 3/4。 |
| 40 | 坏 | 口径10.8<br>器高 3.0 | 口縁部は体部より短く内湾する。体部はやや偏平ぎみで底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 2/3。<br>外面に黒斑あり。 |
| 41 | 坏 | 口径(10.8)<br>器高 3.0 | 口縁部は体部より短く内屈する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 3/4。 |
| 42 | 坏 | 口径11.0<br>器高 3.4 | 口縁部は体部より短く内湾する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－明橙褐色<br>内－淡灰褐色 | 2/3。 |
| 43 | 坏 | 口径11.0<br>器高 3.4 | 口縁部は体部より短く内屈し、口唇部内面に面をもつ。体部は深く、底部は丸底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 完形。 |
| 44 | 坏 | 口径10.8<br>器高 2.7 | 口縁部は体部より短く内屈する。体部はやや偏平ぎみで、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 2/3。<br>二次焼成を受けている。 |
| 45 | 坏 | 口径10.8<br>器高 3.1 | 口縁部は体部より短く内屈する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－明橙褐色 | ほぼ完形。<br>二次焼成を受けている。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 46 | 坏 | 口径10.6<br>器高 3.4 | 口縁部は体部より短く内屈する。体部は底部より方向を変え、底部は丸底を呈す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－明橙褐色 | ほぼ完形。 |
| 47 | 坏 | 口径10.6<br>器高 3.1 | 口縁部は体部より短く内屈する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 完形。 |
| 48 | 坏 | 口径10.6<br>器高 3.3 | 口縁部は体部より短く内屈する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗褐色 | ほぼ完形。 |
| 49 | 坏 | 口径(10.6)<br>器高 3.5 | 口縁部は体部より短く内湾ぎみに直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/2。 |
| 50 | 坏 | 口径10.8<br>器高 3.6 | 口縁部は体部より内湾ぎみに短く直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面は不明。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | ほぼ完形。 |
| 51 | 坏 | 口径(10.0)<br>器高 2.8 | 口縁部は体部より短く内屈する。体部は偏平ぎみで、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗褐色 | 1/2。<br>外面に黒斑あり。 |
| 52 | 坏 | 口径10.0<br>器高 3.1 | 口縁部は体部より短く内屈する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 2/3。 |
| 53 | 坏 | 口径(10.4)<br>器高 3.2 | 口縁部は体部より短く内湾ぎみに直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面は不明。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/3。<br>外面に黒斑あり。 |
| 54 | 坏 | 口径(10.2)<br>器高 3.1 | 口縁部は体部より短く内屈する。体部はやや偏平ぎみで、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－淡橙褐色<br>内－淡褐色 | 1/3。 |
| 55 | 坏 | 口径10.2<br>器高 3.2 | 口縁部は体部より短く内湾ぎみに内傾する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | ほぼ完形。 |
| 56 | 坏 | 口径(10.0)<br>器高 3.5 | 口縁部は体部より短く内湾ぎみに直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/3。<br>外面に黒斑あり。 |
| 57 | 坏 | 口径(10.0)<br>器高 3.1 | 口縁部は体部より短く直線的に直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面は不明。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/3。 |
| 58 | 坏 | 口径10.4<br>器高 3.1 | 口縁部は体部より短く内湾する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－橙褐色 | 1/2強 |
| 59 | 坏 | 口径( 9.8)<br>器高 3.2 | 口縁部は体部より短く内屈する。体分は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/2 |
| 60 | 坏 | 口径(10.0)<br>器高 2.8 | 口縁部は体部より短く内屈する。体分は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>外－明橙褐色<br>内－淡橙褐色 | 1/2 |

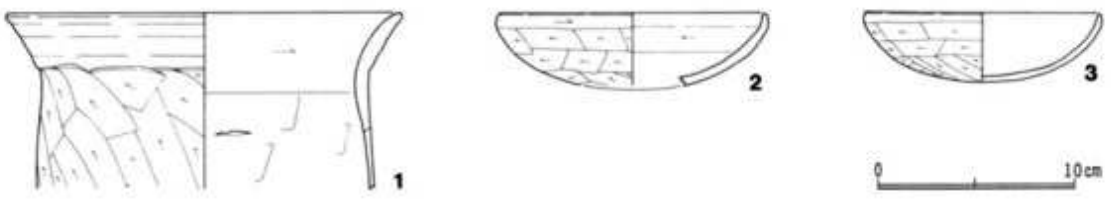
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 61 | 坏 | 口径 9.8<br>器高 2.5 | 口縁部は体部より短く内屈し、口唇部は若干肥厚する。体部は偏平で、底部は丸底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外-淡橙褐色 | ほぼ完形。器形はやや歪んでいる。 |
| 62 | 坏 | 口径10.8<br>器高 3.4 | 口縁部は短く直立し、体部との境に段をもつ。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外-黒褐色<br>内-淡茶褐色 | 2/3。 |
| 63 | 坏 | 口径11.6<br>器高 4.2 | 口縁部は短く緩やかに外反する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面はナデの後に放射状暗文を施す。 | 赤色粒・白色粒<br>内外-淡橙褐色 | 2/3。 |
| 64 | 須恵器<br>蓋 | 口径(18.0) | 口縁部は天井部より横に開き、口唇部外面に面をもつ。内面にはかえりをもつ。 | 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転施ケズリ、内面回転ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外-淡灰色 | 小破片。ロクロ回転右回り。 |
| 65 | 須恵器<br>蓋 | 口縁部径<br>11.0cm<br>器高<br>3.4cm | 口縁部は天井部より内湾ぎみに開き、内面にかえりをもつ。天井部はやや低く、宝珠状の低いつまみをもつ。 | 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転施ケズリ。内面回転ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外-淡灰色 | 4/5。<br>ロクロ回転右回り。 |
| 66 | 砥石 | 残存長 7.6<br>最大幅 4.0 | 平面及び断面の形態とも分銅形を呈する。上半部欠損。 | 表裏面及び両側面とも良く擦られている。 | 凝灰岩 | 約2/3。重量161g |

**第12号住居跡（第100図）**

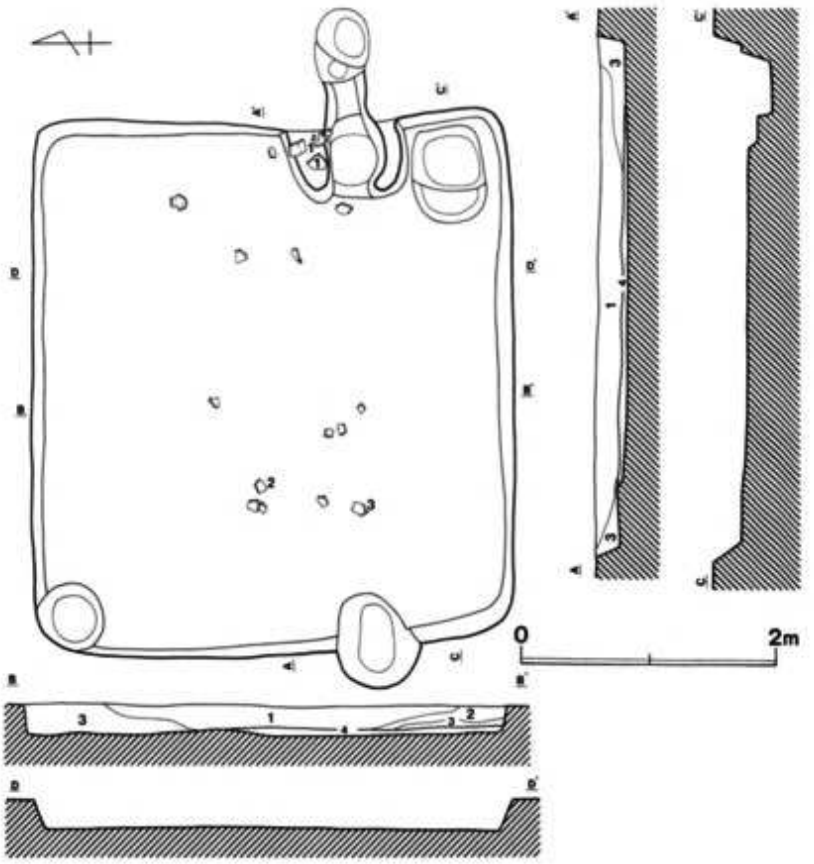
A地点の調査区北側に位置し、重複する第1号掘立柱建物跡に切られている。遺構の遺存状態は、比較的良好な方である。

平面形は、比較的整った方形を呈し、規模は、東西方向4.10m・南北方向3.74mある。住居の主軸方位は、N－90°－Eをとる。確認面からの深さは18cm～28cmあり、壁は直線的に立ち上がっている。各壁下とも壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土（第4層）を若干埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅緻である。貯蔵穴は、カマド南側の南東コーナー部に位置している。74cm×56cmの長方形ぎみの平面形を呈し、東側が方形状に一段深くなっている。床面からの深さは15cmあり、底面は平坦である。

カマドは、住居東側壁の中央南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。袖は、暗褐色土（第4層）を住居の壁に直接貼り付けて構築しているが、左側袖が直線的であるのに対して、右側袖は湾曲している。燃焼部は、住居の床面より若干掘り窪められており、燃焼部底面から煙道部にかけて厚く灰（第3層）が被覆している。煙道部は、燃焼部より一段高く、若干傾斜しながら直線的に壁外に延びているが、その先端部は後世のピットによって切られている。出土遺物は、比較




**第99図　第12号住居跡出土土器**



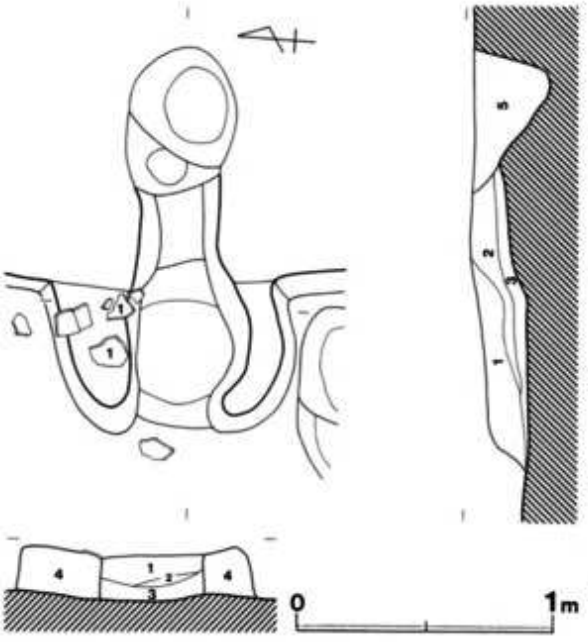

**第12号住居跡土層説明**

第１層：暗褐色土層（小石を均一に、炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第２層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第３層：黒灰色土層（マンガン塊を均一に、ローム粒子・小石を微量含む。粘性・しまりともない。）

第４層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。




**第12号住居跡カマド土層説明**

第１層：暗褐色土層（小礫を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第２層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）

第３層：黒褐色土層（炭化粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第４層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する）。

第５層：暗褐色土層（小礫・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

**第100図　第12号住居跡**

的少なく、カマド周辺や覆土中より土器片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土遺物より真間期の所産と考えられる。

**第12号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(20.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部との境にはケズリによる段を有する。胴部は張らない。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗橙褐色 | 約1/3。<br>外面に黒斑あり。 |
| 2 | 坏 | 口径(13.6)<br>器高( 3.9) | 口縁部は体部より短く直立直立し、体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗橙褐色 | 1/4。 |
| 3 | 坏 | 口径(12.0)<br>器高 3.6 | 口縁部は体部より短く内湾ぎみに直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 1/4。<br>器表面は荒れている。 |

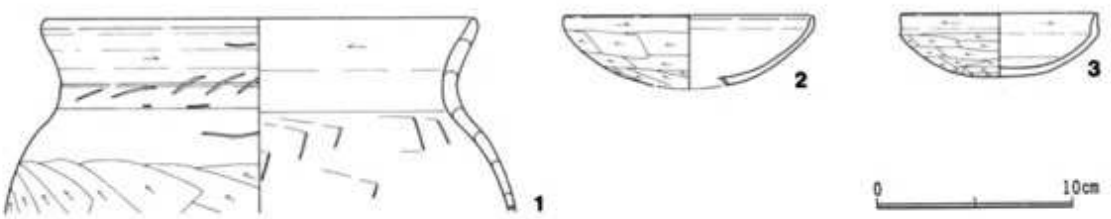
**第13号住居跡（第102図）**

A地点の調査区北側の西端に位置する。重複する第16号住居跡を切っているが、第1号掘立柱建物跡に切られている。遺構の遺存状態は比較的良好な方ではあるが、住居跡の西側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

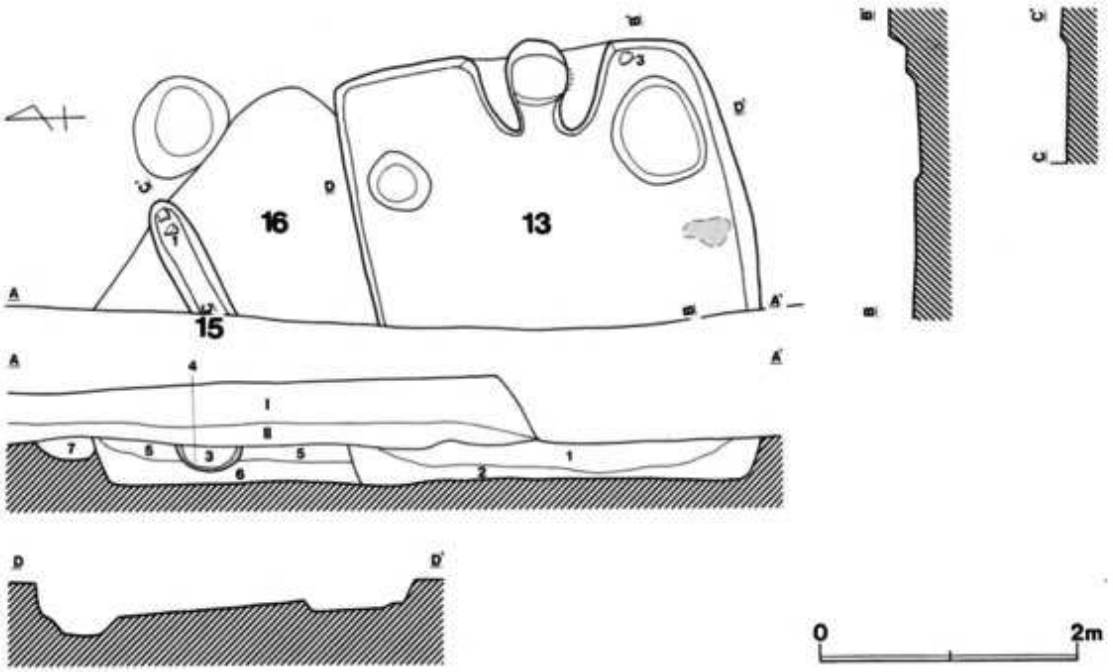
平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われ、規模は南北方向3.02m・東西方向は2.20mまで測れる。住居の主軸方位は、N－81°－Eをとる。確認面からの深さは27cmあり、壁は直線的に立ち上がっている。各壁下とも壁溝は見られない。床面は直床式で、全体に堅緻で平坦であるが、やや北に向かって傾斜している。カマド南側の南東コーナー部には土壙状の掘り込みがある。規模は大きいが、床面からの深さは10cm程度と非常に浅く、一般的な貯蔵穴とは形態を異にしている。

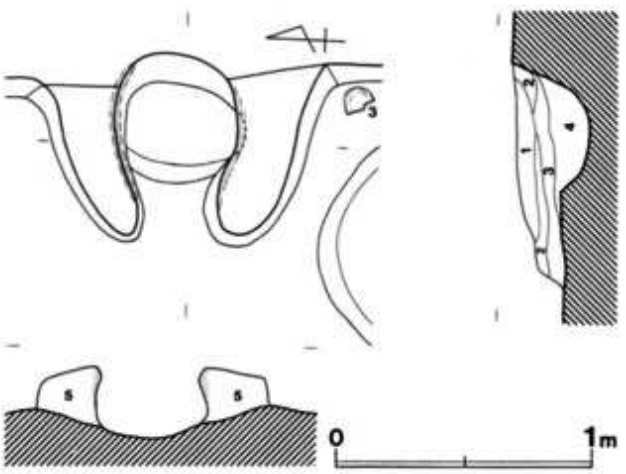
カマドは、住居東側壁の中央やや南側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土(第5層)を、壁に直接貼り付けて構築している。左右両袖とも内湾し、燃焼部に比べて焚口部が狭い形態をとっている。燃焼部は、住居の壁を若干掘り込む形態で、比較的深い掘り方(第4層)をもつ。燃焼面は住居の床面とほぼ同じ高さであり、比較的良く焼けている。煙道部は、すでに削平されているため不明である。出土遺物は、土器が覆土中より少量出土している。このうち、No3の坏は、カマド南側の床面上より出土したもので、本住居跡に伴うものと考えられる。

本住居跡の時期は、出土遺物より真間期の所産と考えられる。




**第101図　第13住居跡出土土器**




第102図　第13・15号住居跡

**第13～16号住居跡土層説明**

**＜第13号住居跡＞**

第１層：黒褐色土層（小礫を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第２層：黒褐色土層（小礫を均一に、炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**＜第15号住居跡カマド煙道部＞**

第３層：暗褐色土層（小石、焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第４層：赤褐色土層（焼土層。）

**＜第16号住居跡＞**

第５層：黒褐色土層（小礫を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第６層：暗褐色土層（小礫・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第７層：暗赤褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

**第13号住居跡カマド土層説明**

第１層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、炭化粒子･焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第２層：赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第３層：黒褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第４層：黒褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第５層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

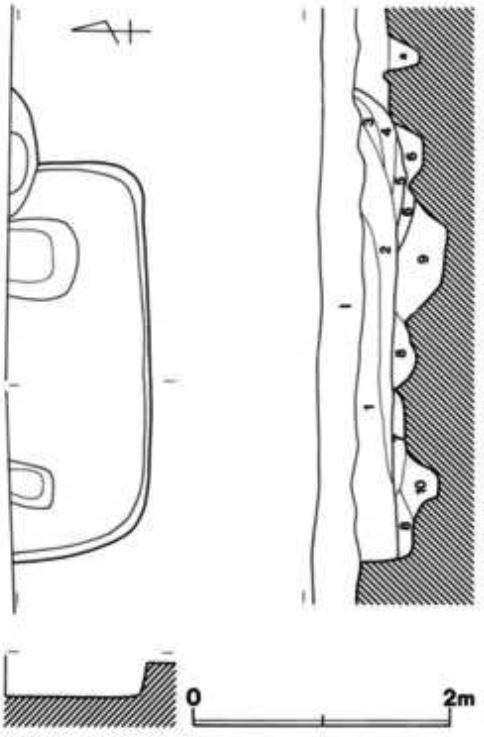
**第13号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 広口壺 | 口縁部径<br>(22.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は内湾ぎみに上方を向く。胴部は強く張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡褐色 | 1/4。 |
| 2 | 坏 | 口径(13.0)<br>器高( 3.8) | 口縁部は体部より短く直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/4。 |
| 3 | 坏 | 口径(10.0)<br>器高 3.3 | 口縁部は体部より短く外反ぎみに直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－黒褐色<br>内－淡茶褐色 | 1/4。 |

## 第14号住居跡（第103図）

A地点の調査区北端に位置する。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、住居の北側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われ、規模は東西方向3.06m・南北方向は1.12mまで測れる。住居の主軸方位は、N－88°－Eをとる。確認面からの深さは28cmあり、壁は直線的で垂直ぎみに立ち上がる。調査区内で検出された各壁下には壁溝は見られない。床面は、暗黄褐色土(第7層)や暗褐色土(第8層)を埋め戻した貼床式であるが、床下の状況は複雑で、長方形状の掘




第103図　第14号住居跡

**第14号住居跡土層説明**

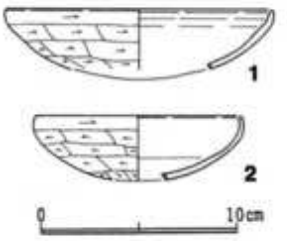
第1層：黒褐色土層（小礫を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第2層：暗褐色土層（小礫・焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に、焼土ブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第4層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）
第5層：黒褐色土層（炭化粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第6層：淡灰褐色土層（小礫を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第7層：暗黄褐色土層（小礫・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第8層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第9層：黒色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第10層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第a層：淡灰色土層（小礫を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

り込み(第9・10層)も見られる。全体に平坦で、住居中央部は堅緻であるが、周辺部は軟弱である。主柱穴や貯蔵穴は、調査区内で検出された範囲には見られない。

カマドは、住居の東側壁に位置し、壁に対して直角に付設されている。調査区内で検出されたのはその南側半分だけであるため、カマドの全容は不明である。袖はなく、燃焼部は住居の壁をかなり掘り込んだ形態をとっている。燃焼面は、住居の床面より若干低く、壁は非常に良く焼けている。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

本住居跡の覆土は2層に分かれるが、住居跡の東側からの流入が顕著である。特に第2層の暗褐色土はカマド上半を削り取るように流入しており、2層とも小礫を均一に含んでいることから、洪水などによる短時間の埋没が推測される。なお、本住居跡と同様な埋没状況は、同時期と考えられる第13号住居跡でも認められる。出土遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土土器より真間期の所産と考えられる。




**第104図　第14号住居跡出土土器**

**第14号住居跡出土土器観察表**

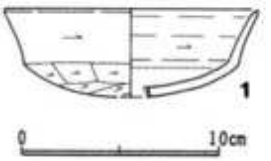
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径(13.6)<br>器高( 3.6) | 口縁部は体部より短く直立する。体部はやや浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 1/4。 |
| 2 | 坏 | 口径(10.6)<br>器高( 3.3) | 口縁部は体部より短く内湾ぎみに直立する。体部は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外-明橙褐色 | 1/5。 |

## 第15号住居跡（第102図）

A地点の調査区北側の西端に位置し、重複する第16号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、カマドの煙道部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

カマド煙道部は、調査区内で約1mほど検出されており、全体に非常に良く焼けている。出土遺物は、煙道部の先端より甕と坏の破片が出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土土器より鬼高期の所産と推測される。




**第105図　第15号住居跡出土土器**

**第15号住居跡出土土器観察表**

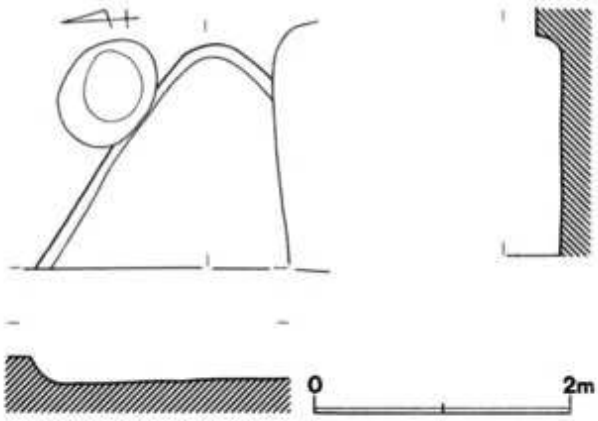
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径(13.0)<br>器高( 4.5) | 口縁部は緩やかに外反し、口唇部は尖る。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>赤色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/4。 |

**第16号住居跡（第106図）**

A地点の調査区北側の西端に位置し、重複する第13号住居跡と第15号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは、住居跡の東側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

確認面からの深さは25cm程度あり、壁は比較的緩やかに立ち上がっている。床面は直床式で、全体に平坦で堅緻である。出土遺物は、土器片がごく少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器より鬼高期の所産と推測される。




第106図　第16号住居跡

**第17号住居跡（第108図）**

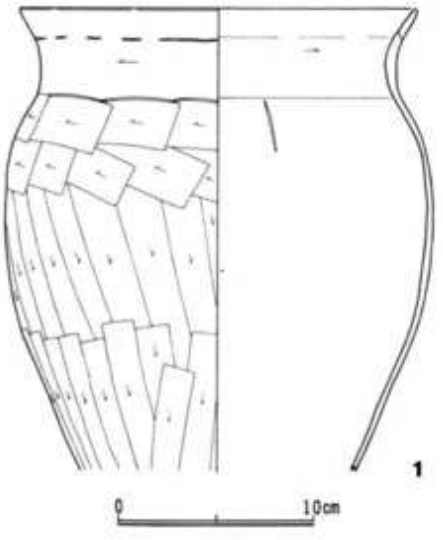
A地点の調査区南側の南西端に位置し、重複する第18号住居跡と第4号土壙を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とはいえない。住居跡の西側は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、長方形を呈するものと思われるが、南北両側の壁は平行せずにやや歪んでいる。規模は、南北方向2.32m・東西方向は2.80mまで測れる。住居の主軸方位は、N－78°－Eをとる。確認面からの深さは3cm～7cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。住居東側壁のカマドより南側は、ロームブロックを主体とする黄褐色土(第2層)によって貼壁されており、カマドより北側の壁とは約15cm内側にずれている。各壁下とも壁溝は見られない。床面は、全体に堅緻で平坦であるが、やや起伏が見られる。主柱穴や貯蔵穴等の住居内施設はまったくない。

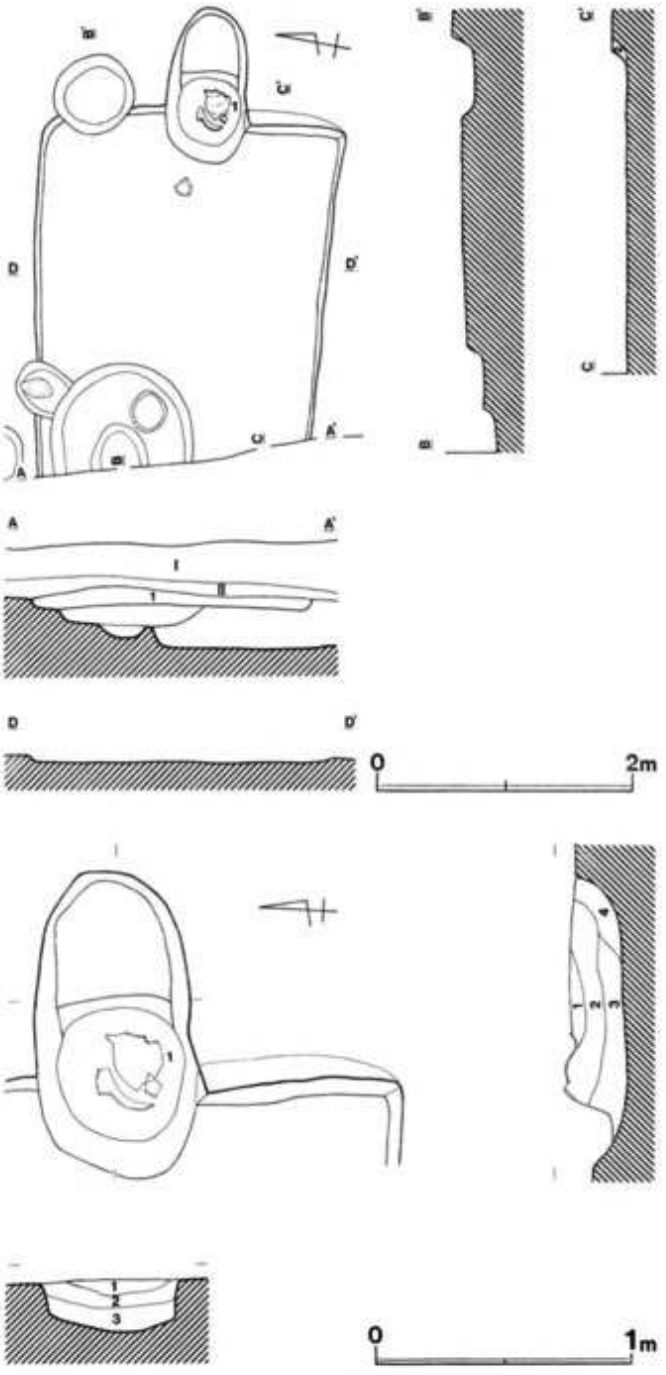
カマドは、東側壁の中央に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長118cm・最大幅60cmを測る。袖はなく、燃焼部は住居の壁をかなり掘り込んだ形態をとっている。燃焼面は、床面より10cm程度低く、壁面は比較的良く焼けている。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

出土遺物は、土器片が少量出土しただけである。このうちNo.1の甕は、カマド内から出土したもので、本住居跡に伴うものである。

本住居跡の時期は、出土土器より国分期初頭の所産と考えられる。




第107図　第17号住居跡出土土器




**第17号住居跡土層説明**

第１層：暗褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第２層：黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**第17号住居跡カマド土層説明**

第１層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）

第２層：黒灰色土層（炭化粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第３層：暗灰色土層（マンガン塊・焼土ブロック・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第４層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

**第108図　第17号住居跡**

**第17号住居跡出土土器観察表**

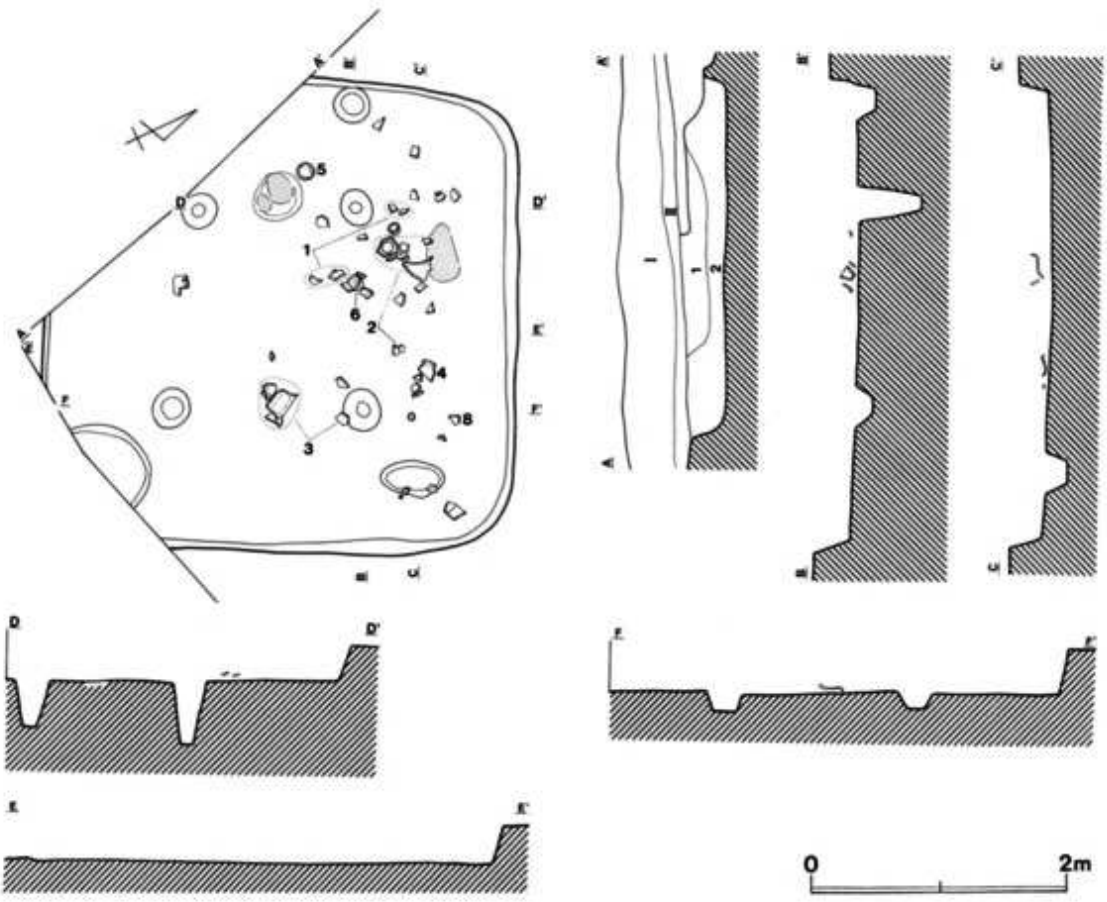
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径（20.4cm）<br>残存高 23.7cm | 粘土紐積み上げ成形。頸部は外反ぎみに直立し、口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。胴部はやや張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 2/3。 |

**第18号住居跡（第109図）**

A地点の調査区南西端に位置し、重複する第17号住居跡と第4号土壙に切られている。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、住居跡の西側と南側コーナー部は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ方形を呈し、規模は北西～南東方向3.68m・北東～南西方向3.66mある。住居の主軸方位は、N－64°－Wをとる。確認面からの深さは35cmあり、壁は直線的に立ち上がっている。各壁下に壁溝は見られない。床面は直床式で、堅緻で平坦に作られているが、全体に細かな凹凸が見られる。主柱穴は4本主柱穴で、住居の対角線上に位置している。いずれも直径30cm程度の円形を呈するが、深さはまちまちである。住居の南側コーナー部には規模の大きな円形状の掘り込みがあるが、これは本住居跡に伴うものではなく、後世の攪乱である。

炉は、住居北西側の主柱穴間中央に位置している。床面を若干掘り窪めた地皿炉で、直径約30cm

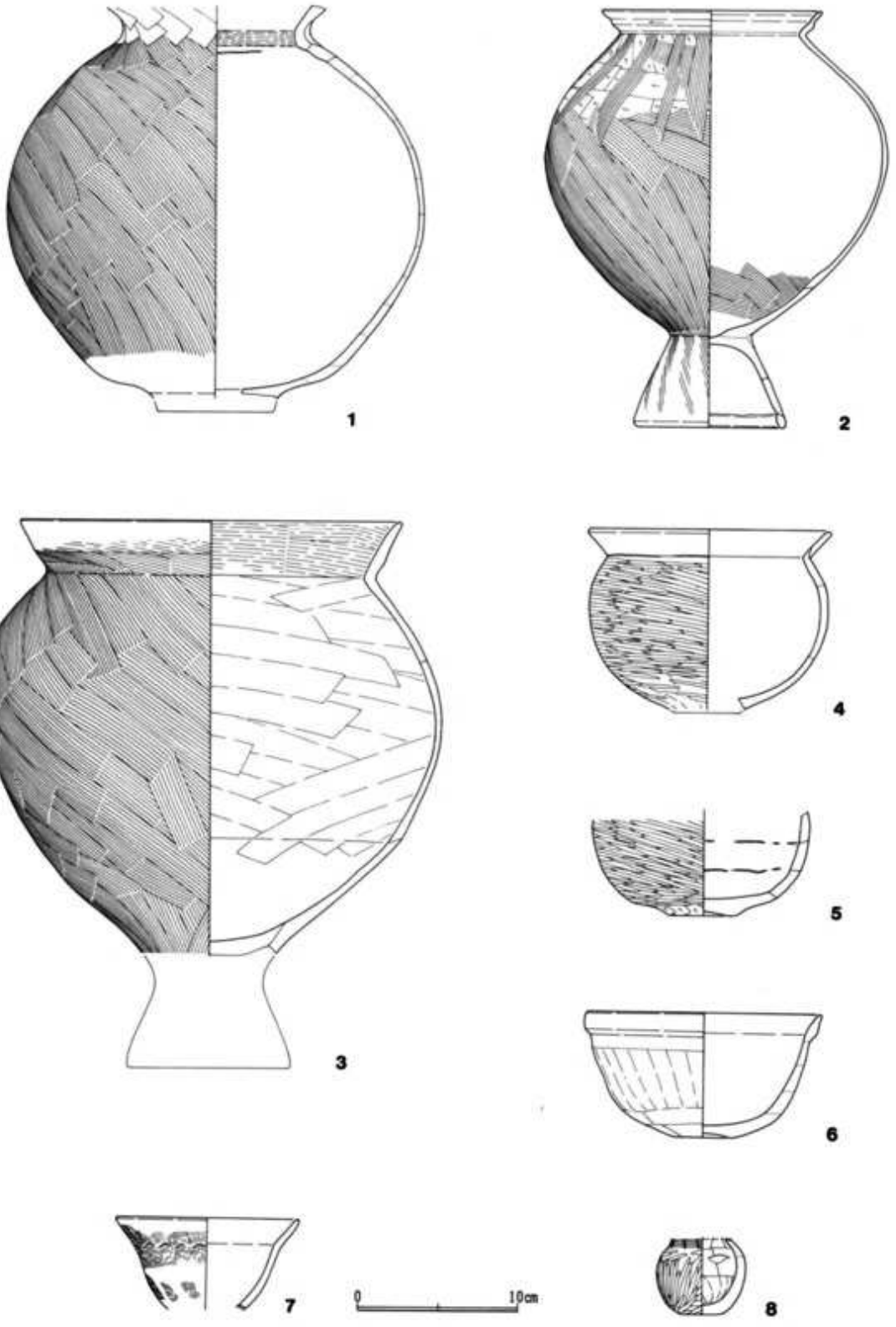



**第109図　第18号住居跡**

**第18号住居跡土層説明**

第1層：黒褐色土層（マンガン塊を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（マンガン塊を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）




**第110図　第18号住居跡出土土器**

の円形を呈している。底面は良く焼けて、赤色化している。出土遺物は、住居東側の床面近くより、比較的多くの土器が出土している。これらの土器は、原形を止めているものは少なく、多くは散乱したような状態であった。住居跡北東側の覆土下層中には焼土ブロックを多量に含む部分がある。本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土土器より五領期の所産と考えられる。

**第18号住居跡出土土器観察表**

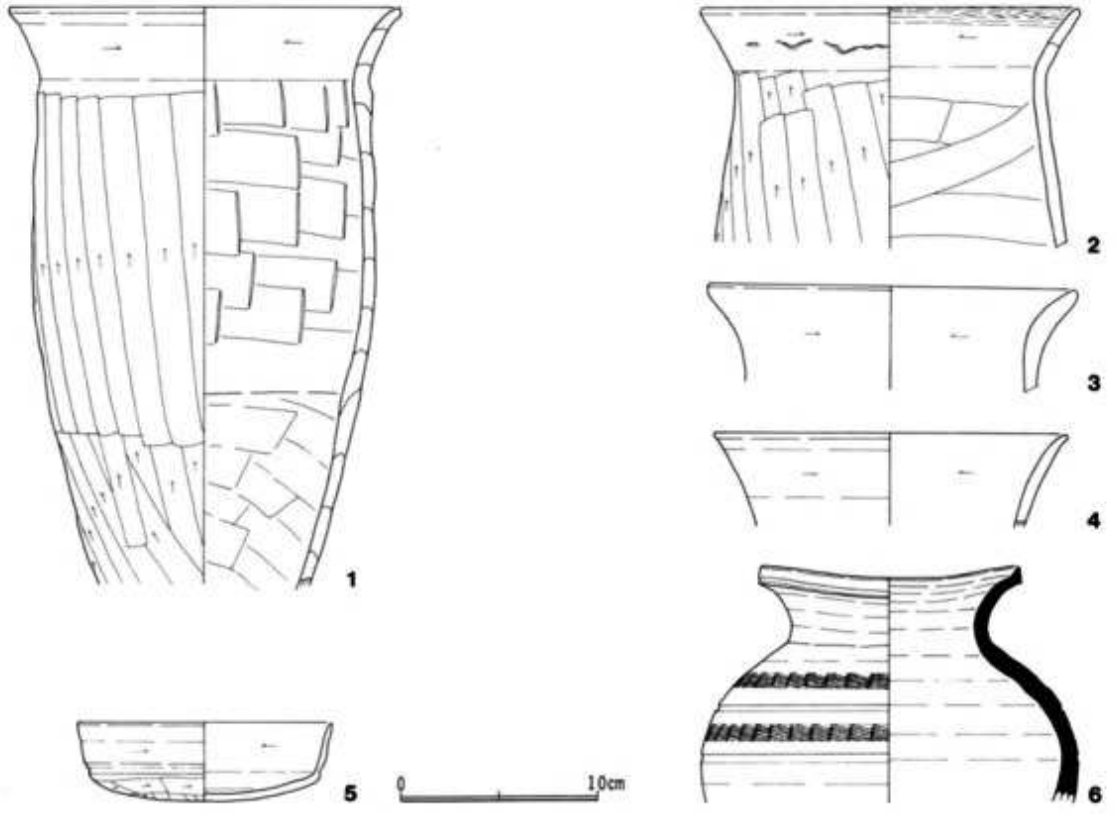
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺 | 残存高<br>24.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁は強く外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部は突出する。 | 口縁部内外面ハケの後ナデ。胴部外面斜方向のハケの後下部にナデを加える。胴部内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 1/3。 |
| 2 | 台付甕 | 口縁部径<br>13.6cm<br>器高<br>25.5cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部はS字状を呈する。胴部は強く張り、最大径を中位にもつ。台部はハの字状に開き、端部を折り返す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ハケの後下半に一部ハケを加える。台部外面ハケの後部分的なナデ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－暗褐色 | 3/4。 |
| 3 | 台付甕 | 口縁部径<br>23.4cm<br>残存高<br>26.5cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は強く張り、最大径を中位にもつ。 | 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面斜方向のハケ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－明茶褐色<br>内－暗灰褐色 | 1/2。 |
| 4 | 鉢 | 口縁部径<br>(15.0cm)<br>残存高<br>11.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は張り、底部は若干突出すると思われる。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデ。 | 白色粒<br>内外-暗茶褐色 | 1/4。<br>外面に煤の付着あり。 |
| 5 | 小型壺 | 底部径<br>4.0cm | 粘土紐輪積み成形。底部は突出する若干上げ底風の小さな平底を呈する。 | 胴部外面ミガキ、内面ナデ。底部外周ケズリ、外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－明茶褐色<br>内－暗褐色 | 胴部下半のみ。<br>外面に煤の付着及び黒斑あり。 |
| 6 | 壺 | 口径14.6<br>器高 7.6<br>底径 3.5 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は複合口縁状を呈す。胴部は張らず、底部は突出しない上げ底風の平底を呈す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面篦ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部内外面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－明茶褐色 | 完形。<br>二次焼成を受けている。 |
| 7 | 壺 | 口縁部径<br>(11.2cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は張らない。 | 外面ハケの後ナデ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 1/3。 |
| 8 | ミニチュア | 残存高<br>4.6cm<br>底部径<br>2.5cm | 粘土紐積み上げ成形。胴部は球形に張り、最大径を中位にもつ。底部は平底を呈する。 | 胴部外面ナデの後ミガキ、内面指ナデの後上半篦ナデ。底部外面ナデ。頸部外面に篦描による等間隔止簾状文。 | 赤色粒・白色粒<br>外－茶褐色<br>内－暗褐色 | 胴部のみ。 |

**第19号住居跡（第112図）**

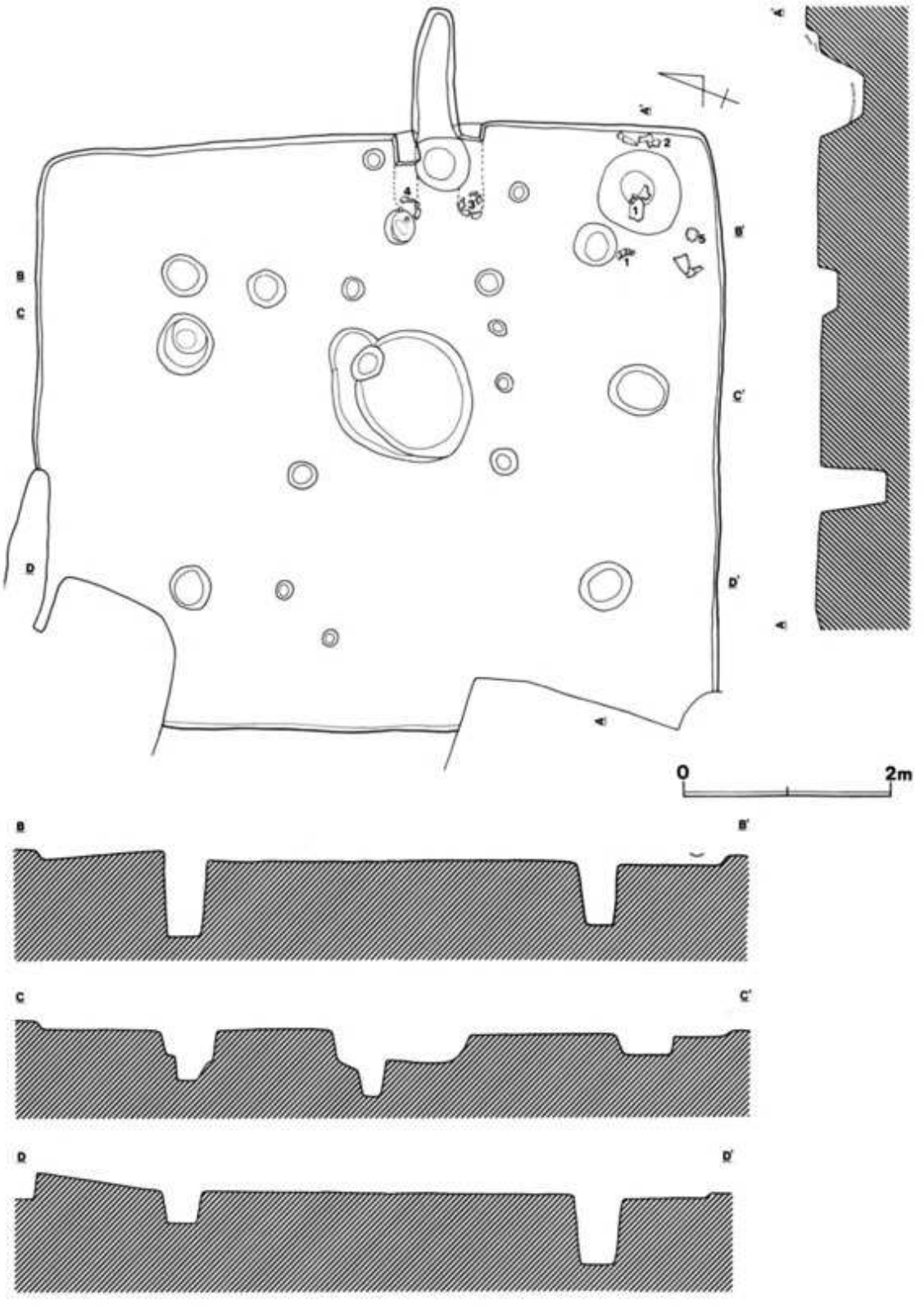
A地点の調査区の中央部に位置する。重複する第７号住居跡と第11号住居跡に切られ、第20号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えず、かろうじて残存しているような状況である。

平面形は、比較的整った長方形を呈する。規模は、南北方向6.50m・東西 方向5.60mを測り、検出された住居跡の中では比較的大型の住居跡である。住居の主軸方位は、N－67°－Eをとる。確認面からの深さは３cm～16cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。各壁下には壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるのに対して、周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、住居のほぼ対角線上に４本ある。形態は、直径40cm～60cmの円形を呈し、床面からの深さは30cm～80cmある。住居中央部やカマド周辺には浅い小ピットが多く見られるが、その性格は不明である。貯蔵穴は、住居の南東コーナー部に位置し、直径80cm程度の不整円形を呈している。確認面からの深さは55cmあり、底面は平坦である。貯蔵穴内からは、No１の甕の破片が出土している。この他、住居中央部には大きな円形の土壙状の掘り込みがあるが、これは本住居跡に伴うものではなく、後世の攪乱である。

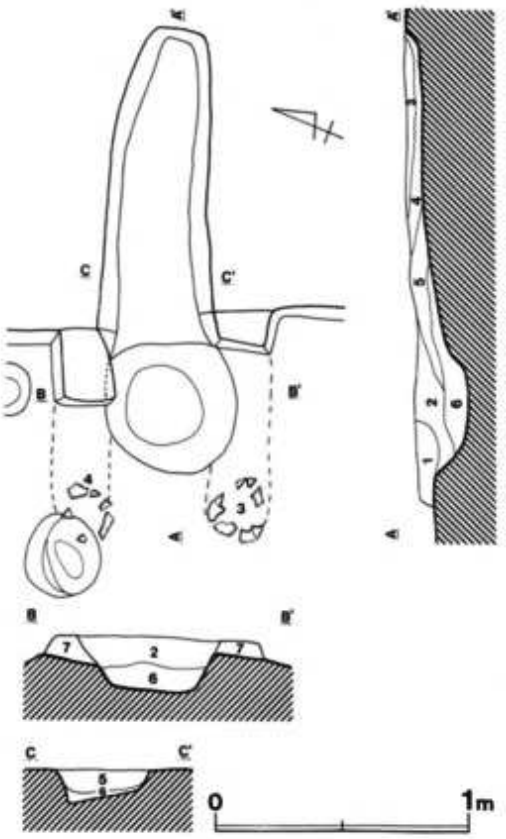
カマドは、住居東側壁の中央やや南寄りに位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は、全長194cm・幅90cmを測る。袖は、暗褐色土（第７層）を住居の壁に直接貼り付けて構築している。大部分はすでに削平されているが、床面にその痕跡が見られ、袖の先端部の補強に使われたと考え




**第111図　第19号住居跡出土土器**




**第112図　第19号住居跡**




**第19号住居跡カマド土層説明**

第1層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第3層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第4層：暗褐色土層（焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第5層：暗赤褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

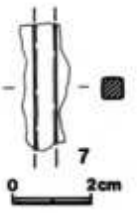
第6層：暗灰色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**第113図　第19号住居跡カマド**

られる甕の口縁部破片(No３・４)が残存していた。燃焼部は、住居の壁を掘り込まず、床面よりも一段深い形態であるが、あまり焼けていない。煙道部は、燃焼部から緩やかに移行し、住居の壁外に若干湾曲ぎみに延びている。出土遺物は、カマド内や貯蔵穴周辺より土器片が出土している。これらは、カマドの一部に使用されたもの(No３・４)や、貯蔵穴内(No１)および住居の床面付近(No２・５)から出土しているため、そのほとんどが本住居跡に伴うものと考えられる。土器以外では、覆土中より棒状の鉄製品(No７)が出土している。

本住居跡の時期は、出土遺物より鬼高期の所産と考えられる。




**第114図**
**棒状鉄製品**

**第19号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(20.2cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らず、長胴を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | 1/2。 |
| 2 | 甕 | 口縁部径<br>(19.5cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部はあまり張らない。 | 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケの後ナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－明茶褐色 | 1/2。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 甕 | 口縁部径 19.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや長く、緩やかに外反する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。 | 片岩粒・白色粒 赤色粒 内外－茶褐色 | 口縁部のみ。 |
| 4 | 甕 | 口縁部径 (18.2cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は短く横に向く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。 | 片岩粒・白色粒 赤色粒 内外－明茶褐色 | 1/2。 |
| 5 | 坏 | 口縁部径 (13.0cm) 器高 4.0cm | 口縁部は直線的に若干外傾し、体部との境に凹線を有する。体部は浅く、丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒 内外－明茶褐色 | 2/3。 |
| 6 | 須恵器 壺 | 口縁部径 (13.2cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。口唇部は上下に摘まみ出され、外面に凹線をもつ。胴部は球形に張る。 | 内外面とも回転ナデ。胴部外面に５本歯の櫛描波状文を２段施す。 | 白色粒 外－淡灰色 内－暗灰色 | 1/2。 口縁部は歪んでいる。 |
| 7 | 棒状鉄器 | 残存 3.2 厚さ 0.5 | 棒状の鉄器の一部で、両端を欠失している。断面は方形を呈するが、やや丸みをもつ。錆はかなり進行し、地金深くに及んでいる。残存部約1/3。 | | | |

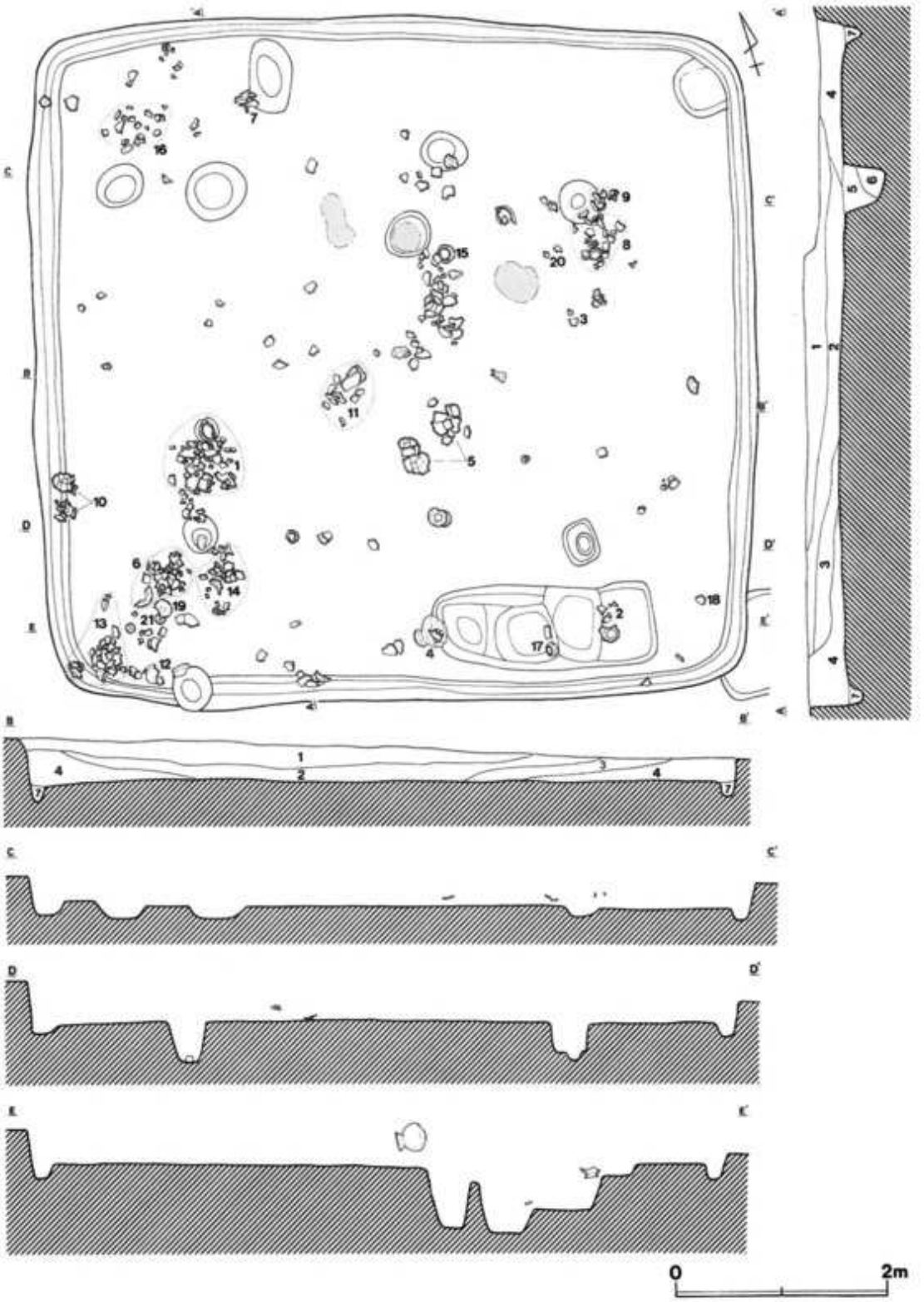
**第20号住居跡（第115図）**

Ａ地点の調査区中央部に位置し、重複する第２号住居跡・第７号住居跡・第19号住居跡及び第５号土壙によって切られている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ比較的整った方形を呈する。規模は、南北方向6.34m・東西方向6.74mを図り、検出された住居跡の中では比較的大型の住居跡である。住居の主軸方位は、Ｎ－21°－Ｅをとる。確認面からの深さは、西側で40cm・東側で20cmあり、壁は直線的で垂直ぎみに立ち上がる。各壁下には幅15cm・深さ10cm程度の壁溝があり、途切れずに全周している。床面は、住居の周辺部をロームブロックを含む黄褐色土で若干埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるのに対して、周辺部はやや軟弱である。全体に平坦であるが、住居中央部には細かな凹凸が顕著に見られる。主柱穴は、住居の対角線上に位置する４本主柱穴である。形態は、32cm～64cmの円形や不整形を呈し、深さは北側の２本が10cm程度とかなり浅いのに対して、南側の２本は40cmと深くなっている。これらの主柱穴のうち南西側の柱穴では、その底面より礎石と考えられる自然石が１個出土している。貯蔵穴は、住居南側壁付近の東寄りに位置している。平面形は 212cm×68cmの長方形に近い形態を呈しているが、底面は一様ではなく、深さの異なる４つの方形状の掘り込

**第20号住居跡土層説明**

第１層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第２層：黒褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第４層：暗茶褐色土層（鉄滓・マンガン塊を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗灰色土層（ローム粒子を均一に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第６層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第７層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）




**第115図　第20号住居跡**

みが並列した形状をなしている。床面からの深さは、西側から順に55cm・60cm・42cm・10cmあり、いずれも底面は平坦である。貯蔵穴内からは、№２の壺や№17の小形鉢がその覆土中より出土している。

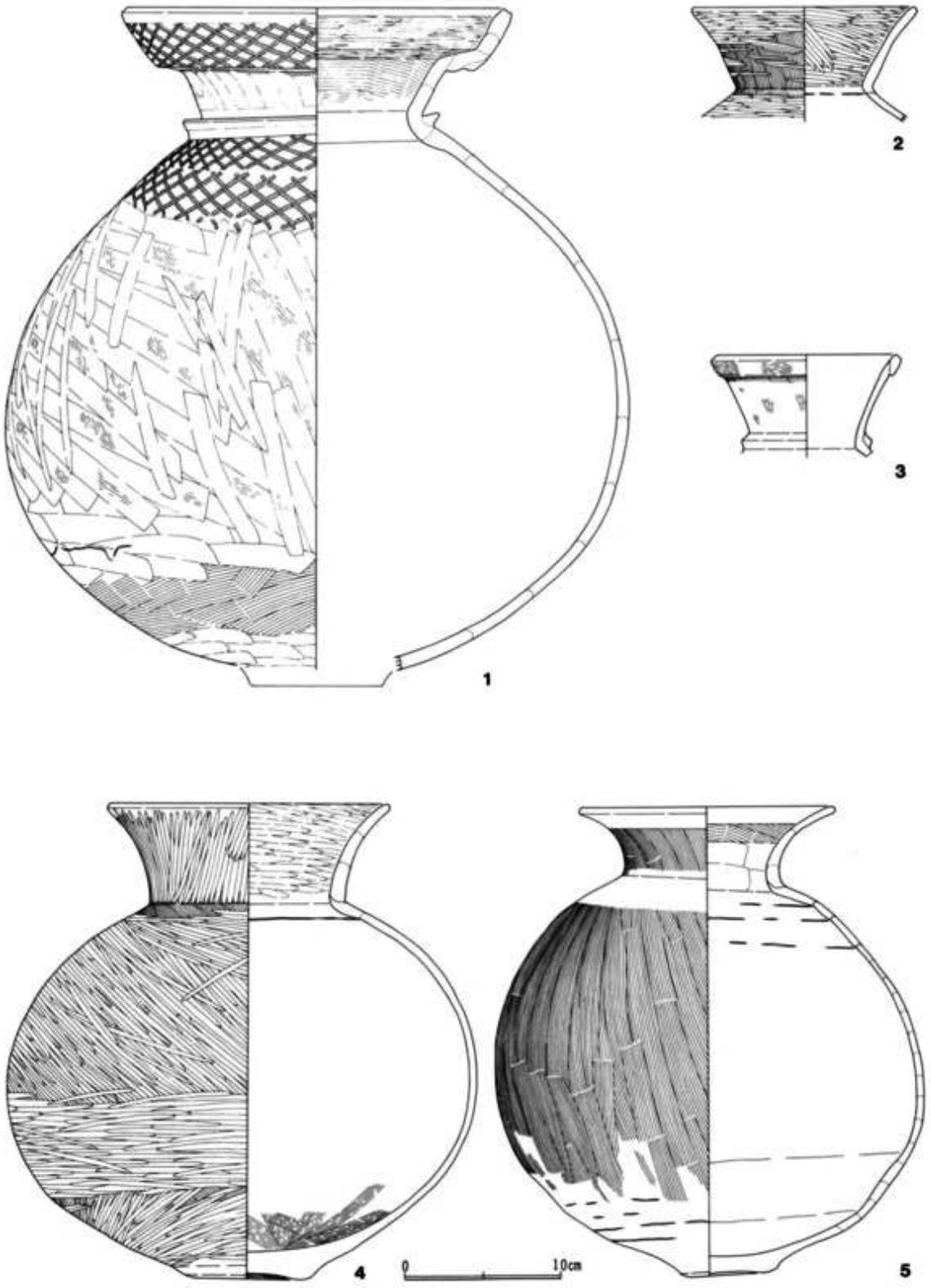
炉は、主炉と副炉とでも呼ぶべき２形態の異なる炉があり、両者は近接して位置している。主炉は、住居北側の主柱穴間中央のやや内側寄りに位 置する。形態は、床面を若干掘り窪めた地皿炉で、直径40cmの円形を呈し、底面は良く焼けている。副炉は、主炉の西側約30cmと東側約70cmの２箇所に位置している。いずれも床面が焼けているだけの地床炉で、不整形を呈しているが、非常に良く焼けて周囲の床面よりも堅化している。

出土遺物は、比較的豊富で多くの土器が出土しているが、これらの土器のすべてが本住居跡に伴う一括資料と考えることはできない。住居中央部から出土した土器は、床面上に位置するものが多く見られるが、住居の周辺部から出土した土器には、床面からかなり浮いた覆土中に位置するものがいくつかあり、住居廃絶後の覆土中に投棄されたと推測されるものも存在する。

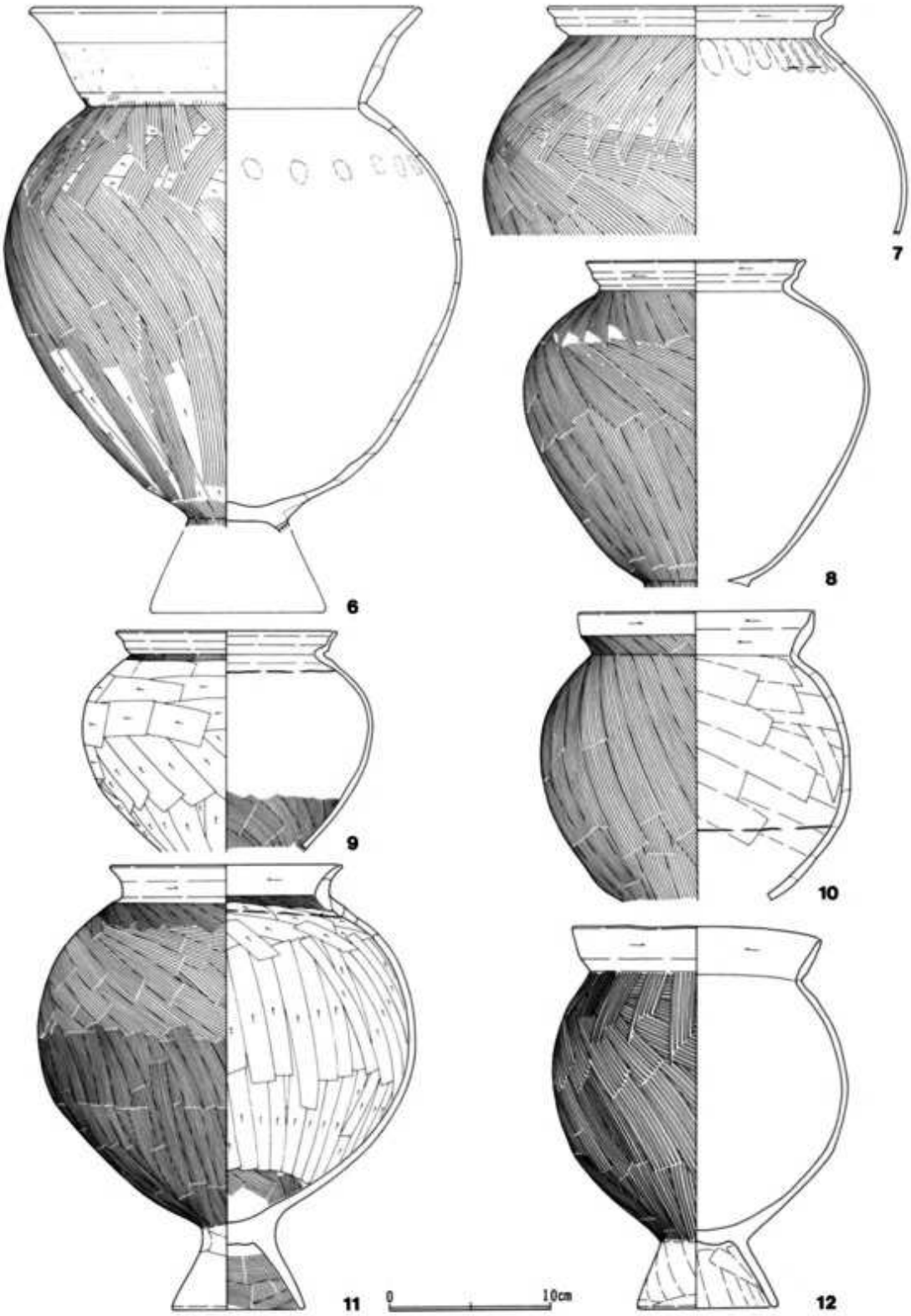
本住居跡の時期は、出土土器より五領期の所産と考えられる。

**第20号住居跡出土土器観察表**

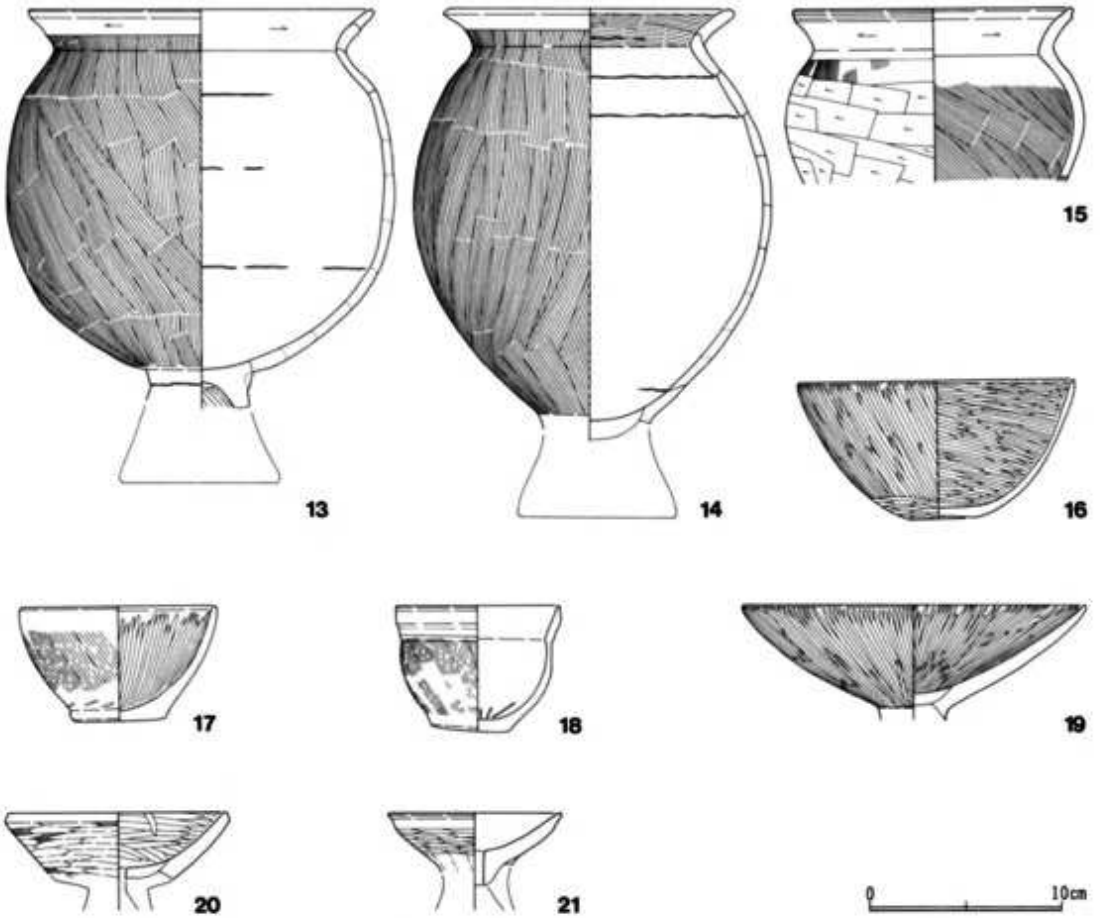
| No. | 器 種 | 法 量 | 形態・成形手法の特徴 | 調 整 手 法 の 特 徴 | 胎 土・色 調 | 備 考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺 | 口縁部径 24.6cm<br>残 存 高 41.5cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は二重口縁を呈し、口唇部は面をもつ。頸部と胴部の境には断面三角形の貼り付け凸帯を有する。胴部は強く張り、最大径をやや下位にもつ。 | 口唇部及び頸部凸帯ヨコナデ。口縁部及び頸部外面ハケの後ナデ、内面ハケの後ミガキ。胴部外面ハケの後篦ナデ、内面ナデ。口縁部と胴部上半に節が太く粗い撚糸を施文。 | 片岩粒・赤色粒 白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 3/4。 |
| 2 | 壺 | 口縁部径 (14.2cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。頸部は「く」の字をなす。 | 口縁部外面ハケの後ミガキ、内面ミガキ。胴部外面ハケの後ミガキ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/2。 |
| 3 | 壺 | 口縁部径 12.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は幅狭の複合口縁を呈し、頸部と胴部の境に断面三角形の貼り付け凸帯を有する。 | 口縁部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 3/4。 |
| 4 | 壺 | 口径17.8<br>器高29.9<br>底径 8.0 | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反し、頸部は「く」の字を呈する。胴部は強く張り、底部は上げ底風の突出する平底を呈する。 | 口縁部内外面ミガキ。胴部外面ハケの後ミガキ、内面ナデ。底部内外面ハケ。 | 片岩粒・赤色粒 白色粒<br>内外－明茶褐色 | ほぼ完形。底部外面は摩滅顕著。外面に黒斑あり。 |
| 5 | 壺 | 口径16.2<br>器高29.5<br>底径 6.0 | 粘土紐輪積み成形。口縁部は比較的強く外反し、頸部は「く」の字を呈する。胴部は強く張り、底部は上げ底風の突出する平底を呈する。 | 口縁部内外面ハケの後口唇部内外面ヨコナデ。頸部内面篦ナデ。胴部外面ナデの後ハケ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－明茶褐色<br>内－淡褐色 | 4/5。胴部はやや歪んでいる。底部外面は摩滅顕著。 |
| 6 | 台付甕 | 口縁部径 24.2cm<br>残 存 高 32.1cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は長く緩やかに外反し、下部に不明瞭な段をもつ。胴部は強く張り、最大径をやや上位にもつ。 | 口縁部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。口唇部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半左下がり・下半右下がりのハケ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒 白色粒<br>内外－淡褐色 | 残存部ほぼ完形。<br>外面は煤の付着顕著。 |




**第116図　第20号住居跡出土土器（1）**




第117図　第20号住居跡出土土器(2)




第118図　第20号住居跡出土土器（3）

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 7 | 台付甕 | 口縁部径<br>18.2cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状を呈し、口唇部は肥厚する。胴部は張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>赤色粒<br>内外－淡灰褐色 | 1/2。 |
| 8 | 台付甕 | 口縁部径<br>13.6cm<br>残存高<br>20.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状を呈し、口唇部に凹線をもつ。胴部は張り、最大径を上位に有する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/2。 |
| 9 | 台付甕 | 口縁部径<br>13.6cm<br>残存高<br>13.5cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状を呈する。胴部は強く張り、最大径をやや上位に有する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ハケ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面ナデの後下半ハケ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 3/4。<br>外面下半は二次焼成を受けている。 |
| 10 | 台付甕 | 口縁部径<br>14.6cm<br>残存高<br>17.7cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、上半は直立する。胴部は張り、最大径を中位に有する。 | 口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－明茶褐色 | 3/4。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 11 | 台付甕 | 口縁部径 14.4cm<br>器高 27.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は強く張る。台部は小さく、直線的に開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ハケの後ケズリ。台部外面ナデ、内面ハケ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 3/4。<br>外面に黒斑あり。 |
| 12 | 台付甕 | 口縁部径 15.4cm<br>器高 23.5cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張る。台部は低く、直線的に開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ナデ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－明茶褐色 | 4/5。 |
| 13 | 台付甕 | 口縁部径 17.8cm<br>残存高 20.3cm | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反し、中位に若干稜をもつ。胴部は張り、最大径を中位にもつ。 | 口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。台部内外面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 4/5。<br>外面に煤の付着あり。 |
| 14 | 台付甕 | 口径 15.0<br>残存高21.5 | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、やや長胴を呈する。 | 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 残存部完形。<br>外面に煤の付着あり。 |
| 15 | 甕 | 口縁部径 14.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部はやや上方に向き、外面に凹線をもつ。胴部は張る。 | 口縁部内外面刷毛状工具によるヨコナデ。胴部外面ハケの後ケズリ、内面ハケ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 3/4。 |
| 16 | 埦 | 口径14.2<br>器高 7.1<br>底径 3.4 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は体部より内湾しながら開く。底部は平底を呈する。 | 外面ケズリの後ミガキ、内面ミガキ。底部外面ミガキ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 1/2。 |
| 17 | 埦 | 口径10.2<br>器高 5.9<br>底径 4.7 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾しながら開き、底部は突出ぎみの平底を呈す。 | 外面ハケの後ナデ、内面ミガキ。底部外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>片岩粒<br>内外－明茶褐色 | ほぼ完形。<br>内面タール状の付着物。 |
| 18 | 埦 | 口径 8.4<br>器高 6.5<br>底径 4.0 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く直線的に外傾し、肥厚する。底部は突出ぎみの平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。底部外面ハケの後ナデ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 4/5。 |
| 19 | 高坏 | 口縁部径 17.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は脚接合部より内湾ぎみに強く開く。 | 口縁部内外面ともミガキ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 坏部完形。 |
| 20 | 器台 | 口縁部径 11.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開く。 | 口縁部外面ハケの後ミガキ、内面ミガキ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－茶褐色 | 残存部完形。 |
| 21 | 器台 | 口縁部径 8.9cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部は外反ぎみに薄くなる。 | 口唇部内外面ヨコナデ。口縁部外面ミガキ、内面ナデ。脚部外面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－明茶褐色 | 残存部完形。 |

**第21号住居跡（第119図）**

A地点の調査区南西側に位置する。重複する第29号住居跡を切り、第８号住居跡と第６号土壙に住居の一部を切られている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

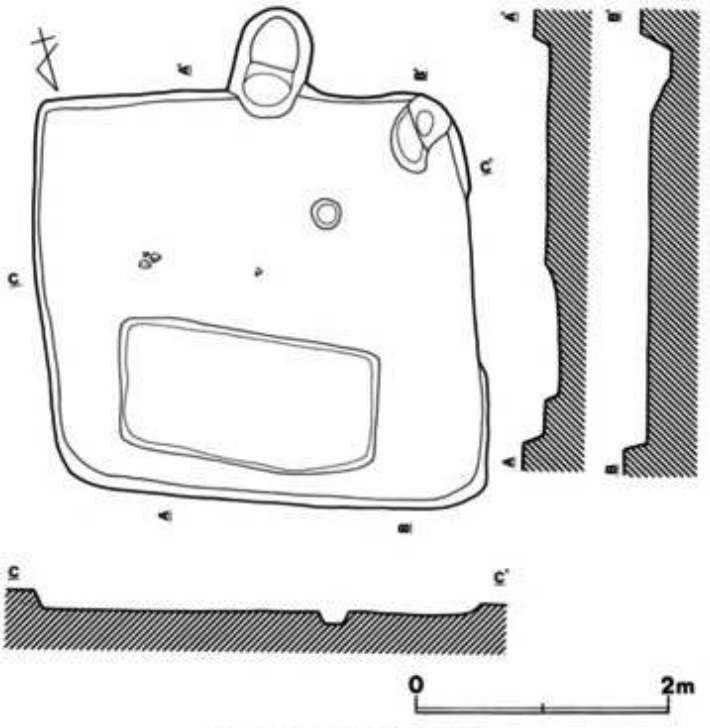
平面形は、東西方向3.36m・南北方向3.18mの方形を呈するが、住居の北側壁と南側壁は平行せずにやや歪んでいる。住居の主軸方位は、N－162°－Wをとる。確認面からの深さは５cm～18cmあり、壁は直線的ではあるが比較的緩やかに立ち上がっている。床面は直床式で、全体に平坦で堅緻である。住居内ではピットが２箇所検出されているが、南西コーナー部に位置するものは、後世のもので、本住居跡に伴うものではない。

カマドは、住居の南側壁の中央やや西寄りに位置し、壁に対してやや斜めに付設されている。規模は、全長86cm・幅57cmを測る。袖はなく、燃焼部は住居の壁をかなり掘り込んだ形態をとっている。燃焼部底面は、床面よりも一段低く、北に向かってやや傾斜している。壁面及び底面は良く焼けて赤色化している。出土遺物は、カマド内や覆土中より土器片が少量出土しただけである。

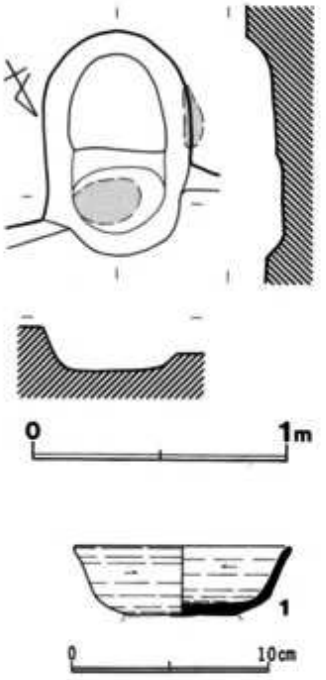
本住居跡の時期は、出土土器より真間期の所産と考えられる。

**第21号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器<br>坏 | 口径11.2<br>器高 3.6<br>底径 5.8 | 口縁部は体部より直線的に外傾し、口唇部は若干外反する。底部は小さな平底。 | 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後一定方向のナデ。 | 白色粒・黒色粒<br><br>内外－暗灰色 | 1/2。<br>ロクロ回転。<br>右回り |




第119図　第21号住居跡




第120図　第21号住居跡出土土器

### 第22号住居跡（第121図）

A地点の調査区南西側に位置する。第23号住居跡や第24号住居跡と東側壁をほぼ一致させて入れ子状に重複し、住居南西コーナー部の一部を第1号井戸跡に切られている。遺構の遺存状態は、検出された住居跡の中では、比較的良好な方である。

平面形は、整った長方形を呈する。規模は、東西方向5.26m・南北方向4.32mある。住居の主軸方位は、N－89°－Eをとる。確認面からの深さは10cm～20cmあり、壁は直線的に立ち上がっている。各壁下には、壁溝は見られない。床面は、暗茶褐色土（第8層）を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で非常に堅緻である。住居中央部の床面上には炭化粒子を主体とする黒褐色土（第5層）が薄く被覆しており、覆土中には焼土ブロックや焼土粒子が顕著に見られることから、本住居跡は焼失した可能性が高いと推測される。主柱穴や貯蔵穴等の施設はまったく検出されなかった。

カマドは、住居東側壁のほぼ中央に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長132cm・最大幅93cmを測る。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土（第6層）を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込む形態で、住居の床面より若干低くなっている。煙道部は、燃焼部より一段高く、住居外に傾斜しながら60cm程直線的に延びている。出土遺物は、カマド内や住居の床面付近の覆土中より、比較的多くの土器片が出土している。

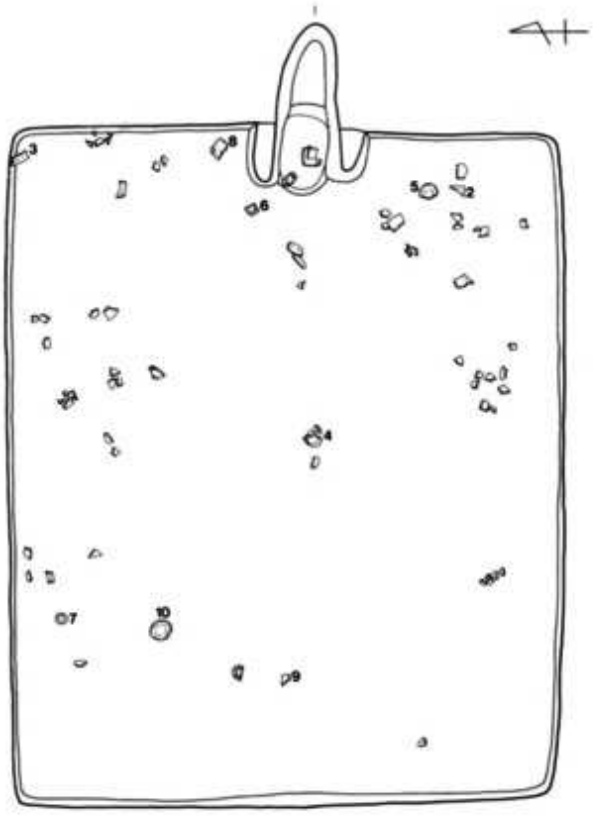
本住居跡の時期は、出土土器より国分期の所産と考えられる。

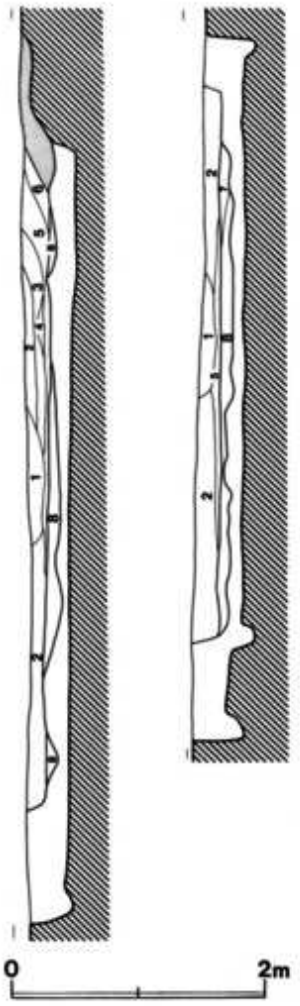
**第22号住居跡出土土器観察表**

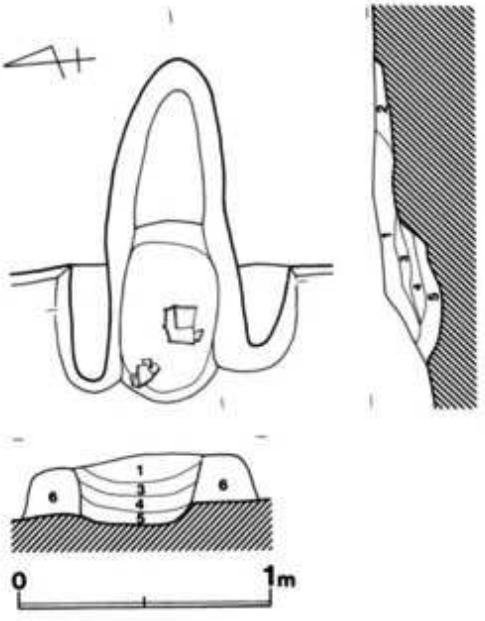
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器<br>甕 | 残存高<br>38.3cm<br>底部径<br>(16.6cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を上位にもつ。底部は大きな平底。 | 口縁部内外面回転ナデ。胴部外面叩きの後ナデ、内面上半ナデ・下半篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－暗灰色 | 1/2。<br>末野産。 |
| 2 | 甕 | 口縁部径<br>(20.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや外傾ぎみに立ち、口唇部は内湾ぎみに開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/4。 |
| 3 | 甕 | 口縁部径<br>(18.6cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は一度直立し、口唇部は内湾ぎみに開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/2。 |
| 4 | 坏 | 口径12.4<br>器高 3.2 | 口縁部は体部より内湾しながら立つ。体部は浅く、底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡茶褐色 | ほぼ完形。 |

**第22号住居跡土層説明**

第1層：黒褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗灰色土層（マンガン塊・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に、焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第4層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）
第5層：黒褐色土層（炭化粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）
第6層：暗灰色土層（炭化粒子を多量に、焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第7層：灰色土層（マンガン塊を多量に、ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第8層：暗茶褐色土層（マンガン塊を多量に含む。粘性はなく、しまりを有する。）






**第22号住居跡カマド土層説明**

第1層：黒褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

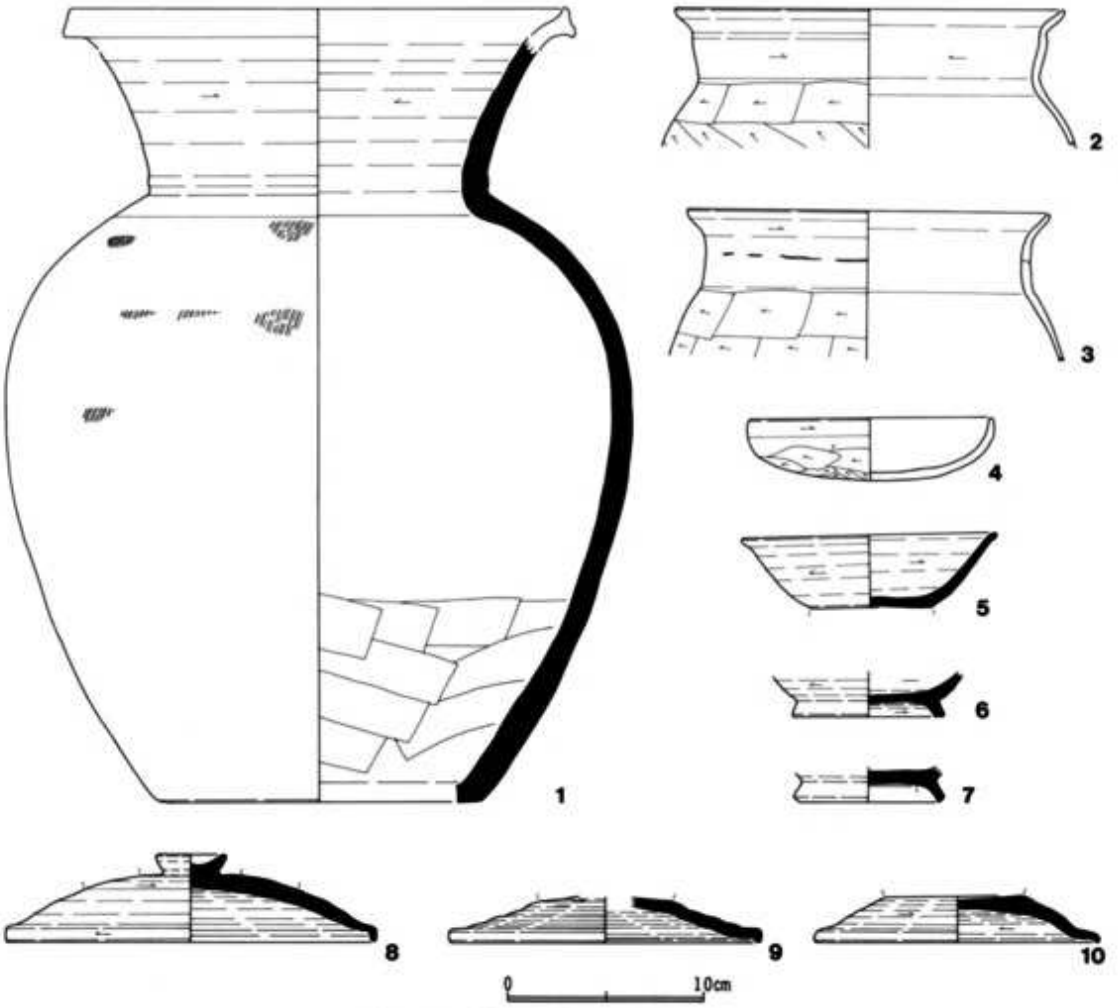
第3層：暗褐色土層（焼土ブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第4層：暗赤褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第5層：暗灰色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第6層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**第121図　第22号住居跡**




第122図　第22号住居跡出土土器

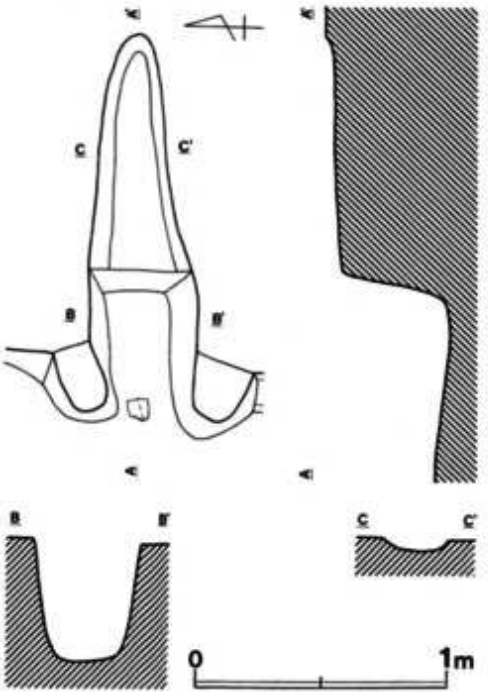
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 須恵器<br>坏 | 口径13.2<br>器高 3.7<br>底径 6.2 | 口縁部は若干内湾ぎみに外傾し、口唇部は短く横に開く。底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 赤色粒・白色粒<br><br>内外－淡灰褐色 | ほぼ完形。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 6 | 須恵器<br>高台付<br>埦 | 高台部径<br>7.8cm | 高台部貼り付け。高台部は外傾して貼り付けられ、端部は窪む。 | 高台部及び体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 白色粒<br><br>内外－淡灰色 | 2/3。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 7 | 須恵器<br>高台付<br>埦 | 高台部径<br>7.8cm | 高台部貼り付け。高台部は外傾して貼り付けられ、端部は面をもつ。 | 高台部及び体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 白色粒<br><br>内外－淡灰褐色 | 高台部のみ。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 8 | 須恵器<br>蓋 | 口径(19.0)<br><br>器高 4.5 | 口縁部は短く直立する。天井部は低く、偏平化したつまみがつく。 | 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転施ケズリ。つまみ部回転ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－淡褐色<br>内－淡灰褐色 | 1/3。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 9 | 須恵器<br>蓋 | 口縁部径<br>(16.0cm) | 口縁部は天井部より外反ぎみに開き、端部は短く直立する。 | 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転施ケズリ。 | 白色粒<br><br>内外－暗灰色 | 1/6。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 須恵器<br>蓋 | 口径14.6<br><br>器高 2.4 | 口縁部は天井部より外反ぎみに開き、端部は丸く直立する。 | 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転糸切り。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－暗褐色<br>内－淡赤褐色 | ほぼ完形。<br><br>末野産。 |

**第23号住居跡（第125図）**

A地点の調査区南西側に位置する。重複する第22号住居跡と第1号井戸跡に切られ、第24号住居跡と第39号住居跡を切っている。

平面形は、比較的整った長方形を呈する。規模は、東西方向5.96m・南北方向4.76mあり、検出された住居跡の中では大型の住居跡である。住居の主軸方位は、N－91°－Eをとる。確認面からの深さは30cm～40cmあり、壁は直線的に立ち上がっている。各壁下には幅約20cm・深さ10cm程度の均一な形態の壁溝が巡っている。床面は、住居の周辺部を埋め戻した貼床式で、全体に平坦に作られている。住居中央部は比較的堅緻であるのに対して、周辺部はやや軟弱である。主柱穴は、ほぼ住居の対角線上に位置する4本主柱穴である。形態は、直径35cm～46cmの楕円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは25cm～60cmとまちまちである。貯蔵穴は見られない。

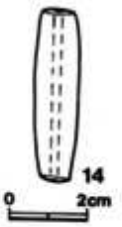



第123図　第23号住居跡カマド

カマドは、住居東側壁の中央南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長156cm・最大幅82cmある。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を四角形にかなり掘り込む形態をとり、燃焼面は床面より若干低くなっている。煙道部は、燃焼部より一段高く、直線的に住居外に長く延びている。

出土遺物は、カマド内及びその周辺や住居跡の南東側の覆土中より、比較的多くの土器が出土している。土器以外では、覆土中より土錘が1点出土している。

本住居跡の時期は、出土土器より国分期初頭の所産と考えられる。




第124図
土　錘

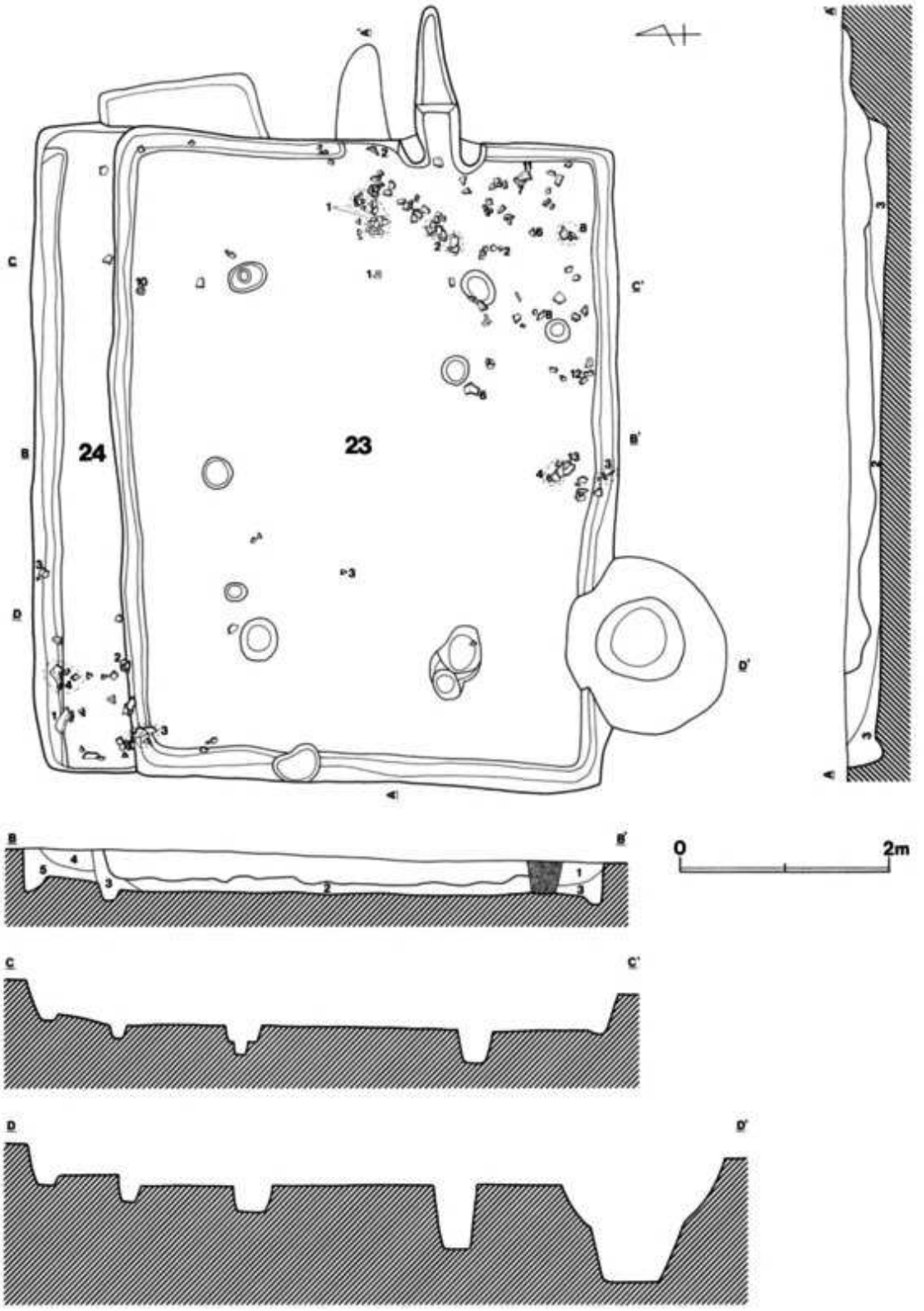
**第23～24号住居跡土層説明**

**＜第23号住居跡＞**

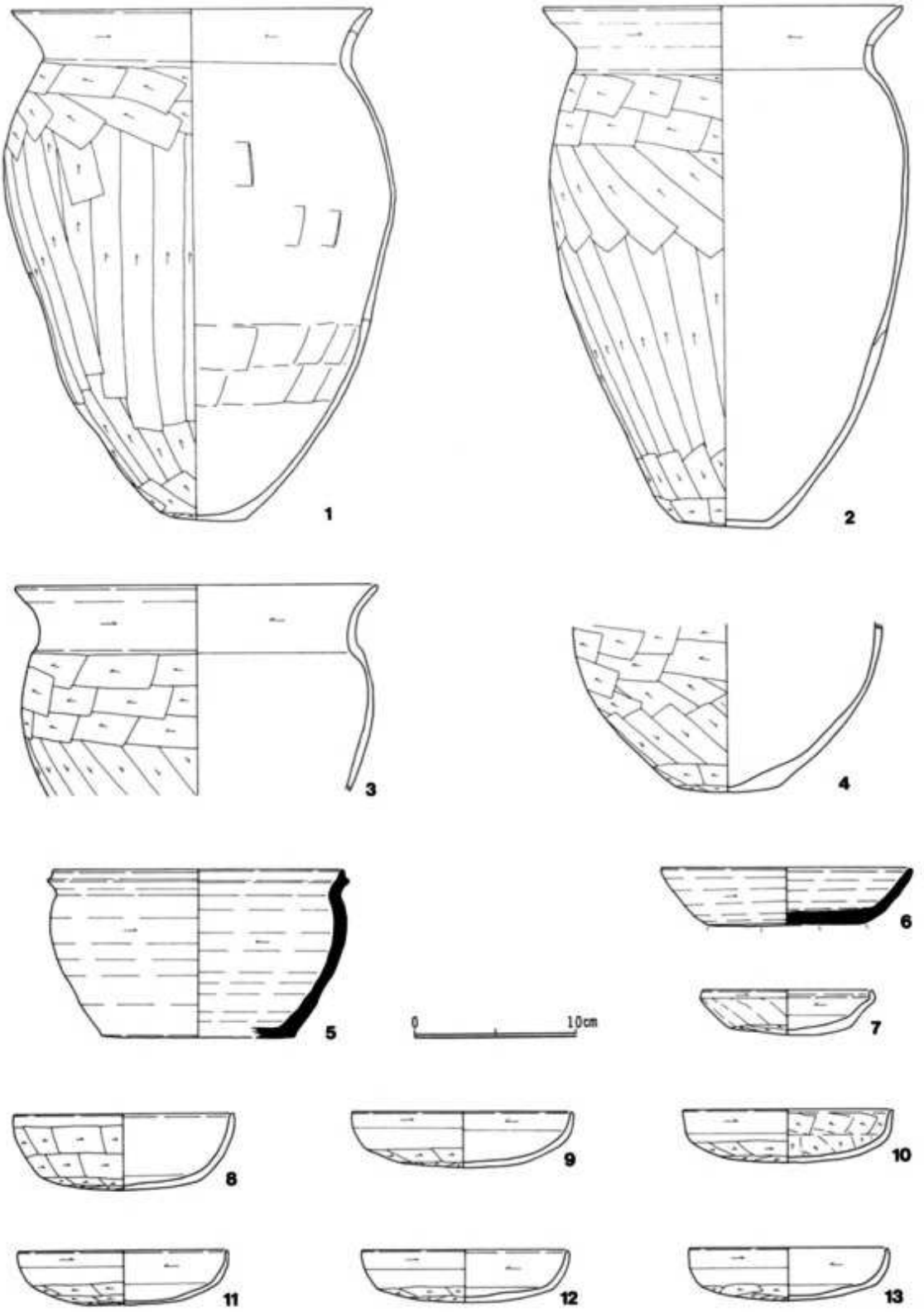
第1層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗褐色土層（マンガン塊・ローム粒子を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第3層：暗灰色土層（マンガン塊を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

**＜第24号住居跡＞**

第4層：暗褐色土層（焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第5層：暗灰色土層（焼土粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）




第125図　第23・24号住居跡




**第126図　第23号住居跡出土土器**

**第23号住居跡出土土器観察表**

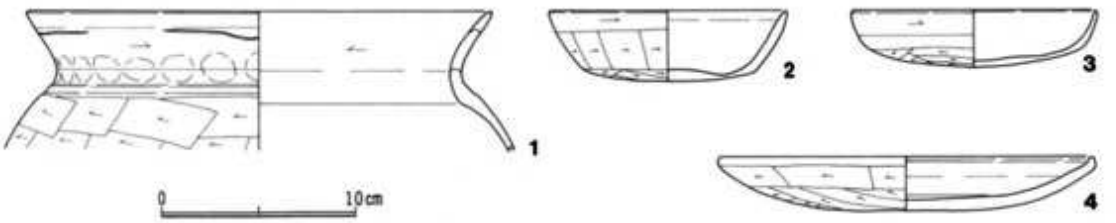
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口径22.4<br>器高31.6<br>底径 5.5 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はやや張り、底部は平底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面箆ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒<br>外－淡褐色<br>内－暗橙褐色 | 3/4。 |
| 2 | 甕 | 口径22.4<br>器高32.2<br>底径 5.9 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く直立してから緩やかに外反する。胴部はやや張り、底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－淡橙褐色<br>内－淡灰褐色 | 2/3。<br>内外面に煤の付着あり。 |
| 3 | 甕 | 口縁部径<br>22.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はやや張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡褐色 | 4/5。 |
| 4 | 甕 | 底部径<br>6.8cm | 粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、底部は平底を呈す。 | 胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/2。 |
| 5 | 須恵器<br>鉢 | 口径(18.0)<br>器高 10.4<br>底径(12.0) | 口縁部は短く外反し、口唇部は上方につまみ上げられる。胴部はあまり張らず、底部は平底を呈する。 | 内外面とも回転ナデ。底部外面ナデ。 | 白色粒<br>内外－暗灰色 | 1/4。 |
| 6 | 須恵器<br>坏 | 口径(15.6)<br>器高 3.5<br>底径 9.8 | 口縁部は内湾ぎみに外傾する。底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後、外周回転箆ケズリ。 | 白色針状物質<br>内外－淡灰色 | 2/3。<br>南比企産。 |
| 7 | 坏 | 口径10.4<br>器高 2.8 | 口縁部は体部より短く内屈する。体部は浅く、底部は平底ぎみである。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗褐色 | 完形。 |
| 8 | 坏 | 口径(13.8)<br>器高 4.7 | 口縁部は体部より内湾しながら立つ。体部は深く、底部は丸底を呈する | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/2。 |
| 9 | 坏 | 口径13.6<br>器高 3.5 | 口縁部は体部より内湾しながら立つ。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡褐色 | 4/5。 |
| 10 | 坏 | 口径(13.0)<br>器高 3.3 | 口縁部は体部より内湾ぎみにやや外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部外面ヨコナデ、内面箆ナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗茶褐色 | 1/4。 |
| 11 | 坏 | 口径13.0<br>器高 3.3 | 口縁部は体部より内湾しながら立つ。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 3/4。 |
| 12 | 坏 | 口径(13.0)<br>器高 3.2 | 口縁部は体部より内湾ぎみに開く。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 1/4。 |
| 13 | 坏 | 口径12.4<br>器高 3.3 | 口縁部は体部より内湾ぎみに立つ。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 2/3。 |
| 14 | 土錘 | 長さ 4.4<br>厚さ 1.1<br>重量 12g | 若干中膨らみの棒状を呈する。両端部は丁寧に平坦に仕上げられている。 | 表面及び両端面丁寧なナデ。穿孔は中心部を通り、直径0.2mmと比較的細い。 | 白色粒・黒色粒<br>表面－淡褐色 | 完形。 |

**第24号住居跡（第125図）**

A地点の調査区南西側に位置する。遺構の遺存状態は極めて悪く、重複する第23号住居跡に住居跡の大半を切られている。残存しているのは、住居の北側の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、長方形もしくは方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向6.02m・南北方向は90cmまで測れ、重複する第23号住居跡と同じく、大型の住居跡であったものと推測される。確認面からの深さは34cmあり、壁は直線的に立ち上がっている。北側壁下には、幅15cm・深さ7cmの均一な形態の壁溝がある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦である。出土遺物は、住居跡の覆土中より土器破片が少量出土しているが、混入品が顕著に見られる。

本住居跡の時期は、住居跡の重複関係や出土土器より、第23号住居跡とあまり時間差のない国分期初頭の所産と推測される。




**第127図　第24号住居跡出土土器**

**第24号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 広口壺 | 口縁部径<br>(24.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/3。 |
| 2 | 坏 | 口径12.2<br>器高 3.6 | 口縁部は体部より内湾ぎみに開く。体部はやや深く、底部は平底ぎみである。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | ほぼ完形。 |
| 3 | 坏 | 口径(12.6)<br>器高 2.9 | 口縁部は体部より内湾ぎみに開く。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/4。 |
| 4 | 皿 | 口縁部径<br>19.4cm<br>器高<br>2.8cm | 口縁部は体部より内湾ぎみに開き、口唇部は短く内屈する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/2。 |

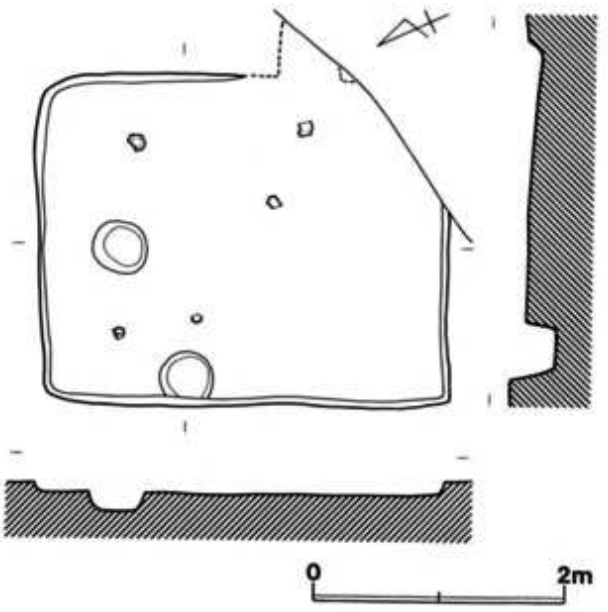
### 第25号住居跡（第128図）

A地点の調査区南端に位置し、重複する第30号住居跡・第32号住居跡・第39号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えず、かろうじて残存しているような状況である。住居跡の南側コーナー部は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明であるが、検出された部分からある程度住居跡の形態を推測することは可能である。

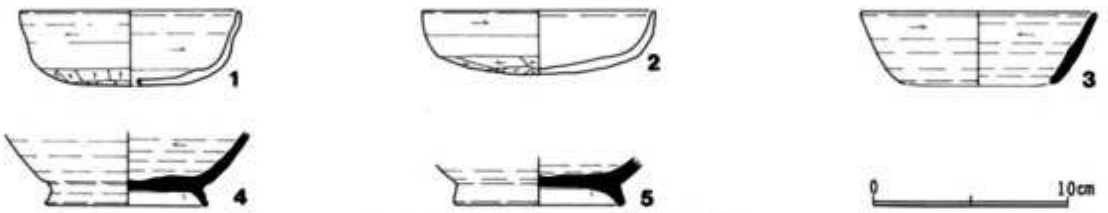
平面形は、比較的整った長方形を呈する。規模は、北東～南西方向3.18m・北西～南東北西2.54mある。住居の主軸方位は、N－113°－Eをとる。確認面からの深さは5cm～14cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。各壁下には壁溝は見られない。床面は直床式と推測され、全体に平坦で堅緻である。住居内からは比較的大きく浅いピットが2箇所検出されているが、本住居跡に伴うものかは不明である。カマドは、すでに削平されているが、住居南東側壁の南寄りにその痕跡が確認されている。

出土遺物は、少量の土器片が出土しただけである。№2の坏は、他のものと時期が異なり、重複する第30号住居跡からの混入品と推測される。

本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土土器より、国分期の所産と考えられる。




第128図　第25号住居跡




第129図　第25号住居跡出土土器

第25号住居跡出土土器観察表

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径(11.4)<br>器高 3.8 | 口縁部は体部より蛇行して内湾ぎみに立つ。体部はやや深く、底部は平底ぎみ。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－暗橙褐色<br>内－暗茶褐色 | 1/3。 |
| 2 | 坏 | 口径(12.0)<br>器高 3.2 | 口縁部は体部より内湾ぎみに立つ。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 1/4。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.0)<br>器高 3.8 | 口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。 | 内外面とも回転ナデ。 | 白色針状物質<br>内外－暗灰色 | 1/3。<br>南比企産。 |
| 4 | 須恵器<br>高台付埦 | 高台部径<br>8.4cm | 高台部貼り付け。高台部は外傾し、体部は丸みをもつ。 | 高台部及び体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡灰色 | 残存部完形。<br>末野産。 |
| 5 | 須恵器<br>高台付埦 | 高台部径<br>8.8cm | 高台部貼り付け。高台部はやや外傾している。 | 高台部及び体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡灰色 | 残存部完形。<br>末野産。 |

**第26号住居跡（第131図）**

A地点の調査区南端に位置し、重複する第27号住居跡と第28号住居跡及び第２号溝跡を切り、第７号土壙に切られている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向3.20m・南北方向は3.24mまで測れる。住居の主軸方位は、N－82°－Eをとる。確認面からの深さは５cm～13cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。各壁下には壁溝は見られない。床面は直床式と推測され、やや軟弱である。全体に平坦であるが、若干起伏が見られる。住居跡内からは比較的大きな浅いピットが１箇所検出されているが、本住居跡に伴うものかは不明である。

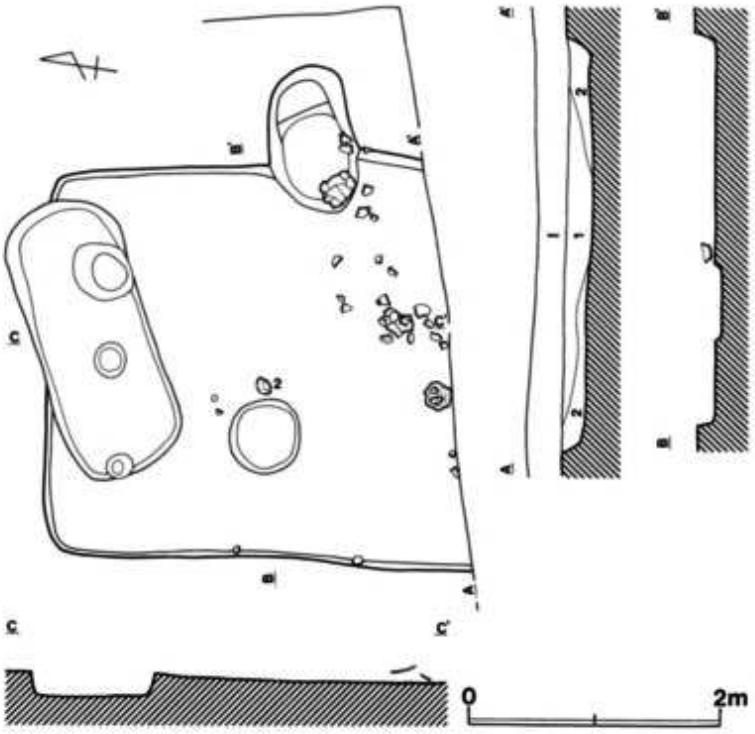
カマドは、住居東側壁の中央南寄りに位置し、壁に対してやや斜めに付設されている。規模は、全長110cm・幅71cmを測る。袖はなく、燃焼部は住居の壁をかなり掘り込んだ形態をとっている。燃焼面は、床面よりも一段低く、やや傾斜している。壁面は良く焼けている。煙道部は、先端部が削平されているが、燃焼部より一段高く、傾斜しながら住居外に延びている。出土遺物は、カマド周辺から住居跡の南側を主体に、土器片が少量出土している。

本住居跡の時期は、出土土器より国分期の所産と考えられる。

**第130図　第26号住居跡出土土器**

**第26号住居跡出土土器観察表**

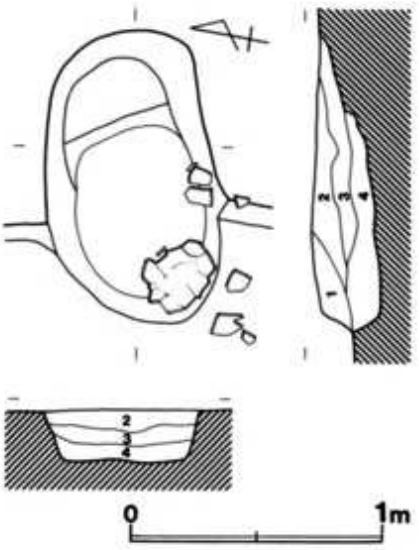
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径(12.0)<br>器高( 3.1) | 口縁部は体部より内湾ぎみに開く。底部は平底ぎみ。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・黒色粒<br>白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/3。 |
| 2 | 須恵器<br>坏 | 口径12.4<br>器高 3.5<br>底径 5.9 | 口縁部は体部より直線的に外傾し、口唇部はやや外反する。底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗灰色 | 2/3。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 3 | 須恵器<br>坏 | 口径12.2<br>器高 3.5<br>底径 7.2 | 口縁部は体部より内湾ぎみに開き、口唇部はやや外反する。底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡灰色 | 2/3。<br>末野産。 |




**第26号住居跡土層説明**

第１層：黒褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子･焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）




**第26号住居跡カマド土層説明**

第１層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第２層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第３層：暗灰色土層（焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第４層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

**第131図　第26号住居跡**

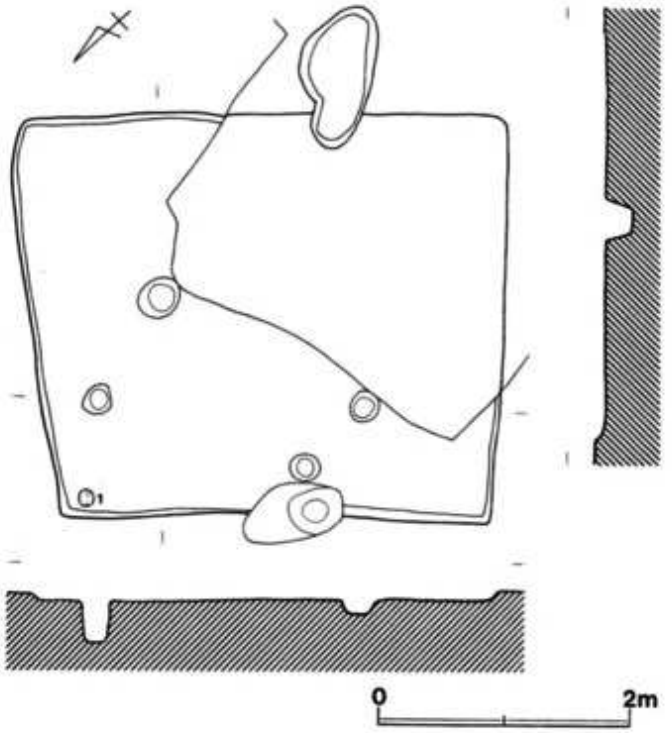
**第27号住居跡（第132図）**

Ａ地点の調査区南側に位置し、重複する第26号住居跡と第７号土壙に切られている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えず、かろうじて残存しているような状況である。住居跡の南側を第26号住居跡に切られているため、本住居跡の全容は不明である。

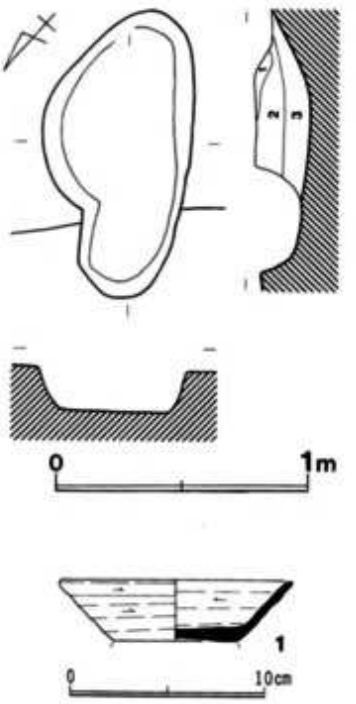
平面形は、長方形を呈するものと思われるが、住居の北東側壁は東に向かってやや開いている。規模は、北西～南東方向3.08m・北東～南西方向3.80mある。住居の主軸方位は、N－135°－Eをとる。確認面からの深さは9cm程度あり、壁は緩やかに立ち上がっている。残存する各壁下には壁溝は見られない。床面は直床式で、全体に堅緻で平坦をなすが、細かな凹凸が見られる。住居跡内からは小さなピットが4箇所検出されているが、本住居跡に伴うものかは不明である。

カマドは、住居南東側壁の中央南寄りに、その痕跡が見られる。上半はすでに第26号住居跡によって削平されており、燃焼部の下半だけが残存している。燃焼部は、住居の壁をかなり掘り込んだ形態をとり、床面よりも一段低くなっている。出土遺物は、土器片がごく少量出土しただけであるが、住居の北側コーナー部の床面上より完形の須恵器坏(No.1)が出土している。

本住居跡の時期は、出土土器より国分期の所産と考えられる。




第132図　第27号住居跡




第133図　第27号
住居跡出土土器

**第27号住居跡カマド土層説明**

第1層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第2層：黒灰色土層（炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

**第27号住居跡出土土器観察表**

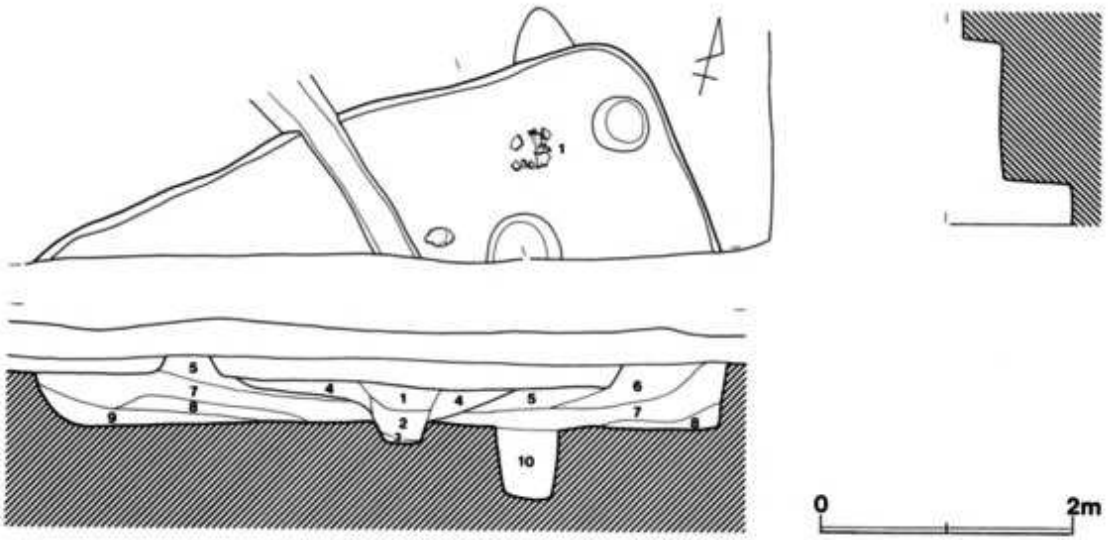
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器坏 | 口径12.1<br>器高 3.1 | 口縁部は体部より直線的に開き、口唇部は若干外反する。底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 小　石・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡灰褐色 | 完形。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |

**第28号住居跡（第134図）**

A地点の調査区南端に位置し、重複する第26号住居跡・第30号住居跡及び第２号溝跡に切られている。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、住居南側の大半が調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は不明であるが、東西方向は5.02mまで、南北方向は1.82mまで測れる。確認面からの深さは50cm程度あり、壁は直線的で垂直ぎみに立ち上がっている。検出された壁下には壁溝は見られない。床面は、住居内の周辺部を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で比較的堅緻である。主柱穴は、住居内の調査区壁際のピットが該当するものと考えられ、おそらく４本主柱穴の一部を構成するものであろう。直径50cm程度の円形を呈するものと思われ、床面からの深さは54cmある。この他、住居の北東コーナー部にもピットが検出されているが、これは本住居跡に伴うものではない。出土遺物は、住居跡の覆土中より土器片が出土しているだけである。

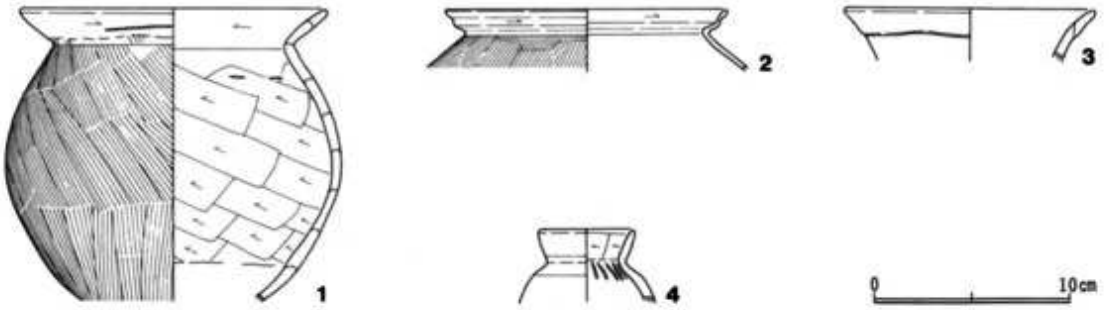
本住居跡の時期は、出土土器より五領期の所産と考えられる。




**第134図　第28号住居跡**

**第28号住居跡土層説明**

第１層：黒褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第３層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第４層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第５層：黒灰色土層（鉄斑・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第６層：暗茶褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第７層：暗灰色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第８層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）
第９層：暗茶褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）
第10層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）




第135図　第28号住居跡出土土器

第28号住居跡出土土器観察表

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径 15.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデの後ケズリ。 | 片岩粒・赤色粒 外－暗褐色 内－黒褐色 | 1/2。 |
| 2 | 甕 | 口縁部径 (14.4cm) | 口縁部は「S」字状を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒 内外－淡灰褐色 | 1/5。 |
| 3 | 壺 | 口縁部径 (13.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は幅狭の複合口縁を呈す。 | 口縁部内外面ナデ。 | 片岩粒・白色粒 内外－暗橙褐色 | 1/4。 |
| 4 | 小形壺 | 口縁部径 ( 5.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く直線的に外傾する。 | 口縁部外面ナデ、内面ケズリ。胴部内外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒 内外－暗橙褐色 | 1/4。 |

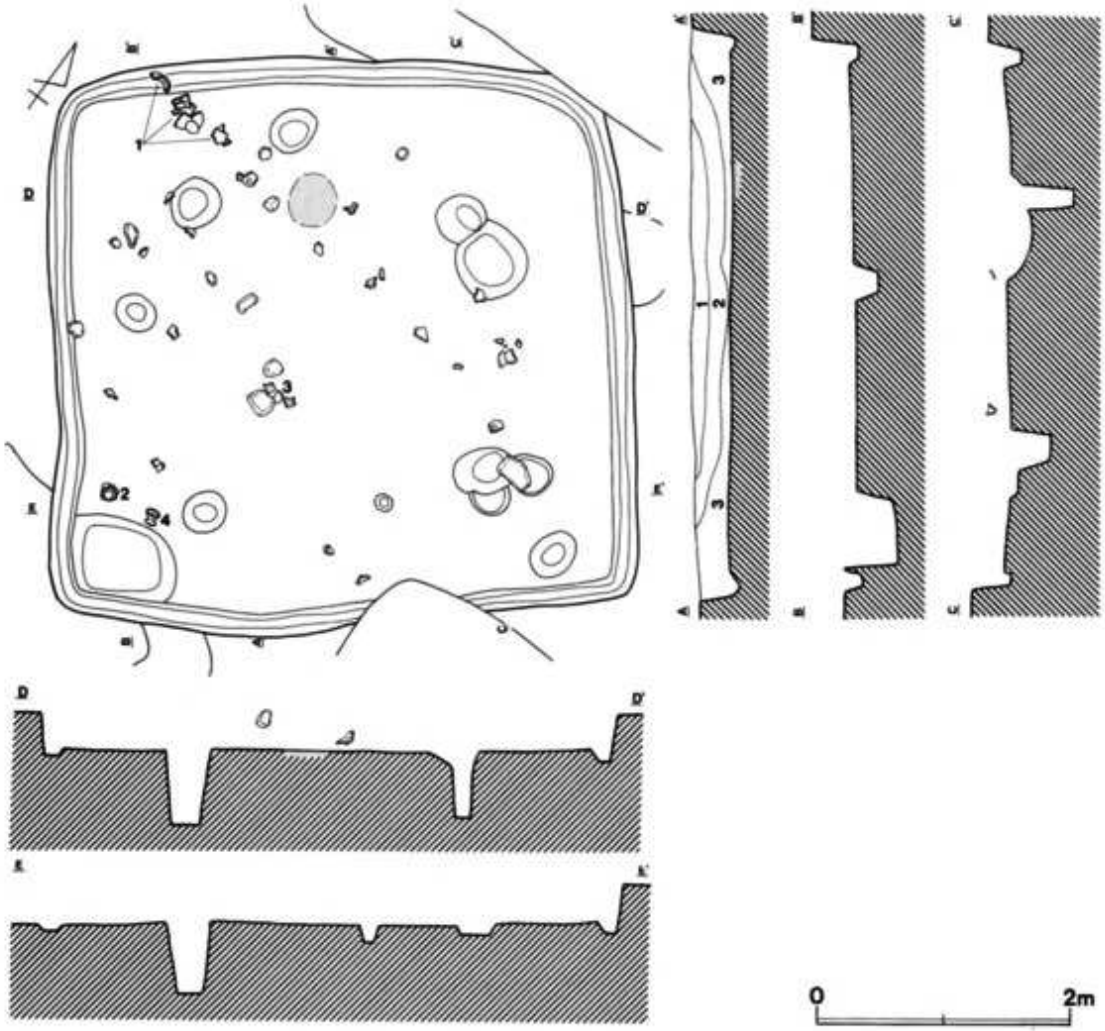
**第29号住居跡（第136図）**

A地点の調査区南西側に位置し、重複する第10号住居跡・第21号住居跡・第24号住居跡に切られている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、比較的整った方形を呈する。規模は、北西～南東方向4.44m・北東～南西方向4.48mある。住居の主軸方位は、N－38°－Wをとる。確認面からの深さは30cmあり、壁は直線的で垂直ぎみに立ち上がっている。各壁下には幅20cm・深さ5cm前後の均一な形態の壁溝が、途切れずに全周している。床面は、住居内の壁際に近い周辺部をロームブロックを含む暗黄褐色土で埋め戻した貼床式で、全体に平坦であるが、やや緩やかな起伏が見られる。主柱穴に囲まれた住居中央部は比較的堅緻であるのに対して、主柱穴外側の周辺部はやや軟弱である。

炉は、住居北西側の主柱穴間中央に位置する。40cm×37cmの円形を呈し、床面が焼けているだけの地床炉である。主柱穴は、4本主柱穴で住居跡のほぼ対角線上に位置している。形態は、直径34cm～40cmの円形に近い形態を呈し、床面からの深さは50cm前後あるが、東側の主柱穴だけは30cmと他に比べてやや浅くなっている。この東側の主柱穴の脇には、表面が焼けて赤色化した大きな自然石が出土しているが、これは東側に重複するピットに伴うものであり、本住居跡とは直接関係しない。貯蔵穴は、住居の南側コーナー部に位置している。形態は、82cm×60cmのやや崩れた長方形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは30cmある。底面は広く平坦である。この他、住居内には浅いピットがいくつか検出されているが、その多くは本住居跡に直接伴わないものである。

出土遺物は、住居跡の覆土中より土器が比較的多く出土している。これらの出土状態は、住居中央部では覆土中でも比較的低い位置から出土し、壁際に近いものほど高い位置から出土しており、




**第136図　第29号住居跡**

**第29号住居跡土層説明**

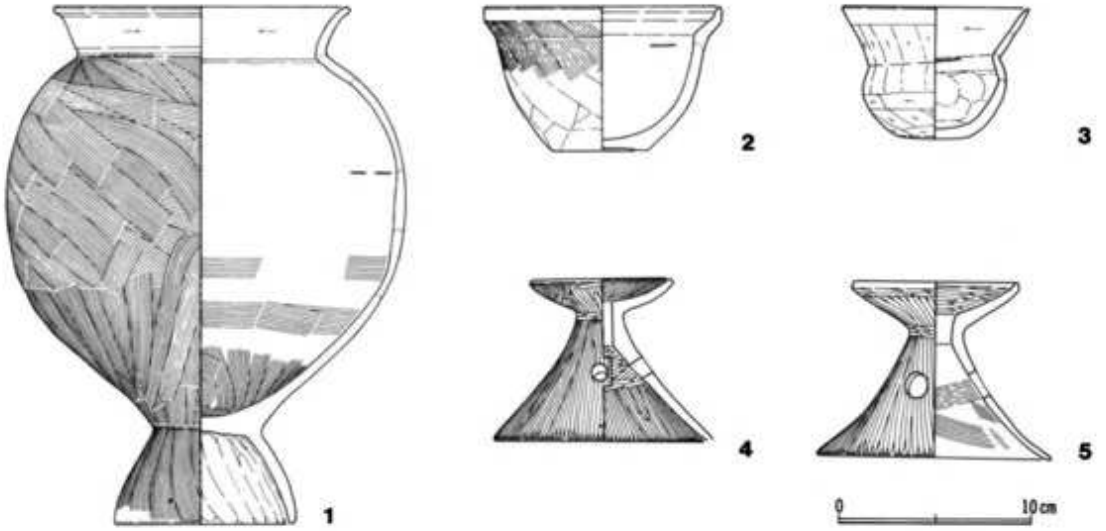
第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第2層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

覆土の堆積と一致した状態が認められる。そのため、本住居跡から出土した土器のほとんどは、住居廃絶後の覆土埋没過程中に周辺から投棄されたものと考えられる。土器以外では、住居中央部の覆土中より、自然石を利用した砥石が出土している。

本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土土器より、五領期の所産と考えられる。

**第29号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 台付甕 | 口縁部径 15.2cm<br>器高 26.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、台部は内湾しながら開く。 | 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデの後部分的なハケ。台部外面ハケ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | 4/5。 |



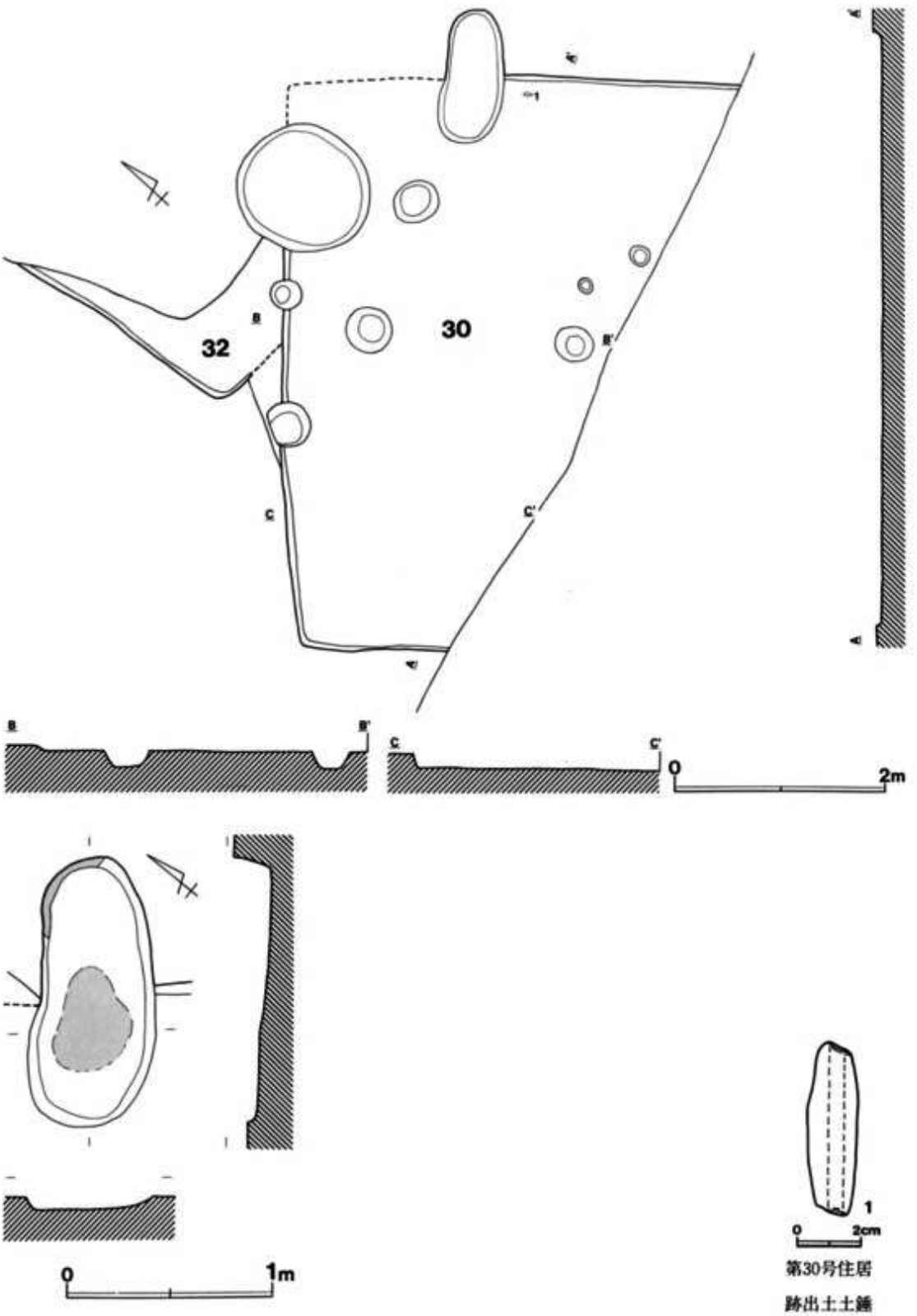

第137図　第29号住居跡出土土器

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 壺 | 口径12.2<br>器高 7.4<br>底径 4.9 | 粘土紐輪積み成形。口縁部は短く外傾し、口唇部は直立する。胴部は張らず、底部は平底を呈する。 | 口唇部内外面ヨコナデ。口縁部外面ハケ。胴部外面ハケの後ナデ、内面ミガキ。底部外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－明茶褐色 | ほぼ完形。 |
| 3 | 小形丸底壺 | 口縁部径<br>9.6cm<br>器高<br>6.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は偏平ぎみに張り、底部は平底ぎみである。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－明茶褐色 | 4/5。<br>外面に黒斑あり。 |
| 4 | 器台 | 口径 7.4<br>器高 8.4<br>脚端部径11.2 | 器受部は内湾しながら開く。脚部は外反しながら大きく開き、穿孔は筒状をなす。 | 器受部内外面ミガキ。脚部内外面ミガキ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 3/4。<br>脚部穿孔は4箇所。 |
| 5 | 器台 | 口径 8.6<br>器高 9.1<br>脚端部径12.0 | 器受部は内湾しながら開き、口唇部は若干上方に向く。脚部は外反しながら大きく開き、穿孔は筒状をなす。 | 器受部内外面ハケの後ミガキ。脚部外面ハケの後ミガキ、内面ハケの後ナデ。 | 黒色粒・白色粒<br>内外－赤茶褐色 | 1/2。<br>脚部穿孔は3箇所。 |

**第30号住居跡（第138図）**

A地点の調査区南端に位置し、重複する第3号住居跡と第25号住居跡及び第8号土壙に切られ、第28号住居跡・第32号住居跡・第39号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えず、かろうじて残存しているような状況である。住居の南側半分は調査区外に位置しているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、北東～南西方向5.60m・北西～南東方向は4.24mまで測れ、調査区内で検出された住居跡の中では、比較的大型の住居跡であることが推測される。住居の主軸方位は、N－45°－Eをとる。確認面からの深さは5cm～10cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。調査区内で検出された各壁下には、壁溝は見られない。床面の構




第138図　第30・32号住居跡

造については、遺構の重複が激しいため不明であるが、全体に平坦に作られている。住居内には比較的浅いピットが数箇所検出されているが、これらはすべて本住居跡に伴うものではない。

カマドは、住居北東側壁の中央北寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長125cm・幅60cmを測る。袖はなく、燃焼部が住居の壁をかなり掘り込んだ形態をとっている。燃焼部は床面より一段低く、燃焼面はやや傾斜し、壁面とも良く焼けている。煙道部は、すでに削平されているため不明である。出土遺物は、土器破片がごく少量出土しており、土器以外ではカマド南東側の床面上より土錘が1個体出土している。

本住居跡の時期は、出土土器より真間期の所産と推測される。

**第30号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土錘 | 長さ 5.4<br>厚さ 1.5<br>重量 18g | 中膨らみの棒状を呈するが、ややいびつである。両端部は斜めに仕上げられている。 | 表面雑なナデ。穿孔は直径5㎜あり、比較的太い。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>表面－暗茶褐色 | 完形。 |

## 第31号住居跡（第139図）

A地点の調査区南側に位置し、重複する第3号住居跡と第2号溝跡及び第8号土壙に切られ、第32号住居跡と第33号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は良好である。

平面形は、若干壁が張る方形を呈している。規模は、南北方向4.70m・東西方向4.44mある。住居の主軸方位は、N－19°－Wをとる。確認面からの深さは35cm前後あり、壁は直線的で垂直ぎみに立ち上がっている。各壁下には幅20cm深さ5cm前後の整った形態の壁溝が巡っているが、住居東側壁の南半から南東コーナー部にかけては壁溝が見られず途切れている。床面は、住居内の周辺部を埋め戻した貼床式で、全体に緩やかな起伏が見られる。住居中央部は比較的堅緻であるのに対して、周辺部はやや軟弱である。主柱穴や貯蔵穴と考えられるものは、検出されていない。住居内からは柱穴状の比較的深いピットが数箇所検出されているが、本住居跡に伴うものかは不明である。

カマドは、住居の北側壁と東側壁の2箇所に見られるが、これらは同時に存在したものではなく、東側のカマドから北側のカマドに作り替えられたものである。北カマドは、壁のほぼ中央に位置し、壁に対して若干東に傾いて付設されている。規模は、全長204cm・最大幅108cmを測る。袖は、ロー

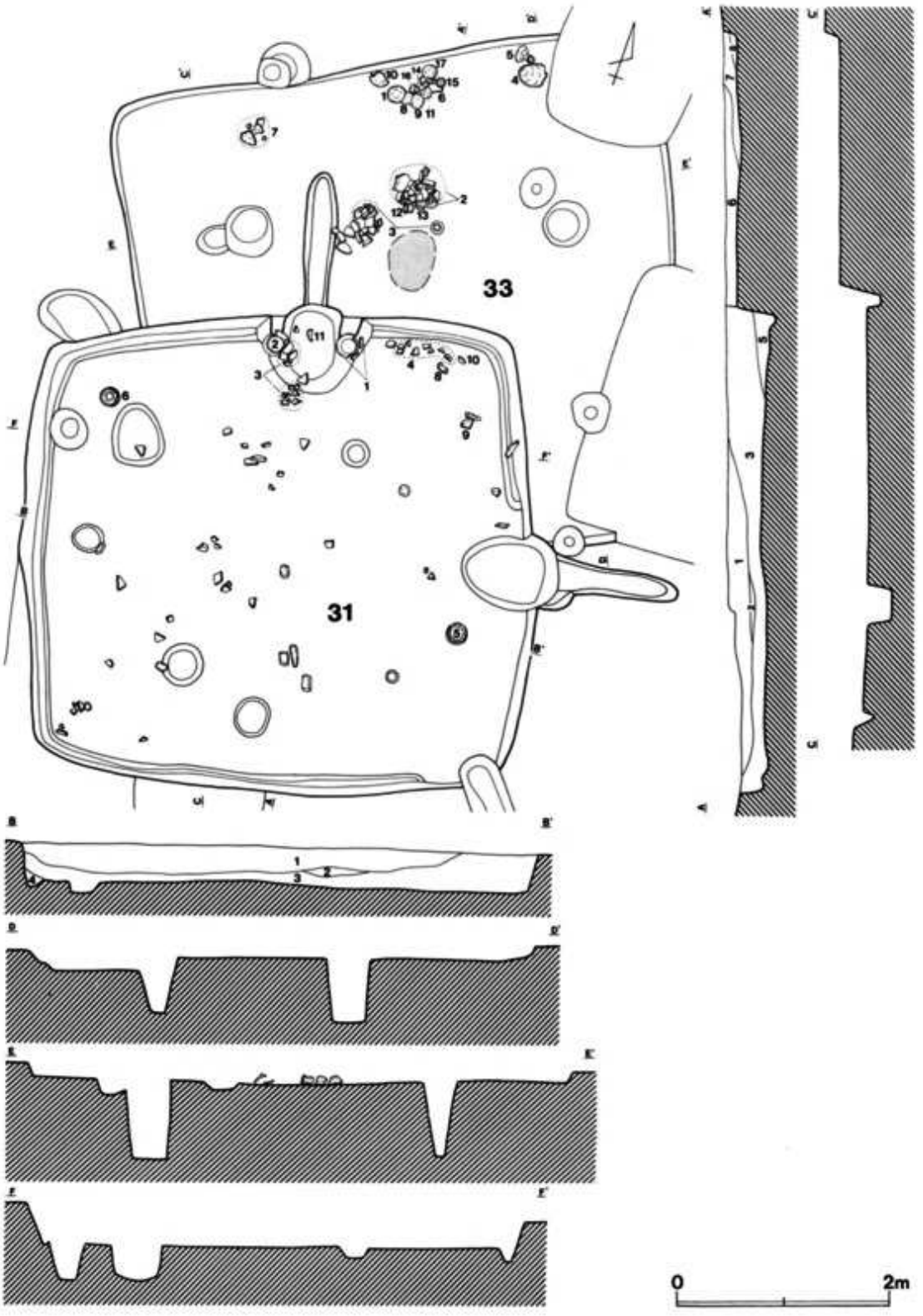
**第31～33号住居跡土層説明**

**＜第31号住居跡＞**

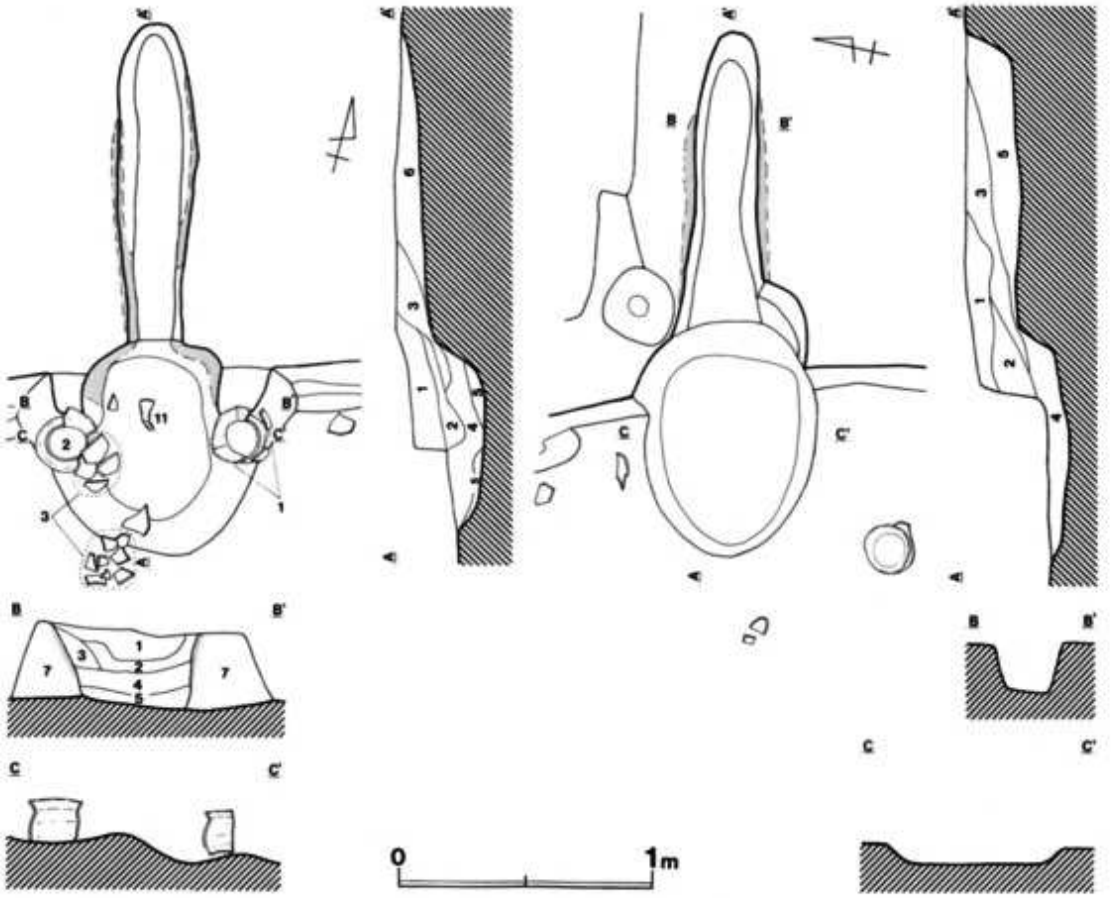
第1層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第2層：黒褐色土層（炭化粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第3層：黒灰色土層（炭化粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）
第5層：黒褐色土層（炭化粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

**＜第33号住居跡＞**

第6層：黒褐色土層（焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第7層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第8層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）




第139図　第31・33号住居跡




第140図　第31号住居跡カマド

**第31号住居跡北カマド土層説明**

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗赤褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第4層：黒褐色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第6層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第7層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

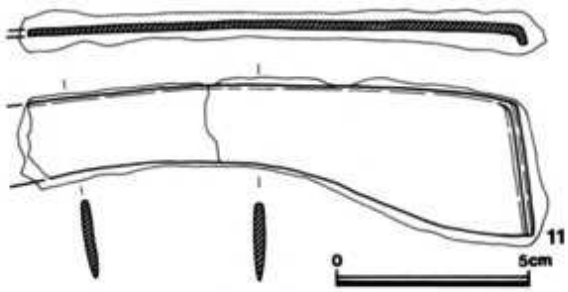
**第31号住居跡東カマド土層説明**

第1層：暗褐色土層（ロームブロック・焼土ブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第2層：黒褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第3層：暗褐色土層（焼土粒子を多量に、炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第4層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を多量に、ローム粒子・焼土ブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第5層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

ムブロックを含む暗褐色土(第７層)を住居の壁に直接貼り付けて構築している。左右両袖とも短く、先端部にはNo１・２の甕を伏せて補強に使用している。燃焼部は、住居の壁を若干掘り込んだ形態をとり、燃焼面は床面より一段低く平坦で良く焼けている。煙道部は、燃焼部より一段高く、住居外に120cm程度やや傾斜しながら直線的に延びている。東カマドは、北カマドと同様に壁のほぼ中央に位置し、壁に対してやや南に傾いて付設されている。規模は、全長202cm・幅70cmを測る。袖はすでに破壊されており、燃焼部の掘り方と煙道部だけが残存している。燃焼部は、住居の壁を若干掘り込んだ形態をとり、燃焼面は床面より一段低くなっている。煙道部は、燃焼部より一段高く、ほぼ水平に住居外に110cmほど直線的に延びて立ち上がっている。

出土遺物は、住居の覆土中より比較的多くの土器片が出土しているが、本住居跡に伴うと考えられる床面上から出土した土器は、北カマドの周辺や北東コーナー部付近に集中している。No６の須恵器長頸壷も、住居北西コーナー部付近の床面上から正位で出土しており、本住居跡に伴うものである。土器以外では、北カマドの燃焼部中央より、鉄製鎌(No11)が出土している。

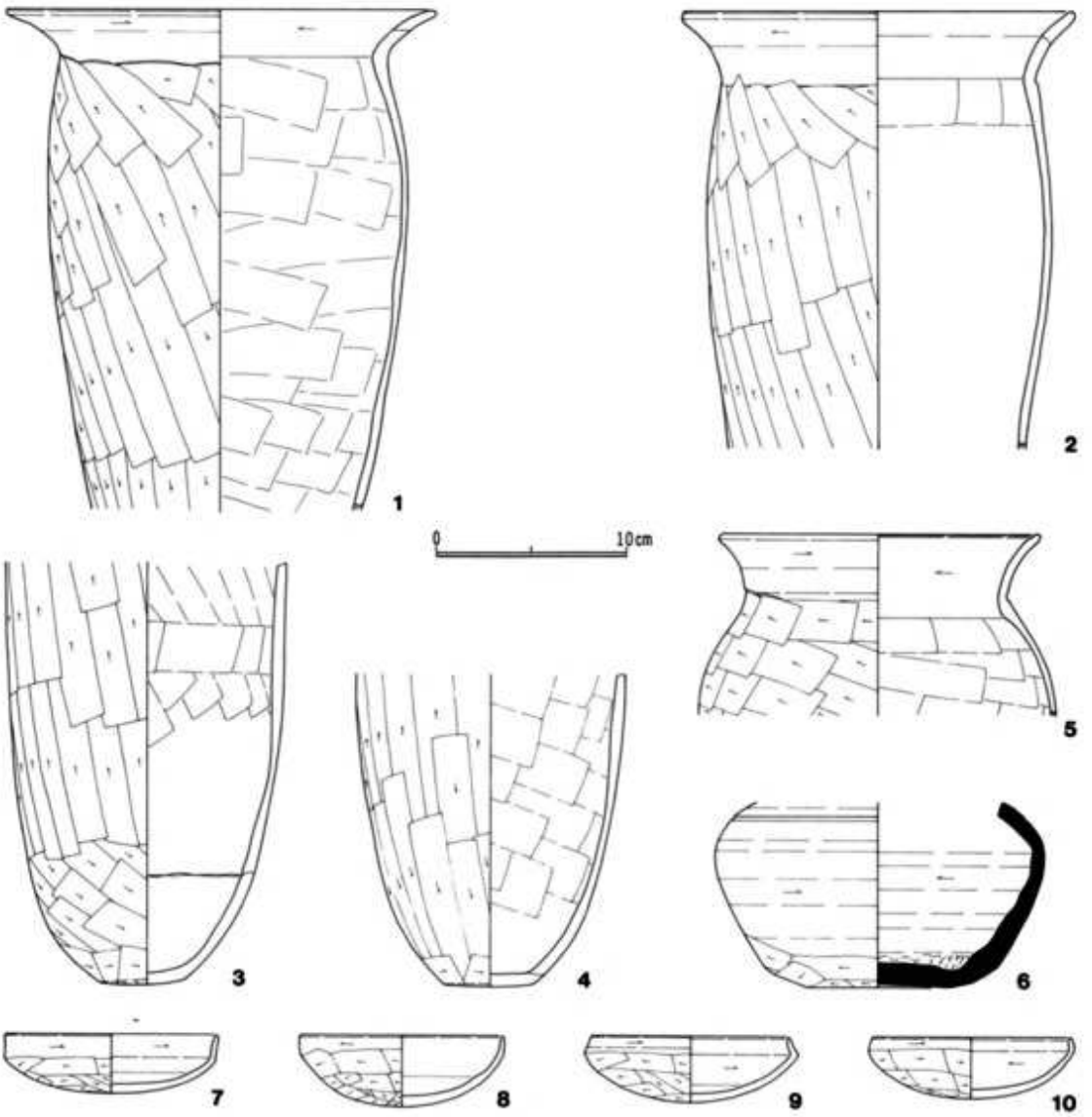
本住居跡の時期は、出土土器より真間期の所産と考えられる。




**第141図　第31号住居跡出土鉄製鎌**

**第31号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径 22.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は強く外反する。胴部はあまり張らず、長胴を呈す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒 黒色粒 内外－淡褐色 | 3/4。 |
| 2 | 甕 | 口縁部径 20.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はあまり張らない。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒 黒色粒 内外－橙褐色 | 4/5。 |
| 3 | 甕 | 底部径 4.5cm | 粘土紐積み上げ成形。胴部は張らず、底部は不安定で小さな平底を呈する。 | 胴部外面ケズリ、内面下半ナデの後上半篦ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒 白色粒・黒色粒 内外－淡褐色 | 3/4。 |
| 4 | 甕 | 底部径 4.6cm | 粘土紐積み上げ成形。胴部あまり張らず、底部は不安定で小さな平底を呈する。 | 胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒 外－淡橙褐色 内－暗茶褐色 | 3/4。 |
| 5 | 小形甕 | 口縁部径 17.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部内面に沈線をもつ。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒 黒色粒 内外－淡褐色 | 上半部のみ。 |
| 6 | 須恵器長頸壷 | 底部径 7.5cm | 粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、最大径を上半にもつ。底部は平底を呈する。 | 胴部内外面回転ナデ。底部外面ナデの後外周篦ケズリ。内面ナデ、外周指押さえ。 | 白色粒・黒色粒 内外－灰色 | 胴下半のみ。 |
| 7 | 坏 | 口径11.0 器高 3.1 | 口縁部はやや外反ぎみに直立する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部～底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒 外－淡褐色 内－黒褐色 | 2/3。 |




**第142図　第31号住居跡出土土器**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 坏 | 口径10.6<br>器高 3.8 | 口縁部は内湾ぎみに短く直立する。体部はやや深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部～底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 3/4。 |
| 9 | 坏 | 口径10.4<br>器高 3.6 | 口縁部は外反ぎみに短く内屈する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部～底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/2強。 |
| 10 | 坏 | 口径10.4<br>器高 3.2 | 口縁部は内湾しながら短く内傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部～底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>外－淡褐色<br>内－淡橙褐色 | 1/2強。<br>外面に黒斑あり。 |
| 11 | 鉄製鎌 | 残存長13.1<br>最大幅 3.5 | 背部は若干湾曲し、基部は短く屈曲する。刃部はかなり擦り減って幅が短くなっている。錆はすでに安定し、地金部分はほとんどない。先端部欠失。 | | | |

**第32号住居跡（第138図）**

A地点の調査区南側に位置し、重複する第25号住居跡と第31号住居跡及び第８号土壙に切られている。遺構の遺存状態は極めて悪く、かろうじて残存しているような状況であり、遺構の形態や床面の状態から住居跡と判断したものである。住居跡の大半を切られているため、本住居跡の全容は不明である。

出土遺物がまったくないため本住居跡の時期は明確ではないが、遺構の重複関係より真間期以前の所産と推測される。

**第33号住居跡（第139図）**

A地点の調査区南側に位置し、重複する第１号住居跡と第31号住居跡及び第１号土壙に切られている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

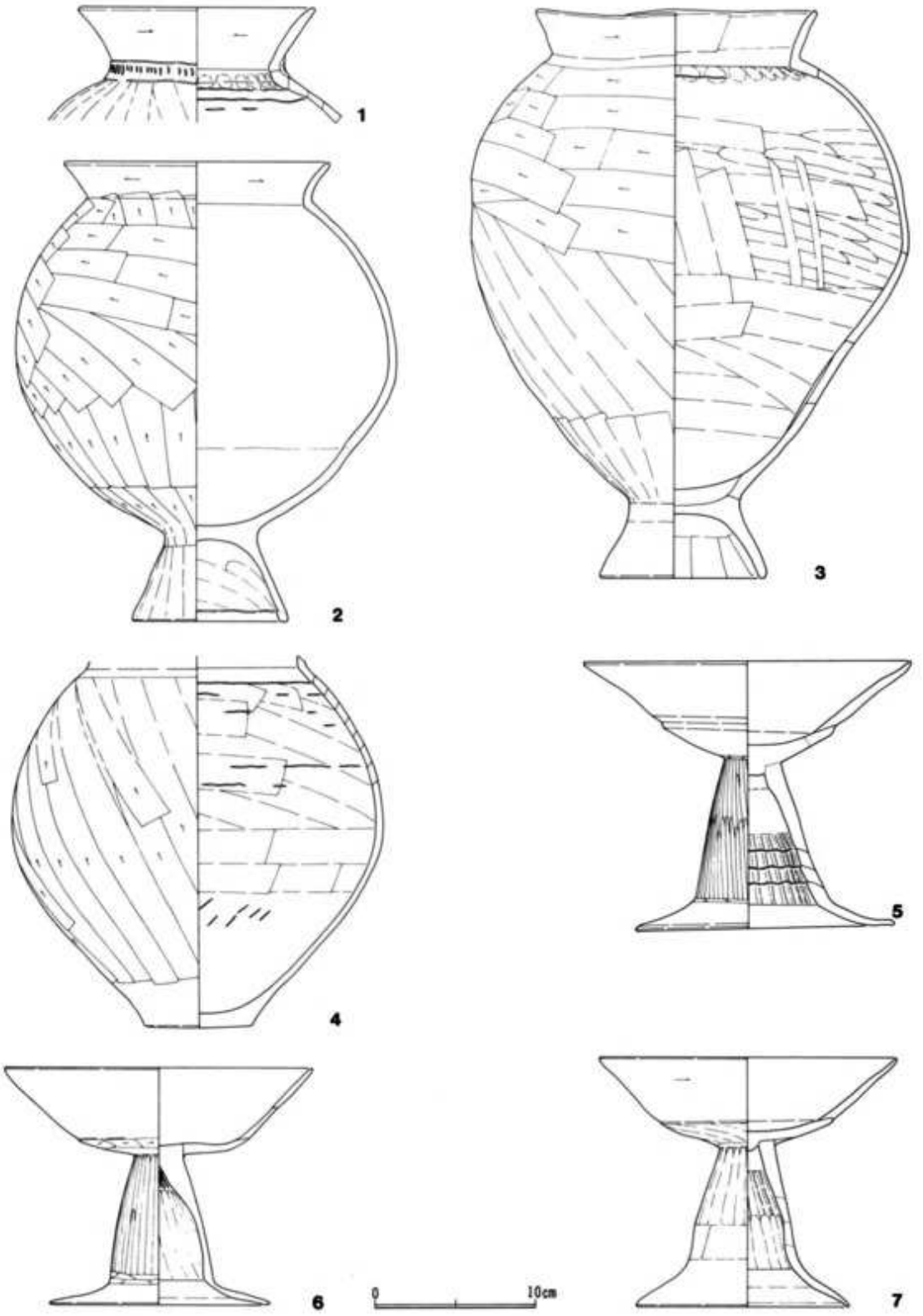
平面形は、残存する部分から判断すると、比較的整った方形を呈するものと推測される。規模は、南北方向4.76m・東西方向5.06mある。住居の主軸方位は、N－27°－Wをとる。確認面からの深さは８cm～15cmあり、壁は直線的に立ち上がっている。残存する各壁下には壁溝は見られない。床面は、主柱穴外側の壁際周辺部を若干埋め戻した貼床式である。全体に堅緻であり、やや緩やかな起伏が見られる。主柱穴は、住居のほぼ対角線上に位置する４本主柱穴と思われ、その内の３本が検出されている。形態は、直径40cm前後の円形を呈し、床面からの深さは50cm～60cmと比較的深い。炉は、住居北側の主柱穴間中央のやや内側に位置する。床面が焼けているだけの地床炉で、非常に良く焼けて赤色に堅化している。

出土遺物は、住居の床面上より比較的多くの完形に近い土器が出土しており、良好な一括資料と言える。これらの土器は、台付甕が炉の周辺より、他のものは住居北側の壁際にまとまって出土しており、No８の小形甑はNo９の小形鉢に重ねて置かれていたものが、そのまま横転したような状況で出土している。

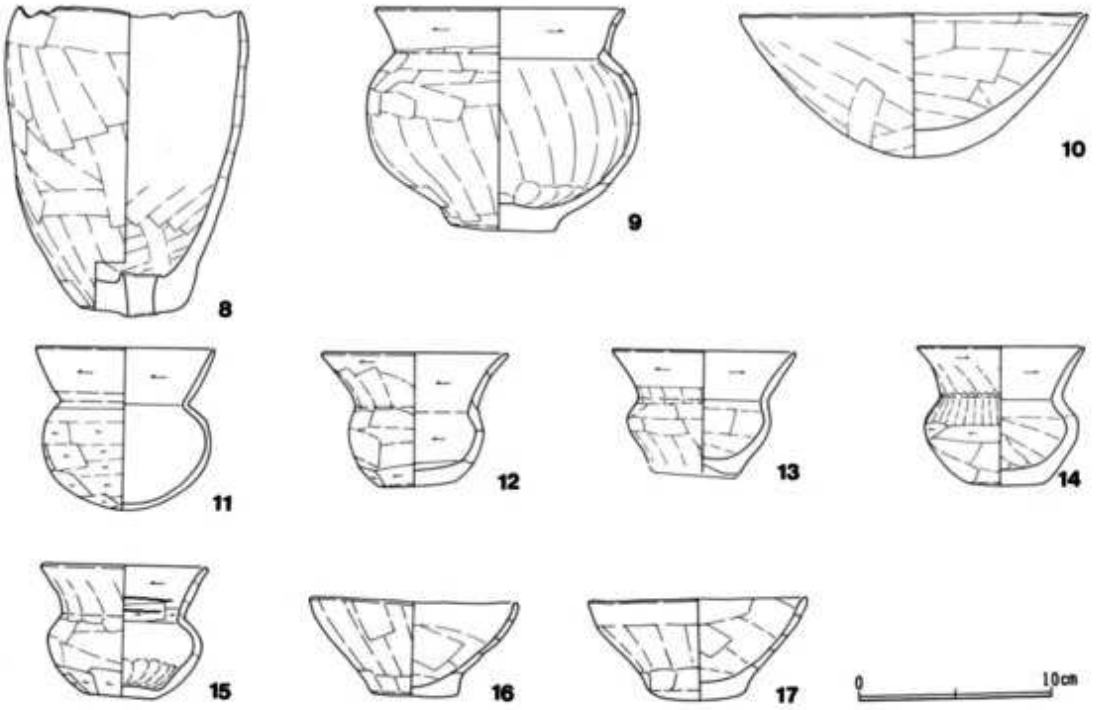
本住居跡の時期は、出土土器より和泉期の所産と考えられる。

**第33号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壷 | 口縁部径 14.6cm | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反し、頸部外面に補強の粘土を貼る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ヨコナデ、内面指押さえ。胴部内外面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－淡茶褐色 | 残存部完形。頸部外面に爪圧痕。 |
| 2 | 台付甕 | 口縁部径 16.4cm<br>器高 28.2cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は強く張る。台部は直線的に開き、端部は折り返す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。台部外面ケズリの後ナデ、内面指ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－暗褐色 | 3/4。 |
| 3 | 台付甕 | 口縁部径 17.4cm<br>器高 34.8cm | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を上位に有する。台部は小さく内湾ぎみに開く。 | 口縁部内外面篦ナデ。胴部外面ケズリの後下半ナデ、内面上位ナデ・中位指ナデ・下位篦ナデ。台部外面ナデ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>外－暗茶褐色<br>内－黒褐色 | 4/5。 |




**第143図　第33号住居跡出土土器(1)**




**第144図　第33号住居跡出土土器（2）**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 甕 | 残存高22.8<br>底部径11.6 | 粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部及び底部外面ケズリの後上半ナデ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 1/2。<br>外面に黒斑あり。 |
| 5 | 高坏 | 口縁部径<br>20.2cm<br>器高<br>16.5cm | 脚部粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外反ぎみに開き、口唇部は若干内湾する。脚柱部は膨らみ、脚端部は外反しながら開く。 | 坏部内外面ナデ。脚柱部外面ミガキ、内面ナデ。脚端部内外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 3/4。 |
| 6 | 高坏 | 口縁部径<br>19.0cm<br>器高<br>14.5cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に開く。脚柱部は膨らみ、脚端部は低く内湾ぎみに強く開く。 | 口縁部外面ナデの後雑なミガキ、内面ヨコナデ。坏部外面ケズリ。脚柱部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデ、脚端部内外面ヨコナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－淡橙褐色 | ほぼ完形。<br>外面に煤の付着あり。 |
| 7 | 高坏 | 口縁部径<br>18.4cm<br>器高<br>15.3cm | 脚部粘土紐巻き上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。脚柱部は膨らみ、脚端部は高く、内湾ぎみに開く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリの後ナデ、内面指ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 赤色粒<br>内外－淡橙褐色 | 4/5。 |
| 8 | 甑 | 口径12.6<br>器高15.8<br>底径 5.2 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は若干内湾する。胴部は張らず、底部は平底を呈す。 | 外面篦ナデ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－茶褐色 | ほぼ完形。<br>穿孔は焼成前に1孔。 |
| 9 | 鉢 | 口径12.8<br>器高11.4<br>底径 5.4 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、底部は平底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | ほぼ完形。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 鉢 | 口径18.0<br>器高 7.4 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾しながら開く。底部は厚く、丸底を呈する。 | 外面ナデ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 3/4。<br>外面は荒れている。 |
| 11 | 小形丸底壺 | 口径 9.2<br>器高 8.3 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、底部は丸底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後丁寧なナデ、内面丁寧なナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | ほぼ完形。<br>内面に煤の付着あり。 |
| 12 | 小形丸底壺 | 口径 9.6<br>器高 6.9<br>底径 3.9 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は大きく外反する。胴部はやや張り、底部は平底。 | 口縁部外面ヨコナデの後ナデ。内面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－暗茶褐色 | 完形。 |
| 13 | 小形丸底壺 | 口径 9.4<br>残存高6.3 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は大きく外反する。胴部はやや張り、底部は平底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－暗茶褐色 | 残存部完形。 |
| 14 | 小形丸底壺 | 口径 8.6<br>器高 7.1<br>底径 3.8 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部やや張り、底部は平底。 | 口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面指ナデ。底部外面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | ほぼ完形。 |
| 15 | 小形丸底壺 | 口径 8.6<br>器高 6.8<br>底径 3.4 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部やや張り、底部は平底。 | 口縁部外面ナデ、内面ヨコナデの後ケズリ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－暗茶褐色<br>内－暗褐色 | 完形。 |
| 16 | 埦 | 口径10.8<br>器高 5.0<br>底径 4.5 | 粘土紐巻き上げ成形。口縁部は内湾しながら開く。底部は突出し、平底を呈する。 | 外面ナデ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－茶褐色 | ほぼ完形。 |
| 17 | 埦 | 口径11.3<br>器高 5.2<br>底径 5.0 | 粘土紐巻き上げ成形。口縁部は内湾しながら開く。底部は突出し、平底を呈する。 | 外面ナデ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 完形。<br>外面に黒斑あり。 |

**第34号住居跡（第145図）**

A地点の調査区中央部の西端に位置し、重複する第35号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。住居跡の大半は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。住居の主軸方位は、N－73°－Eをとる。確認面からの深さは15cm前後あり、壁は直線的で垂直ぎみに立ち上がっている。検出された部分では壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に堅緻である。住居跡内からは、ピットや土壙状の浅い掘り込みが検出されているが、これらは本住居跡に伴うものではない。

カマドは、住居東側壁に位置する。規模は、全長64cm・最大幅61cmを測る。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土（第3層）を、直接住居の壁に貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を若干掘り込んだ形態をとり、燃焼面は床面とほぼ同じ高さで、良く焼けている。煙道部は、すでに削平されているため不明である。出土遺物は、覆土中より土器片がごく少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、カマドの形態や出土土器より真間期の所産と推測される。

**第35号住居跡（第145図）**

A地点の調査区中央部の西端に位置し、重複する第34号住居跡と第２号井戸跡に切られ、第37号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。住居の西側壁は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

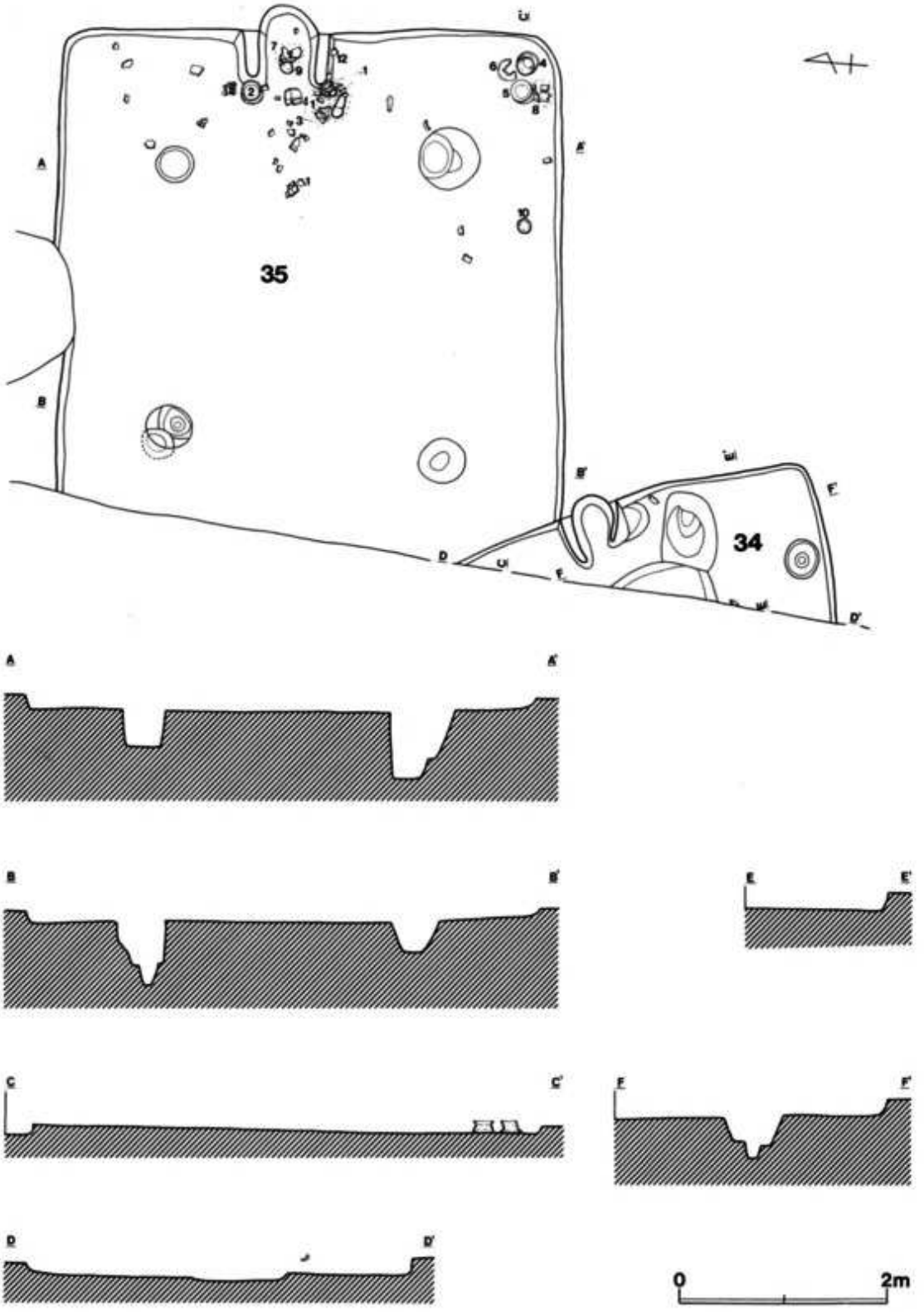
平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ比較的整った長方形を呈するものと思われる。規模は、南北方向4.70m・東西方向は4.94mまで測れる。住居の主軸方位は、N－88°－Eをとる。確認面からの深さは10cm前後あり、壁は緩やかに立ち上がっている。調査区内で検出した各壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を若干埋め戻した貼床式で、全体に平坦に作られているが、やや軟弱である。主柱穴は、住居の対角線上に位置する４本主柱穴である。形態は、直径40cm前後の円形を呈し、床面からの深さは26cm～60cmある。

カマドは、住居東側壁の中央やや北寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長91cm・最大幅87cmを測る。袖は、暗褐色土（第４層）を住居の壁に直接貼り付けて構築している。左右両袖とも直線的に延び、その先端部にはNo１とNo２の甕を伏せて補強に使用しているが、No１はすでに崩壊して床面上に散乱している。燃焼部は、住居の壁を掘り込んだ形態をとり、燃焼面は床面よりも若干低くなっている。煙道部は、すでに削平されているため不明である。出土遺物は、カマド内及びその周辺と住居南東コーナー部付近の床面上より、かたまって出土している。

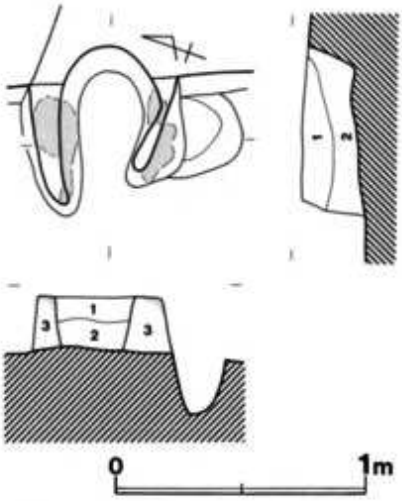
本住居跡の時期は、出土土器より真間期の所産と考えられる。

**第35号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口径21.0<br>器高34.1<br>底径 4.8 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部はやや内湾する。胴部はあまり張らず、底部は不安定な平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 4/5。 |
| 2 | 甕 | 口縁部径<br>21.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は横に開く。胴部はあまり張らない。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 3/4。 |
| 3 | 甕 | 底部径<br>5.0cm | 粘土紐積み上げ成形。底部は小さな平底を呈する。 | 胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗褐色 | 底部のみ。 |
| 4 | 甕 | 口縁部径<br>21.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部内面に凹線をもつ。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 2/3。 |
| 5 | 甕 | 口縁部径<br>20.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はあまり張らない。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 3/4。<br>外面に黒斑あり。 |
| 6 | 大形甑 | 底部径<br>（9.6cm） | 粘土紐積み上げ成形。胴部はあまり張らず、端部は丸く仕上げられている。 | 胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 胴下半のみ。 |




第145図　第34・35号住居跡



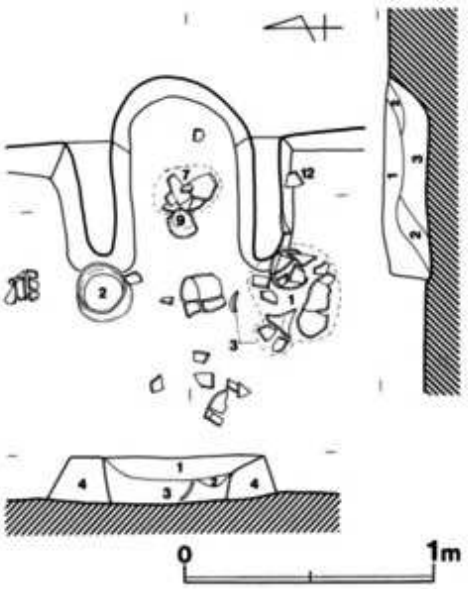

**第34号住居跡カマド土層説明**

第１層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第２層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第３層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**第146図　第34号住居跡カマド**




**第35号住居跡カマド土層説明**

第１層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

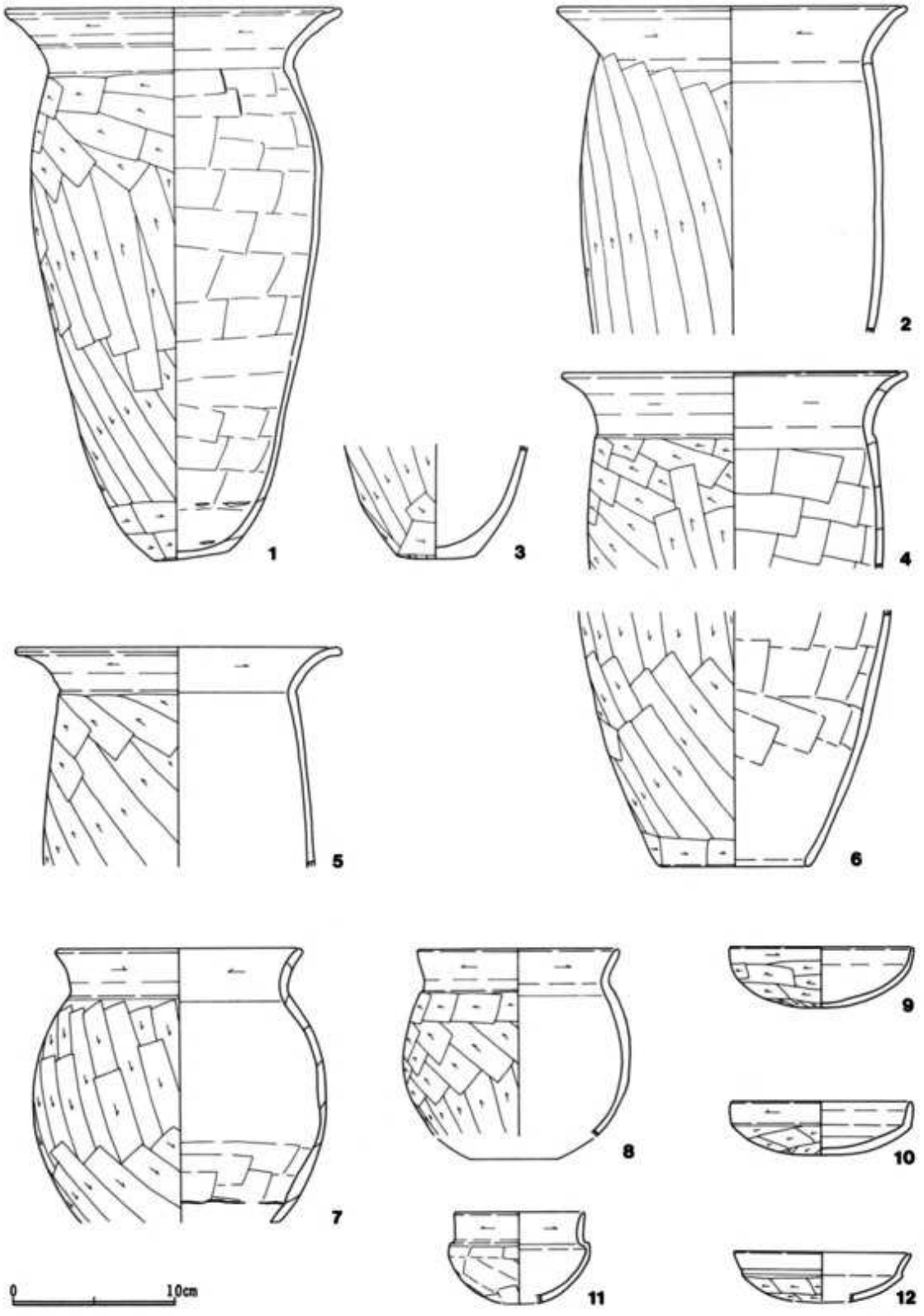
第２層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）

第３層：黒褐色土層（炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第４層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

**第147図　第35号住居跡カマド**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 7 | 小形甕 | 口縁部径<br>(15.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はやや張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半ナデ・下半篦ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>外－淡橙褐色<br>内－明橙褐色 | 1/2。 |
| 8 | 小形甕 | 口縁部径<br>12.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 残存部完形。二次焼成を受けている。 |
| 9 | 坏 | 口径11.4<br>器高 3.8 | 口縁部は体部より内湾しながら立つ。器高は深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－暗橙褐色 | 2/3。 |




**第148図　第35号住居跡出土土器**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 坏 | 口径11.2<br>器高 3.3 | 口縁部はやや外傾ぎみに直立する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒<br>内外－淡茶褐色 | 完形。 |
| 11 | 小形広口壷 | 口径(8.0)<br>器高(5.7) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く直立する。胴部はあまり張らず、底部は丸底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒<br>内面－赤褐色 | 1/3。<br>二次焼成を受けている。 |
| 12 | 坏 | 口径(11.0)<br>器高( 3.1) | 口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/3。 |

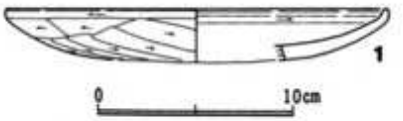
**第36号住居跡（第150図）**

A地点の調査区中央部の西端に位置し、重複する第37号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。住居の西側半分は調査区外に位置し、また住居跡の北側は撹乱を受けているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。住居の主軸方位は、N－93°－Eをとる。確認面からの深さは5cm前後あり、壁は緩やかに立ち上がっている。調査区内で検出された各壁下には、壁溝は見られない。床面は、暗褐色土を若干埋め戻した貼床式で、全体に平坦であるが、やや軟弱である。主柱穴や貯蔵穴は検出されていない。

カマドは、住居東側壁の中央付近に位置すると推測され、壁に対してやや斜めに付設されている。規模は、全長91cm・最大幅86cmを測る。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土(第1層)を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、住居の壁を掘り込んだ形態をとるが、やや幅が狭い。燃焼面は、住居の床面と同一の高さで、壁面は良く焼けている。出土遺物は、土器片がごく少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土土器が少ないため明確ではないが、一応真間期の所産と推測される。




**第149図　第36号住居跡出土土器**

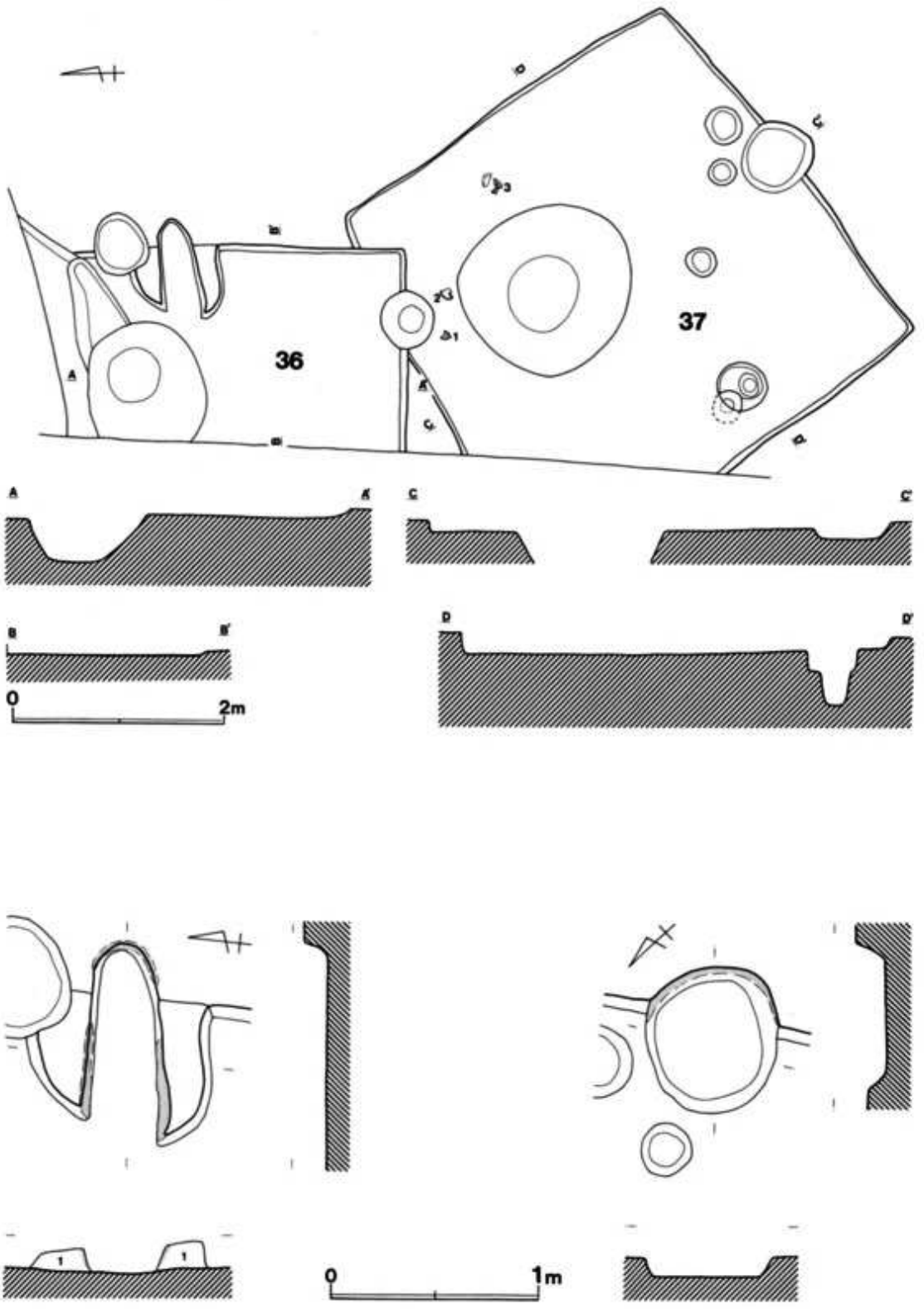
**第36号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 皿 | 口縁部径<br>(19.8cm) | 口縁部は体部より内湾しながら開き、口唇部は短く直立する。体部は浅い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗褐色 | 1/6。 |

**第37号住居跡（第149図）**

A地点の調査区中央部西端に位置し、重複する第35号住居跡と第36号住居跡及び第2号井戸跡に切られている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。住居の西側コーナー部付近は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明であるが、検出された部分から住居跡の形態を推測することは可能である。

平面形は、比較的整った方形を呈するものと推測される。規模は、北西～南東方向4.00m・北東～南西方向4.00mある。住居の主軸方位は、N－145°－Eをとる。確認面からの深さは3cm～20cm

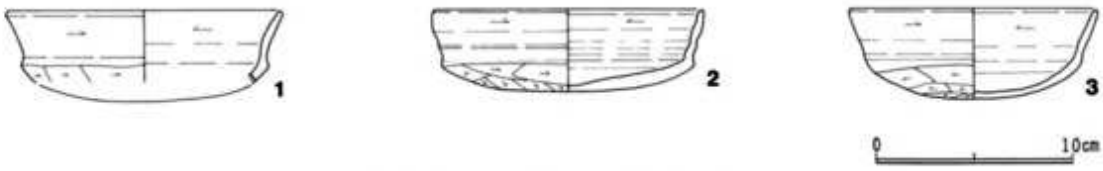



第150図　第36・37号住居跡

あり、壁は直線的で垂直ぎみに立ち上がっている。調査区内で検出された各壁下には、壁溝は見られない。床面は直床式と推測され、全体に平坦で非常に堅緻である。

カマドは、住居の南東側壁の中央やや北寄りに位置するが、上半部は重複する第35号住居跡により削平されており、燃焼部の掘り方のみ残存している。袖は、すでに削平あるいは崩壊しているため不明である。燃焼部は、住居の壁を若干掘り込んだ形態をとっている。燃焼面は、住居の床面よりも一段低く、壁面は良く焼けている。出土遺物は、床面付近より土器片がごく少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土土器より鬼高期の所産と考えられる。




**第151図　第37号住居跡出土土器**

**第37号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口縁部径<br>(14.2cm) | 口縁部は体部より緩やかに外反する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/5。 |
| 2 | 坏 | 口径(14.0)<br>器高　4.2 | 口縁部は蛇行しながら外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－暗褐色 | 1/3。 |
| 3 | 坏 | 口径(12.8)<br>器高　4.6 | 口縁部は若干外反ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/3。 |

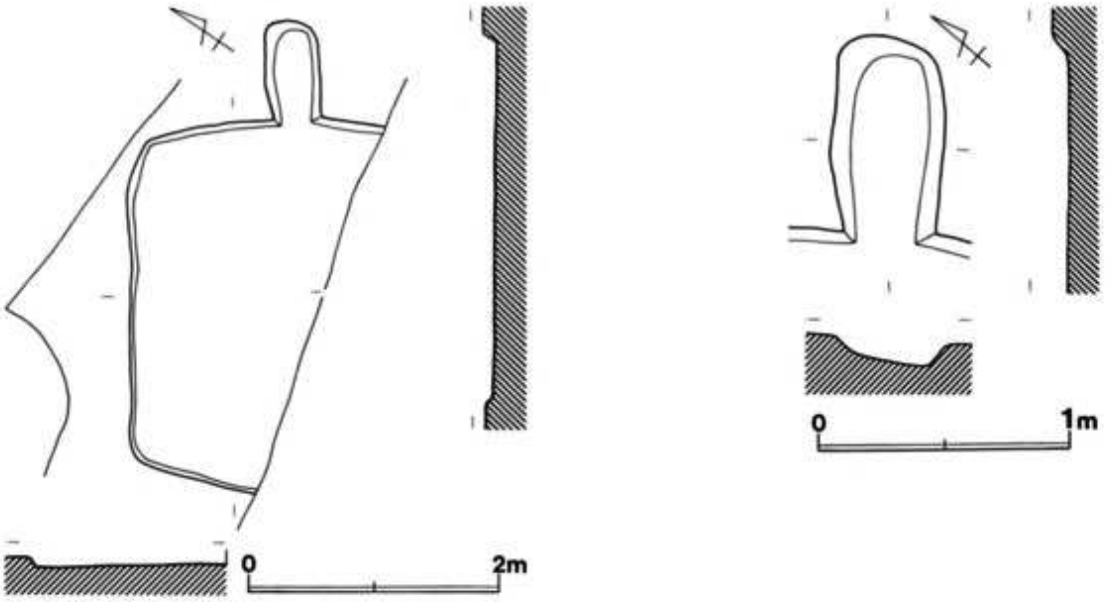
**第38号住居跡（第152図）**

A地点の調査区南西側の南端に位置する。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。住居の南側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、東西両壁がやや張る方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向2.80m・南北方向は1.50mまで測れ、比較的小型の住居跡である。住居の主軸方位は、N－57°－Eをとる。確認面からの深さは8cm程度あり、壁は緩やかに立ち上がっている。調査区内で検出された各壁下には、壁溝は見られない。床面は直床式で、全体に平坦で堅緻である。

カマドは、住居東側壁の中央付近に位置すると推測され、住居の壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長103cm・幅42cmを測る。袖はなく、壁外に燃焼部が延びるタイプで、第3号住居跡のカマドの形態と類似している。燃焼部は、住居の床面とほぼ同じ高さである。出土遺物は、土器片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土土器より国分期の所産と考えられる。




第152図　第38号住居跡

第153図　第38号住居跡出土土器

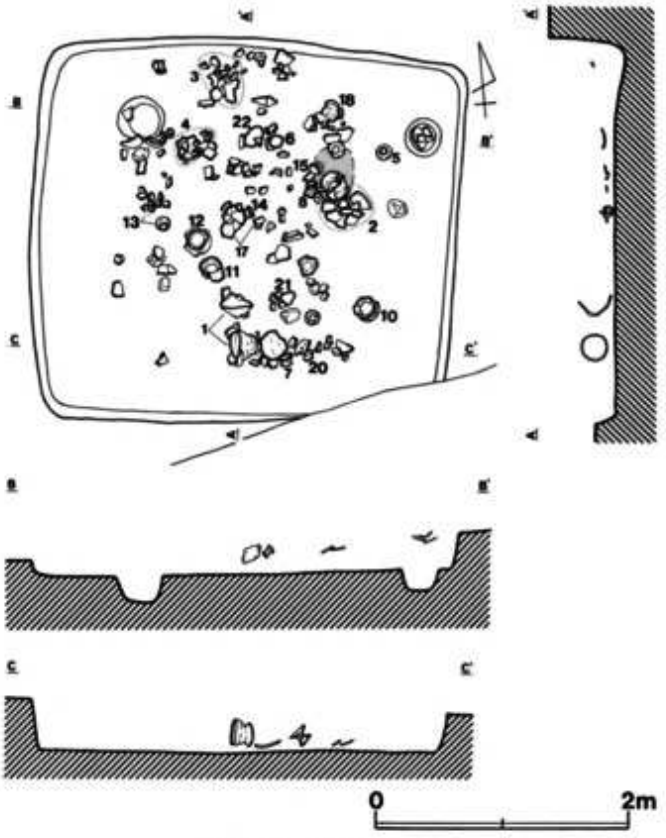
第38号住居跡出土土器観察表

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(19.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直立し、口唇部は直線的に外傾する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/5。 |
| 2 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.8)<br>器高　3.6<br>底径　7.6 | 口縁部は内湾ぎみに外傾し、口唇部は肥厚する。体部は浅く、底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。底部外面回転糸切りの後外周回転篦ケズリ。 | 白色針状物質<br>内外－淡灰色 | 1/2。 |
| 3 | 須恵器<br>高台付<br>埦 | 高台部径<br>( 7.2cm) | 高台部貼り付け。高台部は外傾する。端部は肥厚し、外面は窪む。 | 高台部内外面回転ナデ。 | 白色粒<br>内外－淡灰色 | 1/4。 |

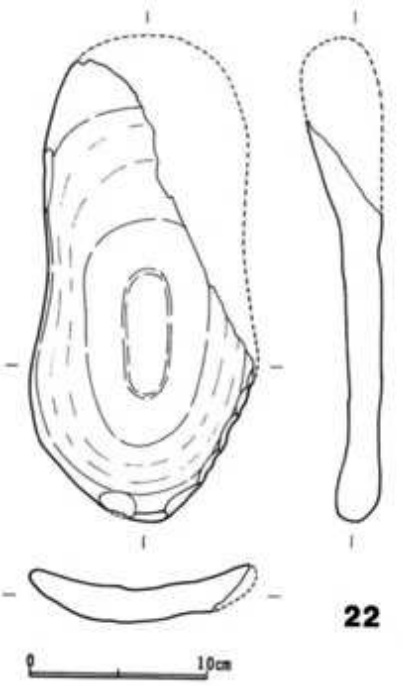
**第39号住居跡（第154図）**

A地点の調査区南端に位置し、重複する第22・23・25・30号住居跡に切られている。遺構の依存状態は比較的良好である。なお、本住居跡の南東コーナー部は調査区外に位置している。

平面形は、比較的整った長方形を呈するが、住居の西側壁は若干張っている。規模は、東西方向3.29m・南北方向2.95mあり、比較的小型の住居跡である。住居の長軸方位は、N－97°－Eをとる。確認面からの深さは最高で40cmあり、壁は直線的で垂直ぎみに立ち上がっている。各壁下には壁溝は見られない。床面は直床式で、全体に平坦であるが若干緩やかな起伏が見られ、やや軟弱である。




第154図　第39号住居跡




第154図　第39号住居跡出土石皿

住居の北側より直径36cmと27cmの円形を呈する比較的浅いピットが2箇所検出されているが、その性格は不明である。炉は、住居中央より北東側寄りに位置する。床面が焼けているだけの地床炉であるが、非常に良く焼けて堅化している。

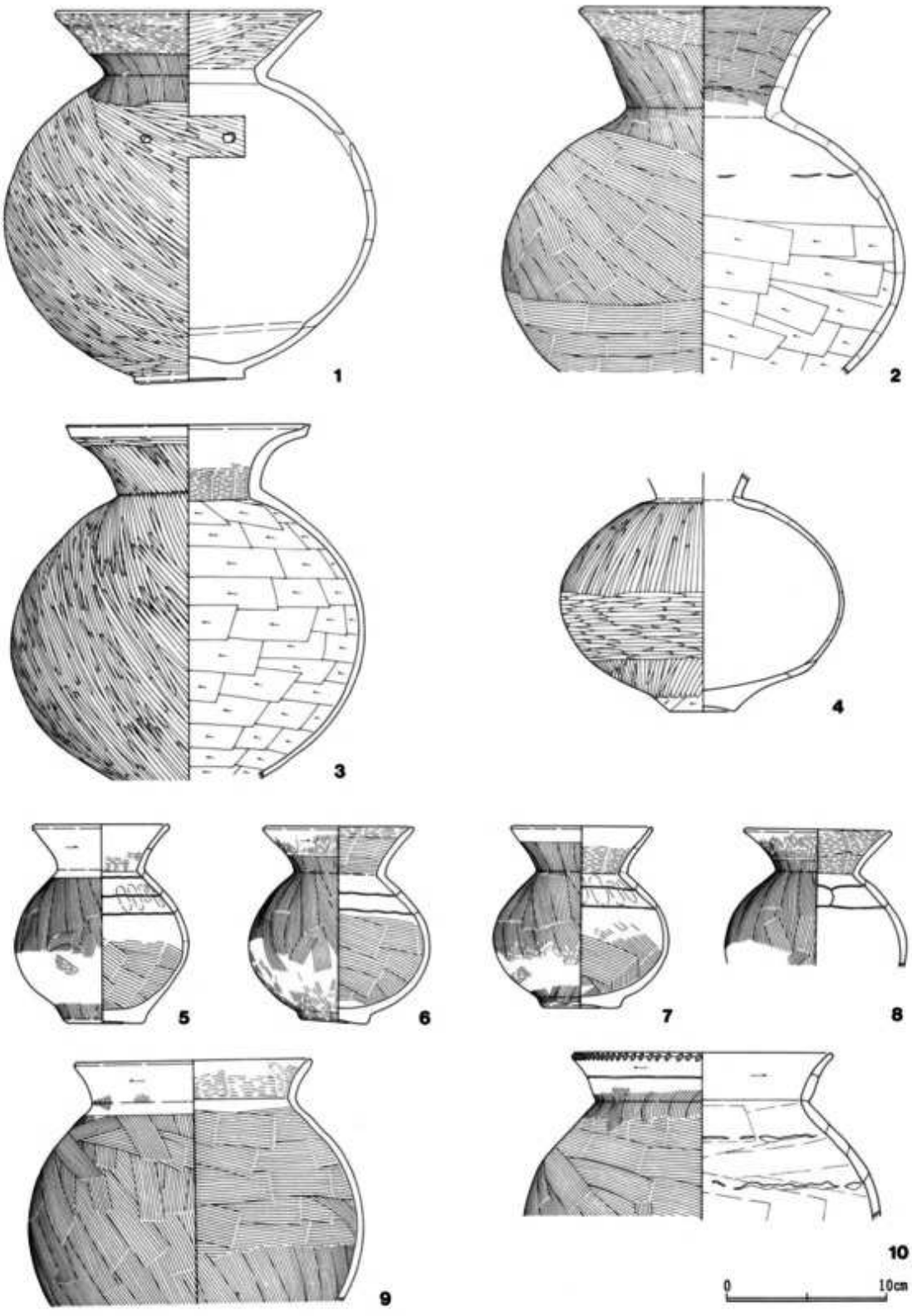
出土遺物は、住居の中央部より比較的多量の土器が散乱したような状態で出土している。これらの土器は、住居中央部付近のものは床面に近く、周辺部のものほどレベルが高くなっており、覆土が自然に堆積した状態とよく一致している。おそらくは、そのほとんどが住居廃絶後の覆土埋没過程中に周辺から投棄されたものであろう。この他には、これらの多量の土器に混じって、住居中央部北側寄りの覆土中より破損した石皿(No.22)が1点出土している。この石皿は、その特徴から本住居跡の時期のものではなく、縄文時代のものと推測され、偶然的に再利用されたか混入品であろう。

本住居跡の時期は、出土土器より五領期の所産と考えられる。

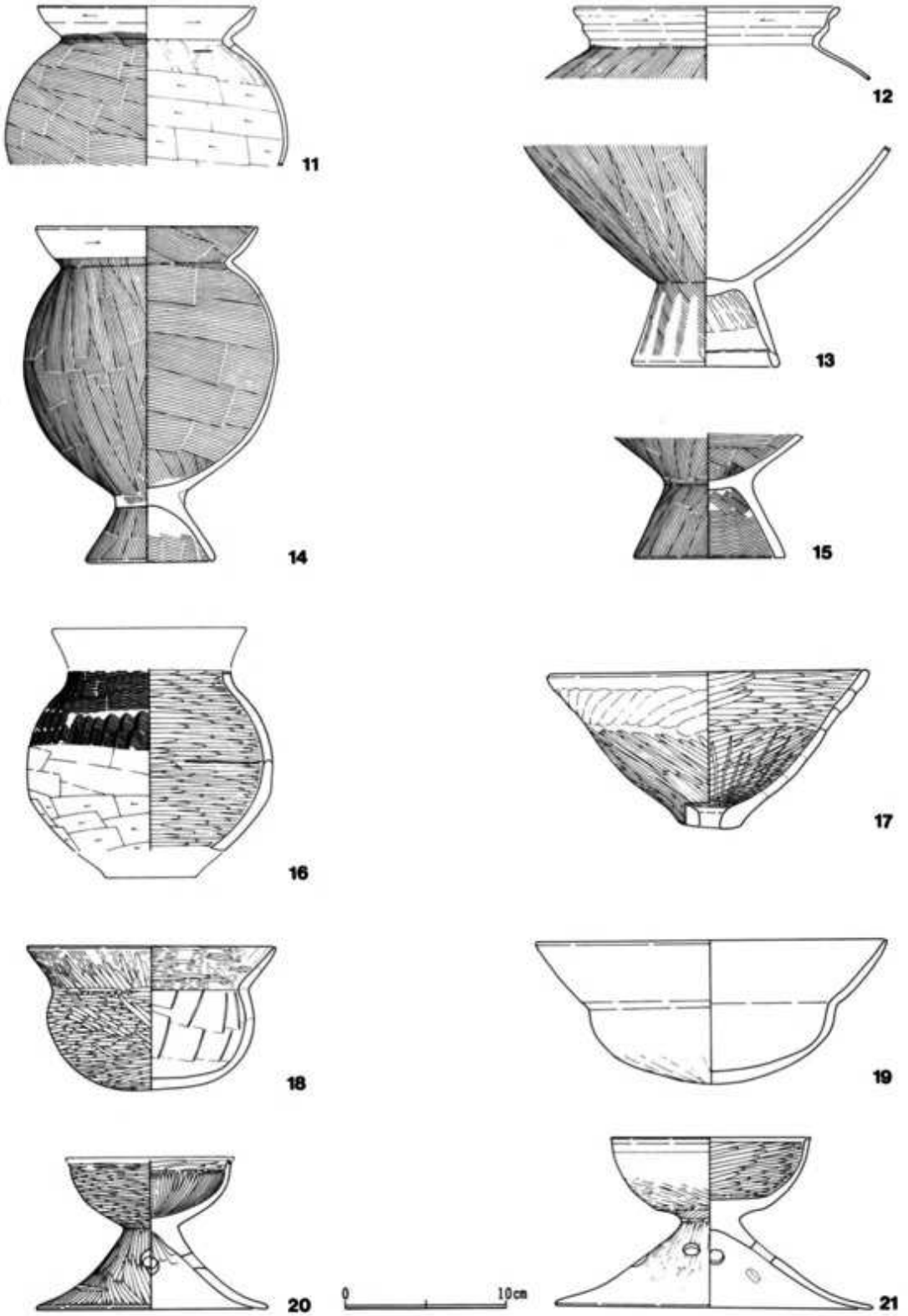
**第39号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺 | 口径16.6<br>器高23.0<br>底径 6.8 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に強く外傾する。胴部は強く張り、底部は突出する平底を呈する。 | 口縁部外面ハケの後ナデ、内面ミガキ。胴部外面ハケの後丁寧なミガキ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br><br><br><br>内外－明茶褐色 | ほぼ完形。胴部上半に焼成前の穿孔2箇所。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 壺 | 口縁部径<br>15.6cm<br>残存高<br>22.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は強く張り、最大径を中位にもつ。 | 口縁部外面ハケの後上半ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ハケ、内面ナデの後下半ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－淡橙褐色<br>内－灰褐色 | 1/2。 |
| 3 | 壺 | 口縁部径<br>(15.2cm)<br>残存高<br>21.9cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は上方に摘まみ上げられ、外面に面をもつ。胴部は強く張る。 | 口唇部内外面ヨコナデ。口縁部外面ハケの後ミガキ、内面ハケの後ナデ。胴部外面ハケの後ミガキ、内面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 4/5。<br>外面に黒斑あり。 |
| 4 | 壺 | 残存高<br>14.7cm<br>底部径<br>4.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反する。胴部は偏平をなし、底部は上げ底風の平底を呈する。 | 口縁部内外面ナデ。胴部外面ミガキ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>外上半-暗灰褐色<br>外下半－淡褐色<br>内－暗灰褐色 | 残存部完形。 |
| 5 | 小形壺 | 口径 8.6<br>器高(12.3)<br>底径 4.8 | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径をやや下位にもつ。底部は突出する平底を呈する。 | 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ナデ、内面ナデの後下半ハケ。底部外面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－明茶褐色<br>内－茶褐色 | 1/2。<br>上半と下半は接合せず、器形は図上復元。 |
| 6 | 小形壺 | 口径 9.4<br>器高12.2<br>底径 4.4 | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径をやや下位にもつ。底部は突出する平底を呈する。 | 口縁部内外面ハケの後上半ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ナデ、内面ナデの後下半ハケ。底部外面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－明茶褐色 | 3/4。 |
| 7 | 小形壺 | 口径 8.8<br>器高(11.2)<br>底径 5.0 | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径をやや下位にもつ。底部は突出する上げ底風の平底を呈する。 | 口縁部内外面ハケの後上半ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ナデ、内面ナデの後下半ハケ。底部外面ナデ。 | 片岩粒・黒色粒<br>白色粒<br>内外－明茶褐色 | 4/5。<br>上半と下半は接合せず、器形は図上復元。 |
| 8 | 小形壺 | 口縁部径<br>9.2cm | 粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張る。 | 口縁部内外面ハケの後上半ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ナデ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 3/4。 |
| 9 | 甕 | 口縁部径<br>14.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張る | 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部内外面ハケ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/2。 |
| 10 | 甕 | 口縁部径<br>16.2cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、外面に輪積み痕を残す。 | 口縁部内外面ヨコナデ。口唇部に篦による刻みを施す。胴部外面ハケ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/2。 |
| 11 | 甕 | 口縁部径<br>13.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、器肉は薄い。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデの後ケズリ。 | 赤色粒・黒色粒<br>白色粒<br>内外－淡褐色 | 2/3。 |
| 12 | 甕 | 口縁部径<br>16.4cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は「S」字状を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 口縁部のみ。 |
| 13 | 台付甕 | 台端部径<br>9.0cm | 粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、台部は「ハ」の字状に開き、端部を折り返す。 | 胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗灰褐色 | 1/3。 |




第156図　第39号住居跡出土土器(1)




第157図　第39号住居跡出土土器(2)

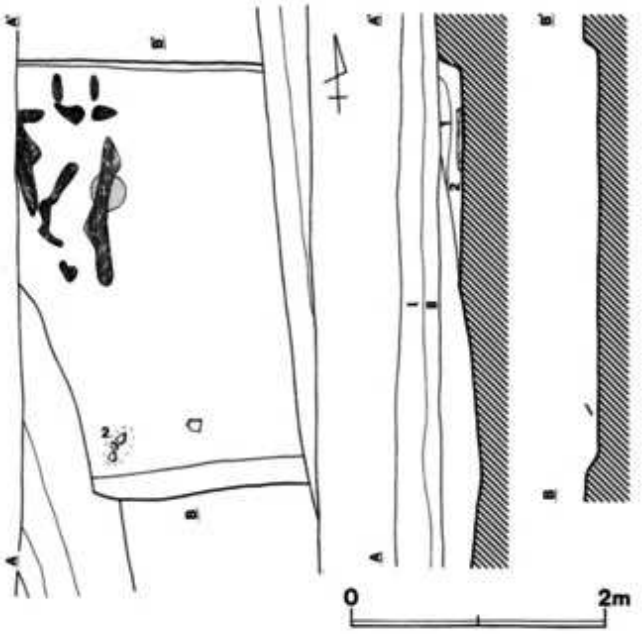
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 台付甕 | 口縁部径 13.6cm<br>器高 20.6cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、台部は小さく「ハ」の字状に開く。 | 口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ハケ。胴部内外面ハケ。台部外面ハケ、内面ナデの後ハケ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－淡褐色<br>内－暗茶褐色 | ほぼ完形。 |
| 15 | 台付甕 | 台端部径 9.4cm | 粘土紐積み上げ成形。台部は「ハ」の字状に開く。 | 内外面ハケ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 台部のみ。 |
| 16 | 甕 | 残存高 11.0cm | 粘土紐積み上げ成形。胴部はやや張り、最大径を中位にもつ。 | 外面ケズリの後上半に6本歯の右回りによる櫛描波状文を施文する。内面ミガキ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 1/2。 |
| 17 | 甑 | 口径(19.8)<br>器高 9.6<br>底径 3.8 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は体部より内湾ぎみに開く。底部は小さな平底。 | 外面ナデの後下半ミガキ、内面ミガキ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | 2/3。<br>底部穿孔は焼成前。 |
| 18 | 鉢 | 口縁部径 15.2cm<br>器高 8.8cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部はあまり張らず、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ハケの後ヨコナデさらに部分的なミガキ。胴部外面ケズリの後ミガキ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | 4/5。<br>底部外面に黒斑あり。 |
| 19 | 鉢 | 口径(21.6)<br>器高 8.8 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張らず、底部は丸底。 | 口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/3。 |
| 20 | 高坏 | 残存高 9.2cm | 粘土紐積み上げ成形。坏部は内湾しながら開き、口縁部は短く外反する。脚部は外反しながら大きく開く。 | 坏部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－明茶褐色 | 1/3。<br>脚部穿孔は4箇所。 |
| 21 | 高坏 | 口縁部径 (12.4cm)<br>器高 10.6cm | 粘土紐積み上げ成形。坏部は内湾しながら開き、口唇部内面に面をもつ。脚部は外反しながら大きく開く。 | 口唇部内外面ヨコナデ。坏部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－橙褐色 | 1/3。<br>脚部穿孔は上下3箇所ずつ。 |
| 22 | 石皿 | 残存長25.6<br>最大幅12.4 | 偏平な自然石の上面を、楕円形状に丁寧に磨り窪めている。 | 右側の側縁部に形状調整のためと思われる荒い加工が見られる。 | 緑色片岩 | 約2/3。<br>上半部の切断面は被熱により変色している。 |

**第40号住居跡（第158図）**

B地点の調査区南側に位置し、重複する第3号溝跡と第4号溝跡に切られている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。住居跡の東西両壁は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われ、南北方向は3.36mを測る。住居の主軸方位は、N－7°－Eの北側にとるものと推測される。確認面からの深さは18cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。調査区内で検出された各壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを全体に若干埋め戻した貼床式で、ほぼ平坦に作られているが、比較的軟弱である。炉は、住居中央部の北寄りに位置する。床面が焼けているだけの地床炉で、焼けている範囲はやや狭い。住居の床面上には、炭化材が多く見られることから、本住居跡は消失したものと考えられる。出土遺物は比較的少なく、土器片がごく少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土土器より五領期の所産と考えられる。

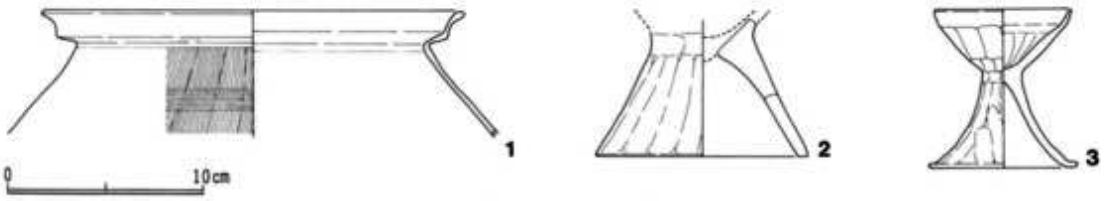



**第40号住居跡土層説明**

第1層：黒褐色土層（マンガン塊・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第2層：暗褐色土層（マンガン塊を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

**第158図　第40号住居跡**




**第159図　第40号住居跡出土土器**

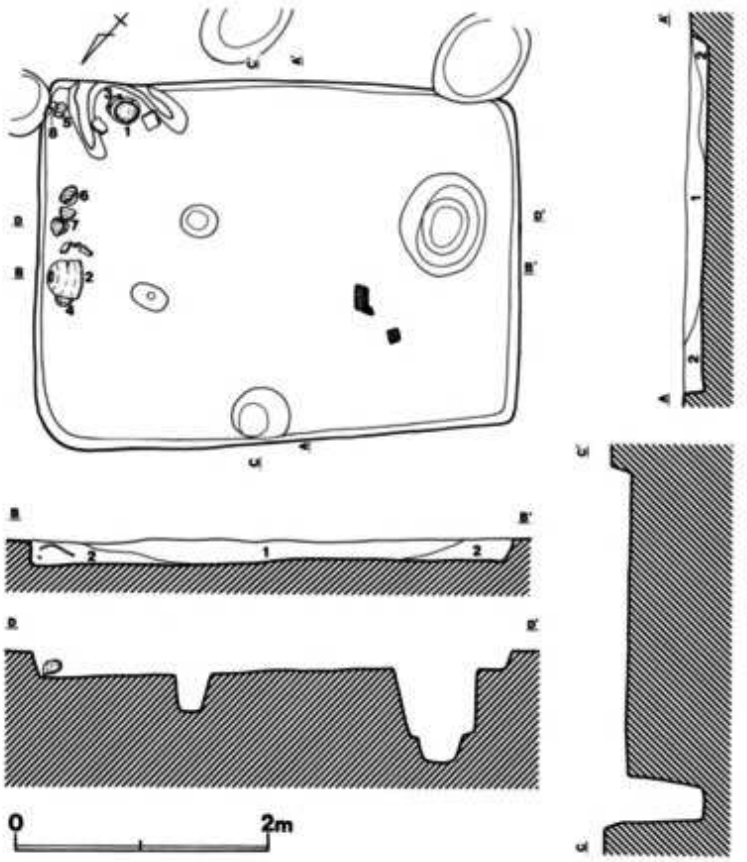
**第40号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(21.8cm) | 口縁部は「S」字状を呈し、口唇部は丸く肥厚する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>外-暗褐色 内-淡褐色 | 小破片。 |
| 2 | 台付甕 | | 粘土紐積み上げ成形。台部は「ハ」の字状に開く。 | 台部内外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 2/3。 |
| 3 | 器台 | 口径( 7.0)<br>器高 8.1 | 粘土紐積み上げ成形。器受部は内湾ぎみに開く。脚部は外反しながら開く。 | 口唇部内外面ヨコナデ。器受部内外面篦ナデ。脚部外面篦ナデ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗橙褐色 | 1/4。<br>二次焼成を受けている。 |

**第41号住居跡（第160図）**

C地点の調査区東側に位置する。第2号掘立柱建物跡の柱穴によって住居南側コーナーの一部を切られている。遺構の遺存状態は、本遺跡の中では比較的良好な方である。

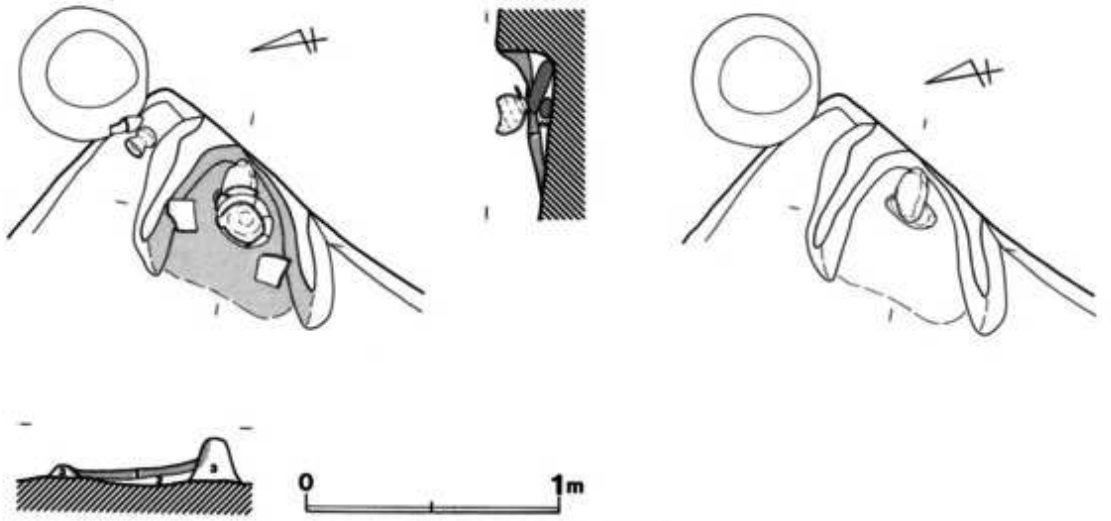
平面形は、住居コーナー部が若干丸みをもつ長方形を呈するが、住居の北東側壁に比べて南西側壁がやや短くなっている。規模は、北東～南西方向3.75m・北西～南東方向2.80mを測る。住居の主軸方位は、N－137°－Eをとる。確認面からの深さは15cm前後あり、壁は直線的に立ち上がっている。各壁下には壁溝は見られない。床面は直床式で、全体に平坦で堅緻である。住居内からはピッ




**第41号住居跡土層説明**

第１層：黒灰色土層（鉄斑を多量に、マンガン塊・ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：暗黄灰色土層（鉄斑・ローム粒子・マンガン塊を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）




**第160図　第41号住居跡**

**第41号住居跡カマド土層説明**

第１層：赤褐色土層（焼土層。）

第２層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第３層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

トが4箇所検出されているが、南西壁寄りの規模が大きく深いピットは、住居埋没後に掘削されたもので、本住居跡に伴うものではない。

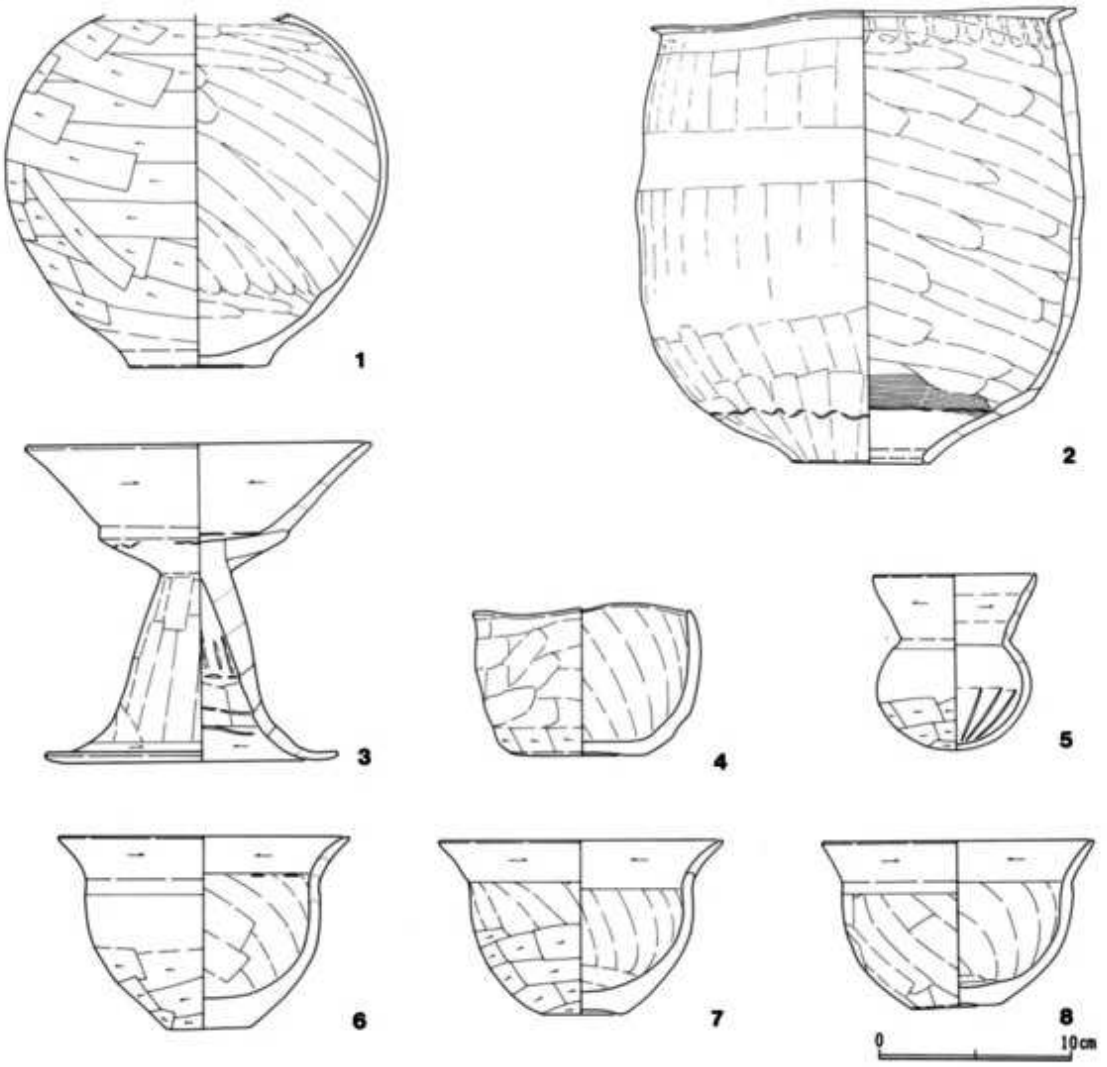
カマドは、住居南東壁の東側コーナー部寄りに位置し、壁に対して約65°西に傾いて付設されている。規模は、全長56cm・最大幅80cmを測る。袖は、ローム粒子を主体とする暗黄褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の厚さは比較的薄く、先端付近はかなり崩壊している。燃焼部は、住居の壁を掘り込まず、焚口部が大きく開く形態で、非常に良く焼けている。燃焼面は、カマドの奥に向かって緩やかに傾斜し、最奥部に比較的大きく偏平な自然石を2個積み重ね、さらにその上に高坏(No3)を伏せて支脚にしている。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

出土遺物は、カマド内より甕と高坏、住居北東側の壁際より大形甑・鉢・小形丸底壺などの土器が出土している。これらの土器は、カマド内では支脚として再利用されたNo3の高坏の上にNo1の甕が据えられた状態で出土し、住居北東側の壁際の土器はいずれも床面に置かれていたものが横転したような状態で出土しており、その出土状態から見て本住居跡で同時に使用されていたものと考えられ、良好な一括資料と言えるものである。土器以外では、住居中央西寄りの床面上に小さな炭化材が検出されているが、本住居跡が焼失したような痕跡は認められない。

本住居跡の時期は、出土土器より和泉期の所産と考えられる。

**第41号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 残存高18.1<br>底径 7.2 | 粘土紐積み上げ成形。胴部は球形に強く張る。底部は突出する平底を呈する。 | 胴部外面ケズリ、内面指ナデ。底部内外面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－暗褐色<br>内－淡褐色 | 2/3。<br>外面に煤の付着あり。 |
| 2 | 大形甑 | 口径21.8<br>器高23.2<br>底径 7.2 | 粘土紐輪積み成形。口縁部は直線的に短く外傾する。胴部はあまり張らず、底部はやや突出ぎみである。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面篦ナデ、内面ハケの後指ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒・小　石<br>内外－茶褐色 | 完形。<br>内外面に黒斑あり。 |
| 3 | 高　坏 | 口径17.8<br>器高16.3 | 脚部粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外反ぎみに開く。脚部は太く、端脚部は強く外反する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面ナデ。脚部外面ケズリの後ナデ、内面篦ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明茶褐色 | ほぼ完形。 |
| 4 | 坏 | 口径11.2<br>器高 7.8<br>底径 7.0 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は胴部より内湾ぎみに立ち、底部は平底を呈する。 | 外面ナデの後下端ケズリ、内面ナデ。底部内外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 3/4。 |
| 5 | 小形丸底壺 | 口縁部径<br>8.4cm<br>器　高<br>9.0cm | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は若干内湾する。胴部は張り、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面篦ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>外－茶褐色<br>内－黒褐色 | 完形。 |
| 6 | 鉢 | 口径15.0<br>器高 9.9<br>底径 4.4 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らず、底部は平底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－明茶褐色<br>内－淡褐色 | ほぼ完形。 |
| 7 | 鉢 | 口径14.6<br>器高 8.9<br>底径 4.2 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らず、底部は平底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－茶褐色 | 完形。<br>内面に煤の付着あり。 |




**第161図　第41号住居出土土器**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 鉢 | 口径(14.0)<br>器高 8.6<br>底径 4.5 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らず、底部は平底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－茶褐色<br>内－暗灰褐色 | 1/2。 |

**第42号住居跡（第163図）**

C地点の調査区東側の南端に位置し、重複する第43号住居跡と第44号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、住居の大部分は調査区外であるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は不明であるが、調査区内で検出された北西側コーナー部はかなり丸みの強い形態を呈している。確認面からの深さは36cmあり、壁は比較的緩やかに立ち上がっている。調査区内で検出された壁下には壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、

全体に平坦で堅緻である。住居内からは性格不明の浅いピットが1箇所検出されている。出土遺物は、覆土中より土器片がごく少量出土しただけである。

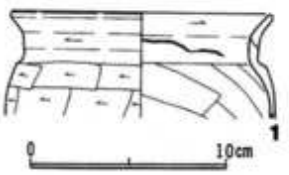
本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器より国分期の所産と考えられる。

**第43号住居跡（第163図）**

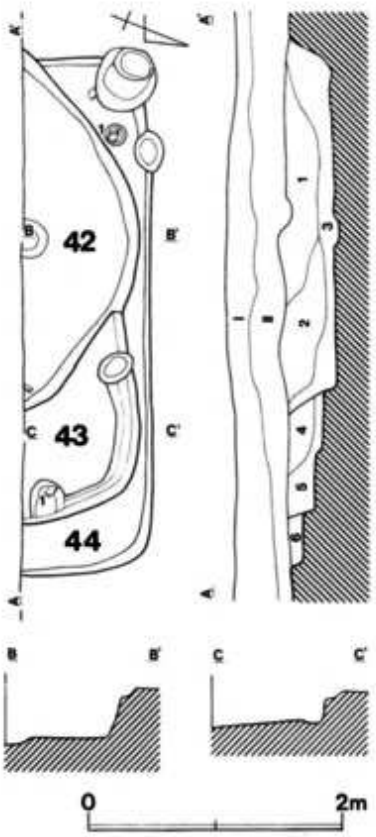
C地点の調査区東側の南端に位置し、重複する第42号住居跡に切られ、第44号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は比較的良好な方ではあるが、住居の大部分は調査区外であるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は不明であるが、住居の北東側コーナー部はやや丸みをもっている。確認面からの深さは20cm～26cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。住居の北東側コーナー部には、一部壁溝が見られる。床面は直床式で、堅緻である。規模が小さく浅いピットが、住居の壁際に2箇所検出されており、その間を壁溝でつないでいることから、壁溝と関連するものと考えらる。出土遺物は、覆土中より土器片がごく少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土土器より国分期の所産と考えられる。




**第162図　第43号住居跡出土土器**




**第163図　第42～44号住居跡**

**第42～44号住居跡土層説明**

**＜第42号住居跡＞**

第1層：暗褐色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第2層：暗灰色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：黒灰色土層（マンガン塊を均一に、鉄斑・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

**＜第43号住居跡＞**

第4層：暗褐色土層（鉄斑を多量に、マンガン塊・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗灰色土層（ローム粒子・鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

**＜第44号住居跡＞**

第6層：暗灰色土層（鉄斑を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

**第43号住居跡出土土器観察表**

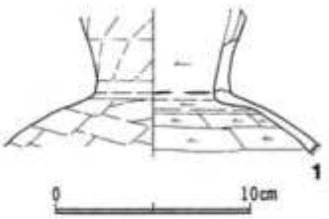
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小形甕 | 口縁部径<br>(13.4cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直立し、口唇部は短く外傾する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－暗橙褐色<br>内－淡灰褐色 | 1/3。 |

## 第44号住居跡（第163図）

C地点の調査区東側の南端に位置し、重複する第42号住居跡と第43号住居跡及び第3号掘立柱建物跡に切られている。遺構の遺存状態はあまり良好とは言えず、住居の南側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向3.98m・南北方向は1.00mまで測れる。確認面からの深さは10cm程度あり、壁は緩やかに立ち上がっている。調査区内で検出された各壁下には、壁溝は見られない。床面は直床式で、ほぼ平坦で作られており、比較的堅緻である。出土遺物は、覆土中より土器片がごく少量出土しただけである。No.1の土師器長頸壺の破片は、住居の北西コーナー部付近に位置する浅い小ピット内から出土したもので、そのピットとともに本住居跡に直接伴うものかは不明である。

本住居跡の時期は、出土土器より真間期の所産と推測される。




**第164図　第44号住居跡出土土器**

**第44号住居跡出土土器観察表**

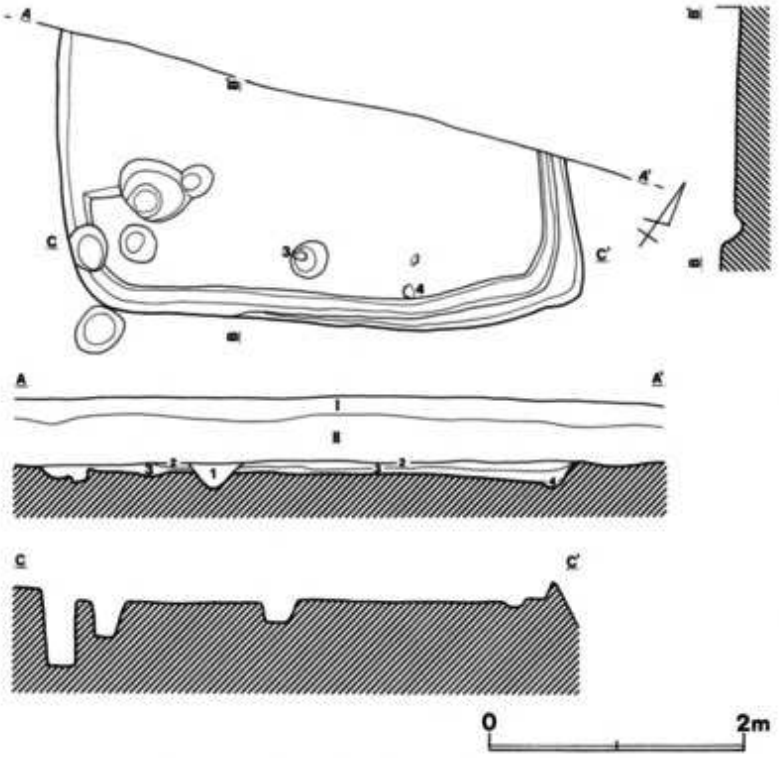
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 壺 | | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面篦ナデ、内面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/2。<br>外面に黒斑あり。 |

## 第45号住居跡（第165図）

C地点の調査区東側の北端に位置し、重複する第3号掘立柱建物跡に切られている。遺構の遺存状態はあまり良好とは言えず、かろうじて残存しているような状態である。住居の北側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈するものと思われるが、住居のコーナー部はやや丸みをもっている。規模は、東西方向3.98m・南北方向は2.10mまで測れる。確認面からの深さは最高で10cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。調査区内で検出された住居の北東側と南東側の壁下には壁溝が巡っているが、南西側の壁については一部に強い削平を受けているため明確ではない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻した貼床式で、全体に平坦に作られており、比較的堅緻である。出土遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。No.3の坏の破片は、南側壁際の中央に位置する小ピット内から出土している。

本住居跡の時期は、出土土器より鬼高期終末の所産と考えられる。




**第45号住居跡土層説明**

第１層：暗褐色土層(マンガン塊・鉄斑を多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第２層：暗灰色土層(マンガン塊・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない)

第３層：暗褐色土層（マンガン塊を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。)

第４層：暗黄褐色土層（マンガン塊・ローム粒子を多量含む。粘性・しまりともない。)

**第165図　第45号住居跡**

**第166図　第45号住居跡出土土器**

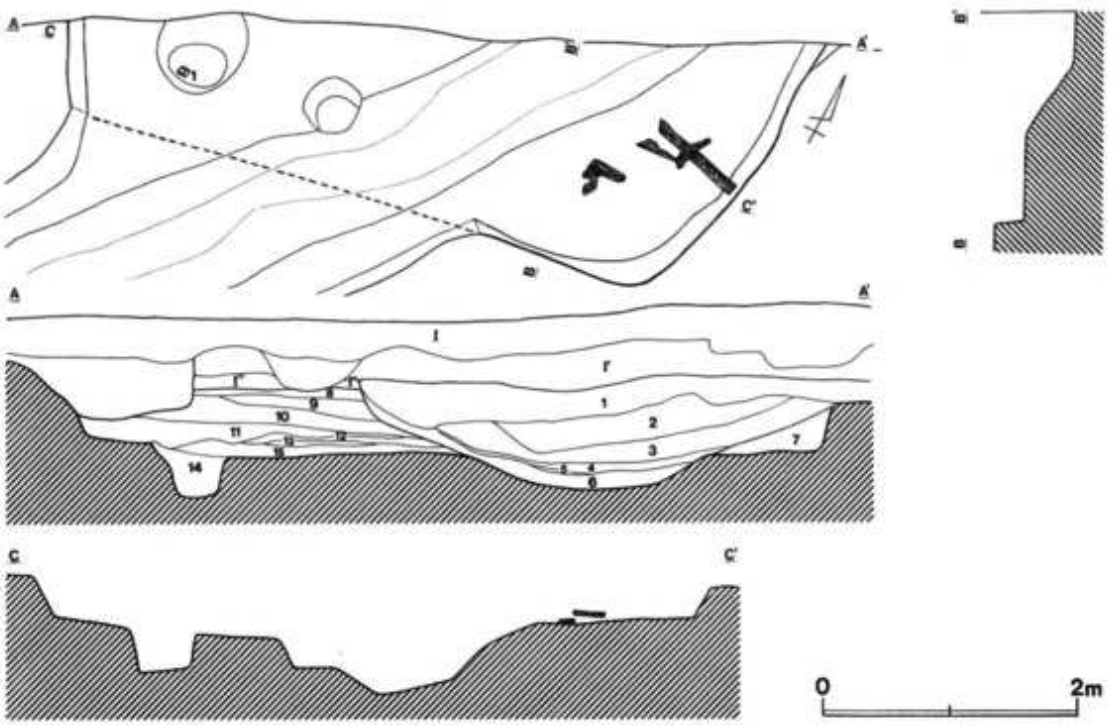
**第45号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径(13.0)<br>器高 3.5 | 口縁部は体部より内湾しながら立つ。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡褐色 | 1/3。<br>体部内外面指頭圧痕。 |
| 2 | 坏 | 口径(10.4)<br>器高( 3.3) | 口縁部は体部より外反する。体部は浅く、底部は丸底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/4。 |
| 3 | 坏 | 口径(10.0)<br>器高( 3.5) | 口縁部は体部より外反する。体部は浅く、底部は丸底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/3。 |
| 4 | 坏 | 口径(10.0)<br>器高( 3.3) | 口縁部は体部より短く直線的に外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 1/3。 |

**第46号住居跡（第167図）**

C地点の調査区西側の北端に位置し、重複する第８号溝跡に切られている。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、住居北側の大半は調査区外であるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形あるいは長方形を呈するものと思われるが、住居のコーナー部はやや丸みをもっている。規模は、東西方向は5.60mまで、南北方向は2.20mまで測れる。確認面からの深さは38cm




**第167図　第46号住居跡**

**第46号住居跡土層説明**

**＜第８号溝＞**

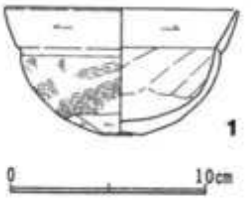
第１層：淡灰褐色土層（A軽石を多量に、ロームブロック・粘土ブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第２層：淡灰褐色土層（A軽石を多量に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第３層：暗灰褐色土層（A軽石を均一に、鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第４層：暗灰色土層（A軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第５層：暗灰色土層（A軽石・鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第６層：暗灰色土層（A軽石・鉄斑・砂を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

**＜第46号住居跡＞**

第７層：淡灰色土層（白色粒・鉄斑・ローム粒子・粘土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第８層：黒褐色土層（鉄斑を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第９層：暗茶褐色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第10層：黒灰色土層（鉄斑・マンガン塊・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第11層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、マンガン塊・鉄斑を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第12層：暗褐色土層（焼土粒子を多量に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第13層：暗黄褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
第14層：淡褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第15層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

あり、壁は直線的に立ち上がっている。調査区内で検出された各壁下には、壁溝は見られない。床面は直床式で、全体に平坦に作られており堅緻である。住居の南西コーナー部付近には、貯蔵穴と推測される規模の大きい楕円形を呈するピットがある。床面からの深さは40cmあり、底面はやや丸みをもっている。住居の南東側コーナー部付近からは、多くの炭化材が検出されており、覆土下半に焼土粒子や炭化粒子が顕著に見られることから、本住居跡は焼失したものと推測される。出土遺物は、土器片がごく少量出土しただけである。No.1の土器は、住居南西コーナー部付近の貯蔵穴と推測されるピットから出土している。

本住居跡の時期は、出土土器より五領期の所産と考えられる。




**第168図　第46号住居跡出土土器**

**第46号住居跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小形鉢 | 口径(12.0)<br>器高 6.5<br>底径 2.0 | 口縁部は胴部より内湾ぎみに外傾する。胴部は張らず、底部は中央部が窪む小さな平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－茶褐色<br>内－暗茶褐色 | 1/4。<br>底部外面に黒斑あり。 |

## 2．掘立柱建物跡

### 第１号掘立柱建物跡（第169図）

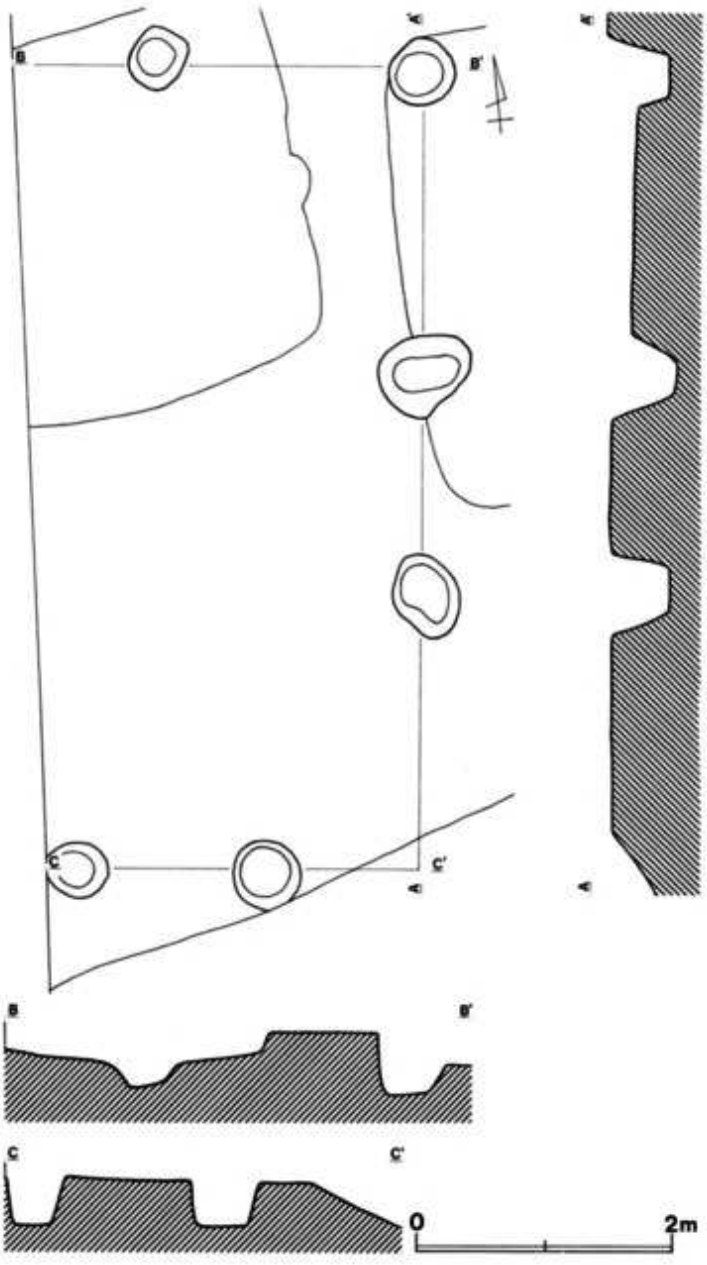
Ａ地点の調査区北側の西端に位置し、重複する第12号住居跡と第13号住居跡及び第１号溝跡を切っている。本建物跡は、形態や覆土が類似する柱穴状のピットが、方形もしくは長方形に配列されていると推測されるものであるが、各側柱とも柱穴間の間隔は不規則であり、また建物跡の西側半分は調査区外に位置するため、明確ではない。そのため、一応建物跡の可能性があるものとして扱っておきたい。

規模は、南北方向が３間で6.14ｍを測り、北側と南側の２間が約２ｍあるのに対して、真ん中の１間は1.14ｍと間隔が狭くなっている。東西方向は２～３間の3.14ｍまで測れ、北側と南側では間数や柱間距離が異なっているようである。本建物跡の南北方向は、Ｎ－６°－Ｅに向いている。

柱穴は、直径45㎝前後の円形を呈するものが多い。確認面からの深さは、40㎝前後と比較的そろっており、底面はいずれも平坦になっている。

出土遺物は、各柱穴の覆土中より真間期～国分期と推測される土師器の破片がごく少量出土しただけであるが、該期の遺構と重複しているものが多いため、本建物跡の時期に属するものか明らかではない。

本建物跡の時期は、時期を確定できるような要素が少ないため明確ではないが、このような柱穴の間隔が不規則な配列をとる建物跡は、当地方では中世以降の比較的小規模な建物跡によく見られることから、ここでは一応国分期以降の所産と考えておきたい。




第169図　第１号掘立柱建物跡

**第２号掘立柱建物跡（第170図）**

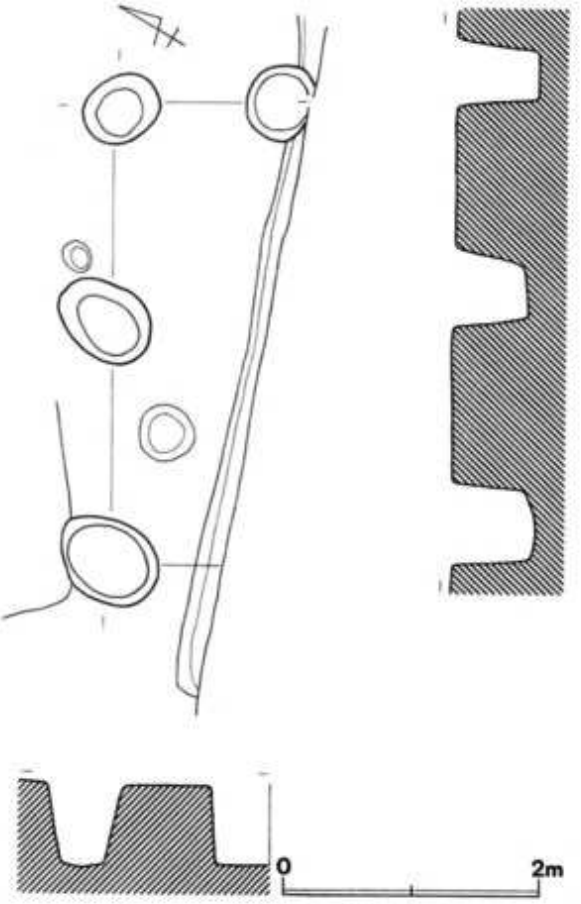
Ｃ地点の調査区東側の南端に位置し、重複する第41号住居跡を切っている。建物跡の南側の大半は調査区外に位置するため、本建物跡の全容は不明であるが、形態の類似する柱穴と推測されるピットの配列から、建物跡の可能性が高いと考えられるものである。

規模は、東西方向が２間で3.60mあり、南北方向は１間分が検出されており1.50mまで測れる。東西方向の１間は1.80mであるが、調査区内で検出された南北方向の１間は1.30mとやや短い。

柱穴は、60cm～80cmの比較的規模の大きな楕円形を呈するものが多く、確認面からの深さは60cm前後とかなり深くそろっている。底面は、いずれも広い平坦をなしている。柱穴の覆土は、ローム粒子やロームブロックを含む黒褐色土で、柱痕は見られなかった。

出土遺物は、柱穴の覆土中より土器の破片がごく少量出土しただけである。

本建物跡の時期は、出土土器より国分期の所産と推測される。



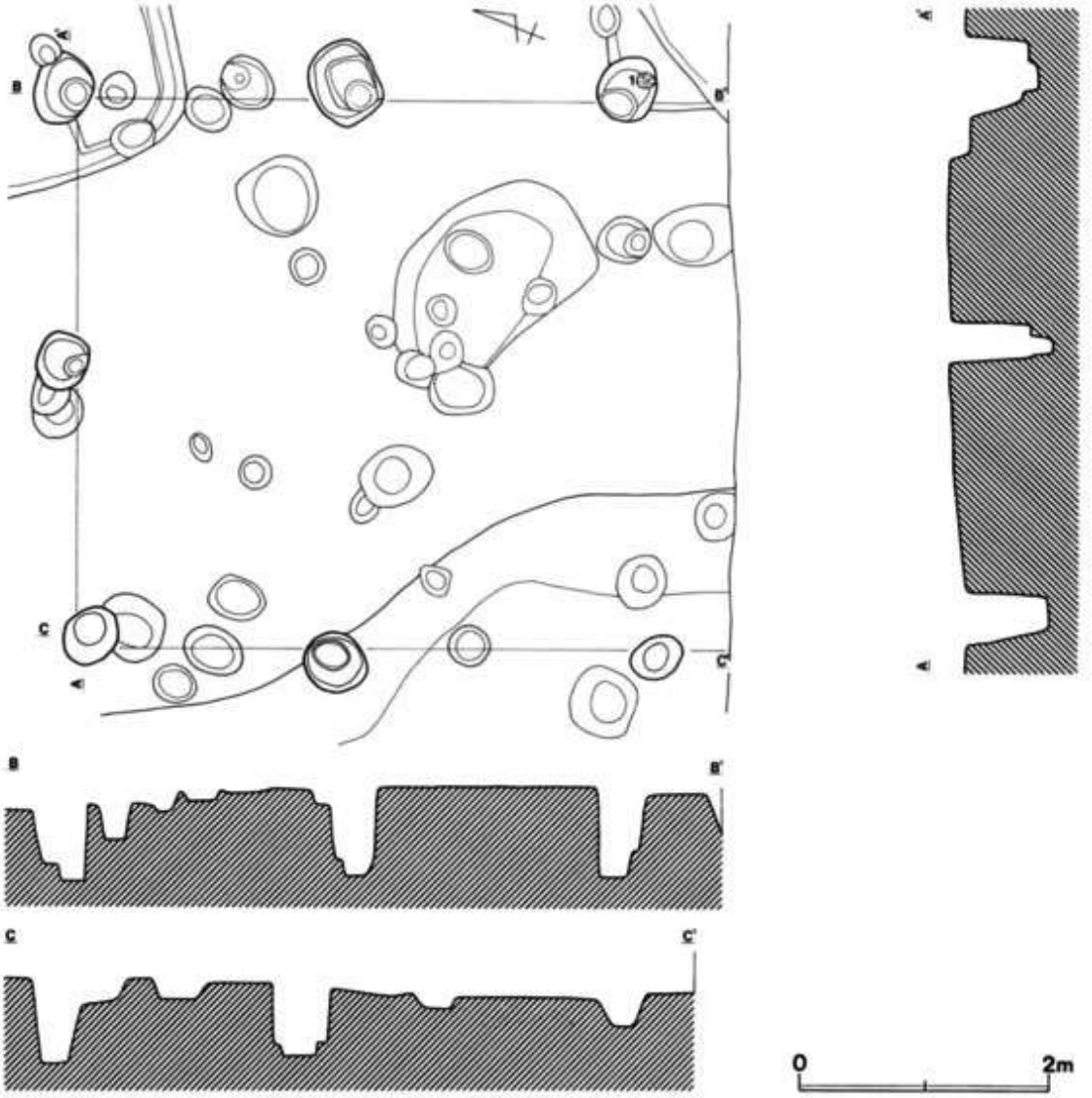

第170図　第２号掘立柱建物跡

**第３号掘立柱建物跡（第171図）**

Ｃ地点の調査区東側に位置し、重複する第44号住居跡と第45号住居跡を切っている。本建物跡の西側には、中央部に第６号溝跡が掘削され、国分期に埋没した緩やかな谷状の地形が見られるが、本建物跡は、この谷状の地形が埋没して平坦になった後に構築されている。建物跡の南側は調査区外に位置しているため、本建物跡の全容は不明である。

形態は、東西方向２間・南北方向は３間以上の側柱式で、長方形を呈するものと推測される。規模は、梁行4.30m・桁行は5.20mまで測れる。建物の主軸方位は、N－22°－Wをとる。柱の通りは比較的良く、梁行・桁行ともほぼ直線上にきれいに並んでいる。柱心間は、梁行・桁行とも2.15mを測り、ほぼ等間隔に配列されている。

柱穴は、直径40cm～50cmの不整円形を呈するものが多い。確認面からの深さは、50cm～70cm前後の比較的深いものが主体であるが、西側桁行の最南部に位置する柱穴だけは、他に比べて極端に浅くなっている。柱穴底面は、いずれも平坦である。柱痕は、多くの柱穴で確認されている。直径25cm前後の円形もしくはそれに近い形態を呈し、いずれも柱穴掘り方の内側の壁面に接して、柱穴掘

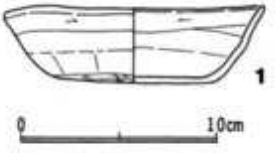



第171図　第３号掘立柱建物跡

り方の底面より一段深く掘り込まれている。

出土遺物は、柱穴の覆土中より土器がごく少量出土しただけである。このうちのNo１の土師器坏は、東側桁行の最南部に位置する柱穴の覆土中から出土した完形品である。

本建物跡の時期は、出土土器より国分期の所産と考えられる。




第172図　第３号掘立柱建物跡出土土器

**第３号掘立柱建物跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径13.4<br>器高 4.0<br>底径 8.3 | 口縁部は若干外反する。体部はやや深く、内湾ぎみに開く。底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>外－明茶褐色<br>内－淡茶褐色 | 完形。 |

## 3．井戸跡

### 第1号井戸跡（第174図）

A地点の調査区南西側に位置し、重複する第22号住居跡と第23号住居跡を切っている。

平面形は、やや楕円形に近い形態を呈している。規模は、1.70m×1.54mと比較的小形である。深さは、全掘できなかったため不明である。断面の形態は、上半部は内湾しながら緩やかに開き、下半部は直径80cmの筒状を呈し、次第に細くなっている。木枠や石組等の痕跡がまったく認められないことから、素掘りの井戸であったものと推測される。出土遺物は、上半部の覆土中より土器片がごく少量出土しただけである。

本井戸跡の時期は、出土遺物や遺構の重複関係から、国分期以降の所産と推測される。

### 第2号井戸跡（第174図）

A地点の調査区中央部に位置し、重複する第35号住居跡と第37号住居跡を切っている。

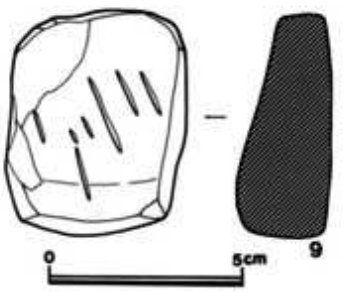
平面形は、第1号井戸跡と同様のやや楕円形に近い形態を呈している。規模は、1.84m×1.60mと比較的小形である。深さは、全掘できなかったため不明である。断面の形態は、直線的に1.50m程急傾斜して落ち込み、そこから直径65cmの筒状に深くなるようである。木枠や石組等の痕跡がまったく認められないことから、素掘りの井戸であったものと推測される。出土遺物は、上半部の覆土中より土器片がごく少量出土しただけである。

本井戸跡の時期は、出土遺物や遺構の重複関係から、真間期以降の所産と推測される。

### 第3号井戸跡（第174図）

A地点の調査区北側に位置し、重複する第1号溝跡を切っている。本井戸跡は、本遺跡で検出された他の井戸跡と異なり、井戸本体の南側より不定形の広く浅い溝が西側に向かって調査区外に延びている。形態にやや差異が見られるものの、いわゆる水田の潅漑を目的とした「溜井」と呼ばれているもの（能登・石坂・小島・徳江1983）に類似している。

井戸本体は、1.40m×1.05mの小規模な不整円形を呈し、上半部は緩やかに傾斜し、下半部は筒状に深くなっている。深さは、全掘できなかったため不明である。井戸本体から西側に延びる溝跡は、最大幅3.00m・深さ38cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦で西に向かって低くなっている。覆土中には一部焼土の投げ込みが見られる。出土遺物は、溝跡の覆土中より比較的多くの土器と小形の砥石（No.9）が出土している。

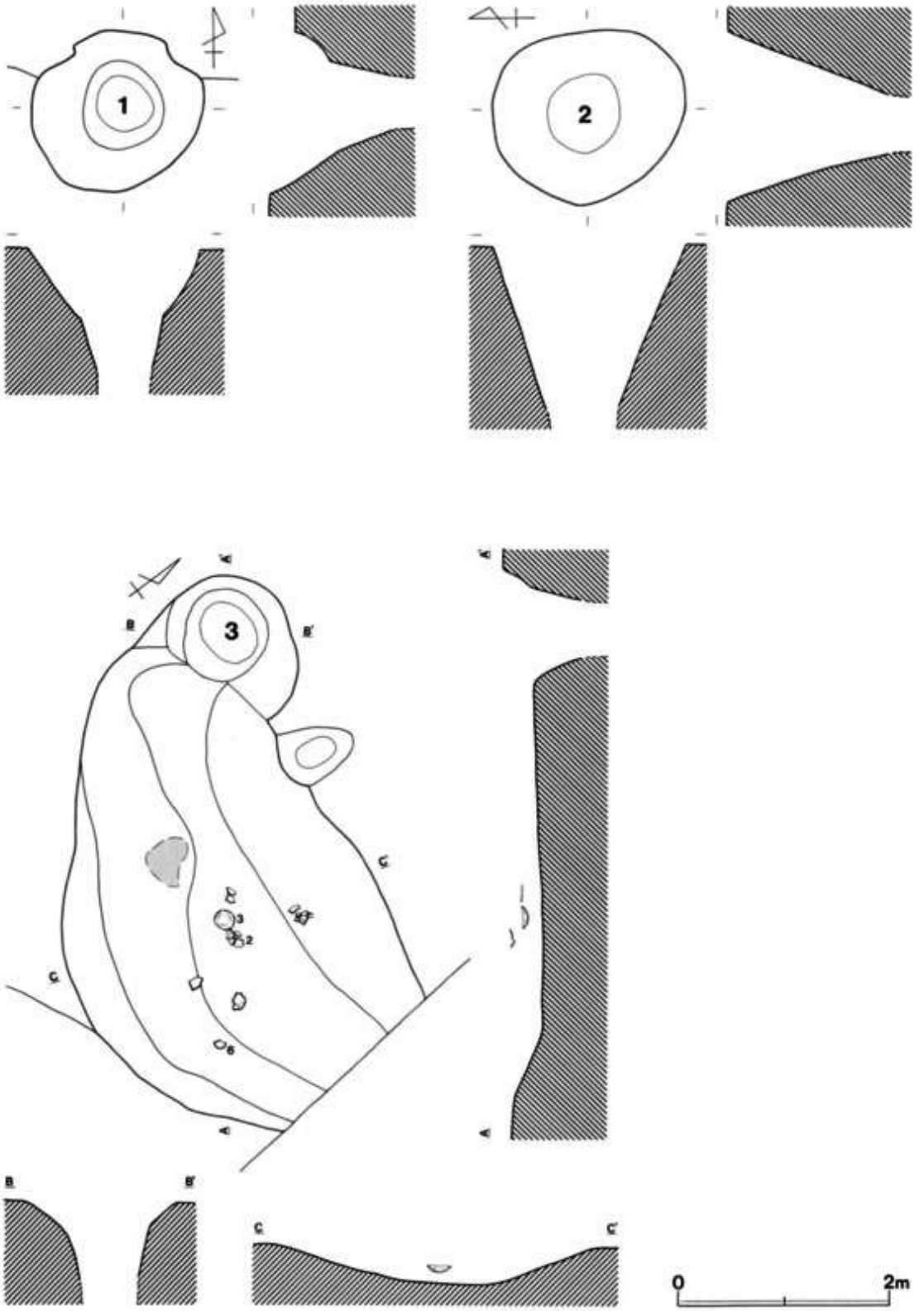



第173図　第3号井戸跡出土砥石

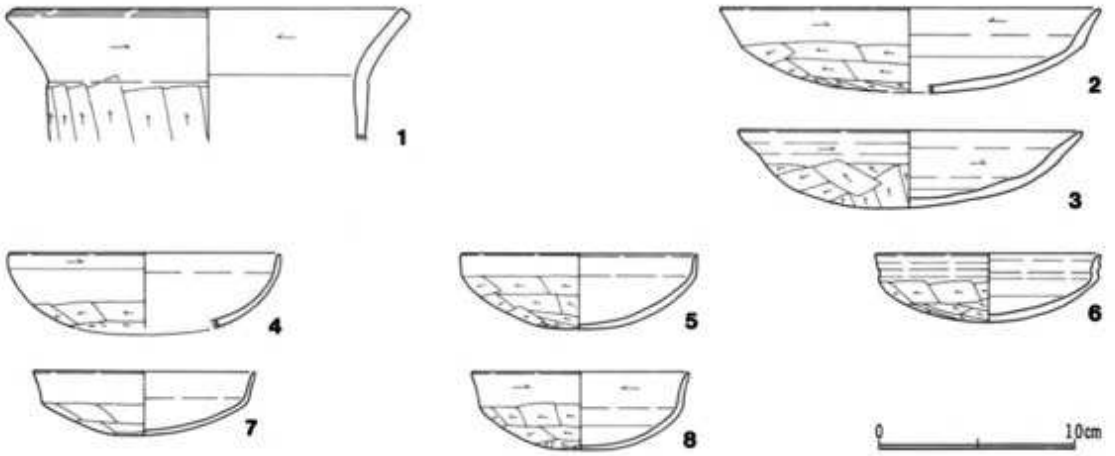
本井戸跡の時期は、出土土器より真間期の所産と考えられる。

第3号井戸跡出土土器観察表

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径（20.8cm） | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部に凹線をもつ。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒白色粒<br>内外－淡褐色 | 1/3。 |




第174図　井戸跡




**第175図　第３号井戸跡出土土器**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 皿 | 口径19.6<br>器高 4.3 | 口縁部は体部より緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－淡茶褐色<br>内－淡褐色 | 1/2。 |
| 3 | 皿 | 口径17.8<br>器高 4.0 | 口縁部は体部より緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 2/3。<br>内面に黒斑あり。 |
| 4 | 坏 | 口径(14.0)<br>器高( 4.2) | 口縁部は体部より短く直立する。体部はやや深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡褐色 | 1/4。 |
| 5 | 坏 | 口径(12.2)<br>器高 3.9 | 口縁部は体部より短く直立する。体部はやや深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－橙褐色 | 1/4。 |
| 6 | 坏 | 口径11.6<br>器高 3.5 | 口縁部は直立ぎみに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗橙褐色 | 3/4。 |
| 7 | 坏 | 口径11.4<br>器高 3.3 | 口縁部は直立ぎみに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/2。 |
| 8 | 坏 | 口径11.2<br>器高 4.0 | 口縁部は直立ぎみに外反する。体部はやや深く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 3/4。 |
| 9 | 砥石 | 長さ 5.8<br>幅 4.5<br>厚さ 2.4 | 平面形は隅丸の四角形を呈する。上半部は薄く、下方に向かって厚くなる。 | 表裏面は良く擦られているが、側面はあまり擦られていない。 | 砂岩 | 完形。<br>重量90g |

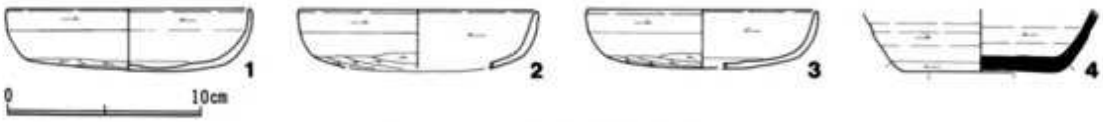
## 4．土　壙

### 第１号土壙（第179図）

Ａ地点の調査区南側に位置し、重複する第33号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、比較的良好な方である。

平面形は、1.94m×1.34mの長方形を呈するが、各コーナー部はやや丸みをもっている。確認面からの深さは16cm～23cmあり、壁は直線的に立ち上がっている。底面は広くほぼ平坦である。覆土中には焼土粒子や炭化粒子が顕著に見られるが、土壙内で火を焚いたような痕跡は認められない。出土遺物は、底面より若干浮いた状態で土師器や須恵器の土器片が比較的多く出土している。

本土壙の時期は、出土土器より国分期の所産と考えられる。




第176図　第１号土壙出土土器

第１号土壙出土土器観察表

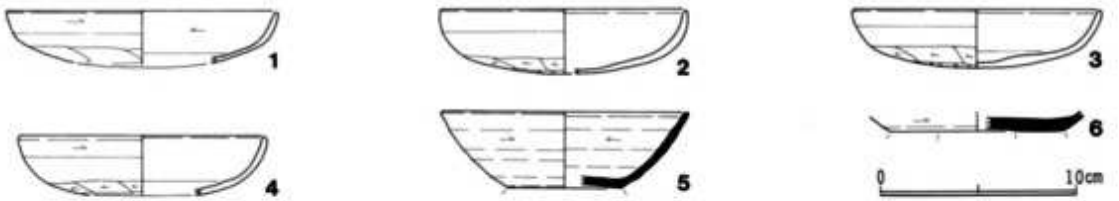
| No. | 器　種 | 法　量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径12.6<br>器高 3.2 | 口縁部は体部より内湾ぎみに立つ。体部は浅く、底部は平底ぎみである。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | ほぼ完形。 |
| 2 | 坏 | 口径(12.4)<br>器高( 3.2) | 口縁部内湾ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は平底ぎみである。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/3。 |
| 3 | 坏 | 口径(12.0)<br>器高 3.0 | 口縁部内湾ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は平底ぎみである。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/3。 |
| 4 | 須恵器<br>坏 | 底部径<br>6.0cm | 体部は若干内湾ぎみに開き、底部平底を呈する。 | 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後、外周回転篦ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>外－淡灰褐色<br>内－淡茶褐色 | 底部のみ。 |

### 第２号土壙（第179図）

Ａ地点の調査区南側に位置する。遺構の遺存状態は、比較的良好な方ではあるが、土壙の南端を重複する第１号住居跡に切られているため、本土壙の全容は不明である。

平面形は、楕円形に似た不整形を呈する。規模は、東西方向1.74m・南北方向は2.60mまで測れる。確認面からの深さは９cm～18cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は広く平坦であるが、南北両端に向かって、緩やかに上がっている。覆土は、暗灰色土を主体とするが、上半部には焼土粒子や炭化粒子が顕著に見られる。出土遺物は、覆土中より土器片が比較的多く出土している。

本土壙の時期は、出土土器より国分期の所産と考えられる。




第177図　第２号土壙出土土器

**第２号土壙出土土器観察表**

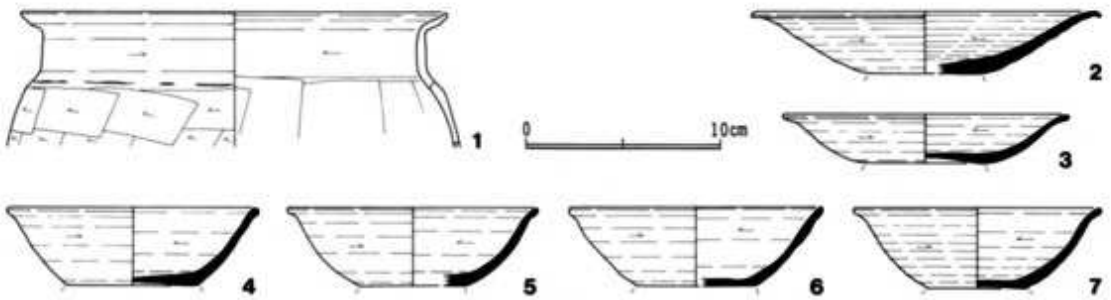
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径(14.0)<br>器高( 3.0) | 口縁部は体部より内湾ぎみに外傾する。体部は低く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/4。 |
| 2 | 坏 | 口径(12.6)<br>器高　3.3 | 口縁部は体部より内湾ぎみに立つ。体部は低く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/2。 |
| 3 | 坏 | 口径(12.8)<br>器高　3.0 | 口縁部は体部より内湾ぎみに外傾する。体部は低く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/3。 |
| 4 | 坏 | 口径(12.8)<br>器高( 3.1) | 口縁部は体部より内湾ぎみに開く。体部は低く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/4。 |
| 5 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.8)<br>器高　3.9 | 口縁部は内湾ぎみに開く。底部は薄く、平底を呈する。 | 体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡灰褐色 | 1/3。 |
| 6 | 須恵器<br>坏 | 底部径<br>( 8.8cm) | 底部は大きく平底を呈する。 | 底部外面回転糸切り後、外周回転篦ケズリ。 | 白色針状物質<br>内外－淡灰色 | 1/2。 |

## 第３号土壙（第179図）

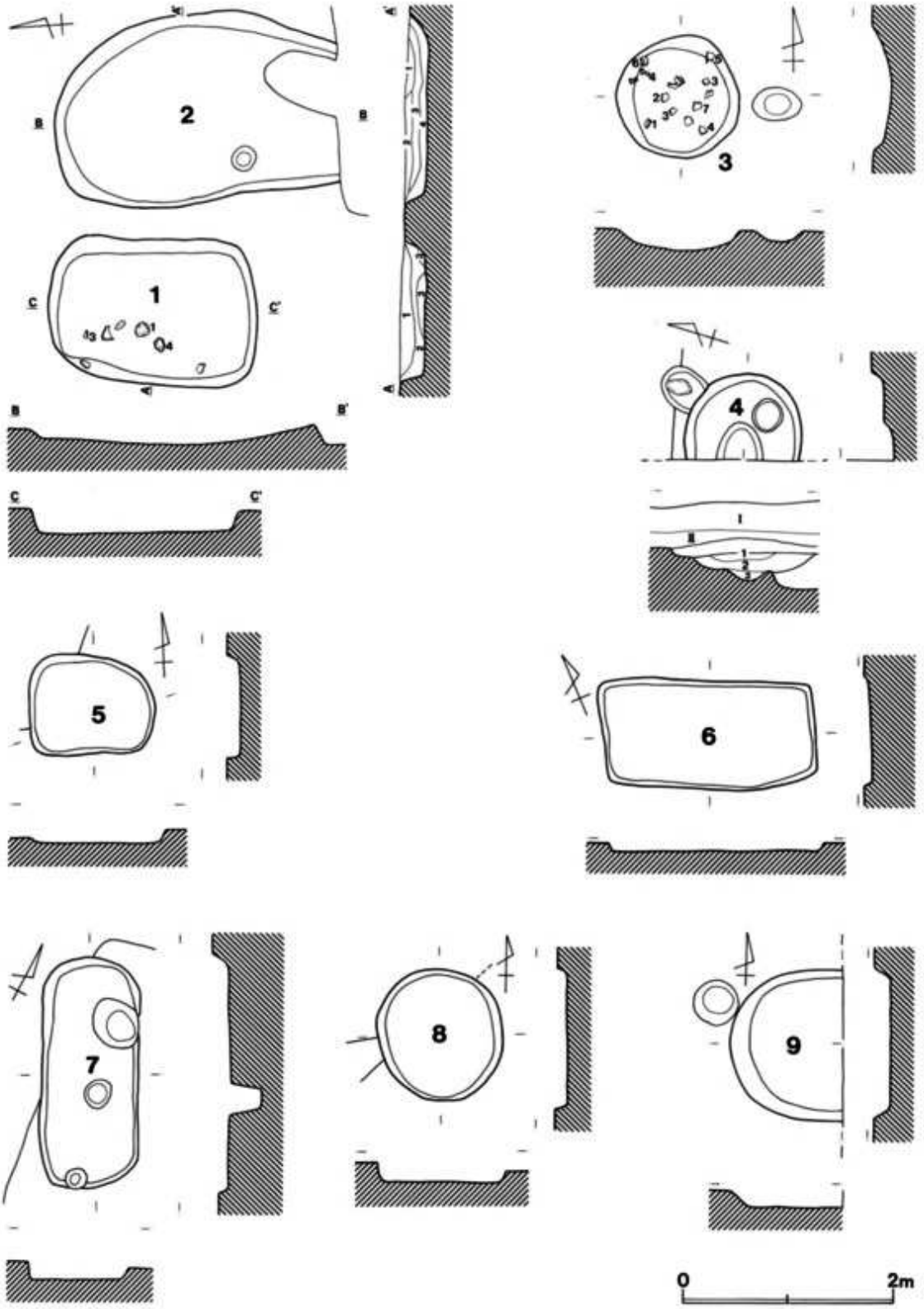
Ａ地点の調査区南西側に位置し、重複する第９号住居跡を切っている。

平面形は、直径1.20mの円形を呈する。確認面からの深さは最高で16cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面はやや丸みをもち、壁に向かって緩やかに高くなっている。覆土は、炭化粒子を含む黒褐色土の単一層である。出土遺物は、覆土中より土器片が比較的多く出土しているが、特に須恵器の破片が多く出土している点は注目される。

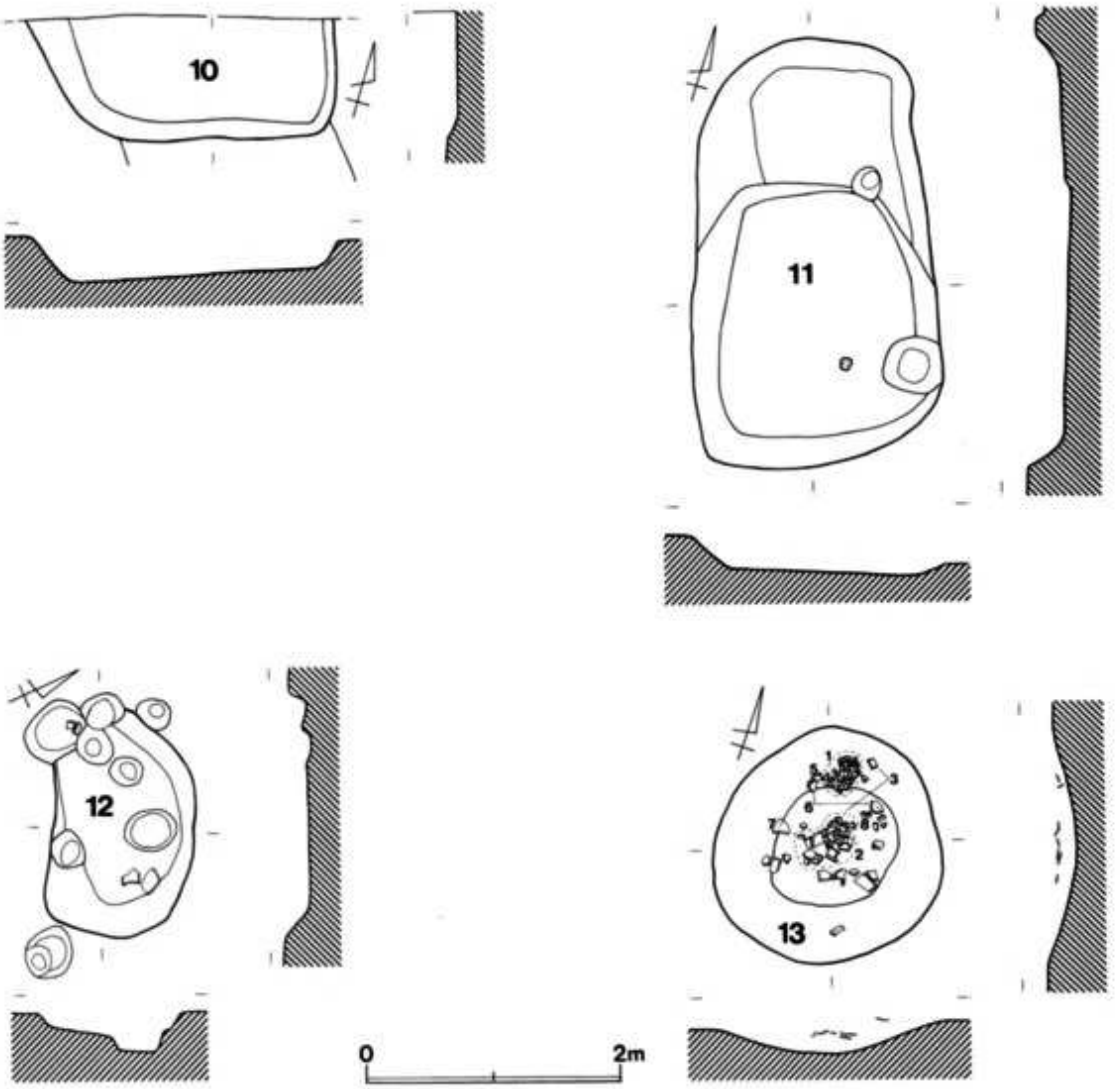
本土壙の時期は、出土土器より国分期の所産と考えられる。




第178図　第３号土壙出土土器




第179図　土　　壙(1)




第180図　土　　壙(2)

**土壙土層説明**

**<第1号土壙>**

第1層：黒灰色土層（焼土粒子・炭化粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗灰色土層（マンガン塊を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

**<第2号土壙>**

第1層：黒褐色土層（炭化粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗灰色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第3層：暗灰色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第4層：暗灰色土層（マンガン塊を均一に含む。粘性・しまりともない。）

**<第4号土壙>**

第1層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

**第3号土壙出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(22.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は「コ」の字状を呈し、口唇部は受口状に内湾する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/3。 |
| 2 | 須恵器<br>皿 | 口径(18.0)<br>器高 3.2<br>底径( 5.8) | 口縁部は直線的に強く開き、口唇部は外反する。体部は低く、底部は平底を呈する。 | 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗灰色 | 1/5。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 3 | 須恵器<br>皿 | 口径(14.8)<br>器高 2.5<br>底径 6.0 | 口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部は横に向く。体部は低く、底部は平底を呈する。 | 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 白色粒<br>内外－暗灰色 | 1/2。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 4 | 須恵器<br>坏 | 口径(13.0)<br>器高 4.0<br>底径 6.8 | 口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部は若干丸く肥厚する。底部は薄い平底を呈する。 | 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－暗灰色 | 1/2。<br>末野産。 |
| 5 | 須恵器<br>坏 | 口径(13.0)<br>器高 4.0<br>底径( 5.4) | 口縁部は内湾しながら開く。口唇部は丸く肥厚し外傾する。底部は平底を呈する。 | 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡灰色 | 1/3。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 6 | 須恵器<br>坏 | 口径(13.2)<br>器高 4.0<br>底径( 6.0) | 口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部は丸く肥厚する。底部は平底を呈する。 | 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡灰褐色 | 1/4。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 7 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.8)<br>器高 4.1<br>底径 5.2 | 口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部は丸く肥厚し外傾する。底部は平底を呈する。 | 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗灰色 | 1/3。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |

**第4号土壙（第179図）**

A地点の調査区南西側の西端に位置し、重複する第17号住居跡に切られ、第18号住居跡を切っている。土壙の西側半分は調査区外に位置するため、本土壙の全容は不明である。

平面形は、直径1.10m程度の円形を呈するものと思われる。確認面からの深さは20cm程度あり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は広く平坦をなし、中央に浅いピット状の落ち込みが見られる。覆土中の第1層と第3層にはロームブロックが顕著に見られ、意図的に埋め戻されたものと思われる。出土遺物は、覆土中より土器片がごく少量出土しただけである。

本土壙の時期は、遺構の重複関係や出土土器より、真間期の所産と推測される。

**第5号土壙（第179図）**

A地点の調査区南側に位置し、重複する第2号住居跡に切られ、第20号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形に近い形態を呈しているが、北側と東側の壁はやや張っている。規模は、東西方向112cm・南北方向94cmを測る。確認面からの深さは13cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は、広く平坦である。覆土はローム粒子を含む黒褐色土の単一土層で、出土遺物はまったくない。

本土壙の時期は、出土遺物がないため明確にできないが、遺構の重複関係からは和泉期～真間期の所産と推測される。

**第6号土壙（第179図）**

A地点の調査区南西側に位置し、重複する第21号住居跡を切っている。

平面形は、長方形を呈するが、東西の両壁はやや歪んでいる。規模は、東西方向1.98m・南北方向1.00mを測る。確認面からの深さは25cm程度あり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は、広く平坦である。覆土はローム粒子と焼土粒子を微量含む暗褐色土の単一土層で、出土遺物は土器片がごく少量出土しただけである。

本土壙の時期は、遺構の重複関係や出土土器より、真間期以降の所産と推測される。

**第7号土壙（第179図）**

A地点の調査区南側に位置し、重複する第26号住居跡と第27号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー文献の丸みが強い長方形を呈する。規模は、東西方向216cm・南北方向90cmを測る。確認面からの深さは15cm程度あり、壁は直線的に立ち上がっている。底面は広く平坦である。本土壙内にはピットが3箇所検出されているが、これらはいずれも本土壙に伴うものではない。覆土は第6号土壙と類似している。出土遺物は、土器片がごく少量出土しているが、本土壙に伴うものかは不明である。

本土壙の時期は、遺構の重複関係や出土土器より、国分期以降の所産と推測される。

**第8号土壙（第179図）**

A地点の調査区南側に位置し、重複する第3号住居跡に切られ、第30～31号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、直径120cmの円形を呈する。確認面からの深さは20cm程度あり、壁は直線的で垂直ぎみに立ち上がっている。底面は広く平坦である。覆土はローム粒子や焼土粒子を微量含む黒褐色土を主体としているが、出土遺物はまったくない。

本土壙の時期は、出土遺物がないため明確にできないが、遺構の重複関係からは真間期～国分期の所産と推測される。

**第9号土壙（第179図）**

A地点の調査区中央部に位置する。土壙の東側半分は調査区外に位置するため、本土壙の全容は不明である。

平面形は、円形もしくは楕円形に近い形態を呈するものと思われる。規模は、南北方向1.40m・東西方向は1.06mまで測れる。確認面からの深さは15cm程度あり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は広く平坦である。覆土はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土を主体としているが、出土遺物はない。

本土壙の時期は、出土遺物がないため明確にできないが、覆土の状態からは国分期以前の所産と推測される。

**第10号土壙（第180図）**

C地点の調査区東側の北端に位置する。土壙の西側は第45号住居跡と接し、南側の上半は撹乱を受けている。土壙の北側は調査区外に位置するため、本土壙の全容は不明である。

平面形は、ややコーナー部が丸みをもつ長方形か方形を呈するものと思われるが、西側の壁は北に向かって開いている。規模は、東西方向2.44m・南北方向は1.00mまで測れる。確認面からの深さは20cm～35cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦であるが、西に向かって緩やかに傾斜している。出土遺物はまったくなく、本土壙の時期は不明である。

**第11号土壙（第180図）**

C地点の調査区東側に位置する。本土壙の北側と東側上半に撹乱を受けているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。

平面形は、コーナー部の丸みが強いやや不整の長方形に近い形態を呈している。規模は、南北方向2.20m・東西方向1.90mを測る。確認面からの深さは23cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は広く平坦であるが、東に向かって緩やかに傾斜している。南東側コーナー部にピットが検出されているが、本土壙に伴うものかは不明である。覆土はローム粒子を含む暗褐色を主体としている。出土遺物はまったくなく、本土壙の時期は不明である。

**第12号土壙（第180図）**

C地点の調査区東側に位置する。本土壙は、多くの小規模なピットによって切られており、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、東西方向1.94m・南北方向1.20mの不整形を呈している。確認面からの深さは7cm～20cmあり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦であるが、やや北に向かって傾斜している。覆土は、ローム粒子やロームブロックを含む黒褐色土の単一土層で、覆土中からは土器片がごく少量出土している。

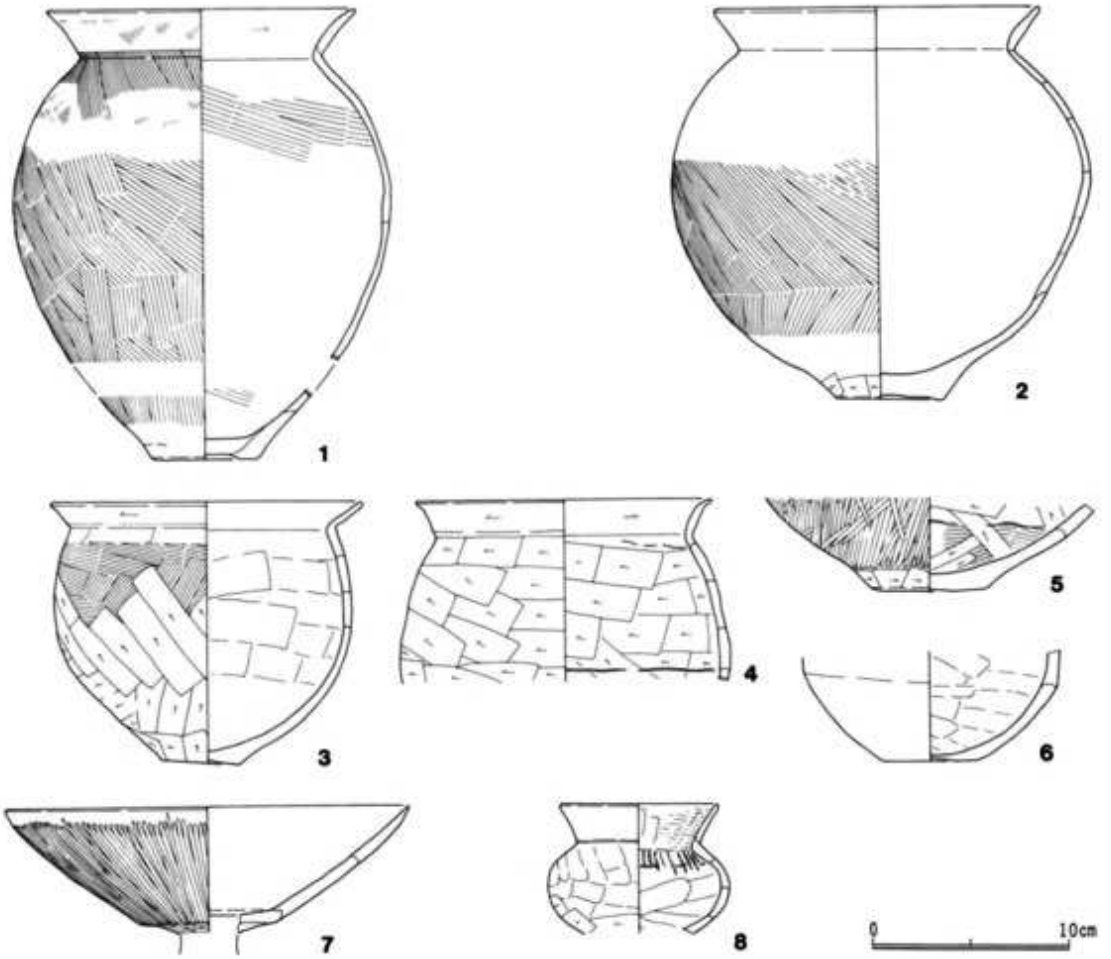
本土壙の時期は、出土土器より真間期～国分期の所産と推測される。

**第13号土壙（第180図）**

C地点の調査区中央部にある第6号溝跡が掘削されている谷状地形の東側緩斜面部に位置している。土壙上面は谷状地形の埋没土（第6号溝跡第6層）によって被覆されている。

平面形は、円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向1.86m・東西方向1.79mを測る。確認面からの深さは、15cm程度と比較的浅い。壁はかなり緩やかで底面との境は不明瞭な皿状を呈している。覆土は、焼土粒子や炭化粒子を多く含む黒褐色土の単一土層である。出土遺物は、覆土上面より比較的多くの土器が破片になって出土している。本土壙は、その位置から谷状地形を掘削した排水的水路と考えられる第6号溝跡に関係するものと推測され、おそらくその溝に関する祭祀に使用した土器を意図的に壊した後、土壙内に廃棄したものではないかと思われる。

本土壙の時期は、出土土器より五領期末～和泉期初頭に属するものと考えられる。




第181図　第13号土壙出土土器

**第13号土壙出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口径 15.8<br>器高(23.0)<br>底径 5.4 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外傾する。胴部は張り、やや長胴をなす。底部は輪台状の平底を呈す。 | 口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部外面ハケの後部分的なナデ、内面ナデの後部分的なハケ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/2。<br>胴部外面に黒斑あり。 |
| 2 | 甕 | 口径16.8<br>器高20.1<br>底径 5.5 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は強く張り、底部は突出する平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | ほぼ完形。<br>内外面とも二次焼成を受けている。 |
| 3 | 小形甕 | 口径16.0<br>器高13.4<br>底径 4.0 | 粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや内湾ぎみに強く外傾する。胴部は張り、底部は平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ケズリ、内面上半篦ナデ・下半ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>外－淡赤褐色<br>内－淡褐色 | 3/4。<br>外面煤付着。<br>二次焼成を受けている。 |
| 4 | 小形甕 | 口縁部径<br>(15.2cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はやや張る。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ケズリ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－淡橙褐色<br>内－暗茶褐色 | 1/4。 |

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 壷 | 底部径 6.0cm | 粘土紐積み上げ成形。底部は胴部よりやや突出し、平底を呈する。 | 胴部外面ミガキ、内面ハケの後ケズリ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・赤色粒<br>外－明茶褐色<br>内－淡褐色 | 1/2。 |
| 6 | 壷 | 底部径 4.8cm | 粘土紐積み上げ成形。胴部下半に稜をもつ。底部は薄く、平底を呈する。 | 胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－暗茶褐色 | 底部のみ。<br>二次焼成を受けている。 |
| 7 | 高坏 | 口縁部径 (20.8cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや内湾ぎみに開き、坏部下端に稜をもつ。 | 内外面ミガキ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－暗茶褐色 | 1/4。<br>内面に斑点状剥落あり。 |
| 8 | 小形丸底壷 | 口縁部径 ( 8.2cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は強く張る。 | 口縁部外面ナデ、内面ハケの後ナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>赤色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/2。<br>外面に黒斑あり。 |

## 5．溝　跡

### 第1号溝跡

A地点の調査区北側に位置し、重複する第11号住居跡と第3号井戸跡に切られている。調査区内では南西から北東方向に向かって、若干弓状に湾曲した流路をとっている。

本溝跡は、上幅110cm前後の均一的な形態を呈し、確認面からの深さは30cm程度の比較的小規模な溝である。溝断面の形態は、底面が幅20cmの狭い平坦面をなし、壁が直線的に立ち上がる逆台形を呈する。覆土は細砂を含む暗褐色土を主体とし、覆土中より比較的多くの土器片が出土している。

本溝跡の時期は、出土土器や遺構の重複関係より鬼高期の所産と考えられる。

第182図　第1号溝跡出土土器

第1号溝跡出土土器観察表

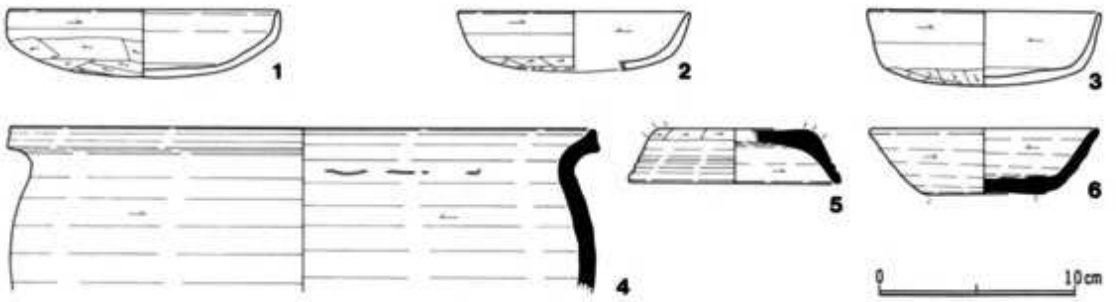
| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径(10.6)<br>器高( 3.7) | 口縁部は体部より直線的に外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒<br>内外－暗橙褐色 | 1/3。 |
| 2 | 手捏ね | 口径 5.2<br>器高 4.3<br>底径 3.6 | 手捏ね成形。体部は内湾ぎみに開き、口縁部は整っている。底部は平底を呈する。 | 体部外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 完形。 |
| 3 | 甕 | | 粘土紐積み上げ成形。頸部は緩やかに括れる。 | 外面ミガキ、内面篦ナデ。頸部外面に13本歯の多連止櫛描簾状文、胴部に櫛描波状文を施文する。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡褐色 | 1/4。<br>櫛描文は右回りに施文 |

**第２号溝跡**

Ａ地点の調査区南側に位置し、重複する第26号住居跡に切られ、第28号住居跡と第31号住居跡を切っている。調査区内では北西から南東方向に向かって流路をとっているが、北西側は第31号住居跡と重複するあたりで途切れている。

本溝跡は、上幅40cm～55cmの比較的小規模な溝で、確認面からの深さは北西端部で25cm、南東端部で60cmを測る。溝断面の形態は、底面が幅20cm～30cmの平坦面をなし、壁が直線的に急角度で立ち上がる逆台形を呈する。覆土の土層は自然堆積を示し、焼土粒子や炭化粒子を微量含んでいる。出土遺物は、覆土中より土器片が少量出土している。

本溝跡の時期は、出土土器や遺構の重複関係より国分期の所産と考えられる。




**第183図　第２号溝跡出土土器**

**第２号溝跡出土土器観察表**

| No. | 器　種 | 法　量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径(13.8)<br>器高　3.5 | 口縁部は体部より短く内湾ぎみに直立する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/2。 |
| 2 | 坏 | 口径(12.0)<br>器高( 3.1) | 口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/4。 |
| 3 | 坏 | 口径(12.0)<br>器高　3.8 | 口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は平底ぎみである。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－淡橙褐色 | 1/2強。 |
| 4 | 須恵器<br>鉢 | 口縁部径<br>(30.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外傾し、口唇部は上下に若干肥厚する。 | 内外面とも回転ナデ。 | 白色粒<br>内外－淡灰褐色 | 1/4。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |
| 5 | 須恵器<br>蓋 | 口径(11.0)<br>器高　2.8 | 天井部は広い平坦をなし、口縁部は直線的に外傾する。 | 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転糸切りの後、外縁手持ち篦ケズリ。 | 白色粒<br>内外－淡灰色 | 1/4。 |
| 6 | 須恵器<br>坏 | 口径11.8<br>器高 3.4<br>底径 6.4 | 口縁部は直線的に外傾し、口唇部は若干外反する。底部は厚い平底を呈する。 | 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－灰色 | ほぼ完形。<br>ロクロ回転<br>右回り。 |

### 第３号溝跡

Ｂ地点の調査区中央部に位置し、重複する第40号住居跡と第５号溝跡を切っている。調査区内では南北方向に直線的な流路をとり、現在見られる地境の小水路とほぼ一致している。

規模は、上幅60cm前後の均一な幅で、確認面からの深さは20cm～30cm程度ある。溝底面はやや丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土の土層は自然堆積を示し、覆土中にはＡ軽石を均一に含んでいる。出土遺物は、土器片がごく少量出土しただけである。

本溝跡の時期は、覆土の状態から近現代の所産と推測される。

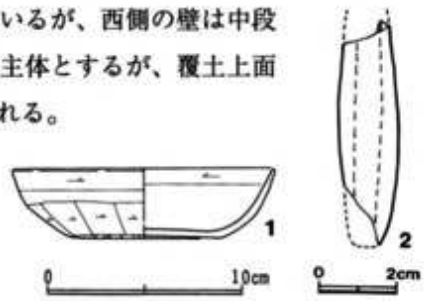
### 第４号溝跡

Ｂ地点の調査区南側の西端に位置し、重複する第40号住居跡を切っている。調査区内では若干弓状に曲がった流路をとっているが、どちらに向かって流れていたかは不明である。

規模は、上幅が１ｍ前後あり、確認面からの深さは30cmを測る。溝底面は、幅20cm～25cmの比較的均一な平坦面をなしている。壁はゆるやかに立ち上がっているが、西側の壁は中段をもっている。覆土は、鉄斑やマンガン塊を含む淡灰色土を主体とするが、覆土上面には部分的にロームブロックを均一に含む暗黄褐色土が見られる。

出土遺物は、覆土中より土器片が少量出土しているが、No１の坏は溝底面から出土した完形品である。土器以外では土錘が１点(No２)覆土中より出土している。

本溝跡の時期は、出土土器や遺構の重複関係より国分期の所産と考えられる。




第184図　第４号溝跡出土遺物

第４号溝跡出土土器観察表

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 口径13.6<br>器高 3.6<br>底径 8.0 | 体部は内湾しながら開き、口縁部は薄く外傾する。底部は広い平底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>内外－明橙褐色 | 完形。 |
| 2 | 土錘 | 残存長 5.8<br>厚さ 1.6<br>重量 15g | 中膨らみの棒状を呈する。両端部を欠失。 | 表面ナデ。穿孔の断面は、６㎜～８㎜の楕円形で、比較的太い。 | 赤色粒・白色粒<br>黒色粒<br>表面－暗茶褐色 | 約4/5。<br>表面は摩滅している。 |

### 第５号溝跡

Ｂ地点の調査区中央部に位置し、重複する第３号溝跡に切られている。本溝跡は、調査区内では東西方向に流路をとっており、形態的にはＡ地点の第１号溝跡と酷似していることから、第１号溝跡の西側延長部分である可能性が高い。

規模は、上幅80cmの均一な幅で、確認面からの深さは38cmを測る。溝底面は幅15cm前後の平坦面をなし、壁は壁が直線的に立ち上がる断面逆台形の形態を呈する。出土遺物は、まったくない。

本溝跡の時期は、出土土器がないため明確にできないが、Ａ地点の第１号溝跡と同じ水路である可能性が高いことから、それと同時期の鬼高期の所産と推測される。

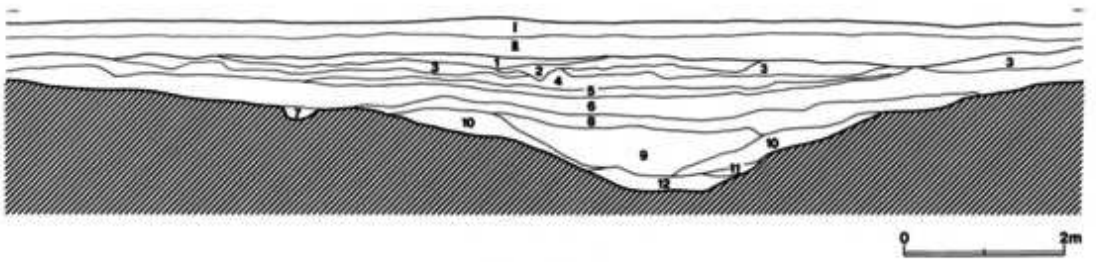
**第6号溝跡**

C地点の調査区中央部にある幅約13mの緩やかで比較的浅い谷状地形のほぼ中央に位置する。流路は、この谷状地形と同一の南北方向にとっており、おそらく谷状地形の最深部を掘削して溝にしたものと推測される。調査区内では検出された溝跡の一部しか調査できなかったため、本溝跡の全容は不明である。

規模は、上幅が6m前後あり、確認面からの深さは1.50mを測る。溝断面の形態は、溝底面が1m前後の広い平坦面をなし、壁は直線的であるがかなり緩やかに立ち上がる、いわゆる逆台形に近い形態を呈している。覆土は、黒灰色粘質土を主体とするが、最下層(第12層)には細砂が多量に見られることから、ある程度恒常的に水が流れていたことが推測される。堆積状態は自然堆積を示し、掘り返しは認められない。

出土遺物は、覆土中より多量の土器片が出土しているが、そのほとんどはまったく接合しないものばかりである。これらの多量の土器片は、ほとんどが第8層より上の谷状地形の埋没土(第5～8層)から出土している。時期は五領期～国分期のものが見られるが、量的には真間期～国分期のものが圧倒的多数を占めている。これに対して下層の溝埋没土(第9～12層)では、土器片の量は少ないながら、五領期のものだけであり、他の時期のものは出土していない。第186図に図示した土器は、No1・2・4～7が上層の谷状地形埋没土の第6層中より出土したものであり、No3の器台は下層の溝埋没土の第9層中から出土したものである。

本溝跡は、覆土やそれに伴う土器の出土状態より、五領期に掘削された可能性が高いと考えられ、

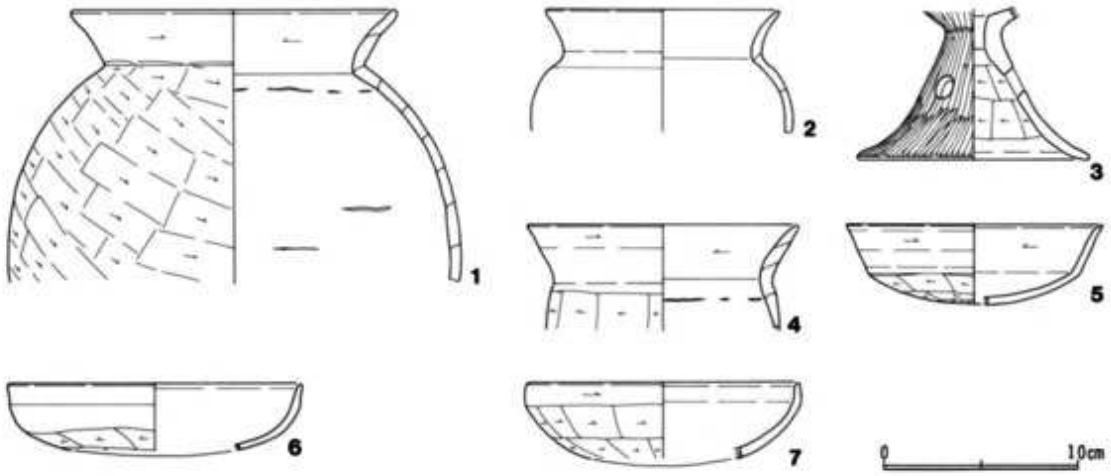



**第185図　第6号溝跡土層断面図**

**第6号溝土層説明**

第1層：暗灰色土層（A軽石・鉄斑を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第2層：黒色土層（A軽石を均一に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗茶褐色土層（A軽石を多量に、鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：暗灰色土層（A軽石・鉄斑を多量含む。粘性・しまりともない。）
第5層：黒色土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第6層：灰褐色土層（鉄斑を多量に、白色粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第7層：淡灰色土層（鉄斑を多量に、ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第8層：灰色土層（白色粒子を均一に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第9層：黒灰色土層（鉄斑を均一に、白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第10層：暗灰色土層（鉄斑を多量に、軽石粒を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第11層：茶灰色土層（鉄斑・ローム粒子を多量に、粘性に富み、しまりはない。）
第12層：灰色土層（白色粒子・砂を多量に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

その後五領期～和泉期のうちに溝本体は埋没し、国分期には谷状地形自体もほぼ平坦に埋没していたことが推測される。




第186図　第６号溝跡出土土器

第６号溝跡出土土器観察表

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 口縁部径<br>(16.8cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は短く上方に向く。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>外－暗褐色<br>内－淡褐色 | 1/3。<br>外面に黒斑あり。 |
| 2 | 鉢 | 口縁部径<br>(12.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。 | 赤色粒・白色粒<br>内外－明橙褐色 | 3/4。 |
| 3 | 器台 | 残存高<br>7.8cm | 粘土紐積み上げ成形。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。 | 脚部外面ミガキ、内面ナデの後ケズリ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－暗橙褐色 | 脚部のみ。<br>穿孔３箇所。 |
| 4 | 小形甕 | 口縁部径<br>(14.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>内外－黒褐色 | 1/3。<br>煤付着顕著。 |
| 5 | 坏 | 口径(13.2)<br>器高( 4.1) | 口縁部は直線的に外傾し、口唇部内面に面をもつ。体部は浅く、底部は丸底。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 片岩粒・赤色粒<br>白色粒<br>内外－明橙褐色 | 1/2。 |
| 6 | 坏 | 口径(15.2)<br>器高( 3.7) | 口縁部は体部より短く外反ぎみに直立する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－淡茶褐色 | 1/5。 |
| 7 | 坏 | 口径(14.0)<br>器高( 4.3) | 口縁部は体部より短く直立する。体部はやや深く、底部は丸底を呈すと思われる。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。 | 白色粒・黒色粒<br>内外－暗橙褐色 | 1/5。 |

**第７号溝跡**

Ｃ地点の調査区西側に位置する。調査区内では北東から南西方向に向かって流路をとっているが、溝跡の北東端部はすでに削平されている。遺存状態は、あまり良好とは言えない。

規模は、北東側で上幅1.30m・南西側で上幅60cmあり、南西側に向かって溝の幅が次第に狭くなっている。確認面からの深さは10cm前後と浅いが、底面は比較的広い平坦面をなしている。覆土は、

A軽石を均一に含む淡灰色土の単一土層である。出土遺物は、覆土中より土器片がごく少量出土しているが、本溝跡に伴うものではない。

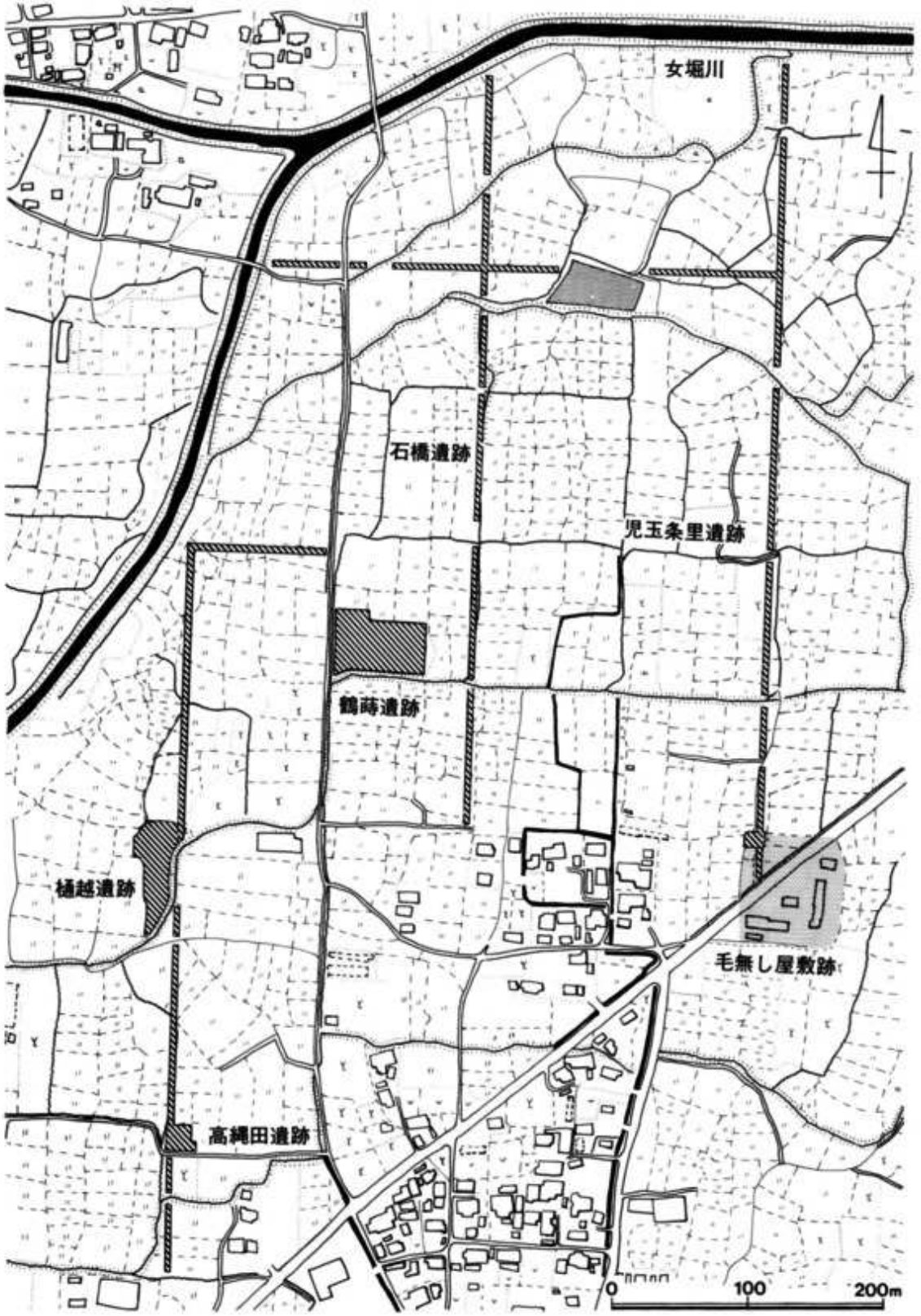
本溝跡の時期は、覆土の状態より近現代の所産と考えられる。

**第8号溝跡**

C地点の調査区西側に位置し、重複する第46号住居跡を切っている。調査区内では南西から北東方向に向かってほぼ直線的な流路をとっている。

規模は、上幅1.60m～1.90mあり、確認面からの深さは70cm前後を測る。底面は幅30cmから50cmの平坦面をなすが、やや細かく蛇行している。壁は、その中位に段をもち下半部は直線的で比較的急に立ち上がっているのに対して、下半部は緩やかでやや内湾ぎみに立ち上がっている。覆土は、上半が淡灰褐色土、下半が暗灰色土であり、全体にA軽石を含んでいる。覆土の堆積状態は、自然堆積を示し、最下層には細砂が見られる。出土遺物は、覆土中より土器片がごく少量出土しているが、本溝跡に伴うものはない。

本溝跡の時期は、覆土の状態より近世後半以降の所産と考えられる。




第187図　昭和63年度第２工区・平成元年度工区発掘調査位置図

# 第Ⅷ章　鶴蒔遺跡の発掘調査

## 第１節　遺跡の概要

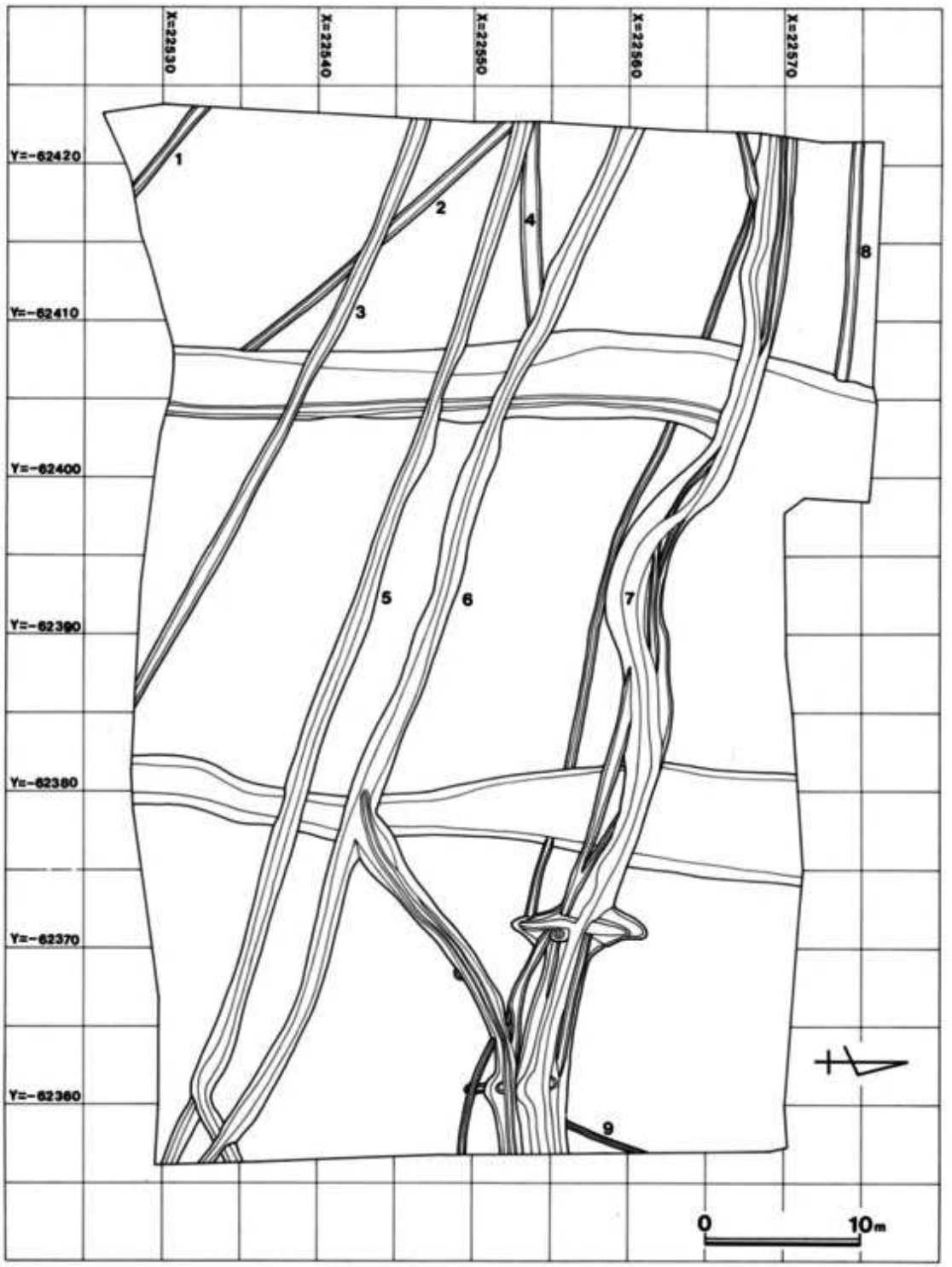
本遺跡は、児玉町大字吉田林字鶴蒔に所在し、標高83.5mを測る条里形地割りの坪内に位置している。本遺跡の周辺には、100m～110m四方の連続する条里形地割りが比較的良好に残存しており、本遺跡の西側約120mには女堀川が北流し、南西側約150mには第Ⅴ章で述べた樋越遺跡が、南東側約250mには次章で述べる毛無し屋敷跡が位置している。

調査地点は条里坪内の南西側にあたり、周囲の水田よりも約30cm高く、主に桑畑として利用されていた。この本遺跡の所在する条里坪内の水田は、南北方向の一次区画を主体とし、それぞれ南側の条里坪線に沿って東西方向に走る水路から引水され、北側の条里坪線に沿って東西方向に走る水路に排水されている。調査区内で南北方向に走る２箇所の幅広い溝状の落ち込みは、この南側の水路から畑北側の条里坪内の水田に引水するために、畑内で水田として利用されていた部分である。

調査区内より検出された遺構は溝跡９条だけで、時期は古墳時代後期１条(第７号溝跡)、中世６条(第１・２・３・５・６・９号溝跡)、近現代２条(第４・８号溝跡)である。これらの溝跡の中で古墳時

**第188図　鶴蒔遺跡調査位置図**

代後期と中世の溝跡は、いずれも北西から南東方向に向かって流路を取り、特に中世の溝群が条里形地割りの方向とまったく一致していないことは注意され、本遺跡周辺の現地表面に残る条里形地割りの施工が古代まで溯らないことが明らかになったことは重要である。




**第189図　鶴蒔遺跡全測図**

## 第２節　検出された遺構と遺物

### １．溝　　跡

**第１号溝跡（第190図）**

調査区の南西端に位置し、北西から南東方向に向かって直線的な流路を取っている。規模は上幅60cmとほぼ均一で、確認面からの深さは24cmを測る。壁は直線的に立ち上がり、底面は幅40cmの比較的広い平坦面をなし、断面は逆台形の形態を呈している。覆土は、Ｂ軽石を微量に含む黒褐色粘質土を主体としている。出土遺物は、覆土中より古墳時代前期～中期の土器片が１片出土しただけであるが、本溝跡に伴うものではなく混入したものである。本溝跡の時期は、本溝跡に伴うと考えられる遺物がないため明確にはできないが、覆土の状態より中世の所産と推測される。

**第２号溝跡（第192図）**

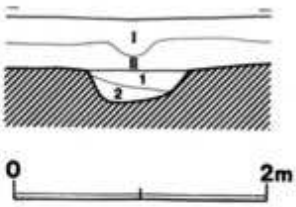
調査区の南西側に位置し、重複する第３号溝跡に切られている。調査区内では北西から南東方向に向かってほぼ直線的な流路を取っている。溝の形態は第１号溝跡と類似し、規模は上幅60cm前後とほぼ均一で、確認面からの深さは24cmを測る。壁は直線的に立ち上がり、底面は幅30cm～45cmの平坦面をなし、断面は逆台形の形態を呈している。覆土は、Ｂ軽石を含む暗灰色粘質土を主体としている。出土遺物は、混入品ではあるが縄文時代前期の土器片が１片出土しただけである。本溝跡の時期は、本溝跡に伴うと考えられる遺物がないため明確にはできないが、覆土の状態より中世の所産と推測される。

**第３号溝跡（第191図）**

調査区の南西側に位置し、重複する第２号溝跡を切っている。調査区内では第５・６号溝跡とほぼ同様に、北西から南東方向に向かって直線的な流路を取っている。規模は上幅１ｍ前後とほぼ均一で、確認面からの深さは52cmを測る。壁は直線的に立ち上がり、底面は幅35cm前後の比較的狭い平坦面をなし、断面は「Ｖ」の字に近い形態を呈している。覆土は、Ｂ軽石を含む黒褐色粘質土を主体としている。出土遺物は、混入品ではあるが縄文時代中期加増利ＥⅢ式の土器片が１片出土しただけである。本溝跡の時期は、本溝跡に伴うと考えられる遺物がないため明確にはできないが、覆土の状態より中世の所産と推測される。

**第４号溝跡（第192図）**

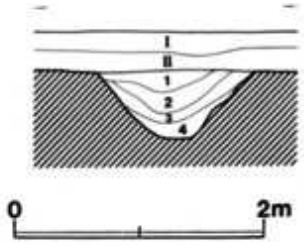
調査区の西側中央部に位置し、重複する第５号溝跡と第６号溝跡を切っている。調査区北西端の第８号溝跡と同様に、ほぼ東西方向に向いた直線的な流路を取っている。規模は上幅１ｍ前後とほぼ均一で、確認面からの深さは14cmと比較的浅い。壁は緩やかに立ち上がり、底面は幅80cm前後の広い平坦面をなしている。覆土は、Ａ軽石を含む淡灰褐色土を主体としている。出土遺物は、縄文時代中期後半の土器片と横刃型石器及び土師器の破片が出土しているが、これらはすべて混入したものである。本溝跡の時期は、覆土の状態や現地表面の地境と一致する第８号溝跡と類似していることから、現代の所産と推測される。




第190図　第１号溝跡

**第１号溝跡土層説明**

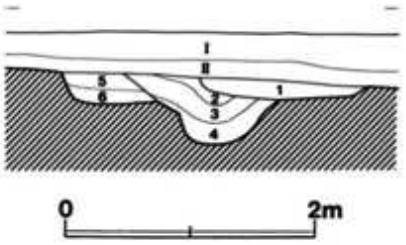
第Ⅰ層：現耕作土
第Ⅱ層：旧耕作土
第１層：黒褐色土層（鉄斑･ローム粒子を均一に、Ｂ軽石･マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒褐色土層（鉄斑・Ｂ軽石・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）




第191図　第３号溝跡

**第３号溝跡土層説明**

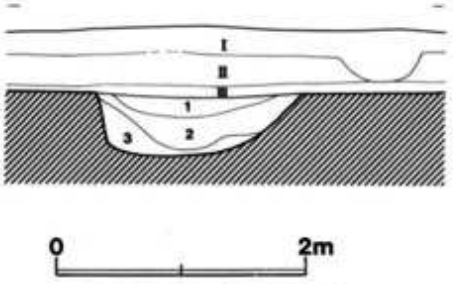
第１層：黒褐色土層（鉄斑・Ｂ軽石を均一に含む。粘性に富み､しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（鉄斑・ローム粒子を多量に、Ｂ軽石・小石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：黒褐色土層（鉄斑・Ｂ軽石を均一に、小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：黒褐色土層（鉄斑・Ｂ軽石・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）




第192図　第２・４・５・号溝跡

**第２・４・５号溝跡土層説明**

第１層：淡灰褐色土層（小石・鉄斑・マンガン塊・Ｂ軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒灰色土層（Ｂ軽石を均一に、鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗灰色土層（鉄斑・マンガン塊・Ｂ軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する・）
第４層：黒灰色土層（Ｂ軽石・マンガン塊を均一に、ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗灰色土層（マンガン塊を多量に、Ｂ軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：暗灰褐色土層（鉄斑･マンガン塊･Ｂ軽石･ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）




第193図　第６号溝跡

**第６号溝跡土層説明**

第Ⅲ層：暗灰色土層（Ｂ軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第１層：黒褐色土層（小石・鉄斑・ローム粒子・Ｂ軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：黒褐色土層（Ｂ軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（小礫を多量に、鉄斑・Ｂ軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

**第５号溝跡（第192図）**

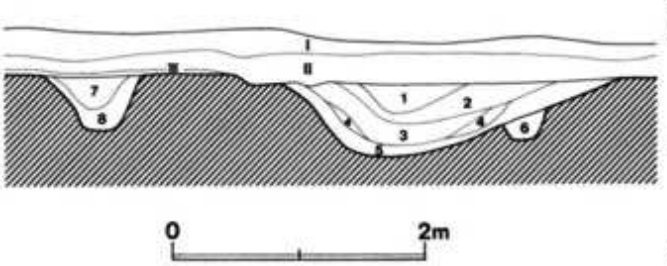
調査区の中央部に位置し、重複する第２号溝跡を切っている。調査区内では、北側の第６号溝跡と併走して、北西から南東方向に向かってほぼ直線的な流路を取っていたが、後に南東端では北東方向に向かって流路が変更されている。規模は上幅1.2m前後と比較的均一で、確認面からの深さは50cmを測る。壁は直線的に立ち上がり、底面は幅40cm～50cmの平坦面をなし、断面逆台形の形態を呈している。覆土は、Ｂ軽石を含む黒灰色粘質土を主体としている。出土遺物は、縄文時代前期と古墳時代後期の土器片が１片ずつ出土しただけであるが、これらはいずれも混入品である。本溝跡の時期は、本溝跡に伴うと考えられる遺物がないため明確にはできないが、覆土の状態より中世の所産と推測される。

**第６号溝跡（第193図）**

調査区の中央部に位置し、南側の第５号溝跡と併走している。北西から南東方向に向かってほぼ直線的な流路を取っていたが、第５号溝跡と同様に後に途中から北東方向に向かって流路が変更されている。規模は上幅1.30m～2.00mあり、確認面からの深さは46cmを測るが、後に北東方向に向かって流路が変更された部分では深さが56cmと一段深くなっている。壁は直線的に立ち上がり、底面は35cm～50cmの平坦面をなしている。覆土は、Ｂ軽石を含む黒褐色粘質土を主体としている。出土遺物は、混入品ではあるが縄文時代中期加曽利ＥⅢ式の土器片が少量出土しただけである。本溝跡の時期は、出土遺物がないため明確にはできないが、覆土の状態より中世の所産と推測され、本溝跡は併走する南側の第５号溝跡と同時に機能していたものであろう。

**第７号溝跡（第194図）**

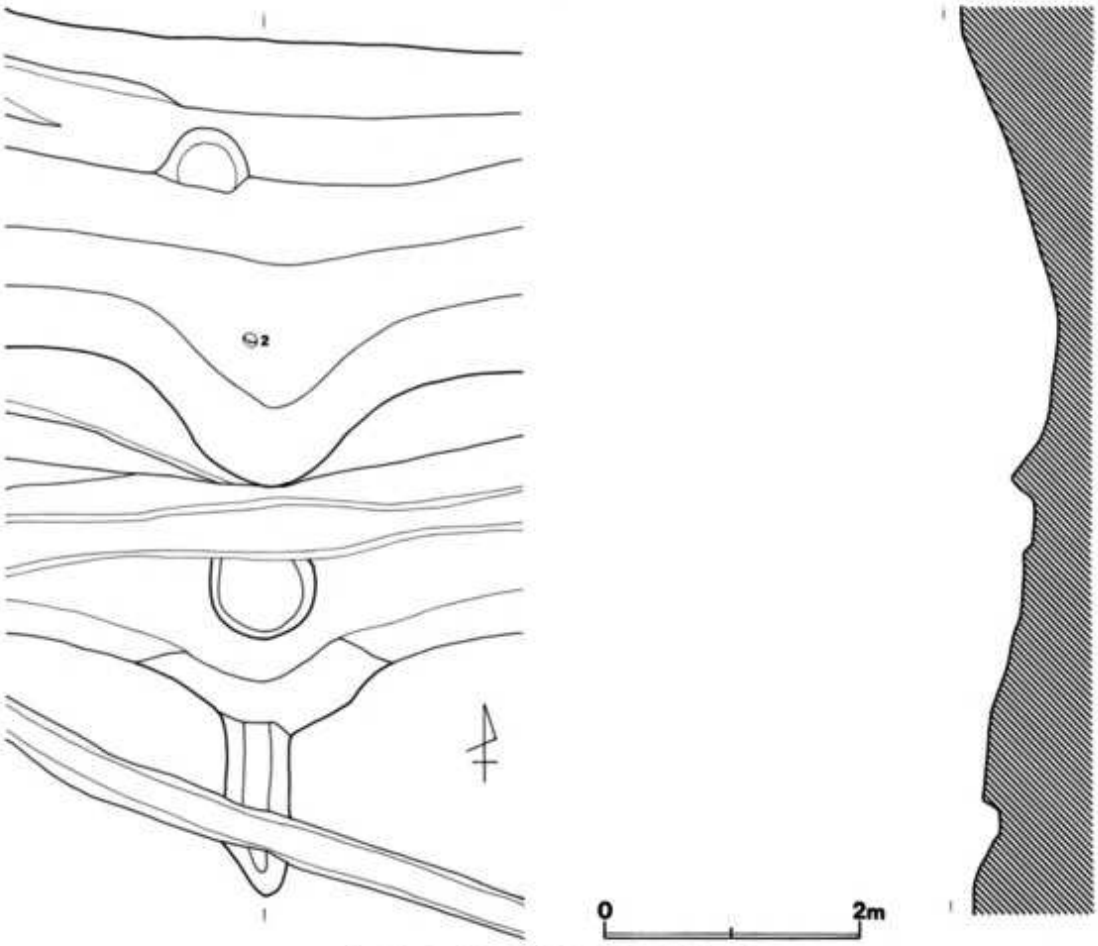
調査区の北側に位置し、北西から南東方向に向かってやや蛇行した流路を取っている。本溝跡は、調査区内で検出された溝跡の中では最大の規模をもつものであるが、同じ流路を取る小規模で比較




**第194図　第７号溝跡群**

**第７号溝跡群土層説明**

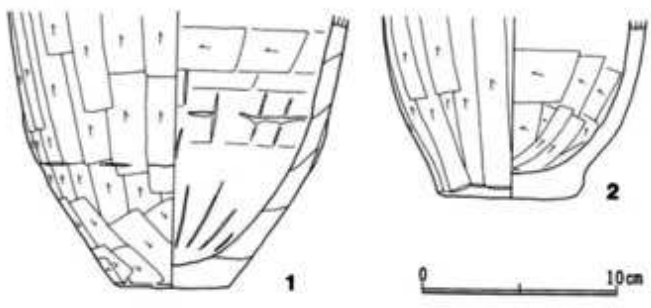
第１層：黒褐色土層（鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗灰色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗灰色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗灰色土層（マンガン塊を多量に、鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：黒褐色土層（マンガン塊を多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第７層：暗黄褐色土層（ロームブロック・Ｂ軽石・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第８層：暗灰色土層（Ｂ軽石・鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



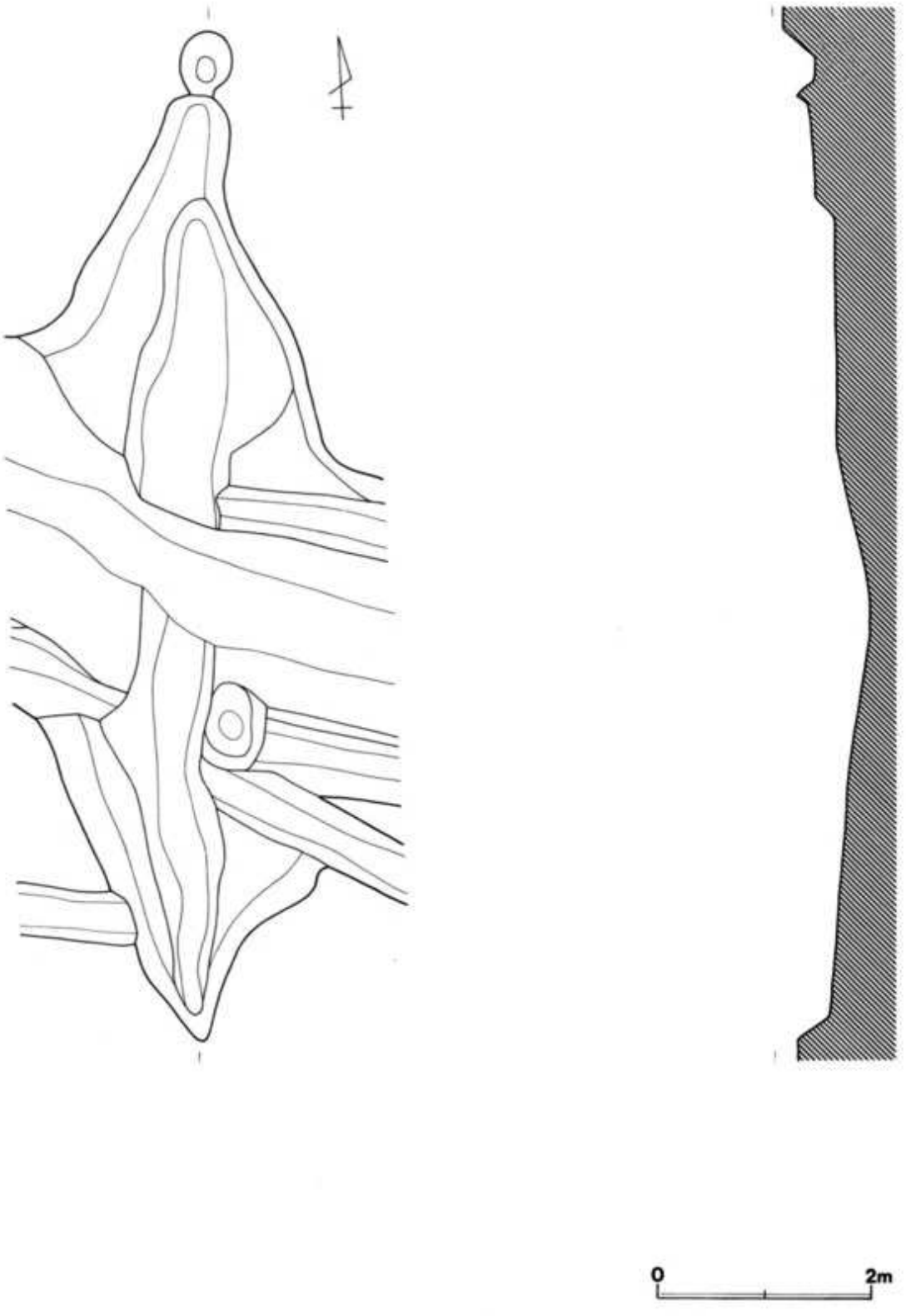

第195図　第７号溝跡張り出し部(１)

的浅い溝がいくつか重複している。その重複関係については一つ一つ明確にできなかったが、覆土の状態から見て、直線的な流路を取るものは本溝跡より新しい中世のものであり、本溝跡と同一に蛇行しているものは本溝跡が何回か掘り返されたための痕跡と推測される。

規模は幅2.30m～3.50mあり、確認面からの深さは60cm～70cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面は40cm前後の丸みをもったやや狭い面をなしている。本溝跡の東側には溝とほぼ直交した張り出しが２箇所あり、一つは溝の南北両側に対象的に張り出しており、もう一つは溝の南側だけに張り出しているもので、いずれも類似した形態を呈している。これらの張り出しは、中央部が溝状に一段深くなり、やや起伏をもつが明確




第196図　第７号溝跡出土土器




第197図　第７号溝跡張り出し部（２）

な階段状をなさずに溝底面に向かって緩やかに傾斜している。

出土遺物は、古墳時代後期鬼高式の土器片が少量出土している。第196図に図示した甕の底部は、本溝跡東側の張り出し付近の溝覆土中より出土した破片がいくつか接合したもので、摩滅が認められないことから、本溝跡に伴うと考えられるものである。この他では、縄文時代中期後半の土器片と横刃型石器が出土している。本溝跡の時期は、覆土の状態や出土土器より古墳時代後期の所産と考えられる。

**第7号溝跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 甕 | 底部径 6.0cm | 粘土紐積み上げ成形。底部は、厚目の平底を呈し、胴部へ直線的に移行する。 | 胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－茶褐色<br>内－淡灰褐色 | 約1/4。 |
| 2 | 甕 | 底部径 7.4cm | 粘土紐積み上げ成形。底部は、厚目の平底を呈し、胴部より突出する。 | 胴部外面ケズリ、内面上半ナデ、下半ケズリ。底部外面ケズリ。 | 片岩粒・白色粒<br>外－淡茶褐色<br>内－淡灰褐色 | 底部のみ。 |

**第8号溝跡**

調査区の北側に位置し、ほぼ東西方向に向いた直線的な流路を取っている。規模は上幅40cmと均一で、確認面からの深さは10cmと比較的浅い。壁は緩やかに立ち上がり、底面は幅32cmの広い平坦面をなしている。覆土は、A軽石を多量に含む暗灰色土とロームブロックを均一に含む暗黄褐色土の2層からなっている。遺物は、まったく出土しなかった。本溝跡の時期は、出土遺物がないため明確にはできないが、覆土の状態や流路が現地表面の地境と一致することから、現代の所産と推測される。

**第9号溝跡**

調査区の東端に位置し、重複する第7号溝跡を切っている。調査区内では北東方向に向いた流路を取っている。規模は上幅28cmと均一で、確認面からの深さは10cmと比較的浅い。壁は緩やかに立ち上がり、底面は幅16cm前後の平坦面をなしている。覆土は第6号溝跡と類似した黒褐色土を主体としている。遺物は、まったく出土しなかった。本溝跡の時期は、出土遺物がないため明確にはできないが、覆土の状態より中世の所産と推測され、おそらく南側の第6号溝跡から分岐された溝と思われる。

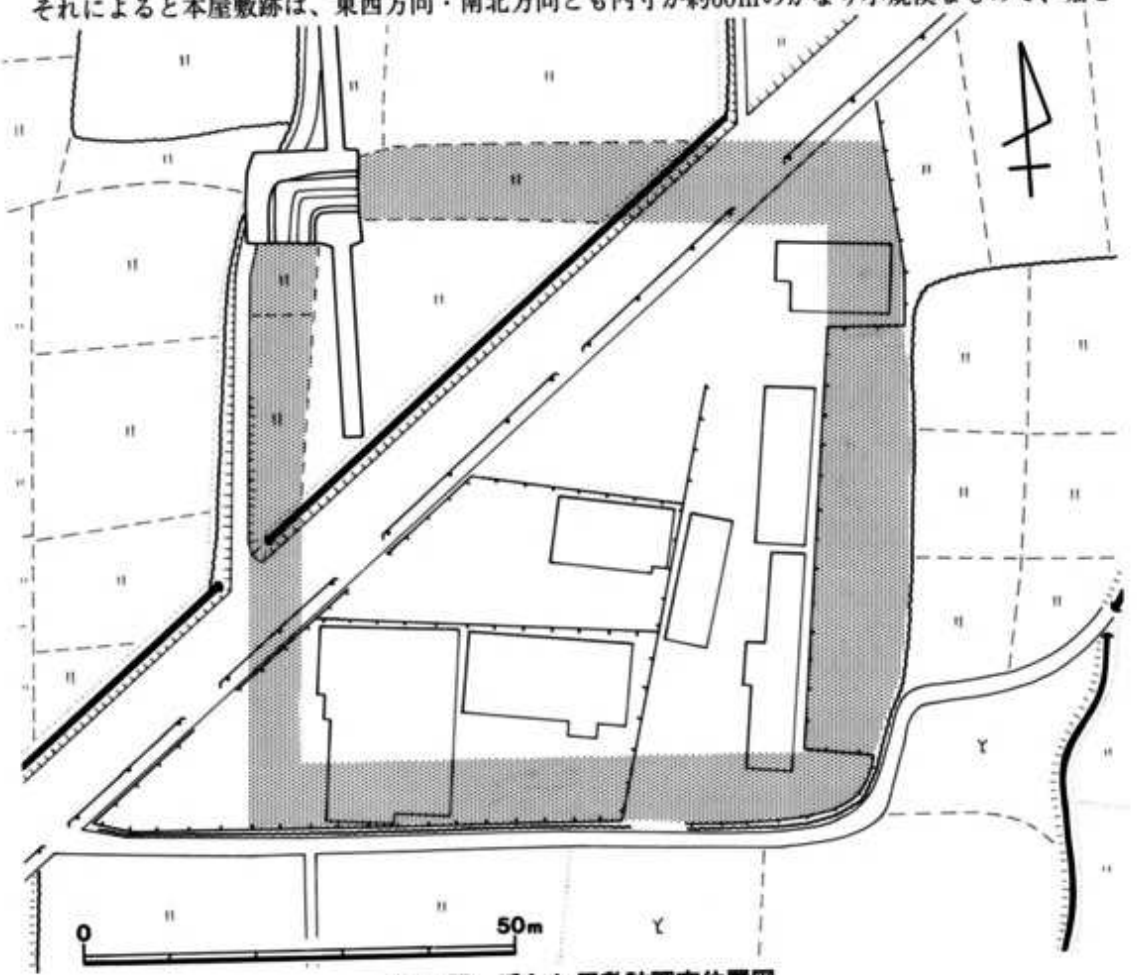
# 第Ⅸ章　毛無し屋敷跡の発掘調査

## 第１節　毛無し屋敷跡の概要

本屋敷跡は、児玉町大字吉田林字毛無しに所在し、標高84ｍを測る現水田内の平坦地に立地している。旧共和村役場による『吉田林地誌』には、本屋敷跡が所在する小字の「毛無し」の地名について、「毛無シニ毛無シ屋敷アリ。里人ノ説ニ、昔時小管氏ノ後室剃髪シテ寓居ス。ヨツテコノ名アリト云フ。ソノ説今明ナラス。旧地頭持ノ所、天保年中村請トナル」という伝承が記載されている。おそらくは、本屋敷跡がこの伝承の「毛無シ屋敷」に該当するものであろう。

屋敷跡の遺存状態はあまり良好とは言えず、屋敷内の中央部をほぼ対角線上に走る国道462号線の北西側については、屋敷堀の痕跡が現水田の地割りとして明確に残っているが、その南東側はすでに宅地化されているため、屋敷堀の痕跡は不明瞭になっている。そのため、現在の地表面に見られる地割りからは、屋敷跡の形状や規模を判断することが難しいが、明治９年に作成された地籍図には、本屋敷跡の堀の痕跡が方形の地割りとして非常に明瞭に残っている（第199図）。

それによると本屋敷跡は、東西方向・南北方向とも内寸が約60ｍのかなり小規模なもので、堀を

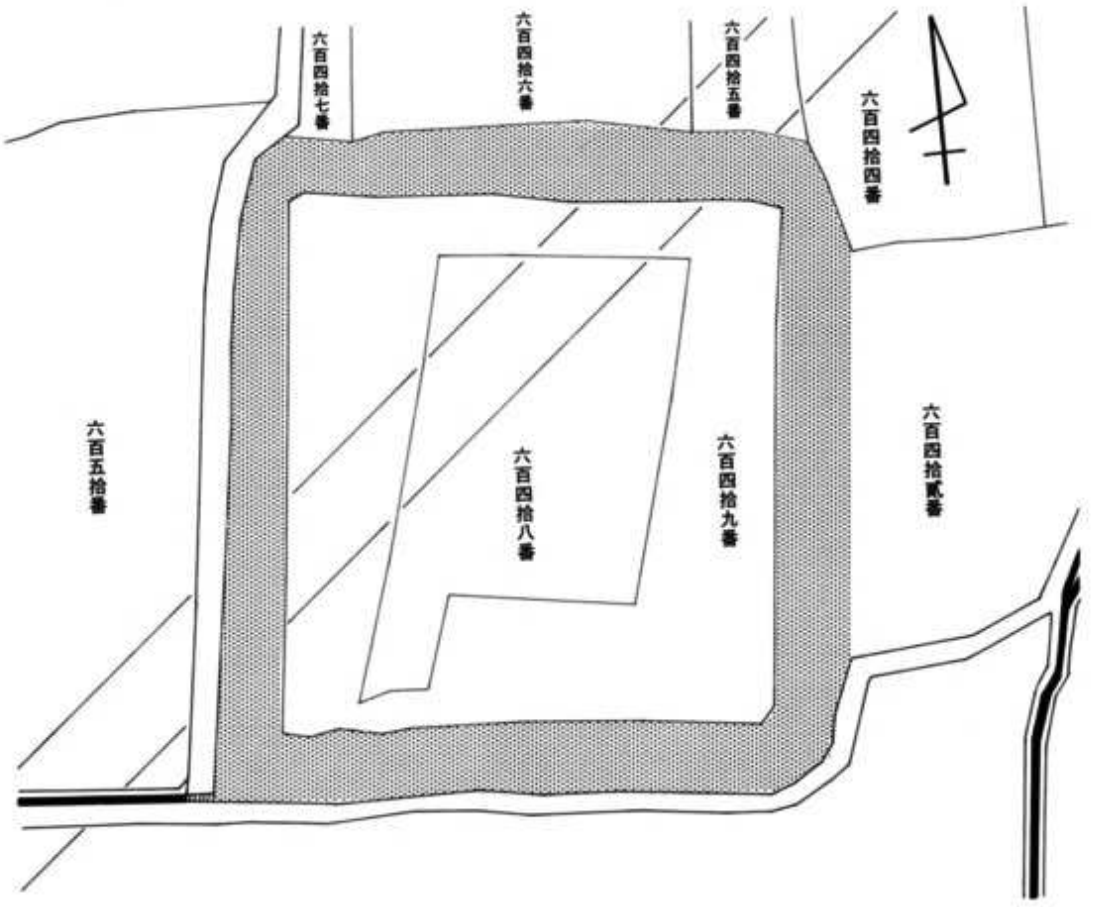



第198図　毛無し屋敷跡調査位置図

一重に巡らす比較的整った方形を呈する屋敷であったものと推測される。屋敷内部の区画では、その中央部に四角い地割り（第199図の六百四拾八番）が見られるが、それが屋敷内部の区画と関係するものかは不明である。また、屋敷堀の外部には、さらに外堀を巡らしているような地割りの様相は見られない。本屋敷跡の西側と北側を画する堀は、周囲の低地内に見られる条里形地割りの南北方向と東西方向の坪線にそれぞれ一致しており、本屋敷跡の敷地がそれ以前に施工された条里形地割りに規制されたものであることが解る。

発掘調査は、国道北西側の南北方向に走る小排水路部分の限定された小規模な調査であったため、本屋敷跡の全体の構造等については明らかではない。調査できたのは屋敷堀のごく一部で、本屋敷跡の北西コーナー部にあたる部分である。屋敷堀は、上幅4～5m・深さ約1.7mの比較的規模の大きな堀で、ほぼ直角に曲がっている。屋敷堀の内側は、地山が外側に比べて20cm～30cmほど高くなっているが、調査した部分ではピットや柱穴等の遺構はまったく検出されなかった。

本屋敷跡の時期は、屋敷内部の調査がほとんど行われていないため明確にはできないが、今回の屋敷堀の調査によれば、覆土中の各土層に見られるB軽石の含有状況より、中世後半以降のものと推測され、覆土中層の第18層付近より出土した唯一の出土遺物である片口鉢（第201図）の形態より、15世紀代には存在した可能性が高いと考えられる。

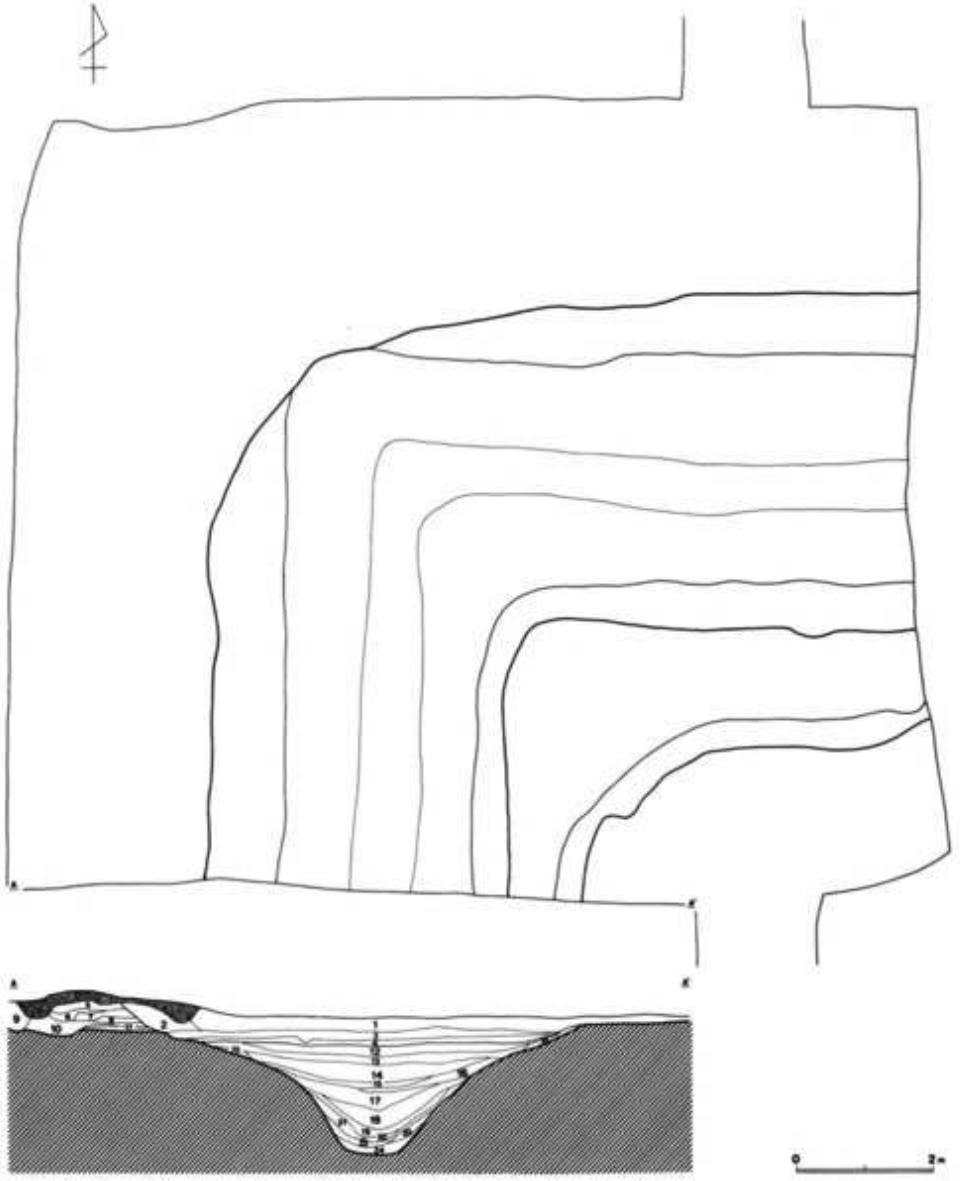



**第199図　屋敷跡周辺地籍図**　（明治9年原図を一部修正）

## 第2節　検出された遺構と遺物

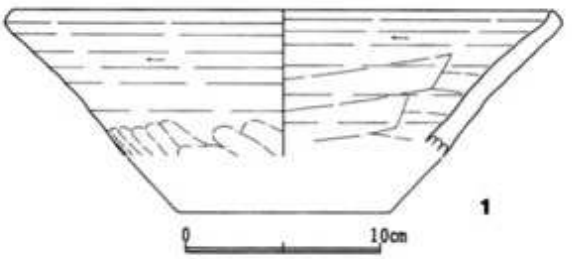
### 1．屋敷堀跡（第200図）

調査区内で検出され堀跡は、本屋敷跡の北西コーナー部にあたり、調査区内でほぼ直角に方向を変えている。規模は、上幅が4.48m～4.90mあり、北側の堀に比べて西側の堀の方が若干狭い。堀の断面形態は、上半は内外ともかなり緩やかな傾斜をしているが、下半は中位より方向を変えてかなり急な傾斜になっている。確認面からの深さは、1.60m～1.75mを測る。底面は、幅80cm～90cmのほぼ均一で、比較的広く平坦な形態である。堀下半の地山は、砂利層や砂層を主体とする複雑な土層であり、絶えず激しく水が沸いていることから、本屋敷跡の堀は常時ある程度の水を湛えてい



第200図　屋敷堀跡

たことが推測され、貯水の機能も兼ね備えていたものと考えられる。覆土は、B軽石をまばらに含む暗灰色粘土を主体とし、下半には小礫や砂を顕著に含んでいる。掘り返しは見られず、自然に埋没していったようで、A軽石降下以前にはすでに若干の窪み程度になっていたようである。出土遺物はほとんどなく、第18層付近より片口鉢の破片（第201図）が出土しただけである。本屋敷堀跡の時期は明確ではないが、覆土の状態や出土遺物より中世後半と考えられる。しかし、堀自体は掘り返しが見られないことや遺物がほとんど出土しなかったことからそれほど長期にわたって機能していない可能性がある。




**第201図　屋敷堀跡出土土器**

**堀跡出土土器観察表**

| No. | 器種 | 法量 | 形態・成形手法の特徴 | 調整手法の特徴 | 胎土・色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 片口鉢 | 口縁部径<br>(29.0cm) | 粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に開く。口唇部は上方に短くつまみ上げ、外面に平坦面をもつ。 | 外面ヨコナデの後下半斜方向の指ナデ。内面ヨコナデの後横方向の篦ナデ。 | 片岩粒・白色粒<br>黒色粒<br><br>内外－暗灰色 | 口縁部1/5<br>破片。<br><br>環元焔焼成。 |

**堀跡土層説明**

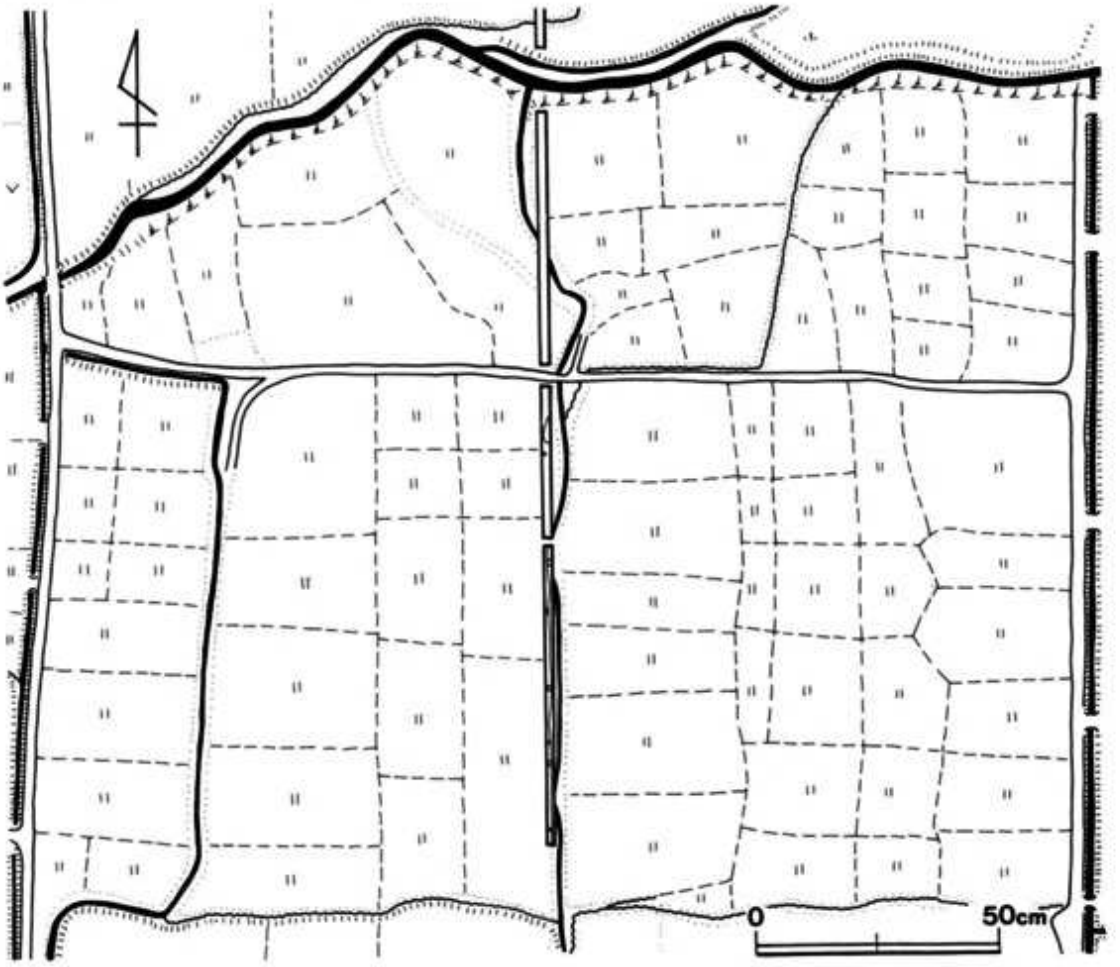
第1層：暗灰褐色土層（現耕作土。）
第2層：暗灰褐色土層（A軽石を均一に、鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：灰色土層（A軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：灰色土層（A軽石を多量に、鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：暗灰褐色土層（A軽石を均一に、鉄斑を多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第6層：暗灰色土層（鉄斑を多量に、A軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第7層：暗灰褐色土層（マンガン塊を多量に、A軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第8層：淡褐色土層（A軽石を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第9層：暗灰色土層（鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第10層：暗灰褐色土層（鉄斑・A軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第11層：暗褐色土層（鉄斑・マンガン塊を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第12層：暗灰褐色土層（鉄斑を均一に、B軽石・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第13層：暗灰色土層（鉄斑を多量に、B軽石・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第14層：暗灰色土層（鉄斑を多量に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第15層：暗灰色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第16層：暗灰褐色土層（鉄斑を多量に、B軽石・小礫を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第17層：暗灰色土層（鉄斑・B軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第18層：暗灰褐色土層（小礫を多量に、鉄斑・B軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第19層：暗灰色土層（鉄斑・マンガン塊・ローム粒子・B軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第20層：灰色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第21層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第22層：暗灰色土層（鉄斑・ローム粒子・マンガン塊・砂を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第23層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第24層：暗褐色土層（鉄斑を多量に、小石・砂を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

# 第Ｘ章　石橋遺跡の発掘調査

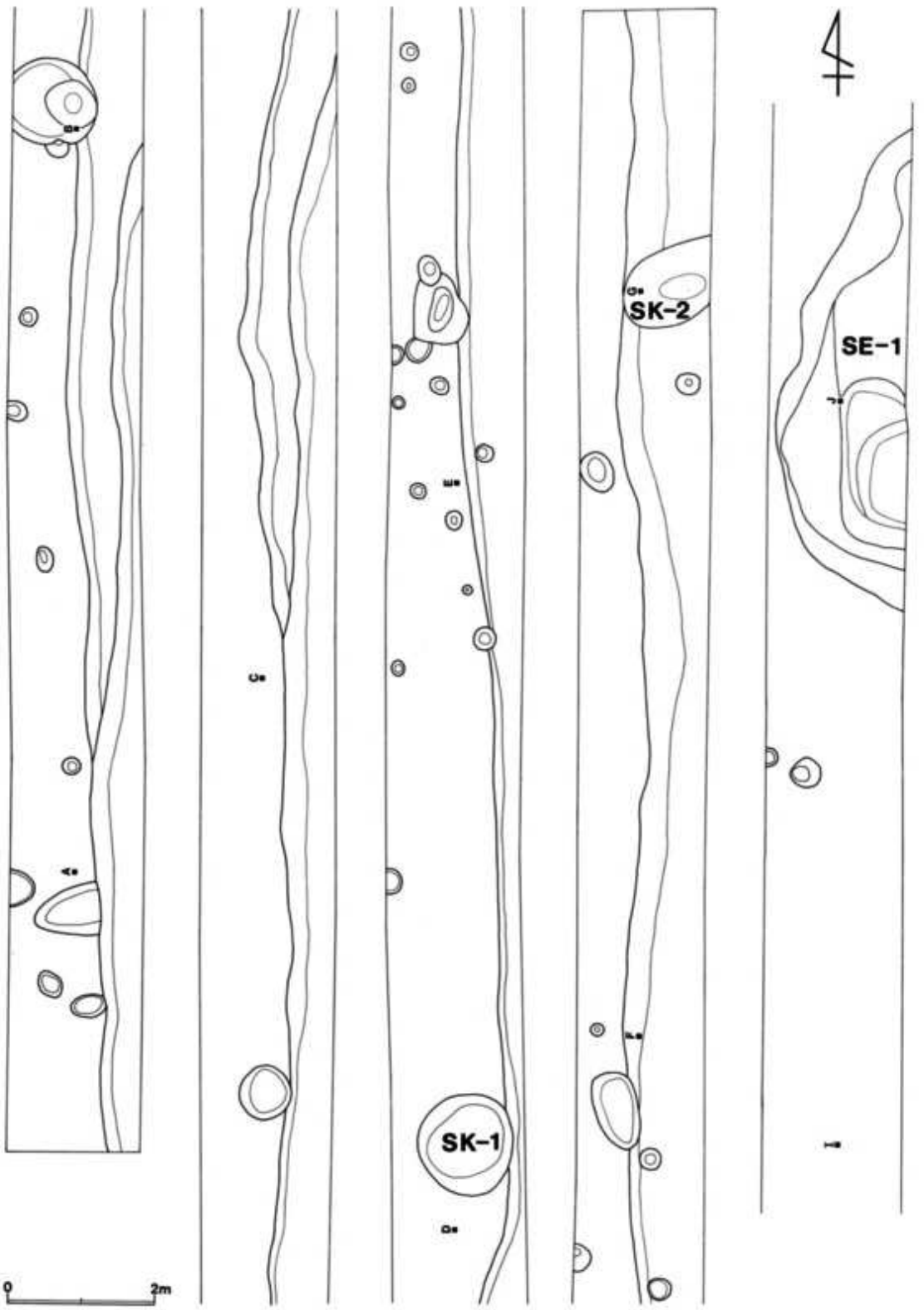
## 第１節　遺跡の概要

本遺跡は、児玉町大字吉田林字石橋に所在し、標高約82mを測る現水田部内に位置している。本遺跡の周辺には条里形地割りの痕跡が比較的明瞭に見られるが、現水田耕作土下には古代に溯るような水田層はほとんど認められない。また本遺跡の北側は、東流する女堀川に向かって段々に低くなっており、小規模な段丘状をなしている。

検出された遺構は、近世の井戸跡と推測される遺構１基、縄文時代中期加曽利ＥⅢ期の土壙２基とピット多数及び遺物包含層である。調査区内の東端に沿って南北方向に流路を取る溝跡は、条里坪線に沿うものであるが、現地表面に見られる溝と重複する最近のものである。本遺跡の主体をなす縄文時代中期後半の遺構や包含層は、調査区の南側に集中している。調査範囲が幅２mの小排水路部分に限られているため遺跡の具体的な様相については不明であるが、遺物包含層の広がりが半径50m程度であることから見て、かなり小規模な集落と推測される。




**第202図　石橋遺跡調査位置図**




第203図　石橋遺跡全体図

## 第２節　検出された遺構と遺物

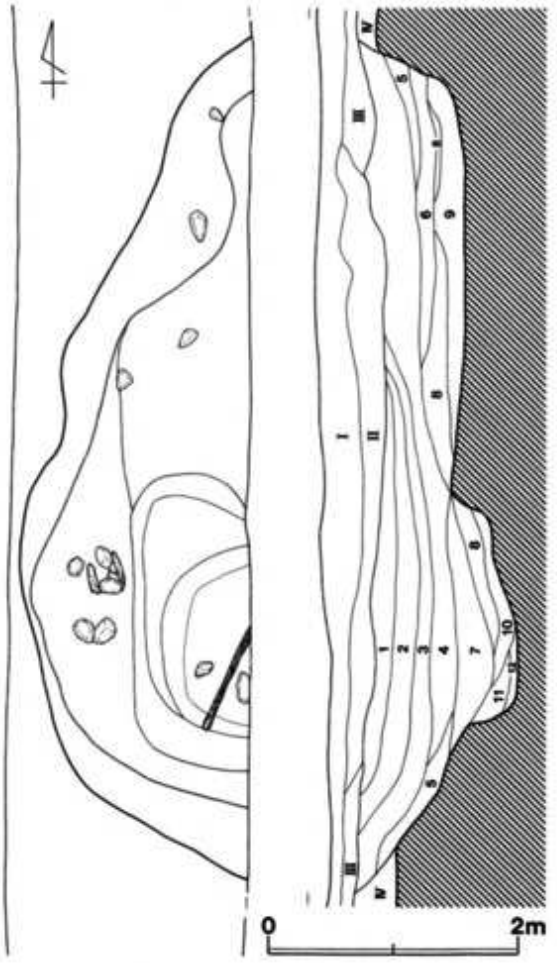
### １．井戸跡

**第１号井戸跡（第204図）**

調査区北側の現地表面に見られる条里形地割りが崩れて不明瞭になった箇所に位置している。本遺構は、その西側の一部が検出されただけであるため全容は不明であるが、覆土の状態より湧水と関係する遺構と推測され、検出された部分からは井戸の可能性が高いと考えられるものである。

平面形は、南北方向６ｍ以上の比較的規模の大きな不整形を呈している。壁は、北側と西側が比較的直線的な急傾斜であるのに対して、南側はかなり緩やかな傾斜である。底面は深さ約80cmで広く平坦な面をなし、南端は直径1.45mの不整円形状にさらに50cm程深くなっている。湧水が激しく、覆土下半には細砂粒や小石が顕著に見られ、上半には20cm前後の自然石がいくつか出土している。出土遺物は、覆土中より近世陶器・土師器・縄文土器の破片などが少量出土しただけである。また南側の不整円形状の落ち込み内からは、棒状の木の枝が１本出土している。

本井戸跡の時期は、覆土の状態や出土遺物より近世の所産と考えられる。




第204図　第１号井戸跡

**第１号井戸跡土層説明**

第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：灰色土層（A軽石を多量に含む。）
第Ⅲ層：淡灰色土層（鉄斑を均一に含む。）
第Ⅳ層：茶褐色土層
第１層：暗灰色土層（鉄斑を多量に、B軽石・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗灰色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：灰色土層（鉄斑を均一に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：灰色土層（細砂粒を均一に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗灰色土層（鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：暗灰色土層（細砂粒を多量に、鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第７層：淡灰色土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第８層：暗灰色土層（細砂粒を多量に、小石・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第９層：灰色土層（鉄斑・マンガン塊を多量に、小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第10層：暗灰色土層（細砂粒・小石を多量に含む。粘性・しまりともない。）
第11層：暗灰色土層（小石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第12層：暗灰色土層（小石を多量に含む。粘性・しまりともない。）

## 2．土　壙

### 第１号土壙（第205図）

調査区の中央部に位置する。土壙の東側の一部を最近の溝に切られているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。

平面形は、比較的整った円形を呈している。規模は、南北方向1.37m・東西方向1.28mを測り、確認面からの深さは27cmある。壁は、やや内湾ぎみに緩やかに立ち上がっている。底面は、広く平坦をなしているが、北西方向に向かって若干傾斜している。覆土は、暗茶褐色土を主体とするが、焼土粒子や炭化粒子を均一に含み、土壙の中央部や壁際では焼土ブロックが顕著に見られることから、土壙内で一時的に火が使用されたものと推測される。

出土遺物は、覆土中より加曽利ＥⅢ式の土器片が多く出土している。このうちの第206図№１の土器は、胴部中位の輪積み痕より下半を意図的に欠いたものであるが、土壙内に据え置かれたものではなく、他の土器片と同じく多くの破片となって投げ込まれたような状態で出土している。この他、本土壙と直接関係するものか不明であるが、本土壙の南側30cmの近接した位置より、やはり胴部中位の輪積み痕より下半を欠いた同時期の土器（第206図№２）が口縁部を下にして伏せた状態で単独に出土している。

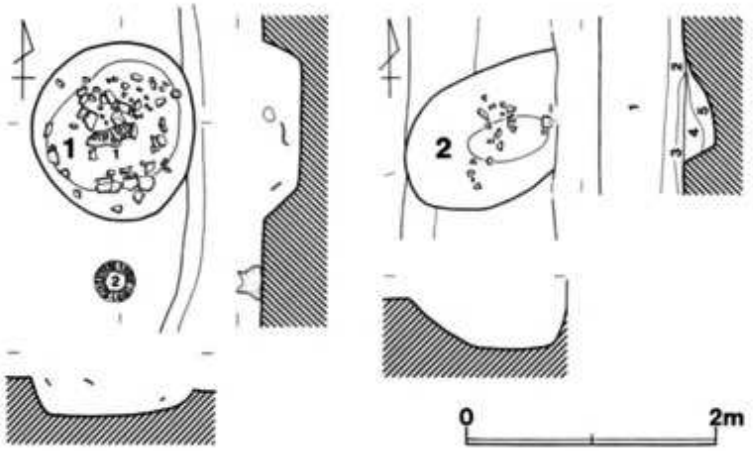
本土壙の時期は、出土遺物より縄文時代中期後半の加曽利ＥⅢ期の所産と考えられる。

### 第２号土壙（第205図）

調査区中央部のやや北寄りに位置する。土壙の上半を最近の溝によって切られており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。土壙の東側の一部は調査区外に位置している。

平面形は、楕円形に近い形態を呈するものと思われ、規模は南北方向１m・東西方向は1.44mまで測れる。確認面からの深さは36cmあり、底面は狭く丸みを帯び、壁も緩やかに立ち上がっている。出土遺物は、覆土中より加曽利ＥⅢ式の土器片が少量出土している。（第208図）

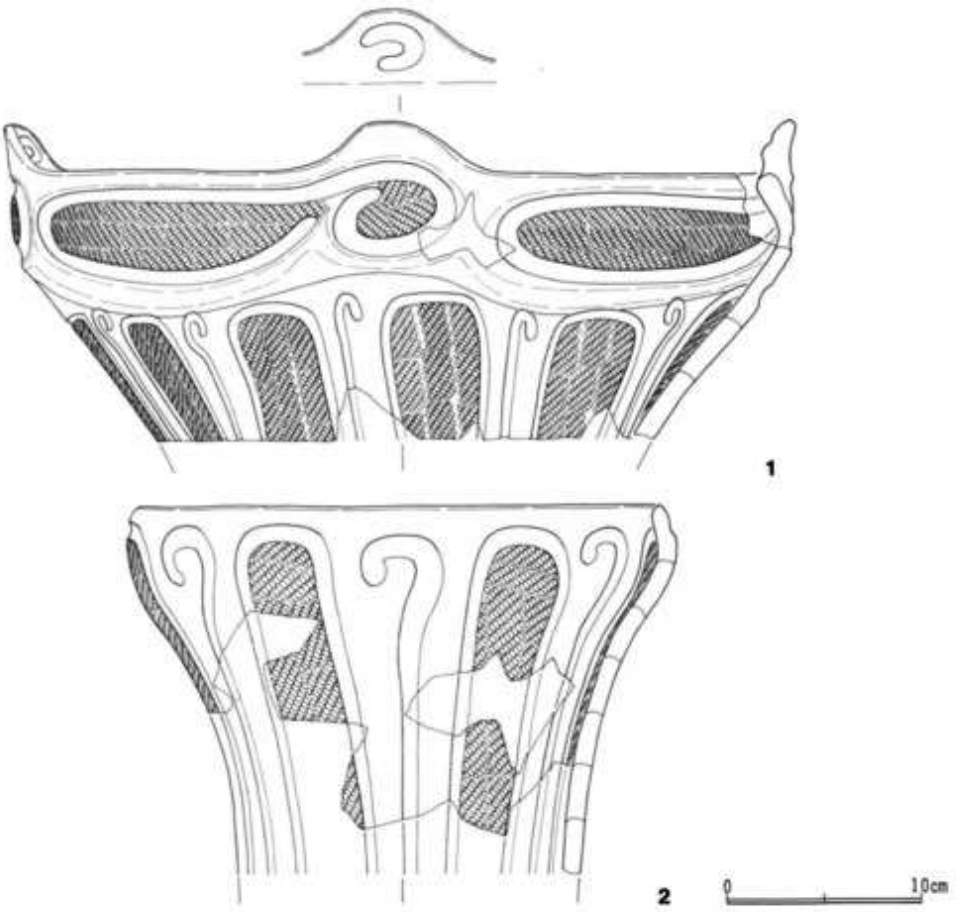
本土壙の時期は、出土遺物より縄文時代中期後半の加曽利ＥⅢ期の所産と考えられる。



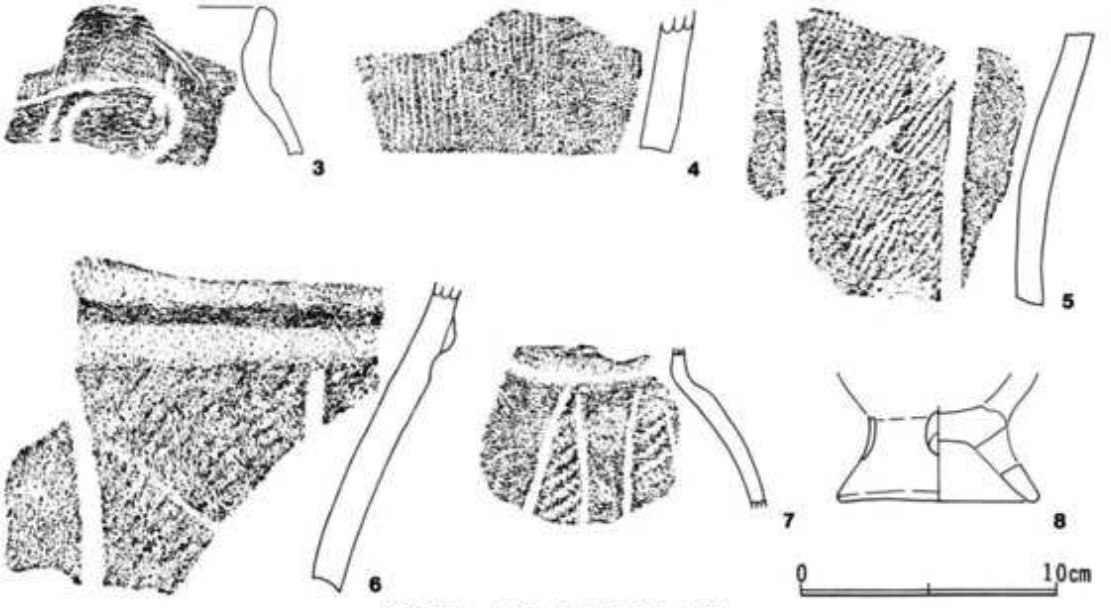

**第２号土壙土層説明**

第１層：淡灰色土層（溝埋土。）
第２層：暗灰色土層（溝埋土。）
第３層：淡灰色土層（溝埋土。）
第４層：淡茶褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗茶褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

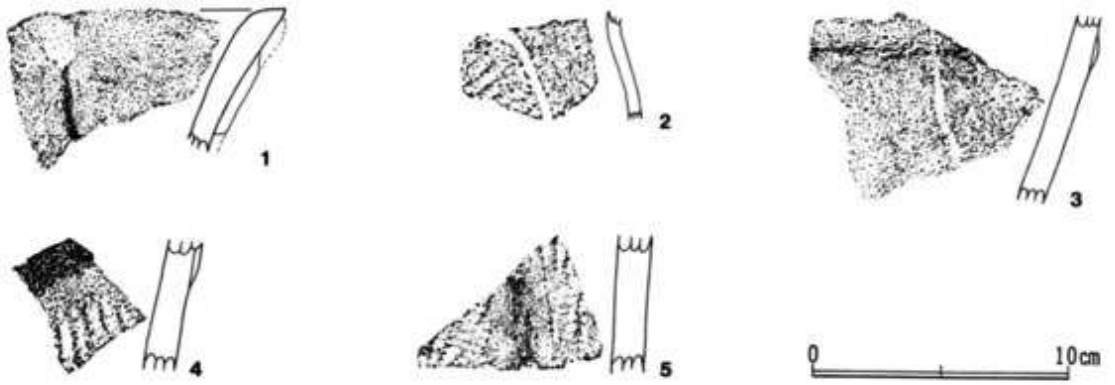
第205図　土　壙



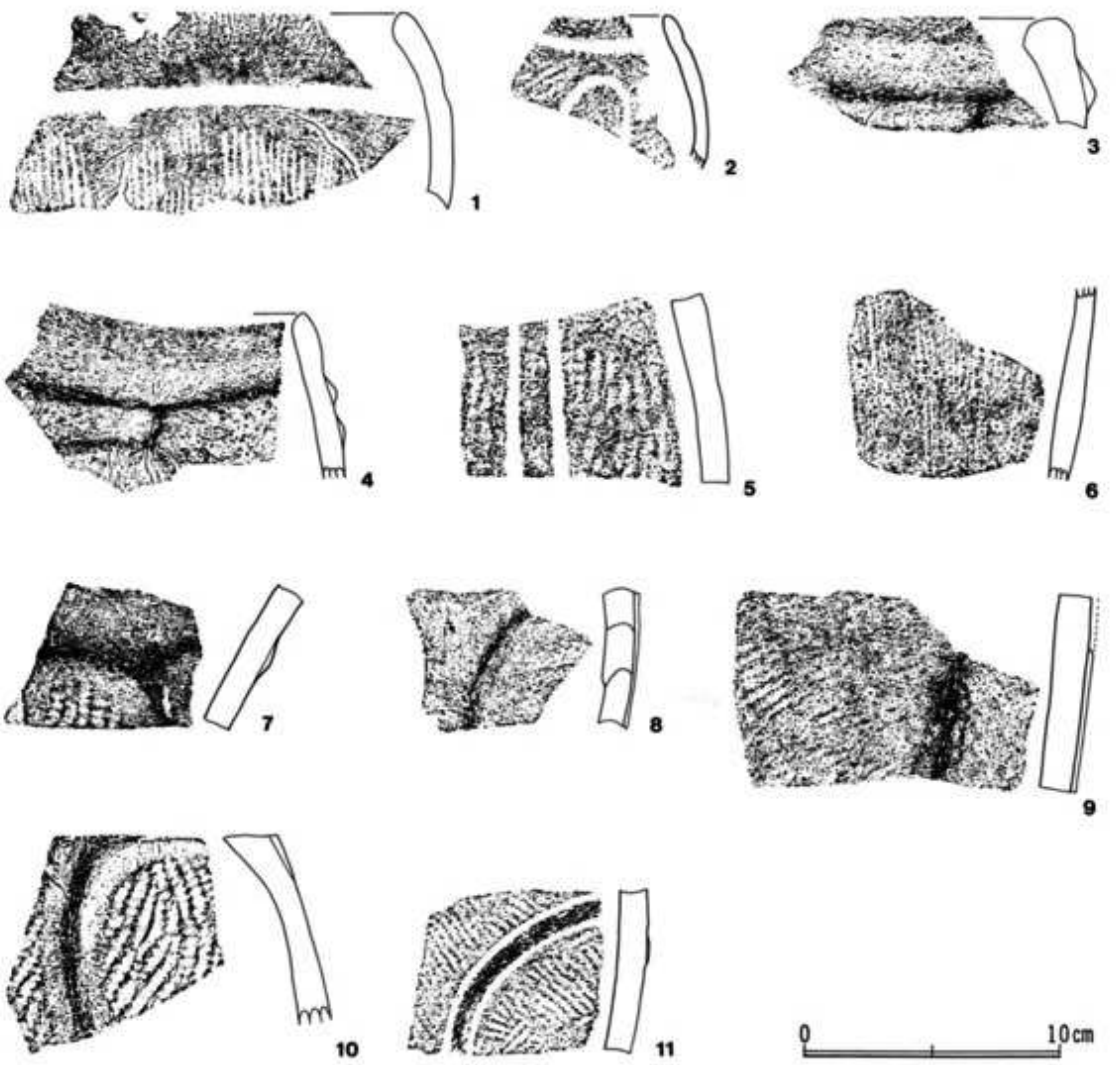

第206図　第１号土壙及び周辺出土土器




第207図　第１号土壙出土土器




第208図　第２号土壙出土土器




第209図　包含層及び調査区内出土土器

# 第XI章　ま　と　め

今回報告した８遺跡から検出された遺構や遺物は、縄文時代から中世にわたるものがあり、それぞれの遺跡の性格も多岐に及んでいる。これらの遺跡の調査成果は、当地域の歴史を考える上で個々に重要な内容をもっているが、それらについては後日折りに触れて述べることとし、ここでは飯玉東遺跡Ｂ地点・高縄田遺跡・梅沢遺跡Ｃ地点及び東牧西分遺跡で出土している古墳時代中期を主体とする時期の遺構と遺物について若干述べて、まとめにかえることにしたい。

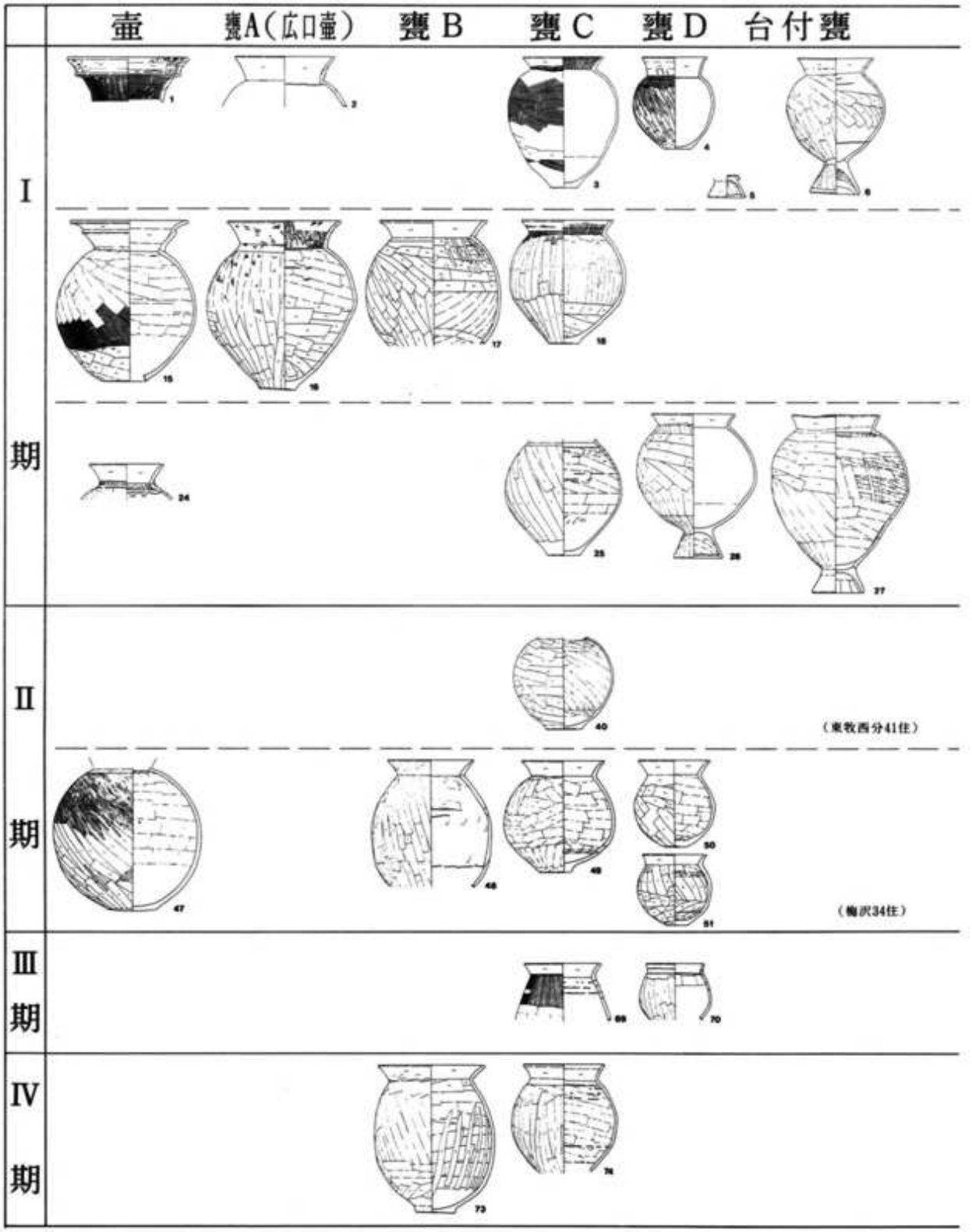
## 第１節　和泉式～鬼高Ｉ式(前半)土器の編年的位置

児玉地方は、古墳時代の遺跡が極めて多いことで著名である。今回報告した遺跡の所在する女堀川中流域に限って見ても、現在までに調査された古墳時代の住居跡の数は、未報告分を含めるとおそらく1000軒に達する位の数にはなると思われる。その半数以上は後期(鬼高期)のものであるが、中期(和泉期)のものも100軒位はあろう。この資料の豊富さとともに特に当地域は、埼玉県内でもカマドの出現と普及が早い地域として注目されており、古墳時代以降の土器研究はもとより、カマド出現をはじめとする集落研究の好フィールドとして、多くの研究者により取り上げられている地域である。

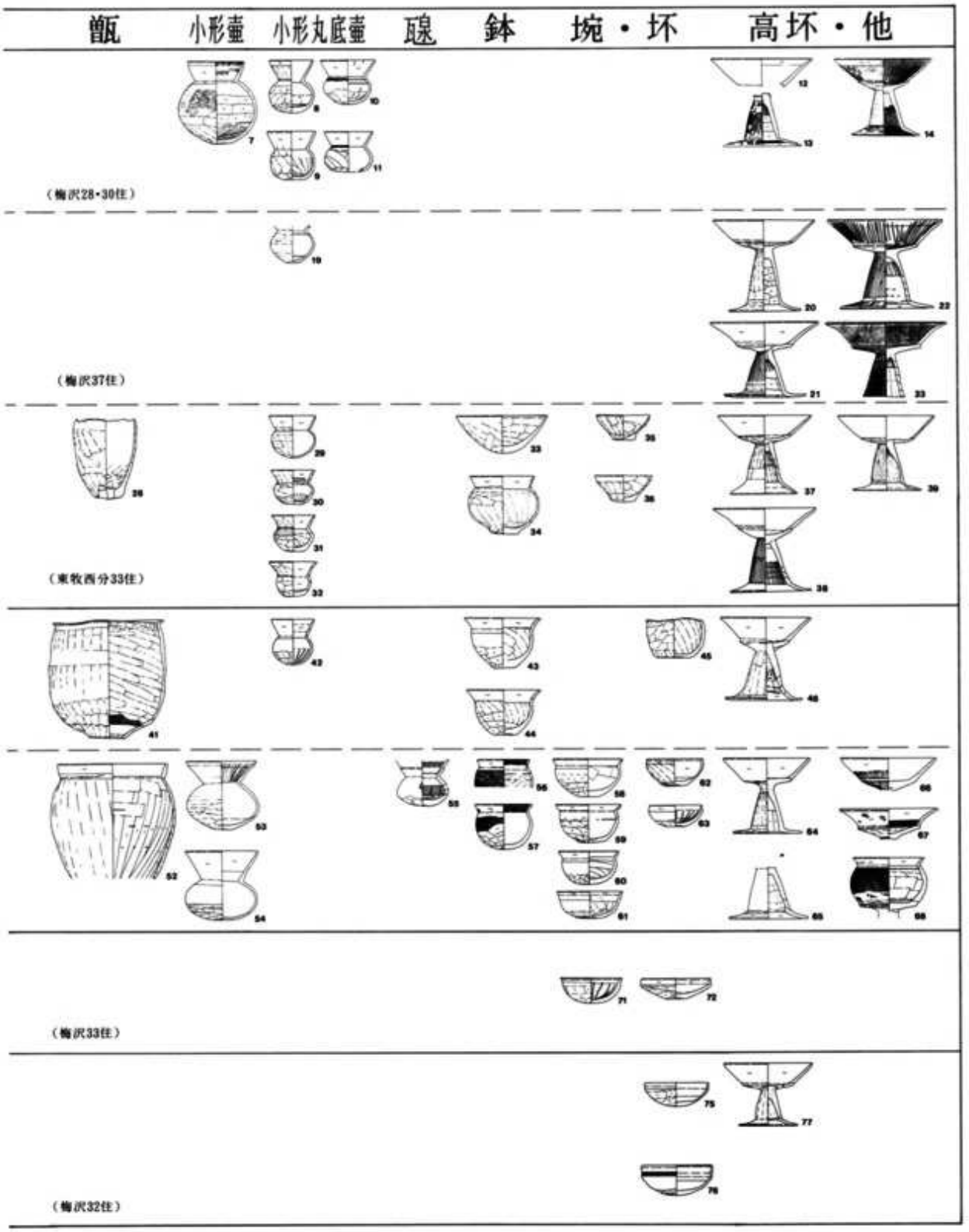
当地域におけるカマド出現前夜から普及期にあたる和泉式～鬼高Ｉ式前半の土器編年については、当地域の古墳時代土器を体系的に編年立てる中で扱われているものが多く、1976年の『本庄市史』資料編における編年表をはじめとして、その後の資料増加に伴い中村倉司(中村1979・1989)、利根川章彦(利根川1981・1982)、坂本和俊(1984)の諸氏によりそれぞれ提示されている。この３氏による該期の編年は、その趣旨や目的の違いによって対象とする時期に差異があるが、口縁部と体部の境に明瞭な段をもつ丸底形態の有稜坏(模倣坏)が出現する段階までの標識資料とその時間的配列による時期区分はほとんど同じであり、最初に発表された中村氏の該期部分の編年(中村1979)がベースになっていると言ってよい。このように当地域における和泉式～鬼高Ｉ式前半の土器編年の大枠はほぼ確立しており、今後は該期の土器様式を構成する多様な各器種毎の緻密な型式組列の検討とそれによる系譜関係の把握を行なっていく必要があろう。ここではそれらについて細かく検討する余裕はないが、坂野和信氏(坂野1988・1991)が当地域の該期土器の系譜を畿内の布留式土器・韓式土器・須恵器との関係から検討し、その模倣行為から和泉式土器の実態を捉え直そうとしている点は注目されよう。

**編　年　対　比　表**

| 中　村(1989) | 利根川(1982) | 坂　本(1984) | 坂　野(1991) |
|---|---|---|---|
| Ⅰ　期<br>(愛宕3･7住) | | 中期Ⅱ期<br>(後張187･136住) | Ⅰ－１期 |
| Ⅱ　期<br>(諏訪30･32住) | Ⅰ　期<br>(諏訪30･32住) | 中期Ⅲ期<br>(諏訪30･32住) | Ⅰ－２期 |
| | | | Ⅱ－１期 |
| Ⅲ　期<br>(諏訪49住) | Ⅱ　期<br>(諏訪49住) | 中期Ⅳ期<br>(諏訪49住) | |
| Ⅳ　期<br>(諏訪48住) | Ⅲ　期<br>(諏訪48住) | 中期Ⅴ期<br>(諏訪48住) | |




第210図　住居跡出土土器配列図(1)




**第211図　住居跡出土土器配列図（2）**

さて、今回報告した遺跡の中で比較的まとまった資料が出土したのは、梅沢遺跡C地点と東牧西分遺跡である。いずれも小規模な地点的調査であるため、該期集落の様相はもとより、遺構の全容すら不明なものが多いが、両遺跡ともカマドをもつ住居跡とカマドをもたない住居跡が検出されており、当地域のカマド出現期の様相を知る上で、その時間的関係が重要となる資料である。第210図と第211図は、両遺跡の住居跡から出土した土器のうち、その出土状態より住居跡に伴う一括性の高い資料として扱えるものを、中村氏のⅠ～Ⅳ期の区分(中村1989)に対応させて、住居毎に相対的に配列したものである。

Ⅰ期に該当するものとしては、梅沢遺跡第30号住居跡・第37号住居跡と東牧西分遺跡第33号住居跡があり、梅沢遺跡第28号住居跡や東牧西分遺跡第13号土壙も該期に属するものと思われる。相対的には、梅沢遺跡第28･30号住居跡･東牧西分遺跡第13号土壙の方が古相である。壷は、頸部の外反が強く口縁部の段を上位にもつ、Ⅰ期に典型的な二重口縁壷がある。甕は、平底甕と台付甕がある。平底甕は、法量差によって概ねA～Dの4タイプに別れる。このうち最も大形の甕Aは、他のタイプに比べて口縁部が長く、中村氏や坂野氏が類型化した広口壷にも類似するが、口唇部に面取り調整を施さないことから、それらとは別系列のものであり、No16は胴下半部の作りからも壷より甕に近いものであろう。台付甕は、台端部の内側を折り返すS字状口縁台付甕の系譜をもつもの(No5･26)と、口縁部がくの字に外反する素口縁台付甕(No6･27)がある。両者とも該期に特徴的な外面箆ケズリかその上にナデを加えるもので、両者とも台部はかなり小さくなっている。No26はS字状口縁台付甕の終末段階のもので、唯一台端部の折り返し技法のみにその系譜の痕跡を留めるものである。甑は、No28の小形甑があるが、一般的な鉢形のものではない。小形丸底壷は、口縁部に最大径をもつものが主体で、器肉が均一で薄く口縁部が内湾ぎみに開き丸底を呈する布留式系のものと、口縁部が外反ぎみに開き底部が不安定で小さな平底を呈するものがある。鉢は、大形の椀状で丸底を呈するものと胴部がやや偏平で肩が張り口縁部が外反して開くものがあるが、前者のNo33は、該期の一般的な器種として存在するものではなく、胎土やその作りから見ておそらく甕の胴下半を製作途中で作り替えたものと思われる。高坏は、坏部が浅く脚部が比較的長脚を呈するものであるが、No13とNo14は均整のとれた作りで、脚端部が内湾もしくは直線的に開く古い特徴が見られる。

Ⅱ期には、東牧西分遺跡第41号住居跡と梅沢遺跡第34号住居跡を該当させたが、両者は土器様相が異なり、前者はⅠ期に近く後者はⅢ期に近い様相を呈している。東牧西分遺跡第41号住居跡は、出土土器が少なく多くの器種を欠くが、韓式土器あるいは須恵器の影響によると思われる把手をもたない単孔の大形甑(No41)が存在する。小形丸底壷は、器肉が均一で非常に均整のとれた作りのもので、口縁部は胴部よりも若干短く、口縁部径と胴部最大径がほぼ同じで底部は丸底を呈している。鉢は、体部が深く口縁部に最大径をもつ平底形態のものである。この鉢は、後張遺跡第136号住居跡(立石他1982)等に類似した形態のものが見られ、Ⅰ期からの系譜を引く器種であるが、該期以降ではまったく見られなくなる。高坏は、坏部が小さく深い形態で、脚部は長脚ぎみで脚端部の外反も高いものである。梅沢遺跡第34号住居跡では、甕はB・C・Dが出土しており、甕Bは長胴ぎみである。大形甑(No52)は、口縁部が肥厚し最大径を胴部にもつ形態で、後張遺跡第143号住居跡（立石他1983)出土の大形甑よりも古いと考えられるものであるが、住居内での出土位置が不明であるため、

厳密には他の土器群と伴うものか明確ではない。小形壷は、胴部が偏平化しているもの(No54)も見られるが、いずれも頸部は広く口縁部が大きく外反するものである。甕は、小形丸底壷よりも若干大きめの器形を呈し、穿孔は焼成前のもので、口縁部に段をもつ。底部は中央に小さな窪みをもち、不明瞭ながら平底に近い。鉢は、体部の深い丸底で、口縁部が外反する小形のものである。埦は、体部が深く口縁部が外傾するもの(No58～60)と、体部が浅く明瞭な口縁部をもたず口唇部が短く外側に向くもの(No61～62)があり、いずれも底部は平底形態が主体である。坏は、小ぶりで口縁部が短く内屈する平底形態のもの(No63)があり、Ⅲ期に主体的となる「源初坏」(中村1984)の一形態に繋がる可能性がある。高坏は、全体にやや小ぶりで、有段高坏以外は坏部は坏底部との境の段が不明瞭な作りで、脚部はやや短く脚端部の外反も低くなっている。鉢形の高坏は、高坏の坏底部に鉢を乗せたような形態で、鉢部の器高はやや低く胴部と底部の境に高坏と同様の段をもっている。

Ⅲ期は、今回報告した遺跡の中では良好な資料は検出されていないが、梅沢遺跡第33号住居跡貯蔵穴内出土の土器が該当する。この貯蔵穴は、重複する第31号住居跡に上半部を切られているため、厳密には第33号住居跡の貯蔵穴か明確ではないが、貯蔵穴内出土土器の一括性に問題はない。甕は、胴部の張りと口縁部の外反が弱い長胴を呈するものと思われる。外面はハケの後にナデを部分的に加えるもので、隣接する川越田遺跡第42号住居跡（恋河内1993)出土の甕に酷似している。埦は、体部の浅い丸底を呈し、口縁部の作りは不明瞭で口唇部が短く外側に向く形態のものである。坏は、該期に典型的な源初坏で、体部は浅い平底で口縁部が短く直立する形態である。

Ⅳ期は、多くの器種を欠くが、梅沢遺跡第32号住居跡が該当する。また、第Ⅱ期の第34号住居跡の覆土上層に投棄された土器群も該期に属すものである。甕は、BとCが出土しており、甕Bは長胴化している。坏は、口縁部が直立し体部は深く底部が厚い丸底を呈し、体部との境に近い口縁部外面に凹線状の窪みを巡らして段を意識的に強調したものである。

以上、梅沢遺跡C地点と東牧西分遺跡の住居跡から出土した該期の土器を、当地域における該期編年に対比してみたが、本報告の他の遺跡については高縄田遺跡第1号住居跡がⅠ期、同第1号溝跡がⅠ期以降、飯玉東遺跡B地点第3号住居跡がⅢ～Ⅳ期、同第1号溝跡上層がⅢ期、同第2号溝跡がⅠ～Ⅱ期に概ね比定することができよう。しかしながら、ここで行った該期土器の時期比定は、当地域における既往の編年の標識資料に対する前後関係により、大ざっぱに対比しただけであるため、一括資料に含まれる特定器種の評価の違いによってはその時期比定が異なる場合も生じ、特に今回Ⅱ期及びその直前に該当させた資料(東牧西分33住)にはその可能性があるものと思われる。各器種毎の細かな類型把握とそれぞれの型式組列上での厳密な位置づけによる対比が必要であろうが、今後該期の良好な資料の報告予定もあり、改めて再検討したい。

## 第2節　出現期のカマドについて

今回報告した東牧西分遺跡の第41号住居跡には、カマドが付設されている（第160図)。この住居跡の時期は、出土土器の様相から一応Ⅱ期に対比され、当地域におけるカマドの出現期にあたる。住居跡は、該期の一般的な住居形態とはやや異なった小型の長方形を呈し、貯蔵穴・柱穴・壁溝等の住居内施設をもたない単純な構造のもので、カマドは東側コーナー部の壁に接して構築されている。

このカマドは、ローム土を主体とした袖部が比較的明確に残っており、当地域に見られる出現期のカマドの中では比較的残存状態が良い方で、カマドの構造をある程度把握することができる。天井部や煙道部は残存していなかったが、両袖の内側から奥壁まで燃焼部の全面がむらなく非常に良く焼けてガリガリに堅化していることから、かなり高温の火熱が行われていたことが伺え、この火熱を可能にするための天井部と煙道部が、本カマドには不可欠であったと思われる。煙道部の機能については、排煙機能とともに火力を後方に引いて燃焼部の火熱を高める機能があり、煙道の傾斜が垂直に近くなるほどその機能は高くなるという(笹森1990)。本カマドの支脚(転用高坏)はカマドの奥壁寄りに位置しているが、燃焼面(火床)は袖先端の焚き口から非常に良く焼けており、火力が後方の奥壁まで強く引かれていたことが伺われる。また燃焼面は、焚き口から奥壁の上方に向かって傾斜しているが、これは支脚の転用高坏を、2個重ねて埋設した石の上に据えて燃焼面の高さに合わせて調節していることから、カマドの排煙機能を高めるために、燃焼面を意図的に傾斜させていることがわかる。これらのことから本カマドは、本来は現在の住居確認面より上に、天井部と奥壁からそのまま垂直方向に延びるかあるいは住居外に延びる煙道部が存在していたことが考えられ、該期のカマドとしては構造的に整ったものであったと思われる。

児玉地方の出現期カマドについては、かって東日本におけるカマド在地発生説の根拠ともされた、その形態的多様性が指摘されているが、井上尚明氏と森原明廣氏はこれらのカマドの形態的差異により類型化して検討されている。井上氏は、児玉町古井戸遺跡の調査結果からその報告書の考察で、「従来のカマドをカマドA類」、「天井部の無いものをカマドB類」、「壁際に焼土、粘土があるだけのものをカマドC類」に分類され、「C類はカマドを知識として認識した時に、B類は具体的なモデルを認識した時に作られ、さらにその構造が把握できた時にA類が出現する」とされ、「おそらく、カマドの存在を知識として認識したのが和泉Ⅱ期で、その構造を把握して定型化したカマドが出現したのが鬼高Ⅰ期新段階から鬼高Ⅱ期なのであろう」と、C類からA類へのカマドに対する認識の深化による発展として考えられている（井上1986)。森原氏は、出現期のカマドの中で「天井部あるいは明瞭な袖部さえも欠き加熱を包む構造をもたないもの」をカマドとは分離して「カマド状遺構」とし、それらを住居の壁面との位置関係から、Ⅰ類（住居壁面に完全に接し、火床を囲むような高まりをもつもの)、Ⅱ類（住居壁面に完全に接し、火床を掘り窪めただけのもの)、Ⅲ類（住居壁面から離れ、馬蹄形の高まりをもつもの）に分類され、「『カマド状遺構』は不完全な構造で現れた後、初現期のカマドへ不完全な要素を残存しつつ発展（移行）し、完成されたカマドへと近づいていくもの」とし、「カマド状遺構」は地域的に限定され、当地域は「関東地方において具体的にカマドが『導入』される以前に、抽象的なカマドの知識を自律的に取り入れていた地域」とされた（森原1990)。この森原氏の「カマド状遺構」は、肝心のⅠ～Ⅲ類に分類された各類型がなにを意味しているのか検討されておらず、単なる分類に終わってしまった点が残念であるが、これらは概ね井上氏のB類に該当する。両氏とも当地方の出現期カマドを、天井部や明確な袖部をもたない、カマドとしては構造的に不完全なものとし、カマドの構造に対する認識が深化する過程の初期的段階として捉えている点で共通する。

出現期のカマドは、全国的に見ても残存状態の悪さが一つの特徴とされ（杉井1993)、技法的にも壊れやすいような作りであったことが伺われるが、天井部や煙道部の有無については住居跡自体の

残存状態の悪さも考慮する必要があるように思われる。当地域の出現期カマドが検出されている住居跡は、確認面からの深さが15cm程度かそれ以下の残存状態でしかないものが多く、諏訪遺跡第30～32号住居跡(柿沼他1979)のようにカマド燃焼面(火床)が床面よりも高い位置にあるものについては、天井部の有無はもちろんのこと、森原氏のⅠⅡ類のような形態的類型の識別も困難であると思われる。しかしⅢ類については、住居壁面から離れていることで他とは明確に識別できるもので、このような形態のカマドが西日本や朝鮮半島にも見られる(杉井1993)ことは、他のカマドとはその導入の系譜を異にする可能性も考えられる。いずれにしても当地域では、東牧西分遺跡第41号住居跡のように構造的には完成度が高いと推測されるカマドがⅡ期には存在し、Ⅲ期にはほぼ完成したカマドが普及している。そして、不完全とされる形態のカマドがⅢ～Ⅳ期まで客体的に残存することは、中村氏が言われるような(中村1989)、まず構造的に整ったカマドが導入され、その模倣として構造的に不完全なカマドが出現するという様相が当地域でも伺え、後張遺跡(立石他1982・83)や周辺の該期集落の状況からは、カマドの構造に対する認識の差異は、時期的あるいは地域間の問題ではなく、当地域内の集落間や集落内の住居間の問題であったと思われる。

**参考文献**


赤熊浩一他（1988）『将監塚・古井戸Ⅱ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
荒川政夫他（1986）『早稲田大学本庄校地埋蔵文化財発掘調査概報２』　早稲田大学
井上尚明他（1986）『将監塚・古井戸Ⅰ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
太田博之他（1991）『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ－公卿塚古墳－』　本庄市埋蔵文化財調査報告第19集
柿沼幹夫他（1979）『下田・諏訪』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集
上　里　町（1992）『上里町史』資料編
恋河内昭彦（1989）『共和小学校校庭遺跡』　児玉町文化財調査報告書第10集
（1990）『根田遺跡』　児玉町文化財調査報告書第12集
（1990）『雷電下遺跡－Ｂ・Ｃ地点－（図版編）』　児玉町文化財調査報告書第13集
（1992）「児玉地方における弥生時代の概観」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要－平成3年度後期文化財担当者会議資料－』　埼玉県教育局文化財保護課　児玉郡市文化財担当者会
（1993）『川越田遺跡Ⅱ』　児玉町遺跡調査会報告書第５集
小久保徹他（1978）『東谷・前山２号墳・古川端』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集
駒宮史朗他（1977）『御林下遺跡』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第13集
（1978）『中堀・耕安地・久城前』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第15集
（1979）『雷電下・飯玉東』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集
埼　玉　県（1982）『新編埼玉県史』資料編２
坂本和俊（1984）「埼玉県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
坂本和俊他（1986）『埼玉県古式古墳調査報告書』　埼玉県県史編さん室
佐々木幹雄他（1980）『大久保山Ⅰ』　早稲田大学本庄校地文化財調査室
（1993）『大久保山Ⅱ』　早稲田大学本庄校地文化財調査室
笹森紀巳子（1982）「かまどの出現と背景」『古代』第72号　早稲田大学考古学会
笹森健一（1978）「平安時代の諸問題」『川崎遺跡（第３次）・長宮遺跡』郷土史料第21集　上福岡市教育委員会
（1990）「竪穴住居の使い方」『古墳時代の研究』第２巻　－集落と豪族居館－　雄山閣
菅谷浩之（1984）『北武蔵における古式古墳の成立』　児玉町史資料調査報告　古代第１集
菅谷浩之他（1973）「児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要」『第６回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県考古学会　埼玉県遺跡調査会　埼玉県教育委員会
（1976）『宮下・樋之口遺跡発掘調査概報』　美里村教育委員会
（1978）『日の森遺跡』　美里村教育委員会

杉井　健（1993）「竈の地域性とその背景」『考古学研究』通巻157号　考古学研究会
鈴木徳雄他（1981）『深町・城の内遺跡』深町遺跡調査会
（1983）『阿知越遺跡Ⅰ』　児玉町文化財調査報告書第３集
（1984）『阿知越遺跡Ⅱ』　児玉町文化財調査報告書第４集
（1989）『真下境東遺跡』　児玉町文化財調査報告書第９集
（1991）『辻ノ内・中下田・塚畠・児玉条里遺跡』　児玉町文化財調査報告書第15集
高橋一夫（1975）「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究２』　校倉書房
（1986）「生活遺構・遺物の変化の意味するもの－竈と鉄製農具－」『季刊考古学』第16号　雄山閣
立石聖詞他（1982）『後張Ⅰ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集
（1983）『後張Ⅱ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
徳山寿樹（1992）「児玉町藤塚遺跡Ｂ地点の調査」『第24回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉県考古学会　埼玉会館　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　埼玉県教育委員会
徳山寿樹他（1994）『平塚・左口・児玉条里遺跡』　児玉町文化財調査報告書第16集
利根川章彦（1981）『倉林後遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第３集
（1982）「古墳時代集落構成の一考察」『土曜考古』第５号　土曜考古学研究会
富田和夫・赤熊浩一（1985）『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・北堀・一丁田・川越田・梅沢』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
中村倉司（1979）「児玉郡における鬼高式土器の編年について」『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第38集
（1984）「器種組成の変遷と時期区分」『土曜考古』第９号　土曜考古学研究会
（1989）「関東地方における竈・大形甑・須恵器出現時期の地域差」『研究紀要』第６号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
能登健・石坂茂・小島敦子・徳江秀夫（1983）「赤城山南麓における遺跡群研究」『信濃』第35巻第４号　信濃史学会
橋本博文他（1980）『宥勝寺北裏遺跡』　宥勝寺北裏遺跡調査会
長谷川勇他（1979）『女堀遺跡群発掘調査概報』　本庄市教育委員会
（1985）『二本松遺跡発掘調査報告書』　本庄市埋蔵文化財調査報告第５集１分冊
（1986）『夏目遺跡発掘調査報告書』　本庄市埋蔵文化財調査報告第５集２分冊
（1987）『社具路遺跡発掘調査報告書』　本庄市埋蔵文化財調査報告第５集３分冊
坂野和信（1988）「竈導入期の土器群」『本庄市立歴史民族資料館紀要』第２号
（1991）「和泉式土器の成立過程とその背景」『埼玉考古学論集』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
（1991）「和泉式土器の成立について」『土曜考古』第16号　土曜考古学研究会
細田　勝他（1984）『向田・権現塚・村後』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集
本庄市（1976）『本庄市史』資料編
（1986）『本庄市史』通史編Ⅰ
増田一裕（1985）『本庄遺跡群発掘調査報告書－久下東遺跡・遺構編－』　本庄市埋蔵文化財調査報告第７集
（1987）『東富田遺跡群発掘調査報告書』　本庄市埋蔵文化財調査報告第10集
（1989）『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　本庄市埋蔵文化財調査報告第９集（第２分冊）
（1989）『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』　本庄市埋蔵文化財調査報告第14集
（1990）『諏訪・久城前・久城往来北遺跡発掘調査報告書』　本庄市埋蔵文化財調査報告第17集
（1990）『山根遺跡発掘調査報告書』　本庄市埋蔵文化財調査報告第18集
（1991）『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　本庄市埋蔵文化財調査報告第９集（第３分冊）
増田逸朗他（1978）『塚本山古墳群』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
美里町（1986）『美里町史』通史編
森原明廣（1990）「関東地方におけるカマド初現をめぐって」『研究紀要６』　山梨県立考古博物館　山梨県埋蔵文化財センター
柳　　進（1961）『児玉町八幡山埴輪焼場窯跡発掘調査報告書』　県立児玉高等学校
柳田敏司（1964）「埼玉県児玉郡生野山将軍塚古墳発掘調査概報」　『上代文化』第34輯
横川好富（1987）「竈の出現とその背景－埼玉県を中心として－」『埼玉の考古学』　新人物往来社